

中川健一メッセージシリーズ

# 『ローマ人への手紙』 メッセージアウトライン

---

ハーベストフォーラム東京定例会メッセージ

---

2010 年 12 月～2012 年 2 月



**ハーベスト・タイム・ミニストリーズ**

## 「神の義の啓示」

### 1. はじめに

- (1) 最初の組織神学の書
- (2) パウロ自身が設立していない教会に宛てた唯一の手紙
  - ①執筆時点では、まだ訪問すらしていない。
  - ②パウロは使 28 章になってようやく、囚人としてローマを訪問している。
- (3) パウロが設立した教会への手紙
  - ①コリント人への手紙 2 通
  - ②ガラテヤ人への手紙
  - ③エペソ人への手紙
  - ④ピリピ人への手紙
  - ⑤コロサイ人への手紙
  - ⑥テサロニケ人への手紙 2 通

### 2. メッセージのアウトライン

- (1) だれが書いたか（著者）。
- (2) だれ宛てに書いたか（宛先）。
- (3) いつごろ書いたか（執筆時期）。
- (4) なんのために書いたか（執筆目的）。
- (5) 何を書いたか（内容）。

### 3. メッセージのゴール

- (1) ロマ書の歴史的意義
- (2) ロマ書の現代的意義

このメッセージは、ローマ人への手紙の学びを開始する前の準備である。

## I. だれが書いたか（著者）。

### 1. 使徒パウロ

- (1) 小アジアのキリキヤのタルソで生れたユダヤ人（使 9 : 11、21 : 39、22 : 3）
  - ①キリキヤの市民にはローマの市民権が与えられた。
  - ②パウロは生れた時からローマの市民権を持っていた。
  - ③すでに両親が市民権を持っていたと思われる。

(2) ベニヤミン族出身

- ①パリサイ派に属していた（ロマ 11：1、ピリ 3：5、使 23：6）。
- ②両親もパリサイ派であった（使 23：6）。

(3) エルサレムで学んだ。

- ①13 歳のバール・ミツバを終えてからエルサレムに上った。
- ②姉妹の家に滞在しながら学んだ（使 23：16）。
- ③1 世紀最大のラビ、ガマリエル 1 世のもとで学んだ（使 5：34、22：3）。
- ④当時、シャマイ学派とヒレル学派があった。パウロは前者に属した。
- ⑤サンヘドリンと良好な関係にあった。
  - \*大祭司からダマスコの会堂あての手紙をもらった（使 9：2、22）。
- ⑥彼は終生、パリサイ派の伝統とライフスタイルを誇りとした。  
（ロマ 9：3、2 コリ 11：22、ピリ 3：5～6）

(4) ステパノを石打ちの刑に処する現場に立ち合った（使 7：58）。

- ①教会迫害の先頭に立った（使 8：1～3）。

(5) ダマスコ途上で回心を経験した（使 9：1～9）。

- ①天からの光に打ちのめされ、「サウロ、サウロ。なぜわたしを迫害するのか」という声を聞いた。
- ②目が見えなくなったが、3 日後に、アナニヤという弟子の助けによってバプテスマ（洗礼）を受け、視力を回復した。
- ③彼は、ただちにダマスコで伝道を開始した。

## 2. 神の摂理

(1) パウロはユダヤ人としての教育を受けた。

- ①職業は天幕作り。
- ②律法の学びにおいてはラビ。

(2) と同時に、ギリシア・ローマ文化についても造詣が深かった。

- ①タルソは当時、アンテオケやアレキサンドリヤと並ぶ学術都市。
- ②異邦人伝道の器になるべき準備がなされていた。

## II. だれ宛てに書いたか（宛先）。

### 1. ローマの教会

「ローマにいるすべての、神に愛されている人々、召された聖徒たちへ」（1：7）

- （1）ローマの教会は、幾つかの家の教会から成り立っている。
- （2）ペンテコステの日に回心したユダヤ人が、ローマに戻って伝道したのであろう。  
「フルギヤとパンフリヤ、エジプトとクレネに近いリビヤ地方などに住む者たち、また滞在中のローマ人たちで、ユダヤ人もいれば改宗者もいる」（使 2：10～11）
- （3）この手紙執筆当時、異邦人信者が大半を占めるようになっていた。

### 2. ユダヤ人信者と異邦人信者の関係

- （1）宗教的、社会的壁があった。
- （2）これは、見逃してはならない神学的問題である。

## III. いつごろ書いたか（執筆時期）。

### 1. 57 年頃に書かれたと思われる。

- （1）第 3 回伝道旅行の終りごろ
- （2）コリント滞在中（使 20：2～3）
  - ①エルサレムに諸教会の献金を届ける直前

### 2. 第 3 回伝道旅行はエルサレムで終わった。

- （1）そこで投獄された。
- （2）それからローマに送られた。
  - ①60 年にローマに到着（使 28：11～15）。

## IV. なんのために書いたか（執筆目的）。

### 1. パウロの神学をまとめるため

- （1）地中海の東側の地区の宣教を終えた。
- （2）次に、スペインを目指している。
- （3）過去 25 年間の活動を振り返り、自らの神学をまとめる必要を感じた。
- （4）しかし、キリスト論、教会論、終末論が抜けている。なぜか。

2. スペイン伝道の支援を求めるため

- (1) アンテオケ教会は遠すぎる。
- (2) ローマの教会からの支援が不可欠となる。
- (3) パウロは論争の的となってきたので、自らの紹介する必要がある。
  - ①自分は誰か。
  - ②自分は何を信じているか。

3. ローマの教会の中にあるユダヤ人信者と異邦人信者の対立を解決するため

- (1) ロマ 14 : 1～15 : 13 は、そのような視点から読む必要がある。

V. 何を書いたか（内容）。

ローマ人への手紙のアウトライン参照（添付）

（内村鑑三の『ロマ書の研究』に倣って）

結論：

1. ローマ人への手紙の歴史的意義

(1) アウグスティヌス（古代キリスト教世界で最大の影響力を持つ神学者）

- ①386 年、ミラノの自宅で隣家の子どもから「取って読め」という声を聞く。
- ②近くにあったローマ人への手紙を読む。

「遊興、酩酊、淫乱、好色、争い、ねたみの生活ではなく、昼間らしい、正しい生き方をしようではありませんか。主イエス・キリストを着なさい。肉の欲のため心を用いてはいけません」（ロマ 13 : 13～14）

(2) マルティン・ルター（宗教改革者）

- ①聖アウグスチノ修道会の修道司祭であった。
- ②ローマ人への手紙に出てくる「神の義」の思想に捕えられる。
- ③「信仰義認」の真理に目覚める。

(3) ジョン・ウェスレー（メソジスト派創始者）

- ①1738 年 5 月 24 日、ロンドンのアルダースゲート街で開かれたモラヴィア派の集会に出席。
- ②司会者が朗読するルターの「ロマ書講解」序文を聞いているうちに、不思議な

回心の体験をした。

「9 時 15 分ごろ、キリストを信ずる信仰によって神が人心に働いて起こした  
まう変化について、彼（司会者）が述べていた時、私は自分の心があやしくも熱  
くなるのを覚えた。そしてキリストを、ただひとりの救い主であるキリストを信  
じた。また彼（キリスト）は私の罪をさえも取り去り給うて、私を罪と死の律法  
から救って下さったとの確証が、私に与えられた」

#### (4) 内村鑑三

①1921 年（大正 10 年）1 月から翌年 10 月まで、60 回にわたって大手町で講演。

②61 歳から 62 歳にかけて

## 2. ローマ人への手紙の現代的意義

### (1) ユダヤ的視点の回復

①パウロは、パリサイ派の学びをしたラビである。

②ローマ人への手紙は、ユダヤ的文書である。

### (2) 執筆目的に関する新しい視点

#### ①ローマの教会とは

\*使 2 : 10 で回心を体験したユダヤ人信者がローマに帰って伝道した。

\*ユダヤ人信者中心の家の教会がいくつか誕生した。

\*紀元 49 年、皇帝クラウデオがユダヤ人をローマから追放。

\*その中には、ユダヤ人信者も含まれていた（使 18 : 2）。

\*パウロは、アクラとプリスキラに出会った（ロマ 16 : 3～4）。

\*ユダヤ人信者がいなくなっからは、異邦人信者中心の教会となる。

\*その後、多くのユダヤ人信者がローマに帰還した。

\*この手紙を執筆した当時は、ユダヤ人信者と異邦人信者が対立していた。

\*パウロは、その神学的、社会的対立に対して解決策を提示した。

#### ②紀元 1 世紀のユダヤ教について

\*宗教改革以来、ロマ書は「個人の救い」を教える書簡として理解されてき  
た（マルティン・ルター、ジョン・カルバン、フルドリッヒ・ツウイングリ）。

\*パウロは、律法主義的ユダヤ教と戦っていたという解釈。

\*信仰義認の教理

\*しかし、紀元 1 世紀のユダヤ人たちは、「律法を守ることによって救われ  
る」とは信じていなかった。

\*パリサイ派の神学では、ユダヤ人は神の選びのゆえにすでに救われている。

・山上の垂訓での「広い門」と「狭い門」の対比

・ニコデモとの対話における「新生」の必要性

\*律法を守る理由は、神の民としての地位を守るためである。

\*パウロは律法主義と闘っていたのではなく、排他主義（救いはイスラエルに限定されており、異邦人と分かち合うものではない）と戦っていた。

(3) テーマ：ロマ 1：16～17

「私は福音を恥とは思いません。福音は、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、信じるすべての人にとって、救いを得させる神の力です。なぜなら、福音のうちには神の義が啓示されていて、その義は、信仰に始まり信仰に進ませるからです。『義人は信仰によって生きる』と書いてあるとおりです」

①ロマ書のテーマは、「神の義の啓示」である。

②福音は、はじめにユダヤ人に提示された。

③次に、異邦人に提示された。

④神の義とは、信仰による義である。

## 「あいさつ (1)」

### 1. はじめに

(1) 前回の復習。パウロの執筆目的。

- ①パウロの神学をまとめるため
- ②スペイン伝道の支援を求めるため
- ③ローマの教会の中にあるユダヤ人信者と異邦人信者の対立を解決するため

(2) その目的を達成するために、書き始めの言葉は非常に重要なものとなる。

- ①ロマ書は、パウロ自身が設立していない教会に宛てた唯一の手紙である。
- ②最初に、自分と受取人とをつなぐ作業が必要となる。
- ③決して技巧ではなく、心の絆、愛の絆を結ぶ必要がある。

(3) 2 つの情報によりそれをした。

- ①神と自分との関係の紹介
- ②受取人と自分が共有している真理の確認

(4) 今回は、1 : 1 だけを取り扱い、パウロの立場を確認する。

### 2. 内容理解のための準備

(1) ギリシア語と日本語の語順の違いに注目する必要がある。

「神の福音のために選び分けられ、使徒として召されたキリスト・イエスのしもべパウロ」(新改訳)

「キリスト・イエスの僕、神の福音のために選び出され、召されて使徒となったパウロから」(新共同訳)

(2) 原文の語順

- ①パウロ
- ②しもべ、キリスト・イエスの
- ③召された、使徒として
- ④選びだされた、神の福音のために

(3) パウロという言葉をもつ 3 つのキーワードで説明している。

- ①しもべ
- ②召された



③選びだされた

3. メッセージのアウトライン

- (1) パウロという名前の意味
- (2) しもべという言葉の意味
- (3) 召されたという言葉の意味
- (4) 選びだされたという言葉の意味

4. メッセージのゴール

- (1) パウロと私たちの間に絆があるかどうかの確認（クリスチャン生活の確認）
- (2) ロマ書を学ぶべき理由があるかどうかの確認（ロマ書の権威の確認）

このメッセージは、パウロの自己紹介を通して、クリスチャン生活の本質を確認するためのものである。

I. パウロという名前の意味

1. 異邦人の解釈

- ①サウロは、ユダヤ人としての名前。
- ②パウロは、クリスチャンになってからの名前。

2. ヘブル的解釈

- (1) 離散の地のユダヤ人は、通常 2 つの名前を持っていた。
  - ①ヘブル名 サウロ（シャウル）。好ましいという意味。
  - ②ラテン名 パウロ（パウロス）。小さいという意味。
    - \*パウロという名は、クリスチャン名ではなく普通のラテン名であった。
    - \*使 13 : 7 地方総督セルギオ・パウロ（サラミスでの伝道）
  - ③今でも、離散の地のユダヤ人は 2 つの名前を持っていることが多い。
    - \*フルクテンバウム先生は、アーノルドである。
    - \*しかし、ユダヤ人の会堂では、アロンという名で知られている。

(2) サウロからパウロへの変更

「しかし、サウロ、別名でパウロは、聖霊に満たされ、彼（魔術師エルマ）をにらみつけて、言った」（使 13 : 9）

- ①この箇所から、パウロの異邦人伝道が始まったことを示している。

### 3. パウロの言語能力

(1) 彼は、ヘブル語もギリシア語も理解し、話せた。

①当時のローマ世界では、ギリシア語は共通語である。

②パウロがギリシア語を話せたことは、なんという幸いか。

「あなたはギリシヤ語を知っているのか」（千人隊長の言葉。使 21 : 37）

(2) ロマ書はギリシア語で書かれている。

①それゆえ、当時の習慣に従って、ラテン名のパウロを使用した。

②その上で、次の 3 つのキーワードによって、自らの資格を証明しようとした。

③もしギリシア語を知らず、サウロという名でしか手紙を書けないなら、ロマ書は成立していなかったであろう。

## II. しもべという言葉の意味

### 1. 「キリスト・イエスのしもべ」

(1) しもべとは、ギリシア語で「デューロス」である。

①奴隷のことである。

(2) 奴隷には 2 種類あった。

①旧約時代のユダヤ人は、貧しさのゆえに自分を売り、奴隷となった。

②その奴隷は、自分の意志に反して奴隷となったのである。

③その場合、6 年間働いて、7 年目に解放される。これがモーセの律法の規定。

「あなたがヘブル人の奴隷を買う場合、彼は六年間、仕え、七年目には自由の身として無償で去ることができる」（出 21 : 2）

④もしその奴隷がさらに主人に仕えることを選択するなら、それが許された。

「その主人は、彼を神のもとに連れて行き、戸または戸口の柱のところに連れて行き、彼の耳をきりで刺し通さなければならない。彼はいつまでも主人に仕えることができる」（出 21 : 6）

＊その家の所有物になったことを象徴している。

⑤彼は、自由意思に基づく奴隷となった。

### 2. パウロの自己認識

(1) イエスによって買い取られた奴隷であるという認識

「あなたがたは、代価をもって買われたのです。人間の奴隷となってははいけません」  
(1 コリ 7：23)

(2) パウロが経験した 3 つのステップ

- ①罪の奴隷から解放された。
- ②自由の身となった。
- ③自らの選択によって神の奴隷となった。

(3) 「キリスト・イエスのしもべ」とは、逆説的言葉である。

- ①最も不自由であるかに見えて、最も自由である。
- ②最も低き所に降ろされたように見えて、最も高き所に引き上げられている。
- ③最も弱い者になったように見えて、最も強い者にされている。

### Ⅲ. 召されたという言葉の意味

#### 1. 「召された」

(1) パウロの使徒としての資格を疑う人が多かった。

- ①かつてはキリストの教会を迫害していた。
- ②律法を否定する者と非難された。
- ③恵みを強調することによって、放縦な生活を助長していると非難された。

(2) パウロは、自らの使徒としての資格は、神からの召しにあると主張した。

①1 コリ 1：1

「神のみこころによってキリスト・イエスの使徒として召されたパウロ」

②ガラ 1：1

「使徒となったパウロ——私が使徒となったのは、人間から出たことでなく、また人間の手を通したことでなく、イエス・キリストと、キリストを死者の中からよみがえらせた父なる神によったのです——」

③2 コリ 11：23

「彼らはキリストのしもべですか。私は狂気したように言いますが、私は彼ら以上にそうなのです。私の労苦は彼らよりも多く、牢に入れられたことも多く、また、むち打たれたことは数えきれず、死に直面したこともしばしばでした」

④ロマ書執筆当時は、その戦いは下火になっていたが、それでも「召し」について書かざるを得ない。

(3) 私たちは、人間の組織によって召しの認定を受けるのではない。

①神学校の卒業証書や、学位は、召しの認定にはならない。

②神から召されたという強い確信が必要である。

## 2. 「使徒として」

(1) ギリシア語で「アポストロス」である。

①遣わされた者

②メッセンジャー

③教会に与えられた最高の賜物（1 コリ 12：28）

(2) ユダヤ的考え方では、遣わされた者は「代理人」である（ヘブル語でシャリアハ）。

①遣わされた者は、遣わした者と同一人物である。

＊同じ権威をもって行動し、交渉（商売）をする。

②エリエゼルはアブラハムの代理人として行動している（創 24 章）。

③モーセは神の代理人としてエジプトに遣わされた（出 3：14～15）。

(3) 新約聖書にも「代理人」の概念がある。

①イエスは究極的な意味で、神の「代理人」である。

「神がお遣わしになった方は、神のことばを話される。神が御霊を無限に与えられるからである」（ヨハ 3：34）

## IV. 選びだされたという言葉の意味

### 1. 「選び分けられ」

(1) ギリシア語の「アフオリゾウ」という動詞から来ている。

①「アフオリスメノス」（受動態、完了形）

②パリサイ人（ファリサイオス）と同じ語源。

③パウロはパリサイ人であったが、主イエスとの出会いによって「霊的パリサイ人」となった。

(2) 時期はいつか

①生まれる前から

「わたしは、あなたを胎内に形造る前から、あなたを知り、あなたが腹から出る前から、あなたを聖別し、あなたを国々への預言者と定めていた」（エレ 1：5）

- ②ダマスコ途上での回心の時
- ③両方の可能性がある。

## 2. 「神の福音のために」

- (1) ギリシア語では「ユーアンゲリオン」である。

- ①元々は、戦争で勝利したという知らせのことである。
- ②「グッドニュース」のことである。

### (2) 旧約聖書

- ①イザ 52 : 7 は、この「グッドニュース」を救いのこととしている。

「良い知らせを伝える者の足は山々の上にあつて、なんと美しいことよ。平和を告げ知らせ、幸いな良い知らせを伝え、救いを告げ知らせ、『あなたの神が王となる』とシオンに言う者の足は」

- ②イザ 61 : 1～2

「神である主の霊が、わたしの上にある。【主】はわたしに油をそそぎ、貧しい者に良い知らせを伝え、心の傷ついた者をいやすために、わたしを遣わされた。捕らわれ人には解放を、囚人には釈放を告げ、【主】の恵みの年と、われわれの神の復讐の日を告げ、すべての悲しむ者を慰め、」

＊ルカ 4 章でイエスが朗読された。

＊「われわれの神の復讐の日を告げ」という部分は省略された。

### (3) 新約聖書

- ①バプテスマのヨハネの宣教は、神の国（メシア的王国）の宣言であった。

- ②イエスの宣教もまた、神の国の宣言であった。

＊メシアが到来した。

＊信仰をもってメシアを受け入れるなら、神の国は成就する。

- ③イエスの死と復活以降は、その福音の内容は異なる。

＊それがなんであるかは、次回学ぶ。

## 結論：

### 1. パウロと私たちの間に絆があるかどうかの確認（クリスチャン生活の確認）

- (1) 選びの確信は共通している。

- ①ヨハ 15 : 16

「あなたがたがわたしを選んだのではありません。わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命したのです。それは、あなたがたが行って実を結び、そのあな

たがたの実が残るためであり、また、あなたがたがわたしの名によって父に求めるものは何でも、父があなたがたにお与えになるためです」

②エペ 1：4

「すなわち、神は私たちが世界の基の置かれる前から彼にあって選び、御前で聖く、傷のない者にしようとされました」

\*選びの目的は、聖化、栄化である。

(2) キリストのしもべであるという確信は共通している。

①ロマ 12：1～2 で、このテーマを展開している。

「あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい」

②教理が先、それから実践。

2. ロマ書を学ぶべき理由があるかどうかの確認（ロマ書の権威の確認）

(1) 「アポストロス」は、遣わした者と同じ権威をもって行動する。

①パウロは、大祭司からの紹介状を持って（代理人として）ダマスコに向かった。

②回心してからは、キリストの代理人となった。

「しかし、主はこう言われた。『行きなさい。あの人はわたしの名を、異邦人、王たち、イスラエルの子孫の前に運ぶ、わたしの選びの器です。彼がわたしの名のために、どんなに苦しまなければならないかを、わたしは彼に示すつもりです』」（使 9：15）

③使徒たちは全員、神の「代理人」として派遣された人たちである。

(2) 2 種類の使徒たちがいた

①12 使徒

「すなわち、ヨハネのバプテスマから始まって、私たちが離れて天に上げられた日までの間、いつも私たちと行動をともにした者の中から、だれかひとりが、私たちとともにイエスの復活の証人とならなければなりません」（使 1：22）

\*イエスが洗礼を受けた時から、弟子であった人

\*復活のイエスに出会った人

②第 2 グループの使徒たち

\*復活のイエスに出会った人

\*パウロはこの資格を満たしている。

\*バルナバもまた第 2 グループの使徒である（使 14：14）。

\*イエスの弟のヤコブも同じである（I コリ 15：7、ガラ 1：19）。

(3) エペ 2：20

「あなたがたは使徒と預言者という土台の上に建てられており、キリスト・イエスご自身がその礎石です」

- ①キリストが礎石である。
- ②使徒と預言者が土台である。つまり、置き換えはできないということ。
- ③預言者とは、新約時代の預言者。使徒には預言者の賜物もあった。
- ④使徒と預言者が土台であるとは、神の啓示が完了したということである。

(4) 現在この資格を有する人はいない。

- ①使徒たちの教えを信じ、それを守ることが、私たちの使命である。

## 「あいさつ (2)」

### 1. はじめに

#### (1) 前回の復習。パウロの自己紹介 (1)

- ①しもべ、キリスト・イエスの
- ②召された、使徒として
- ③選びだされた、神の福音のために

#### (2) ローマのクリスチャンたちと心の絆、愛の絆を結ぶ必要がある。

- ①神と自分との関係の紹介
- ②受取人と自分が共有している真理の確認

### 2. 内容理解のための準備

#### (1) 本来なら、1 節の次は 7 節に飛ぶのが自然である。

- ①パウロの性格は、火が付くとその方向に夢中になって走ること。
- ②ギリシア語の語順では、「神の福音」が 1 節の最後に来る。
- ③そこでパウロは、「神の福音」の説明を始めるのである。

#### (2) 2～6 節は、挿入句である。

- ①福音の内容が要約されている。
- ②飾りものではなく、ロマ書でパウロが語ろうとしていることの要約である。
- ③美しい対句法になっている。

＊すでに存在していた賛美である可能性がある。原本はヘブル語か。

### 3. メッセージのアウトライン

- (1) 作者は誰か。
- (2) いつ考えられたのか。
- (3) どのような内容なのか。

### 4. メッセージのゴールは、3 つのキーワードを通して福音を理解すること。

- (1) 「神の福音」(1 節)
- (2) 「前から」(2 節)
- (3) 「復活により」(4 節)



このメッセージは、パウロの自己紹介を通して、福音の本質を理解するためのものである。

## I. 作者は誰か。

### 1. 「福音」という言葉

#### (1) 「御国の福音」3 回、「神の国の福音」2 回

- ①メシア（キリスト）が登場した。
- ②そのメシアを受け入れたなら、メシア的王国（千年王国）が成就する。
- ③しかし、契約の民はそれを拒否した。
- ④それ以降、福音の内容が変わっていく。

#### (2) 「神の福音」は 8 回、「キリストの福音」は 9 回

- ①メシア的王国ではない、別のメッセージ（恵みのメッセージ）である。
- ②ロマ書の中の福音とは、この意味である。
- ③ローマの信者たちも同じ福音を信じている。
- ④そして、私たちも同じ福音を信じている。

### 2. 「神の福音」という言葉から学ぶこと

#### (1) 神が作者である。

#### (2) 「神の義」がテーマである。

- ①ロマ書は、「神の義」をテーマに読む必要がある。
- ②序言（1：1～17）は、「神の義の啓示」がテーマである。

#### (3) 神がそれを人に委ね、資格を与えた。

- ①天使ではなく、人が福音を伝える責任を負った。
- ②パウロは、「神の福音のために選び分けられた」器である。
- ③パウロには、「神の代理人」としての資格がある。

＊ローマのクリスチャンたちに対する説得力

#### ④これは新約聖書の啓示が完成するまでの時代、極めて重要な概念であった。

「そして、彼らは使徒たちの教えを堅く守り、交わりをし、パンを裂き、祈りをしていた」（使 2：42）

「それは、聖なる預言者たちによって前もって語られたみことばと、あなたがたの使徒たちが語った、主であり救い主である方の命令とを思い起こさせるためなのです」（2 ペテ 3：2）

「小さい者たちよ。今は終わりの時です。あなたがたが反キリストの来ることを聞いていたとおり、今や多くの反キリストが現れています。それによって、今は終わりの時であることがわかります。彼らは私たちの中から出て行きましたが、もともと私たちの仲間ではなかったのです。もし私たちの仲間であったのなら、私たちといっしょにとどまっていたことでしょう。しかし、そうなのは、彼らがみな私たちの仲間でなかったことが明らかにされるためなのです」（1 ヨハ 2 : 18～19）

## II. いつ考えられたのか。

### 1. 「神が、前から約束された」（新改訳）

#### (1) 日本語訳の比較

- ①「神が、あらかじめ約束された」（口語訳）
- ②「神が、既に約束された」（新共同訳）

#### (2) 原語は一語である（プロエペインゲイラト）。

- ①「神」という言葉は、訳者による追加である。
- ②福音は、後の時代に成就するように、あらかじめ神から約束されていたもの。

#### (3) 第二神殿時代のユダヤ的理解

- ①神の予知や約束は、時の始まりから存在していた。
- ②特に、メシアの誕生に関してそう考えられていた。

#### (4) パウロは、紀元 1 世紀にパリサイ派の教育、ラビとしての訓練を受けた。

- ①神の約束（計画）が天地創造の前から存在していたというのがパウロの神学。  
「すなわち、神は私たちを世界の基の置かれる前から彼にあって選び、御前で聖く、傷のない者にしようとされました」（エペ 1 : 4）

### 2. 「その預言者たちを通して」

#### (1) 普通預言者と理解されている人たち（狭義の預言者）

- ①預言書を残した預言者たち（イザヤ、エレミヤ、エゼキエル、ダニエルなど）
- ②預言書を残さなかった預言者たち（エリヤ、エリシャなど）

#### (2) それ以外の預言者たち（広義の預言者）

- ①その前の時代のサムエルも預言者である（1 サム 3 : 20）。
- ②士師のひとりデボラも女預言者である（士 4 : 4）。
- ③アロン、ミリアム、モーセも預言者である（出 7 : 1、15 : 20、申 34 : 10）。
- ④アブラハムも預言者である（創 20 : 7）。

(3) 預言者の役割

- ①同時代人に対して神の御心を伝える。
- ②将来の世代に対する神の計画を伝える。
- ③漸進的啓示という概念が非常に重要である。

(4) 預言者たちは自分が語っている内容を知っていたか。

「この救いについては、あなたがたに対する恵みについて預言した預言者たちも、熱心に尋ね、細かく調べました。彼らは、自分たちのうちにおられるキリストの御霊が、キリストの苦難とそれに続く栄光を前もってあかしされたとき、だれを、また、どのような時をさして言われたのかを調べたのです。彼らは、それらのことが、自分たちのためではなく、あなたがたのための奉仕であるとの啓示を受けました。そして今や、それらのことは、天から送られた聖霊によってあなたがたに福音を語った人々を通して、あなたがたに告げ知らされたのです。それは御使いたちもはっきり見たいと願っていることなのです」（1 ペテ 1 : 10～12）

- ①福音の内容を知っていた。
- ②知らなかったのは、誰がメシアか、いつその約束が成就するか、という点。

3. 「聖書において」

(1) ユダヤ人の聖書（旧約聖書）

- ①新約聖書はまだ完成していない。

(2) 旧約聖書と神の福音との連続性

- ①約束と成就の関係にある。
- ②ロマ書の中には、旧約聖書から 61 回の引用がある。
- ③これによって、パウロは神の福音の信頼性を証明しようとしている。

(3) 真理は、常に古くて新しい。

（例話）ハーベストフォーラム東京での CD の活用。月例会（大阪）への牧師の出席。

Ⅲ. どういう内容なのか。

1. 「御子に関すること」

(1) 原文では、「彼（神）の子に関すること」である。

2. 「御子は、肉によればダビデの子孫として生まれ」

(1) イエスの人性が証明された。

(2) 旧約聖書のメシア預言

「エッサイの根株から新芽が生え、その根から若枝が出て実を結ぶ」（イザ 11：1）

「見よ。その日が来る。——【主】の御告げ——その日、わたしは、ダビデに一つの正しい若枝を起こす。彼は王となって治め、栄えて、この国に公義と正義を行う」（エレ 23：5）

「【主】であるわたしが彼らの神となり、わたしのしもべダビデはあなたがたの間で君主となる。【主】であるわたしがこう告げる」（エゼ 34：24）

(3) ユダヤ人たちは、メシア預言をよく知っていた。

① マタイは、イエスの義父となるヨセフがダビデの家系であることを示した。

② ルカは、マリアがダビデの家系であることを示した（父親の家系をたどる）。

③ イエスに「ダビデの子」と呼びかけた。これはメシアの称号である。

\* マタ 21：9、22：42、マコ 10：47、48

3. 「聖い御霊によれば、死者の中からの復活により、大能によって公に神の御子として示された方」

(1) イエスの神性が証明された。

(2) 死者の中からの復活によって証明された。

① 聖霊による

② 「大能によって」とは「御力をもって」という意味。

\* 復活のことでもあるが、公生涯の時から力が示されていたとも考えられる。

4. 「私たちの主イエス・キリストです」

(1) ロマ 10：9

「なぜなら、もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせてくださったと信じるなら、あなたは救われるからです」

① 復活によってイエスはキリストであることが証明された。

②それを信じるのが、救いの条件である。

結論：

1. 「神の福音」(1 節)

- (1) 人が修正を加えたり、改善したりはできない。
- (2) 選り分けられ、召されたという事実の重みをパウロは実感していた。
- (3) 私たちの態度
  - ①神→使徒たち→新約聖書→そのまま信じる

2. 「前から」(2 節)

- (1) 天地創造の前から
- (2) 神の御子（第二位格の神）の永遠性

3. 「復活により」(4 節)

- (1) イエスの人性
  - ①肉によればダビデの子孫として生まれた。
  - ②永遠なるお方が有限な時間と空間の中に誕生された。
- (2) イエスの神性
  - ①死者の中からの復活により、公に神の御子として示された。
  - ②生まれたのではなく、示された（宣言された）。
  - ③パウロ自身の体験でもあった。
- (3) 復活の意義
  - ①罪の問題が解決したことの証拠である。
  - ②イエスが神の子であることの証拠である。
- (4) 福音の 3 要素
  - ①イエスは私たちの罪のために十字架で死なれた。
  - ②墓に葬られた。
  - ③3 日目に復活された。

## 「あいさつ (3)」

### 1. はじめに

#### (1) パウロの自己紹介 (1 節)

- ①しもべ、キリスト・イエスの
- ②召された、使徒として
- ③選びだされた、神の福音のために

#### (2) 挿入句 (2～6 節)

- ①パウロの情熱がこの挿入句を作り出した。
- ②福音の内容が要約されている。
- ③6 節の「このパウロから」というのは補足した言葉である。
- ④福音の内容
  - \* 神が作者である。
  - \* 天地創造の前から計画されていた。
  - \* 御子に関することである。

#### (3) きょうは、5～7 節を扱う。

- ①挿入句の残りの部分 (5～6 節)
- ②宛先へのあいさつ (7 節)

### 2. メッセージのアウトライン

- (1) 「神の義」を宣言する器
- (2) 「神の義」の内容
- (3) 「神の義」に与った人々

#### (例話) 検察の信頼が失墜した事件

- \* 村木厚子・厚生労働省元局長の無罪が確定した郵便不正事件
- \* 証拠改ざん・隠蔽（いんぺい）事件
- \* 大阪地検特捜部の元主任検事や前特捜部長らが逮捕された。
- \* 検察トップの大林宏検事総長（63）が年内に辞任する意向を固めた。
- \* 村木厚子氏にとっては、名誉回復の機会となった。
- \* 「神の義」とは「神の名誉」であり「神の栄光」である。

### 3. メッセージのゴールは、啓示された「神の義」の大枠を理解すること。

このメッセージは、啓示された「神の義」の大枠を理解するためのものである。

## I. 「神の義」を宣言する器

### 1. 「私たち」という言葉

- (1) ローマの信者を含めた「私たち」ではない。
- (2) 使徒たち全員を含めた「私たち」の可能性はある。
- (3) パウロ個人のことを示す「私たち」であろう。
  - ①ギリシア語ではよくある使用法（あるいは、編集的複数形とも言う）
  - ②僭越な印象を相手に与えないための婉曲法
  - ③「わたくし - ども」（私共）  
「ども」は接尾語。自称。単数・複数にかかわらず用いる。自分、または自分の家族・仲間などをへりくだっていう語。

### 2. 「このキリストによって」

- (1) キリストに 2 性があることは、前回確認した。
  - ①人間性
  - ②神性
- (2) 「dia」の第一義的意味は、「通して」である。
  - ①父なる神の御業が私たちに届けられるための管であり、手段である。
  - ②旧約聖書では大祭司が神と民とをつなぐ管となり、手段となった。
  - ③日本人が「仲介者」の必要性を感じないのは、神を地上レベルに引き下ろしているから。
  - ④体験的にも「キリストを通して」ということは真理である。
- (3) 私たちが受けるすべてのよきものは、キリストを通して与えられる。

### 3. パウロがキリストを通して受けたもの

- (1) 恵み（カリス）
  - ①罪人に与えられた神の憐れみ、一方的な愛のこと。
  - ②神の聖さが人間に影響を与え、信仰による救いを得させること。
  - ③パウロも、一般的な意味での恵みを受けた。

④さらに、使徒としての使命を果たすための力を受けた。

(2) 使徒の務め（使徒職のこと）

①パウロにとっては、恵みは使徒職の土台である。

②使徒は神の代理人（シャリアハ）である。

③パウロは神の代理人として語るのである。

＊パリサイ派の学びの中心は、暗記である。

＊自分の師の名によって、師から受けたことをそのまま次の世代に伝える。

＊日本的宗教観との違いは明白である。

「宗教とは人間の知能による発明であり、人々に受け入れられた時、それが  
広まる」と多くの日本人が考えている。

(3) 恵み（権威）と責務の関係に注目しよう。

①恵み（権威）なき責務はなく、責務なき恵み（権威）もない。

②これは人生における真理であり、クリスチャン生活にそのまま当てはまる。

## Ⅱ. 「神の義」の内容（原文の語順に従って解説する）

### 1. 「信仰の従順をもたらすため」

(1) 律法による義を求める熱心さではない。

①ロマ 10 : 2

「私は、彼らが神に対して熱心であることをあかしします。しかし、その熱心は  
知識に基づくものではありません」

②かつてのパウロがそうであった。

(2) 信仰から出てくる従順のことである。

①パリサイ的ユダヤ教とは異なった原理である。

②信仰は神への従順を生み出す。

### 2. 「あらゆる国の人々の中に」

(1) 新共同訳、口語訳ともに、「異邦人」と訳している。

①ギリシア語では「エスノス」。

②彼は、ローマの教会にユダヤ人信者と異邦人信者がいたことを意識している。



(2) パウロのメッセージは、2 重の意味で革命的であった。

- ①「信仰の従順」を説いた。
- ②異邦人も招かれていることを説いた。

### 3. 「御名のために」

#### (1) 訳語の問題

- ①新改訳は、直訳をしているだけ。
- ②「その御名を広めて」（新共同訳）では、弱い。

(2) 「神の栄誉と栄光のために」が正しい訳である。

#### ①詩 106：8

「しかし主は、御名のために彼らを救われた。それは、ご自分の力を知らせるためだった」

#### ②エゼ 20：14

「しかし、わたしはわたしの名のために、彼らを連れ出すのを見ていた諸国の民の目の前でわたしの名を汚そうとはしなかった」

③イスラエルの民は、地上における神の代理人である。

＊彼らの使命は、異邦人の中にあって神の栄誉を示すことである。

＊しかし、彼らはその使命を果たすことに失敗した。

(3) パウロは神の代理人（シャリアハ）として召された。

- ①イスラエルの民が失敗したことを、パウロは忠実に行おうとしている。
- ②それは、異邦人の中にあって神の栄誉を示すことである。
- ③神がいかにして妥協なしに異邦人を救うか、というのが「神の義」である。

## Ⅲ. 「神の義」に与った人々

1. 「あなたがたも、それらの人々の中にあって、イエス・キリストによって召された人々です」（6 節）

(1) ローマの信者たちも、同じ福音を信じて救われた。

- ①イエス・キリストによってこの世から呼び出された。

(2) パウロの三段論法に注目

- ①パウロは異邦人に対して使徒としての権威と責任を与えられた。

- ②あなたがたもまた、異邦人の中にあってイエス・キリストによって召された。
- ③従って、私にはあなたがたを導く権威を責任がある。

2. 「ローマにいるすべての、神に愛されている人々、召された聖徒たちへ」（7 節 a）

(1) 「すべての」

- ①ユダヤ人信者も異邦人信者も
- ②男も女も、富んだ者も貧しい者も、奴隷も自由人も

(2) 「神に愛されている人々」

- ①愛する理由があるからではない。
- ②従順だからでもない。
- ③神の性質のゆえに、愛されている。

(3) 「召された聖徒たち」

- ①聖徒は「ハギオス」である。
- ②3 つの使用法
  - \* 地域教会の会員（使 9：32、41）
  - \* 普遍的教会の会員（1 コリ 1：2）
  - \* 信者個人（エペ 1：18、コロ 1：12、黙 13：10）
- ③欠陥がないという意味ではない。
- ④選り分けられた、神のご用のために選ばれたという意味である。

3. 「私たちの父なる神と主イエス・キリストから恵みと平安があなたがたの上にありますように」（7 節 b）

(1) 伝統的なユダヤ人のあいさつの形式である。

- ①パウロ書簡のあいさつの特徴である。

(2) 「恵み」と「平安（シャローム）」という 2 つの言葉

- ①この中に、霊的・肉体的祝福がすべて詰まっている。
- ②「恵み」の作者は、父なる神である。
- ③「平安（シャローム）」をもたらしたのは主イエス・キリストである。
  - \* 神と人の和解
  - \* ユダヤ人と異邦人の和解
  - \* 人と人の和解

結論：メッセージのゴールは、啓示された「神の義」の大枠を理解すること。

1. パウロの自己認識は、神の代理人（シャリアハ）である。

- (1) 彼の関心は、神の義がいかに関示されたかを伝えることにある。
- (2) 異邦人が救いの外に置かれているなら、神の義がなったとは言えない。
- (3) 異邦人の救いは、神の義の実現である。

2. パウロは、旧約聖書に啓示されていた神の義を認識していた。

(1) 創 49：10（ヤコブの預言）

「王権はユダを離れず、統治者の杖はその足の間を離れることはない。ついにはシロが来て、国々の民は彼に従う」

(2) 詩 2：7～8（メシア的詩篇）

「わたしは【主】の定めについて語ろう。主はわたしに言われた。『あなたは、わたしの子。きょう、わたしがあなたを生んだ。わたしに求めよ。わたしは国々をあなたへのゆずりとして与え、地をその果て果てまで、あなたの所有として与える』」

3. 新約時代になって啓示された「奥義」がある。

(1) パウロは神の代理人として、神の計画の全貌を開示しようとしている。

(2) 「奥義」の内容

- ①イスラエルの民のつまずき
- ②異邦人の救い（アブラハム契約への接ぎ木）
- ③イスラエルの民のねたみ
- ④イスラエルの民の民族的救い

(3) ロマ 1：16～17 がテーマである。

「私は福音を恥とは思いません。福音は、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、信じるすべての人にとって、救いを得させる神の力です」

## 「ローマ教会との関係（1）」

### 1. はじめに

#### (1) パウロの自己紹介（1 節）

- ①しもべ、キリスト・イエスの
- ②召された、使徒として
- ③選びだされた、神の福音のために

#### (2) 挿入句：福音の要約（2～6 節）

- ①神が作者である。
- ②天地創造の前から計画されていた。
- ③御子に関することである。  
\*復活により、イエスは神であることが証明された。

#### (3) ローマの信徒たち（宛先）へのあいさつ（7 節）

#### (4) きょうの箇所では、ローマ教会との関係が説明される。

- ①「心の絆」の構築
- ②今回は 1：8～12 までを扱う。

### 2. メッセージのアウトライン

- (1) 感謝の人パウロ
- (2) 祈りの人パウロ
- (3) 使命の人パウロ

### 3. メッセージのゴールは、パウロがローマ教会を訪問したいと思った理由を理解すること。

このメッセージは、パウロがローマ教会を訪問したいと思った理由を理解するためのものである。

## I. 感謝の人パウロ（8 節）

### 1. パウロはこの教会が存在していることを感謝している。

「まず第一に、あなたがたすべてのために、私はイエス・キリストによって私の神に感謝します」

(1) イエス・キリストを通して

- ①イエス・キリストがこの教会を建てた。
- ②パウロの感謝も、イエス・キリストを通して。

(2) この教会は、使徒たち（パウロも含む）の手によって建てられた教会ではない。

- ①ペンテコステの日にエルサレムに来ていたユダヤ人が伝道した。
- ②パリサイ派のユダヤ人から迫害を受けたメシアニック・ジューが伝道した。
- ③こういう教会が存在することは、驚きであり、感謝である。
- ④当時は、異邦人主体の教会になっていた。

2. 感謝の理由は、彼らの信仰が広く知られるようになっているからである。

「それは、あなたがたの信仰が全世界に言い伝えられているからです」

(1) 「全世界」とは、当時知られていた世界のこと。

- ①ユダヤ人信者にも異邦人信者にも
- ②教会に敵対的なユダヤ人にも異邦人にも

(2) しかも評判がいい。

- ①パウロが設立に関係したコリント教会のようではなかった。

3. 感謝を第一にする人生

(1) 相手と「心の絆」を結ぶための手法

(2) パウロ自身の生き方の反映

- ①1 コリでさえも、冒頭に「感謝」という言葉が出てくる。

## II. 祈りの人パウロ（9～10 節）

1. 彼は、この教会のために常に執りなしの祈りを捧げている。

「私が御子の福音を宣べ伝えつつ霊をもって仕えている神があかししてくださることですが、私はあなたがたのことを思わぬ時はなく、」

(1) 神を証人にしている。

- ①「霊をもって仕えている」
- ②「心から仕えている」（新共同訳）
- ③キリストの福音を宣べ伝えつつ

(2) 「私はあなたがたのことを思わぬ時はなく」

「わたしは、祈るときにはいつもあなたがたのことを思い起こし」（新共同訳）

①パウロはこの教会を訪問したことはないが、噂をよく聞いている。

②よい教会ではあるが、まだ欠けているものがあることを知っている。

③いつも祈っているので、訪問したくなった。

2. 彼は、自分の願いを神に申し上げている。

「いつも祈りのたびごとに、神のみこころによって、何とかして、今度はついに道が開かれて、あなたがたのところに行けるようにと願っています」

(1) この祈りは、長い時間をかけた祈りである。

(2) 神の御心になるようにという祈りである。

①使徒とは、神の代理人である（シャリアハ）。

②代理人なら、派遣者の意図通りに動かねばならない。

3. 私たちへの教訓

(1) クリスチャンの一体感

①初対面の人でも、クリスチャン同士ならすぐに親しくなる。

②会ったことがなくても、執りなしの祈りを捧げることができる。

### Ⅲ. 使命の人パウロ（11～12 節）

1. 11 節

「私があなたがたに会いたいと切に望むのは、御霊の賜物をいくらかでもあなたがたに分けて、あなたがたを強くしたいからです」

(1) 「御霊の賜物」とは、使徒職のことである。

①「御霊の賜物を分ける」とは、使徒職の行使のことである。

②「強くしたい」（ステイリゾウ）とは、確立すること、建て上げること。

(2) 使徒の役割は、教会の建て上げである。

「こういうわけで、あなたがたは、もはや他国人でも寄留者でもなく、今は聖徒たちと同じ国民であり、神の家族なのです。あなたがたは使徒と預言者という土台の上に建てられており、キリスト・イエスご自身がその礎石です」（エペ 2 : 19～20）

①使徒の役割は、教会の土台となること。

(3) パウロは、ローマ教会に欠けているものがあると感じていた。

①「あなたがたのところに行くときは、キリストの満ちあふれる祝福をもって行くことと信じています。」(15：29)

＊「キリストの満ち溢れる祝福」という言葉に気持ちが込められている。

②「神は、わたしの福音すなわちイエス・キリストについての宣教によって、あなたがたを強めることがおできになります。この福音は、世々にわたって隠されていた、秘められた計画を啓示するものです」(ロマ 16：25 新共同訳)

＊「わたしの福音」という言葉に着目。

＊他の使徒たちにではなく、特にパウロに啓示された真理がある。

＊パウロはその真理をローマ教会に伝えようとした。

## 2. 12 節

「というよりも、あなたがたの間にいて、あなたがたと私との互いの信仰によって、ともに励ましを受けたいのです」

(1) 謙遜なパウロ

①自分がローマ教会の信徒たちよりも上だという印象を与えないようにしている。

②彼らの信仰や体験からも学びたいと願っている。

(2) クリスチャンは、互いの信仰から学び合い、励まし合うことができる。

①支配ではなく、相互に仕え合うことこそ、キリストの教会の特徴である。

結論：メッセージのゴールは、パウロがローマ教会を訪問したいと思った理由を理解すること。

## 1. 「私の福音」

(1) パウロ書簡の中に 3 度出てくる。

①ロマ 2：16、16：25、2テモ 2：8

(2) 使徒たちは同じ福音を伝えたが、特にパウロに啓示されていた真理がある。

①それを教えることによって、ローマ教会が不足している点を満たそうとした。

## 2. 特にパウロに与えられた 2 つの啓示

(1) 奥義

「その奥義とは、福音により、キリスト・イエスにあって、異邦人もまた共同の相続者となり、ともに一つのからだに連なり、ともに約束にあずかる者となるということです」(エペ 3：6)

- ①教会そのものではなく、ユダヤ人と異邦人がひとりの人になることが奥義である。
- ②パウロは、ローマ教会の中にあったユダヤ人信者と異邦人信者の壁を取り除こうとした。

(2) 位置的真理 (positional truth)

「このように、あなたがたも、自分は罪に対しては死んだ者であり、神に対してはキリスト・イエスにあって生きた者だと、思いなさい」(ロマ 6：11)

「罪から来る報酬は死です。しかし、神の下さる賜物は、私たちの主キリスト・イエスにある永遠のいのちです」(ロマ 6：23)

- ①パウロは、テクニカルターム（専門用語）として前置詞を使っている。
- ②「in Christ」「in Jesus」「in Jesus Christ」「in Christ Jesus」「in Him」「in whom」などがある。
- ③キリストを信じた人は、神との関係に置いて新しい位置に置かれたのである。

3. ロマ書の現代的意味

(1) メシアニック・ジュー運動と異邦人教会の関係

(2) 儒教的キリスト教からの解放



## 「ローマ教会との関係（2）」

### 1. はじめに

- (1) あいさつ（1～7 節）
- (2) ローマ教会との関係（8～15 節）
  - ①「心の絆」の構築
  - ②今回は、1：8～12 を扱った。
    - \*感謝の人パウロ
    - \*祈りの人パウロ
    - \*使命の人パウロ
  - ③今回は 1：13～15 までを扱う。
  - ④パウロの使命意識  
(例話) タイガーマスク現象

### 2. メッセージのアウトライン

- (1) 異邦人の使徒
- (2) 負債を負った人（債務者）

### 3. メッセージのゴールは、パウロの使命意識から教訓を学ぶこと。

このメッセージは、パウロの使命意識から教訓を学ぶことである。

## I. 異邦人の使徒（13 節）

「兄弟たち。ぜひ知っておいていただきたい。私はあなたがたの中でも、ほかの国の人々の中で得たと同じように、いくらかの実を得ようと思って、何度もあなたがたのところに行こうとしたのですが、今なお妨げられています」

### 1. パウロはこの文を強調している。

「兄弟たち。ぜひ知っておいていただきたい」

「兄弟たちよ。このことを知らずにいてもらいたくない」（口語訳）

- (1) 「兄弟たち」という呼びかけは、親しみを表現している。

- (2) この表現法は、パウロ書簡に特徴的なものである。

- ①ロマ 11：25、1 コリ 10：1、12：1、2 コリ 1：8、1 テサ 4：13
- ②二重否定であるがゆえに、その内容がさらに強調される。

2. 「何度もあなたがたのところに行こうとした」

(1) 急に思い立ったことではなく、以前から心に決め、決意していたことである。

3. 「今なお妨げられている」

(1) これは挿入句である。

(2) 訪問が延び延びになっているのは、パウロの責任ではない。

①サタンの妨害が考えられる。

「それで私たちは、あなたがたのところに行こうとしました。このパウロは一度ならず二度までも心を決めたのです。しかし、サタンが私たちを妨げました」

(1 テサ 2 : 18)

②優先すべき仕事がある。

\*当時彼は、異邦人教会からの献金をエルサレム教会に届けようとしていた。

4. 「私はあなたがたの中でも、ほかの国の人々の中で得たと同じように、いくらかの実を得ようと思って、」

(1) 彼は異邦人の使徒として召された。

「しかし、主はこう言われた。『行きなさい。あの人はわたしの名を、異邦人、王たち、イスラエルの子孫の前に運ぶ、わたしの選びの器です』」(使 9 : 15)

①主からダマスコの信徒アナニヤへのことば

(2) 彼は異邦人世界で伝道してきた。

「…私はエルサレムから始めて、ずっと回ってイルリコに至るまで、キリストの福音をくまなく伝えました。このように、私は、他人の土台の上に建てないように、キリストの御名がまだ語られていない所に福音を宣べ伝えることを切に求めたのです。それは、こう書いてあるとおりです。『彼のことを伝えられなかった人々が見るようになり、聞いたことのなかった人々が悟るようになる』。そういうわけで、私は、あなたがたのところに行くのを幾度も妨げられましたが、今は、もうこの地方には私の働くべき所がなくなりましたし、また、イスパニヤに行く場合は、あなたがたのところ立ち寄ることを多年希望していましたので」(ロマ 15 : 19～23)

①未伝の地はもはやイスパニヤしか残されていない。

②その前に、ローマにおいても異邦人伝道の責任を果たしたい。

## II. 負債を負った人（債務者）

「私は、ギリシヤ人にも未開人にも、知識のある人にも知識のない人にも、返さなければならぬ負債を負っています」（14 節）

### 1. 直訳

「私は、ギリシヤ人にも未開人にも、教育のある人にもない人にも、債務者である」

(1) ローマ教会の信徒たちから良くしてもらったので恩義を感じている、という意味でない。

### 2. イスラエル人一般に与えられた異邦人に対する使命

「なぜなら、主は私たちに、こう命じておられるからです。『わたしはあなたを立てて、異邦人の光とした。あなたが地の果てまでも救いをもたらすためである』（使 13 : 47)

(1) ピシディアのアンテオケでの伝道

① 先ずユダヤ人に福音を語ったが、彼らはそれを拒否した。

② そこでパウロとバルナバは、異邦人の方に向かうと宣言した。

③ ここでパウロは、イザ 49 : 6 を引用している。

(2) アブラハム以来、イスラエルの選びは全人類に救いをもたらすためであった。

① パウロの召しは、イスラエルの民に与えられていた召しの延長線上にある。

② パウロは、イスラエルの民の失敗を贖おうとしている。

### 3. 異邦人の使徒として召されたという使命意識

「そこで、異邦人の方々に言いますが、私は異邦人の使徒ですから、自分の務めを重んじています。そして、それによって何とか私の同国人にねたみを引き起こさせて、その中の幾人でも救おうと願っているのです」（ロマ 11 : 13～14)

(1) 異邦人伝道の使命が与えられている。

(2) それは、ユダヤ人の救いにつながる。

① 「ねたみ」がキーワードである。

### 4. 特別な啓示を受けたことから来る使命意識

(1) ガラ 1 : 11～12

「兄弟たちよ。私はあなたがたに知らせましょう。私が宣べ伝えた福音は、人間によるものではありません。私はそれを人間からは受けなかったし、また教えられもしませんでした。ただイエス・キリストの啓示によって受けたのです」

①自らの使徒職の擁護となっている。

(2) エペ 3 : 1~3

「こういうわけで、あなたがた異邦人のためにキリスト・イエスの囚人となった私パウロが言います。あなたがたのためにと私がいただいた、神の恵みによる私の務めについて、あなたがたはすでに聞いたことでしょう。先に簡単に書いたとおり、この奥義は、啓示によって私に知らされたのです」

①異邦人がキリスト・イエスにあって、ユダヤ人と共同相続人となる。

(3) 2 コリ 12 : 7~10

「また、その啓示があまりにもすばらしいからです。そのために私は、高ぶることのないようにと、肉体に一つのとげを与えられました。それは私が高ぶることのないように、私を打つための、サタンの使いです。このことについては、これを私から去らせてくださるようにと、三度も主に願いました。しかし、主は、『わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現れるからである』と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。ですから、私は、キリストのために、弱さ、侮辱、苦痛、迫害、困難に甘んじています。なぜなら、私が弱いときにこそ、私は強いからです」

①弱さの意味を理解し、それを誇る信仰へと導かれた。

②根底にあるのは、想像を絶するような祝福の啓示を受けたという事実である。

4. 「ギリシヤ人にも未開人にも、知識のある人にも知識のない人にも」の意味

(1) ローマ人による人類二文法

①ギリシア人と未開人に分ける。ギリシア語を話すかどうかによる分類である。

②ローマ人はギリシア人の中に含まれる。

③知識のある人とはギリシア人のこと、知識のない人とは未開人のこと。

(2) ユダヤ人は人類を、ユダヤ人と異邦人に二分する。

5. 「ですから、私としては、ローマにいるあなたがたにも、ぜひ福音を伝えたいのです」

(15 節)

(1) 英語では、「I am ready to preach the gospel to you」となっている。

①個人的な願いというよりも、キリストの導きである。

②福音は言葉で語らなければ、伝わらない。

(2) この 15 節で、コリントにいるパウロとローマ教会の信徒の間に架け橋ができた。

結論：メッセージのゴールは、パウロの使命意識から教訓を学ぶことである。

1. 私たちは、同胞への負債を負っている。

(1) 聖書の労働観

- ①労働は礼拝である。
- ②神の栄光を表す生き方というものがある。

(2) 言葉による福音の伝達がなければ、救われる人はいない。

- ①家族伝道の使命（まだ不十分である）
- ②自分の賜物を認識せよ（私の場合は、英語バイブルクラスで賜物を認識した）。

2. 私たちは、ユダヤ人への負債を負っている。

(1) パウロは異邦人への負債を負っていると語った。

- ①ユダヤ人としての使命意識
- ②異邦人の使徒としての使命意識
- ③特別な啓示を受けた者としての使命意識

(2) ロマ 11 : 13～14

「そこで、異邦人の方々に言いますが、私は異邦人の使徒ですから、自分の務めを重んじています。そして、それによって何とか私の同国人にねたみを引き起こさせて、その中の幾人でも救おうと願っているのです」

- ①異邦人信者の使命は、ユダヤ人にねたみを起させるような生活をする事。

(3) ロマ 15 : 27

「彼らは確かに喜んでそれをしたのですが、同時にまた、その人々に対してはその義務があるのです。異邦人は霊的なことでは、その人々からもらいものをしたのですから、物質的な物をもって彼らに奉仕すべきです」

- ①異邦人クリスチャンからエルサレムの聖徒たちへの献金
- ②この原則は、今も生きている。

## 「テーマ (1)」

### 1. はじめに

(1) あいさつ (1～7 節)

(2) ローマ教会との関係 (8～15 節)

①「心の絆」を結んだ。

②パウロの使命意識が明らかになった。

(3) いよいよテーマに入っていく。

①今回は 1：16 のみ取り上げる。

### 2. 「私は福音を恥とは思いません」(16 節)

(1) 日本語訳では、「なぜなら」という言葉が抜けている。

①15 節と 16 節をつなぐ重要な言葉である。

②英語では、「For」であろう。

(2) パウロがローマにまで行って、命がけで福音を伝えたい理由がある。

①それは、彼が福音を恥としていないからである。

②「しない (思わない)」という言葉に強調がある。

(3) 「恥と思う」とは、信じないことと同じ意味である。

①マコ 8：38

「このような姦淫と罪の時代にあって、わたしとわたしのことばを恥じるような者なら、人の子も、父の栄光を帯びて聖なる御使いたちとともに来るときには、そのような人のことを恥じます」

②2 テモ 1：11～12

「私は、この福音のために、宣教者、使徒、また教師として任命されたのです。そのために、私はこのような苦しみにも会っています。しかし、私はそれを恥とは思っていません。というのは、私は、自分の信じて来た方をよく知っており、また、その方は私のお任せしたものを、かの日のために守ってくださることができると確信しているからです」

(4) 「恥としない」とは、完璧な信頼を置いている、誇りとしているという意味。

(5) パウロがそう言わざるを得なかった理由がある。

①1 コリ 1：22～23

「ユダヤ人はしるしを要求し、ギリシヤ人は知恵を追求します。しかし、私たちは十字架につけられたキリストを宣べ伝えるのです。ユダヤ人にとってはつまり、異邦人にとっては愚かでしょうが、しかし、ユダヤ人であってもギリシヤ人であっても、召された者にとっては、キリストは神の力、神の知恵なのです」

②ユダヤ人からは軽蔑される。

＊彼らはキリストからでさえも「しるし」を要求した。

＊十字架の死は、呪いの死である。「つまり」である。

＊パウロはユダヤ人から迫害された。

③ギリシヤ人からも軽蔑される。

＊彼らは知恵を追求した（ローマ人は力も追求した）。

＊十字架の死は、愚かである。

＊パウロは無視された。

## 2. メッセージのアウトライン（ギリシヤ語の語順に従って）

パウロが福音を恥としなかった 4 つの理由

- (1) 神の力
- (2) 救い
- (3) すべての人
- (4) 先ずユダヤ人、そしてギリシヤ人

## 3. メッセージのゴール

- (1) 救いの本質の理解
- (2) ユダヤ人、異邦人という順番

このメッセージは、パウロが福音を恥としなかった 4 つの理由を考え、福音の本質を理解しようとするものである。

## I. 神の力

### 1. 「福音は、神の力です」

- (1) 福音の定義はこの箇所にはない。

### 2. 1 コリ 15 : 3～8 にある定義

「私があなたがたに最もたいせつなこととして伝えたのは、私も受けたことであって、次のことです。キリストは、聖書の示すとおりに、私たちの罪のために死なれたこと、また、

葬られたこと、また、聖書の示すとおりに、三日目によみがえられたこと…」

- (1) キリストは私たちの罪のために死なれた。
- (2) 葬られた。
- (3) 三日目によみがえられた。

3. パウロのイメージの中には、イザ 55：11 があつたに違いない。

「そのように、わたしの口から出るわたしのことばも、むなしく、わたしのところに帰っては来ない。必ず、わたしの望む事を成し遂げ、わたしの言い送った事を成功させる」

- (1) 神のことばには力がある。
- (2) 究極的な神のことばは、イエス・キリストである。
- (3) イエス・キリストは、父なる神の計画を成し遂げ、成功させた。

4. パウロは、福音の中に神の力が内在していることを確信していた。

- (1) 福音は、御子に関することである。
- (2) 福音は、御子を通して成し遂げられたことである。
- (3) この福音に全幅の信頼を置いていた。

## II. 救い

1. 「福音は、救いを得させる神の力です」

- (1) 「救いをもたらす神の力だからです」（新共同訳）  
「救いに至る神の力だからです」（直訳）
- (2) 逆に言えば、神の力は救いをもたらすということ。

2. 救いがこの書簡のキーワードである。

- (1) ロマ書 1 章～8 章までは、救いの説明と定義である。
- (2) チャート参照。

3. 救いの 3 要素

- (1) 義認（過去形の救い）
  - ①信じた瞬間に与えられている。
  - ②善良な人間になったということではない。
  - ③これは法廷用語である。
  - ④父なる神との関係が変化した。和解させられた。



(2) 聖化（現在進行形の救い）

- ①完成に向かうプロセスである。
- ②クリスチャンはみな、この過程を歩んでいる。

(3) 栄化（未来形の救い）

- ①救いが完成した状態である。
- ②私たちはやがて栄光の姿に変えられる。

4. 福音が神の力である理由は、救いの 3 要素がすべて約束され、成就するからである。

（例話）安いツアーはグッド・ニュースか。安いなりのわけがある。

- (1) 義認だけなら、神の力は 3 分の 1 である。
- (2) 聖化までなら、神の力は 3 分の 2 である。
- (3) 栄化まで成就するがゆえに、それは 100 パーセント神の力である。

### Ⅲ. すべての人

1. 「福音は、信じるすべての人にとって、救いを得させる神の力です」

- (1) 救いは、すべての人に差し出されている。
- (2) しかし、すべての人が救いを経験するわけではない。
  - ①救いを受ける条件（方法）は、信仰である。
  - ②福音の 3 要素を信じ、イエスをそのようなお方として信頼すること。
  - ③イエスの処女降誕や復活を信じない牧師やクリスチャンがいるが、その人たちは救われていない。

### Ⅳ. 先ずユダヤ人、そしてギリシア人

1. 「福音は、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、信じるすべての人にとって、救いを得させる神の力です」

- (1) 「先ずユダヤ人に対して、そしてギリシア人に対して」（直訳）
- (2) 福音伝達には神が計画された順序がある。

2. 動詞はひとつで、現在形である。

(1) 今も福音は、神の力である。

(2) 今も、ユダヤ人、ギリシア人という順序が有効である。

結論：メッセージのゴールは、パウロが福音を恥としなかった理由を考え、福音の本質を理解することである。

#### 1. 救いの本質の理解

(1) 信仰以外の条件を付け加えるなら、福音は神の力ではなくなる。

(2) 教会史は、そういう事例で満ちている。

(3) 義認、聖化、栄化はすべて信仰によるということを教えないなら、神の力を割引していることになる。

#### 2. ユダヤ人、異邦人という順番

(1) 時間的順番（ユダヤ人の選び）

(2) 契約が与えられた順番

(3) キリストの宣教の順番

(4) パウロの宣教の順番

①使 13 : 4～5 サラミスでの伝道

②使 28 : 23 ローマでの伝道

## 「テーマ (2)」

### 1. はじめに

(1) あいさつ (1～7 節)

(2) ローマ教会との関係 (8～15 節)

①「心の絆」を結んだ。

②パウロの使命意識が明らかになった。

(3) いよいよテーマに入っていく。

①前回は、1：16 を取り上げた。

②今回は、1：17 を取り上げる。

③このメッセージは、「序言」のまとめのメッセージである。

2. 「なぜなら、福音のうちには神の義が啓示されていて、その義は、信仰に始まり信仰に進ませるからです。『義人は信仰によって生きる』と書いてあるとおりです」(17 節)

(1) ロマ書の中で最も重要な聖句である（聖書全体と言ってもいいかもしれない）。

(2) 「なぜなら」という言葉の重要性

①15 節と 16 節をつなぐ言葉になっている。

\*パウロはローマでの伝道を強く願っている。

\*なぜなら、彼は福音を恥としないからである。

②16 節と 17 節をつなぐ言葉になっている。

\*福音は救いに至る神の力である。

\*なぜなら、福音の内には神の義が啓示されているからである。

### 3. メッセージのアウトライン

(1) 神の義の啓示

(2) 信仰の原則

(3) 旧約聖書に見られる原則

### 4. メッセージのゴールは、福音の本質（7 つの側面）を理解すること。

このメッセージは、ロマ 1：17 を通して、福音の本質を理解するためのものである。

## I. 神の義の啓示

「なぜなら、福音のうちには神の義が啓示されていて、」

1. 「神の義」と対立する概念は、「人間の義」である。
  - (1) 「人間の義」とは、業による救いことである。
    - ①「人間の義」は、人間世界において誕生した義であるがゆえに、分かりやすい。
  - (2) キリストの福音以外のものは、すべて「人間の義」を追求しようとするもの。
    - ①ユダヤ教は、血筋による救いと、業による報酬を教える。
    - ②イスラム教は、業による救いを教える。
    - ③その他の宗教も、すべて「人間の義」を追求しようとするもの。
2. 「神の義」とは何か。
  - (1) 罪人を「律法という法廷」の中で義と宣言すること。
  - (2) 罪人に「神の義」を転嫁すること。
  - (3) それを実現する方法（計画）自体が、神の性質に反していないこと。
  - (4) つまり、ゴールも方法も神の義なる性質に叶っているということ。
3. 「神の義」は福音のうちに啓示されている。
  - (1) 「神の義」は、人間世界において誕生した義ではないので、分かりにくい。  
（例話）内村鑑三の回心体験

## Ⅱ. 信仰の原則

「その義は、信仰に始まり信仰に進ませるからです」

「それ（神の義）は、初めから終わりまで信仰を通して実現されるのです」（新共同訳）

「out of faith, into faith」（信仰から出て、信仰に至る）

1. 福音は、最初から最後まで、信仰を土台としてのみ機能する。
  - (1) 信仰は源であり、ゴールである。
2. 救いの 3 要素の再確認
  - (1) 義認（過去形の救い）
    - ①善良な人間になったということではなく、義と宣言されたということ。
    - ②父なる神との関係が変化し、和解させられた。
    - ③義認は、信仰によってのみ成就する。

(2) 聖化（現在進行形の救い）

- ①完成に向かうプロセスである。
- ②クリスチャンはみな、この過程を歩んでいる。
- ③聖化は、信仰によってのみ成就する。

(3) 栄化（未来形の救い）

- ①救いが完成した状態である。
- ②私たちはやがて栄光の姿に変えられる。
- ③栄化は、信仰によってのみ成就する。

3. 信じた人には、上の 3 つのステップが保証されている。

(1) それゆえ、福音の 3 要素を日々確認する必要がある。

- ①キリストの復活までしっかり語ること。

(2) キリストは生きておられる。

- ①そのキリストに信頼を告白する。
- ②キリストの力によって救いの完成へと導かれる。

### Ⅲ. 旧約聖書に見られる原則

『義人は信仰によって生きる』と書いてあるとおりです」

1. 信仰の原則は、すでに旧約聖書に存在する。

(1) ハバクク書 2：4 からの引用。

- ①新しい教えではなく、昔から知られていた教えである。
- ②当時の信者は、異邦人信者も含めて旧約聖書の知識が相当あった。

(2) いかなるディスペンセーション（経綸、時代）においても、信仰の原則は存在している。

2. ハバクク書 2：4 の文脈

(1) ハバククの第 1 の疑問

- ①神の民ユダの中で暴虐が行われていた。
- ②彼は、それに関して何度も祈って来たが、神からの回答はない。
- ③神はどうして民の罪をそのまま放置しておられるのか。

(2) 神の回答

- ①ユダを裁くための器が起こされる。
- ②その器は、これまた暴虐を特徴とするカルデヤ人（バビロニア）である。
- ③この時点では、バビロニアは注目されることのない小国。
- ④それゆえ、この国が強国として登場することは、驚愕すべき出来事。

(3) ハバククの第 2 の疑問

- ①ハバククは、イスラエルの民が完全に滅びることはないと確信している。
- ②その理由は、神と彼らの間に契約関係があるから。
- ③なぜユダよりも邪悪なバビロニアを用いてユダを裁くのか。
- ④第 1 の疑問よりも重大な疑問である。
- ⑤この疑問は、20 世紀のホロコーストに関する疑問と同じである。

(4) 神の回答

- ①神のことばを信じ、それに従って生きる人は信仰者であり、義人である。
- ②ハバククは、神がなぜカルデヤ人を用いてユダを裁くのか、理解できない。
- ③しかし神は、最終的にはすべての問題が解決することを信じるように命じた。
- ④次に神は、罪深く傲慢なカルデヤ人は必ず滅ぼされると預言される。

(5) ハバククの祈り

- ①神の計画が最善であることを信じて前進する。  
「しかし、私は【主】にあって喜び勇み、私の救いの神にあって喜ぼう」（3 : 18）
- ②逆境が彼を神に近づけた。  
「私の主、神は、私の力。私の足を雌鹿のようにし、私に高い所を歩ませる」（ハバクク書の最後の節、3 : 19）

結論：福音の 7 つの側面をまとめてみる。

- 1. 福音の制作者は神である。
- 2. 福音には神の力が内蔵されている。
- 3. 福音は人に救いをもたらす。

(1) 義認

(2) 聖化

(3) 栄化

4. 福音はすべての人に差し出されている。

5. 福音を受け取る唯一の方法は、信じることである。

(1) 信仰に始まり、

(2) 信仰に終わる。

6. 福音には神の義が啓示されている。

(1) 信じる人は、神の義を持つ。

(2) 神ご自身の義と矛盾しない方法である。

7. 福音の伝達には順番がある。

(1) ユダヤ人

(2) 異邦人

## 「異教徒の罪 (1)」

### 1. はじめに

#### (1) 序言 (1~17 節)

#### (2) 救いの第 1 番目の要素「義認」について論じ始める。

①神が罪人に神の義を転嫁すること。

②1 : 18~5 : 21 まで

#### (3) 義認を論じる前に、罪について理解する必要がある。

①罪人としての自覚がないなら、救いを求めて神のもとに来ることはない。

②パウロは、すべての人が有罪であることを論証しようとしている。

③それが、有罪宣言の内容である (1 : 18~3 : 20)。

④自らが霊的に病人であることを知らなければ、霊的医者のもとには来ない。

#### (4) 人類の 2 分法

①ユダヤ人による分類法 : ユダヤ人と異邦人 (異教徒)

②ギリシア人による分類法 : 文化的な人と野蛮人

#### (5) パウロの論理展開

①異教徒の罪 (1 : 18~32)

②文化的異教徒の罪 (2 : 1~16)

③ユダヤ人の罪 (2 : 17~3 : 8)

④結論 : すべての人は罪人である (3 : 9~20)

### 2. メッセージのアウトライン

#### (1) 知識の啓示 (1 : 18~20)

#### (2) 知識の拒否 (1 : 21~23)

#### (3) 拒否の結果 (1 : 24~32)

今回は、(1) と (2) を扱う。

### 3. メッセージのゴール : 福音を聞かないで死んだ人はどうなるのか。

このメッセージは、罪人が置かれている立場を理解するためのものである。

#### I. 知識の啓示 (1 : 18~20)

「というのは、不義をもって真理をはばんでいる人々のあらゆる不敬虔と不正に対して、神の怒りが天から啓示されているからです」 (18 節)

##### 1. 訳語の問題



(1) 「というのは」(For) という接続後を訳しているのは、新改訳だけである。

(2) これは重要な接続詞である。

①パウロは、17 節でロマ書のテーマを提示した。

「なぜなら、福音のうちには神の義が啓示されていて、その義は、信仰に始まり信仰に進ませるからです。『義人は信仰によって生きる』と書いてあるとおりです」

②今から、そのテーマの論証が始まる。

③その内容は、8 章の終りまで続く。

④パウロは、福音以外の救いの方法は無力であることを論証しようとしている。

## 2. 神の怒り

(1) 神の不快感、神の立腹のこと

①復讐ではない。

②神の愛の中に含まれる感情である。

(例話) ファイドという犬が便器から水を飲んでいる。

(2) 「不敬虔と不正に対して」

①「不敬虔」とは、宗教的な意味での罪のことである。

＊神を無視すること

＊神がいないかのような生活を続けていること

②「不正」とは、道徳的な意味での罪のことである。

(3) 彼らは、「不義をもって真理をはばんでいる人々」である。

①「不義によって真理の働きを妨げる人間」(新共同訳)

②真理を押さえつけていること

③「真理」は彼らに啓示されている。

## 3. 真理の啓示

「それゆえ、神について知られることは、彼らに明らかです。それは神が明らかにされたのです」(19 節)

(1) 「それゆえ」ではなく、「なぜなら」(新共同訳)である。

①「ディオティ」という非常に強い接続詞である。

②異教徒がどのようにして真理を押さえつけているかを明らかにしている。

- (2) 聖書を持たない人にも啓示が与えられている。
  - ①被造世界を通して、神についての知識を得ることができる。
  - ②程度の差はあるが、すべての人にある程度の啓示が与えられている。
  - ③人間は神の「かたち」に創造されている。神を認識する能力がある。

#### 4. 弁解の余地はない

「神の、目に見えない本性、すなわち神の永遠の力と神性は、世界の創造された時からこのかた、被造物によって知られ、はっきりと認められるのであって、彼らに弁解の余地はないのです」(20 節)

- (1) 福音の内容は分からないが、神についての啓示は与えられている。
  - ①特別啓示と一般啓示
- (2) 被造の世界を通した啓示には、少なくとも 2 つの要素がある。
  - ①神が存在する（目に見えるものは目に見えないものによって創造された）。
  - ②神は力あるお方である。
- (3) 「弁解の余地はない」とはきつい言葉である。
  - ①人間には神に関する知識がある。
  - ②人間はそれを押さえつけて、宗教的に、道徳的に、自分勝手に生きている。
  - ③人間は意図的に真理を押さえつけている。だから、弁解の余地はない。

## II. 知識の拒否（1 : 21～23）

### 1. 接続詞の訳語の問題

「それゆえ」

- (1) 「なぜなら」（新共同訳）がよい。
  - ①20 節の「弁解の余地がない」という理由を説明している。
  - ②神が罪人を裁くのは正しいということを説明している。

- (2) 異教徒は、神を知っていながら、意図的に墮落へのステップを踏んでいる。

### 2. 墮落の 7 つのステップ

「彼らは神を知っていながら、その神を神としてあがめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その無知な心は暗くなりました。彼らは、自分では知者であると言い

ながら、愚かな者となり、不滅の神の御栄えを、滅ぶべき人間や、鳥、獣、はうもののかたちに似た物と代えてしまいました」

- (1) 神を神としてあがめない。
  - ①唯一の神の存在を認めない。
  - ②全知全能の神の存在は、歓迎されない。
- (2) 神に感謝もしない。
  - ①命と祝福の源である神を無視する。
  - ②感謝のない人は、心が頑なになり、霊的に鈍感になる。
  - ③その結果、さらに墮落のステップを踏むことになる。
- (3) その思いはむなしくなる。
  - ①「むなしい思いにふけり」（新共同訳）
  - ②自分中心にものごとを考えるようになる。
  - ③むなしい議論に走り、ますます神の知識から離れて行く。
- (4) その無知な心は暗くなる。
  - ①内なる人のこと。
  - ②理解力が不鮮明になり、論じる力が減退する。
- (5) 自分では知者であると言いながら、愚かな者となる。
  - ①哲学者のことを「フィロソファー（知識を愛する者）」という。
  - ②聖書では、神を恐れない者は「愚か者」である。
  - ③知識が愚かになると、行動も愚かになる。
- (6) 不滅の神の御栄えを像（イメージ）に変える。
  - ①神の栄光が傷つくわけではない。
  - ②人間の内にある神概念が変化するだけである。
  - ③礼拝と感謝の対象を、像（イメージ）に変えるのである。
- (7) 滅ぶべき人間や、鳥、獣、はうもののかたちに似た像を作る。
  - ①英雄が神として崇められる。
  - ②鳥が神として崇められる。

＊エジプトの鷹

＊ローマの鷲

③獣が神として崇められる。

＊エジプトの牛

④はうものが神として崇められる。

＊蛇、とかげ、わに、など。

**結論：福音を聞かないで死んだ人はどうなるのか。**

**1. 「弁解の余地はない」とはきつい言葉である。**

（例話）私の父の反論（キリストを信じない人は滅びるというのは、狭い考え方）

**2. 福音を聞かないで死んだ人は、滅びている。**

- （1）人間には神に関する知識がある。
- （2）人間はそれを押さえつけて、宗教的に、道徳的に、自分勝手に生きている。
- （3）人間は意図的に真理を押さえつけている。だから、弁解の余地はない。
- （4）福音を聞いていなくても、死んだ異教徒は滅びに至っている。
- （5）聞いた人だけが滅びるなら、福音を伝えることは最悪のこととなる。

**3. 神の正義はどこにあるか。**

- （1）人は与えられている啓示の量によって裁かれる。
- （2）福音を聞いていない人は、一般啓示によって裁かれる。
- （3）福音を聞いた人は、特別啓示によって裁かれる。
- （4）一般啓示に応答して生きている人には、さらなる啓示が与えられる。
  - ①宣教師が感じる使命の背後にこの真理がある。
  - ②神の超自然的な介入もある。

## 「異教徒の罪（2）」

### 1. はじめに

(1) 序言（1～17 節）

(2) 救いの第 1 番目の要素「義認」について論じ始める。

①神が罪人に神の義を転嫁すること。

②1 : 18～5 : 21 まで

(3) 義認を論じる前に、罪について理解する必要がある。

①パウロは、すべての人が有罪であることを論証しようとする（1 : 18～3 : 20）。

(4) パウロの論理展開

①異教徒の罪（1 : 18～32）

②文化的異教徒の罪（2 : 1～16）

③ユダヤ人の罪（2 : 17～3 : 8）

④結論：すべての人は罪人（3 : 9～20）

### 2. 前回のメッセージのアウトライン。(1) と (2) を扱った。

(1) 知識の啓示（1 : 18～20）

(2) 知識の拒否（1 : 21～23）

(3) 拒否の結果（1 : 24～32）

### 3. 今回のメッセージのアウトライン

(1) 神による放置その一（1 : 24～25）

(2) 神による放置その二（1 : 26～27）

(3) 神による放置その三（1 : 28～32）

### 4. メッセージのゴール

(1) 異教徒の霊的状态の確認

(2) 私たちへの適用

このメッセージは、異教徒がどのような霊的状态にあるかを理解するためのものである。

## I. 神による放置その一（1 : 24～25）

### 1. 24 節

「それゆえ、神は、彼らをその心の欲望のままに汚れに引き渡され、そのために彼らは、

互いにそのからだをはずかしめるようになりました」

(1) 強い意味の接続詞

- ①「ディオ」というギリシア語
- ②それゆえ、ゆえに（口語訳）、そこで（新共同訳）
- ③神に関する知識の啓示があり、その拒否があり、結果がある。

(2) 神による放置

- ①「神は、彼らを〇〇に引き渡され」
- ②英語では「God gave up」である。
- ③「神は、〇〇に任せられ」（口語訳）、「神は、〇〇にまかせられ」（新共同訳）
- ④これは単なる許可や、恵みの撤去ではない。法的意味での裁きである。

(3) パウロの頭には、イザ 64 : 6～7 があったと思われる。

「私たちはみな、汚れた者のようになり、私たちの義はみな、不潔な着物のようです。私たちはみな、木の葉のように枯れ、私たちの咎は風のように私たちを吹き上げます。しかし、あなたの御名を呼ぶ者もなく、奮い立って、あなたにすぎる者もいません。あなたは私たちから御顔を隠し、私たちの咎のゆえに、私たちを弱められました」

- ①神は、罪人から御顔を隠された。
- ②それゆえ、罪人は弱められ、さらに深い罪に陥って行く。

(4) 放置の結果

- ①人は、創造主に仕えるか、自分の罪の性質に仕えるかのいずれかである。
- ②人は自分の罪の性質に仕え、心の欲望のままに汚れたことをするようになった。
- ③互いにその体を辱めた。つまり、性的乱れが起こったということである。

2. 25 節

「それは、彼らが神の真理を偽りと取り換え、造り主の代わりに造られた物を拝み、これに仕えたからです。造り主こそ、とこしえにほめたたえられる方です。アーメン」

(1) 性的乱れの原因は、神の真理を偽りと取り代えたから。

- ①創造主ではなく、偶像を拝むことは偽りの行為である。
- ②偶像礼拝は、性的墮落の原因である。
- ③日本各地の門前町には岡場所（私娼窟）があった。

(2) ここでパウロは、創造主をたたえずにはおれなくなった。

## Ⅱ. 神による放置その二（1 : 26～27）

### 1. 26 節

「こういうわけで、神は彼らを恥ずべき情欲に引き渡されました。すなわち、女は自然の用を不自然なものに代え、」

(1) 放置という裁きが、より深刻な段階に進む。

(2) 「汚れ」→「恥ずべき情欲」

①女性の同性愛 (lesbianism)

②神が人を男と女に創造したという意図から逸脱している。

### 2. 27 節

「同じように、男も、女の自然な用を捨てて男どうしで情欲に燃え、男が男と恥ずべきことを行うようになり、こうしてその誤りに対する当然の報いを自分の身に受けているのです」

(1) 男も、「自然な用」→「恥ずべきこと」へ移行した。

①男性の同性愛 (homosexuality)

②ローマ時代は、男性の友情が愛の最高形態と考えられていた。

③10 代後半から 20 代前半の青年たちがかかわっていた。

④前 18～19 年に、皇帝アウグストは同性愛禁止令を出した（人口増のため）。

⑤日本でも、戦国大名が小姓を男色の対象とした例が数多く見られる。

(2) 当然の報いを受けている。

①罪には罪が増し加わる（神の「かたち」に従った歩みではない）。

②信仰には信仰が増し加わる。

## Ⅲ. 神による放置その三（1 : 28～32）

### 1. 28 節

「また、彼らが神を知ろうとしがらないので、神は彼らを良くない思いに引き渡され、そのため彼らは、してはならないことをするようになりました」

(1) 放置という裁きが、さらに深刻な段階に進む。

①「神は彼らを正しからぬ思いにわたし、」（口語訳）

- ②「神は彼らが無価値な思いに渡され、」（新共同訳）
- ③「神は彼らを墮落した思いに引き渡され、」が直訳である。

(2)「してはならないこと」のリストが、29～31 節に列挙されている。21 の罪。

- ①不義
- ②悪
- ③むさぼり
- ④悪意
- ⑤ねたみ
- ⑥殺意
- ⑦争い
- ⑧欺き
- ⑨悪だくみ
- ⑩陰口
- ⑪そしり
- ⑫神を憎む
- ⑬人を人と思わぬ
- ⑭高ぶる
- ⑮大言壮語する
- ⑯悪事をたくらむ
- ⑰親に逆らう
- ⑱わきまえない
- ⑲約束を破る
- ⑳情け知らず
- ㉑慈愛がない

## 2. 32 節

「彼らは、そのようなことを行えば、死罪に当たるという神の定めを知っていながら、それを行っているだけでなく、それを行う者に心から同意しているのです」

### (1) 墮落のステップ

- ①彼らは神の定めを知っている。
- ②にもかかわらず、神の定め に 反して悪行を行っている。
- ③それを行う者に同意している。



## 結論：異教徒の霊的状态の確認

### 1. 墮落のステップ

- (1) 彼らは、神に関する知識を持っていた（19 節）。
- (2) 彼らは、経験的に真理を知っていた（21 節）。
- (3) 彼らは、神の真理を偽りと取り代えた（25 節）。
- (4) 彼らは、神に関する知識を放棄した（28 節）。
- (5) 彼らは、結果がどうなるかを知っていた（32 節）。

### 2. 私たちへの適用

- (1) 自然界の中に啓示がある。
- (2) 人類学者は宗教の進化を主張するが、それは誤りである。
  - ①多神教 → 一神教 （誤）
  - ②一神教 → 多神教 （正）
- (3) 神の裁きの中には、放置（御顔を隠される）という原則もある。
  - ①人は自分の罪の性質に仕えるようになる。
  - ②罪 → より深刻な罪
  - ③先進国の状況は、日本も含めて悲惨である。
  - ④同性愛に希望はない。
    - \* 同性愛的資質が遺伝であるという証明はない。
    - \* 性同一性障害とは、体と心の分離である。
    - \* 解決法は、手術ではなく、心を体に調和させることである。
  - ⑤解決法は、問題の本質を知り、悔い改めること。
- (4) 福音により新生する可能性は残されている。

「——律法を持たない異邦人が、生まれつきのままで律法の命じる行いをする場合は、律法を持たなくても、自分自身が自分に対する律法なのです。彼らはこのようにして、律法の命じる行いが彼らの心に書かれていることを示しています。彼らの良心もいっしょになってあかしし、また、彼らの思いは互いに責め合ったり、また、弁明し合ったりしています。——」（2：14～15）

- ①墮落したとは言え、人間の内には「神のかたち」が残っている。
- ②良心の存在がそれである。

## 「文化的異教徒の罪」

### 1. はじめに

#### (1) 序言（1～17 節）

#### (2) 第 1 番目の要素「義認」について論じ始める。

①神が罪人に神の義を転嫁すること。

②1：18～5：21 まで

#### (3) 義認を論じる前に、罪について理解する必要がある。

#### (4) パウロの論理展開

①異教徒の罪（1：18～32）

②文化的異教徒の罪（2：1～16）

③ユダヤ人の罪（2：17～3：8）

④結論：すべての人は罪人（3：9～20）

### 2. 2 章 1 節

「ですから、すべて他人をさばく人よ。あなたに弁解の余地はありません。あなたは、他人をさばくことによって、自分自身を罪に定めています。さばくあなたが、それと同じことを行っているからです」

#### (1) 「すべて他人をさばく人」とは、ギリシア人のこと。

①彼らは自分たちと異教徒とを区別した。

②1 章に出て来た異教徒の罪に関しては、パウロの意見に同意した。

#### (2) 「あなたに弁解の余地はありません」

①彼らは神に関する知識を持っている。

②彼らはその知識を他人に適用した。

③しかし、自分ではそれを実行していない。

④ロマ 1：20 と同じように、「弁解の余地はない」のである。

⑤彼らもまた、神に栄光を帰すということをしていない。

#### (3) パウロは裁きの原則を 3 つ上げて、「弁解の余地はない」ことを論証している。

### 3. メッセージのアウトライン（神の裁きについての 3 つの原則）

(1) 原則 1：神の裁きは、「正義」に基づいて行われる（2：2～5）。

(2) 原則 2：神の裁きは、「行い」に従って行われる（2：6～10）。

(3) 原則 3：神の裁きは、「えこひいきなし」に行われる（2：11～16）。

#### 4. メッセージのゴール

- (1) 一般啓示の役割
- (2) 特別啓示の役割
- (3) 絶望の後に来る希望

このメッセージは、文化的異教徒も「弁解の余地はない」ことを示すためのものである。

### I. 原則 1：神の裁きは、「正義」に基づいて行われる（2：2～5）

1. 「私たちは、そのようなことを行っている人々に下る神のさばきが正しいことを知っています」（2 節）

(1) 「正義」とは何か。

- ①神は、見かけによってではなく、その人の実質を見て裁かれる。
- ②他人を裁く人も、自分が裁いている人と同じように、神によって裁かれる。

2. 「あなたは、自分は神のさばきを免れるのだとでも思っているのですか」（3 節）

(1) ダイアツライブ（diatribe）という文学手法が用いられている。

- ①ローマ時代によく用いられた方法である。
- ②論敵を想定して、その人が発するであろう質問を取り上げる。
- ③その質問に答えるようなかたちで、ディベート（討論）を進める。

(2) 自分は大丈夫だと思っている人たち

- ①彼らは、これまでのパウロの議論に同意し、異教徒の罪を裁く人たちである。
- ②彼らは、自分たちは異教徒とは違うと自負する人たちである。
- ③彼らは、異教徒を裁きながら、自分でも同じ罪を犯している。
- ④他人に厳しいというのは、人間の悪癖である。
- ⑤特に、自分も同じ罪を犯している場合、他人を厳しく糾弾するようになる。  
（例話）2 サム 12：1～6 ダビデとナタンの会話
- ⑥人の心は、偽りに満ちている。

3. 「それとも、神の慈愛があなたを悔い改めに導くことも知らないで、その豊かな慈愛と忍耐と寛容とを軽んじているのですか」（4 節）

(1) 彼らは、神の豊かな慈愛を軽んじている（軽蔑している）。

- ①すべての霊的、物質的祝福は、神からの贈り物である。

②それが分かったと、人は悔い改めに導かれる。

(2) 彼らは、神の豊かな忍耐を軽んじている（軽蔑している）。

①神は裁きを遅らせておられる。

②罪に対する怒りをこらえておられる。

③罪人がひとりでも多く悔い改めるように待っておられる。

(3) 彼らは、神の豊かな寛容を軽んじている（軽蔑している）。

①「忍耐」と「寛容」は基本的には同じ意味である。

②神は人の罪を忍耐しておられる。

③神は、怒るのに遅い神である。

4. 「ところが、あなたは、かたくなさと悔い改めのない心のゆえに、御怒りの日、すなわち、神の正しいさばきの現れる日の御怒りを自分のために積み上げているのです」（5 節）

(1) かたくなで悔い改めのない心

①アダムの子孫の性質

②習慣的罪によって、より深刻になっている。

③神による放置によって、さらに深刻になっている。

(2) 彼らは、自分のために裁きを重くしている。

①時が来たなら、神は彼らを裁かれる。

## II. 原則 2：神の裁きは、「行い」に従って行われる（2：6～10）。

1. 「神は、ひとりひとりに、その人の行いに従って報いをお与えになります」（6 節）

(1) これは業による救いを教えているのではない。

①ここでは、義認のテーマを扱っているわけではない。

(2) これは、単なる信仰告白と、行動がともなった信仰告白の違いを教えている。

①救いは行いを生む。

②義人は、行いによって神からの報酬を受ける。

2. 「忍耐をもって善を行い、栄光と誉れと不滅のものを求める者には、永遠のいのちを与え、」（7 節）

(1) 信仰によって救われた者の特徴が記されている。

①信者には祝福が与えられる。

3. 「党派心を持ち、真理に従わないで不義に従う者には、怒りと憤りを下されるのです」  
(8 節)

(1) 不信者の特徴が記されている。

①不信者には神の裁きが下る。

4. 「患難と苦悩とは、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、悪を行うすべての者の上に下り、  
栄光と誉れと平和は、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、善を行うすべての者の上にあり  
ます」(9～10 節)

(1) 福音伝達の順番 (1：16)

①ユダヤ人

②ギリシア人

(2) 神の裁きの順番もそれと同じである。

### Ⅲ. 原則 3：神の裁きは、「えこひいきなし」に行われる (2：11～16)。

1. 「神にはえこひいきなどはないからです。律法なしに罪を犯した者はすべて、律法なし  
に滅び、律法の下にあって罪を犯した者はすべて、律法によってさばかれます」(11～12  
節)

(1) 神には二重基準はない。

①イスラエルの選びを否定しているのではない。

②義なる裁き主である神が行う裁きは、公平である。

(2) 異邦人に対する裁きの基準

①「律法なしに罪を犯した」

②モーセの律法なしに罪を犯したということ。

③従って、モーセの律法によって裁かれるのではない。

④彼らに与えられている光（自然法）によって裁かれる。

⑤良心は彼ら与えられた光である (15 節)。

\*いかなる文明においても、良心の存在が認められる。

\*いかなる文明においても、殺人は罪とされている。

⑤「滅び」とは永遠の死である。永遠のいのちと対立する概念である。

(3) ユダヤ人に対する裁きの基準

①「律法の下にあって罪を犯した」

②モーセの律法を知っていながら、罪を犯した。

③従って、モーセの律法によって裁かれる。

2. 「私の福音によれば、神のさばきは、神がキリスト・イエスによって人々の隠れたことをさばかれる日に、行われるのです」(16 節)

(1) 裁きの日は確実に来る。

(2) キリスト・イエスが裁き主として任命される。

(3) 人々の隠れたことが明らかになる。

#### 結論：

##### 1. 一般啓示の役割

(1) 人に唯一の神の存在を示す。

(2) 異邦人は、一般啓示という光に基づいて裁かれる。

(3) 一般啓示は、人を救うことができない。

##### 2. 特別啓示の役割

(1) 一般啓示によって神の存在を認識した人に、救いを示す。

(2) ユダヤ人は、特別啓示という光に基づいて裁かれる。

##### 3. 絶望の後に来る希望

(1) 異教徒の罪

(2) 文化的異教徒の罪

(3) 次回は、ユダヤ人の罪について学ぶ。

(4) 以上のことは、絶望の底に向かってラセン階段を下りて行くようなものである。

(5) 絶望の底に立つのが十字架である。

(6) 人には、福音により新生する可能性が残されている。

「——律法を持たない異邦人が、生まれつきのままで律法の命じる行いをする場合は、律法を持たなくても、自分自身が自分に対する律法なのです。彼らはこのようにして、律法の命じる行いが彼らの心に書かれていることを示しています。彼らの良心もいっしょになってあかしし、また、彼らの思いは互いに責め合ったり、また、弁明し合ったりしています。——」(2：14～15)

## 「ユダヤ人の罪」

### 1. はじめに

- (1) 序言（1～17 節）
- (2) 救いの第 1 番目の要素「義認」について論じ始める。
  - ①神が罪人に神の義を転嫁すること。
  - ②1 : 18～5 : 21 まで
- (3) 義認を論じる前に、罪について理解する必要がある。
- (4) パウロの論理展開
  - ①異教徒の罪（1 : 18～32）
  - ②文化的異教徒の罪（2 : 1～16）
  - ③ユダヤ人の罪（2 : 17～3 : 8）
  - ④結論：すべての人は罪人（3 : 9～20）

### 2. ローマ教会にはユダヤ人信者がいた。

- (1) ユダヤ人には多くの特権が与えられている。
- (2) 特権には責任が伴う。
- (3) 特権は救いそのものではない。

### 3. メッセージのアウトライン

- (1) 言行不一致の罪（2 : 17～24）
- (2) 割礼の価値（2 : 25～29）
- (3) ユダヤ人の特権（3 : 1～8）

### 4. メッセージのゴール

- (1) パリサイ派神学とパウロ神学の対比
- (2) 異邦人信者と霊的イスラエルの関係
- (3) 認罪の必要性

このメッセージは、ユダヤ人もまた有罪であることを示すためのものである。

## I. 言行不一致の罪（2 : 17～24）

### 1. ユダヤ人の自己認識

「もし、あなたが自分をユダヤ人となえ、律法を持つことに安んじ、神を誇り、みこころを知り、なすべきことが何であるかを律法に教えられてわきまえ、また、知識と真理の具体的な形として律法を持っているため、盲人の案内人、やみの中にいる者の光、愚かな者の導き手、幼子の教師だと自任しているのなら、」（17～20 節）

(1) 「ユダヤ人」（ユーダイオス）（ヘブル語のイエフダー）

「彼女はまたみごもって、男の子を産み、『今度は【主】をほめたたえよう』と言った。それゆえ、その子を彼女はユダと名づけた。それから彼女は子を産まなくなった」（創 29：35）

①「誉れ」の意

②「神をほめたたえる」の意

(2) ユダヤ人は、誇り高き民である。

①律法を持つことに安んじている。

（例話）会堂に新しくトーラーの巻物を運び込むユダヤ人（時価数百万円）

②神を誇りとしている。

③御心を知っている。

④なすべきことがなんであるかをわきまえている。

⑤盲人の案内人、やみの中にいる者の光、愚かな者の導き手、幼子の教師

## 2. ユダヤ人の行動

「どうして、人を教えながら、自分自身を教えないのですか。盗むなど説きながら、自分は盗むのですか。姦淫するなど言いながら、自分は姦淫するのですか。偶像を忌みきらいながら、自分は神殿の物をかすめるのですか。律法を誇りとしているあなたが、どうして律法に違反して、神を侮るのですか。これは、『神の名は、あなたがたのゆえに、異邦人の中でけがされている』と書いてあるとおりです」（21～24 節）

(1) 言行不一致

①人を教えながら、自分自身を教えない。

②盗むなど説きながら、自分は盗む。

③姦淫するなど言いながら、自分は姦淫する。

④偶像を忌み嫌いながら、自分は神殿の物をかすめる。

\* 異邦人は偶像の宮を聖なる場所を考えていた。

\* そこに金を預ければ安全であった。

\* 偶像の無力を証明するために、そこから金を盗むユダヤ人がいた。

⑤律法を誇りとしながら、律法に違反し、神を侮っている。



(2) ユダヤ人の信じている神が侮られている。

「神の名は、あなたがたのゆえに、異邦人の中でけがされている」

①イザ 52：5 の引用

(3) 特権には責任が伴う。

①ユダヤ人はその責任を果たしていない。

②特権そのものは、救いではない。

③特権が与えられているからと言って、優れているわけではない。

## II. 割礼の価値（2：25～29）

### 1. 儀式としての割礼の有効性

「もし律法を守るなら、割礼には価値があります。しかし、もしあなたが律法にそむいているなら、あなたの割礼は、無割礼になったのです」（25 節）

(1) 割礼は祝福の保証ではない。

①祝福は、割礼後に継続される従順な生活の上に下る。

(2) 割礼を受けた者が律法にそむいているなら、無割礼になったのと同じである。

### 2. 異邦人がユダヤ人を裁くことになる。

「もし割礼を受けていない人が律法の規定を守るなら、割礼を受けていなくても、割礼を受けている者とみなされないでしょうか。また、からだに割礼を受けていないで律法を守る者が、律法の文字と割礼がありながら律法にそむいているあなたを、さばくことにならないでしょうか」（26～27 節）

(1) 異邦人が律法の規定を守るなら、割礼を受けているのと同じことである。

(2) 内的に神に従っている異邦人は、儀式的なユダヤ人をさばくことになる。

①そういう異邦人の方が、儀式的なユダヤ人よりも優れているということである。

### 3. 外的ユダヤ人と内的ユダヤ人

「外見上のユダヤ人がユダヤ人なのではなく、外見上のからだの割礼が割礼なのではありません。かえって人目に隠れたユダヤ人がユダヤ人であり、文字ではなく、御霊による、心の割礼こそ割礼です。その誉れは、人からではなく、神から来るものです」（28～29 節）

(1) 外的ユダヤ人

①からだの割礼

②文字（律法の文字）による割礼

(2) 内的ユダヤ人

①心の割礼

②御霊による割礼

(3) 「その誉れは、人からではなく、神から来るものです」

①ユダヤ人、ユダヤ教：「誉れ」という意

②その誉れは、儀式や文字ではなく、神から来る。

### Ⅲ. ユダヤ人の特権（3：1～8）

1. ユダヤ人と異邦人は同じベースに立っている。

(1) とともに神の裁きを受ける。

(2) 救いの方法は同じである。

(3) それでも、ユダヤ人には特権が与えられている。

(4) パウロは、読者の質問を想定してそれに答えている。

2. 質問①

(1) 割礼にはなんの意味もないのか。

「では、ユダヤ人のすぐれたところは、いったい何ですか。割礼にどんな益があるのですか」（1 節）

(2) パウロの回答

「それは、あらゆる点から見て、大いにあります。第一に、彼らは神のいろいろなおことばをゆだねられています」

①詳細な回答は 9～11 章に出て来る。

②ユダヤ人は、神の啓示（旧新約聖書）を委ねられている。

＊神の啓示を聞いた。

＊それを書き留めた。

＊写本を遺した。

3. 質問②

(1) ユダヤ人に対する神の約束は取り去られるのか。

「では、いったいどうなのでしょう。彼らのうちに不真実な者があつたら、その不真実によって、神の真実が無に帰することになるでしょうか」(3 節)

①罪のゆえに、ユダヤ人は選びの民としての特権を失ったのか。

②これは置換神学(多くの契約神学)の立場である。

(2) パウロの回答

「絶対にそんなことはありません。たとい、すべての人を偽り者としても、神は真実な方であるとすべきです。それは、『あなたが、そのみことばによって正しいとされ、さばかれるときには勝利を得られるため。』と書いてあるとおりです」(4 節)

①「絶対にそんなことはありません」(メイ・ゲノイテ) : 最も強い否定語

②神は真実なお方である。神の約束は変わらない。

③詩 51 : 4 の引用 : ダビデの罪の告白

「私はあなたに、ただあなたに、罪を犯し、あなたの御目に悪であることを行いました。それゆえ、あなたが宣告されるとき、あなたは正しく、さばかれるとき、あなたはきよくあられます」

#### 4. 質問③

(1) 罪が神の計画を前進させるなら、神はどうしてそれを裁くことができるのか。

「しかし、もし私たちの不義が神の義を明らかにするとしたら、どうなるのでしょうか。人間的な言い方をしますが、怒りを下す神は不正なののでしょうか」(5 節)

(2) パウロの回答

「絶対にそんなことはありません。もしそうだとしたら、神はいったいどのように世をさばかれるのでしょうか」(6 節)

①「絶対にそんなことはありません」(メイ・ゲノイテ) : 最も強い否定語

②罪を犯してもいいという言い訳は、どこにも存在しない。

③パウロの教えに関する噂が広がっていた。

「善を現すために、悪をしようではないか」(8 節)

④そう論じる者は、罪に定められる。

#### 結論 :

##### 1. パリサイ派神学とパウロ神学の対比

###### (1) パリサイ派神学

- ①全てのユダヤ人は、来世においてなんらかの祝福に与る。
- ②割礼を受けたユダヤ人は、どのようなことを行っても、地獄には行かない。
- ③メシアニック・ジューの出現により、この論理に変更が加えられた。
  - \* 天使が陽の皮を持って来て元のところに返すので、無割礼に戻る。

## (2) パウロ神学

- ①パウロは、パリサイ派神学を学んだ人である。
- ②彼は、外的割礼と、内的割礼とを区別した。
- ③9～11 章に入ると、大半のユダヤ人とイスラエルの残れる者（レムナント）が区別される。

## 2. 異邦人信者と霊的イスラエルの関係

### (1) 霊的イスラエル

- ①心に割礼を受けたイスラエルのことである。
- ②肉的イスラエルとの対比で語られている概念である。
- ③いつの時代でも少数派のユダヤ人である。レムナント。

### (2) 異邦人信者

- ①異邦人が霊的イスラエルになるわけではない。
- ②異邦人の罪に関する議論は終わり、この箇所はユダヤ人の罪を論じている。
- ③異邦人信者は、霊的異邦人である。

## 3. 認罪の必要性

### (1) 義認の祝福を受ける前に必要なのは、認罪である。

- ①異邦人もユダヤ人も、この点では同じである。
- ②異邦人もユダヤ人も、ともに神の裁きを受ける。
- ③裁きの基準は、異なる。

### (2) 第 2 回ハーベスト「再臨待望聖会」が近い

- ①再臨という旗印の下にクリスチャンが結集する聖会としたい。
- ②日本のリバイバル、ユダヤ人の救い、メシアの再臨
- ③ユダヤ人の救いとは、ユダヤ人の霊的覚醒（awakening）のことである。
- ④日本のリバイバルとは、日本人の霊的覚醒のことである。

\* 覚醒、目覚め

（例話）朝日新聞の記事（2011/02/21） キリスト教ブーム

## 「すべての人は罪人」

### 1. はじめに

- (1) 序言（1～17 節）
- (2) 救いの第 1 番目の要素「義認」について論じ始める。
  - ①神が罪人に神の義を転嫁すること。
  - ②1 : 18～5 : 21 まで
- (3) パウロの論理展開
  - ①異教徒の罪（1 : 18～32）
  - ②文化的異教徒の罪（2 : 1～16）
  - ③ユダヤ人の罪（2 : 17～3 : 8）
  - ④結論：すべての人は罪人（3 : 9～20）

### 2. ヘブル的読み方

- (1) パウロはラビ的手法で書いている。
- (2) 「大から小へ（from the greater to the lesser）」の論法
  - ①ユダヤ人が大で異邦人が小  
（例話）プロのゴルファーが打てない距離をアマチュアが打てるはずがない。
  - ②マコ 2 : 1～13
  - ③きょうの箇所の議論は、ユダヤ人中心に展開している。
- (3) 「真珠の数珠つなぎ（pearl-stringing）」の論法
  - ①ある結論の証拠として、似たような聖句をつなげていく論法

### 3. メッセージのアウトライン

- (1) 全人類は有罪（9 節）
- (2) 有罪の証拠（10～18 節）
- (3) 適用（19～20 節）

### 4. メッセージのゴール

- (1) 有罪宣言（1 : 18～3 : 20）のまとめ
- (2) 救いの必要性

このメッセージは、すべての人が罪人であることを示すためのものである。

## I. 全人類は有罪（9 節）

1. ユダヤ人は異邦人よりも優れているわけではない。

「では、どうなのでしょう。私たちは他の者にまさっているのでしょうか。決してそうではありません。私たちは前に、ユダヤ人もギリシヤ人も、すべての人が罪の下にあると責めたのです」（9 節）

(1) パウロは 3 : 1～8 で、ユダヤ人には特権が与えられていると論じた。

(2) 「私たちは他の者にまさっているのでしょうか」

- ①「私たち」とはユダヤ人のこと。
- ②「他の者」とは異邦人のこと。
- ③特権が与えられているユダヤ人は、異邦人よりも優れているのか。
- ④あるいは、ユダヤ人は異邦人よりも優れているから特権が与えられたのか。

(3) 「決してそうではありません」

- ①ユダヤ人の選びは、神の一方的な選びによる。
- ②ユダヤ人が神に背を向けても、神のユダヤ人に対する忠実さは変わらない。
- ③神は、異邦人の中からでも選びの民を選ぶことができた。

(4) 「私たちは前に、ユダヤ人もギリシヤ人も、すべての人が罪の下にあると責めたのです」

- ①異邦人の罪（1 : 18～2 : 16）
- ②ユダヤ人の罪（2 : 17～3 : 8）
- ③特権はあっても、ユダヤ人もまた異邦人同様、神の裁きを受ける立場にある。

## II. 有罪の証拠（10～18 節）

1. 旧約聖書から 7 ヶ所の引用が列挙される。

(1) ラビ的手法である。「真珠の数珠つなぎ」論法

(2) 引用は、詩篇と預言書からのもの。

- ①第一義的には、ユダヤ人に向かって語られている。
- ②ユダヤ人の有罪を証明すれば、全人類が有罪であることの証明となる。

2. 7 ヶ所の引用の分類

(1) すべての人が罪の束縛の中にある（10～12 節）

「義人はいない。ひとりもない。悟りのある人はいない。神を求める人はいない。すべての人が迷い出て、みな、ともに無益な者となった。善を行う人はいない。ひとりもない」

①詩 14 : 1～3 と詩 53 : 1～3 の引用

「愚か者は心の中で、『神はいない』と言っている。彼らは腐っており、忌まわしい事を行っている。善を行う者はいない」（詩 14 : 1）

②内的確信が間違っている。

③結果として、行為が墮落する。

(2) すべての人が言葉の罪を犯している（13～14 節）

「彼らののは、開いた墓であり、彼らはその舌で欺く」

「彼らのくちびるの下には、まむしの毒があり、」

「彼らの口は、のろいと苦さで満ちている。」

①詩 5 : 9 と詩 140 : 3 の引用

②言葉を発する器官が 4 つ上げられている。

\* のど（開いた墓）

\* 舌（欺きの道具）

\* くちびる（まむしの毒がある）

\* 口（のろいと苦さで満ちている）

(3) すべての人が隣人に対して罪を犯している（15～17 節）

「彼らの足は血を流すのに速く、彼らの道には破壊と悲慘がある。また、彼らは平和の道を知らない」

①イザ 59 : 7～8 の引用

②大きな文脈は、イスラエルの霊的回復である。

③直前の文脈では、イスラエルの国家的罪を論じた箇所である。

③その罪が、神とイスラエルの民を隔てる中垣となっている。

(4) まとめ（18 節）

「彼らの目の前には、神に対する恐れがない」

①詩 36 : 1 の引用

「罪は悪者の心の中に語りかける。彼の目の前には、神に対する恐れがない」

②罪が擬人法で語られている。

③10 節に戻っている。「義人はいない。ひとりもない」

＊「ウーク エスティン」（ギ）

### Ⅲ. 適用（19～20 節）

#### 1. 律法の擬人化

「さて、私たちは、律法の言うことはみな、律法の下にある人々に対して言われていることを知っています。それは、すべての口がふさがれて、全世界が神のさばきに服するためです」

（1）ここでの律法とは、旧約聖書全体のこと

①モーセの律法（トーラー、モーセの五書）を指すこともある。

（2）律法が擬人化されてユダヤ人に語っている。

①ユダヤ人がテストケースである。

②ユダヤ人が失敗したなら、全人類が失敗する。

③神に選ばれ、神の啓示を受けた民がだめなら、その他の民もまただめである。

④これは、「大から小へ」の論法である。

#### 2. 律法が与えられている目的

「なぜなら、律法を行うことによって、だれひとり神の前に義と認められないからです。律法によっては、かえって罪の意識が生じるのです」

（1）律法の目的については、先に行ってから詳細に論じられる。

（2）ここでは、そのひとつが紹介されている。

①律法は人を義とするものではない。

②律法によって、人に罪の意識が生じる。

③つまり、律法は人を罪に定めるものである。

### 結論：

#### 1. 有罪宣言（1 : 18～3 : 20）のまとめ

（1）野蛮人の異教徒の罪（1 : 18～32）

①彼らには、被造物という証拠やその他の一般啓示が与えられている。

②彼らは、その基準によって裁かれる。

（2）文化的異教徒の罪（2 : 1～16）



- ①彼らには、良心という証拠やその他の一般啓示が与えられている。
- ②彼らは、その基準によって裁かれる。

(3) ユダヤ人の罪（2：17～3：8）

- ①彼らには、聖書という特別啓示が与えられている。
- ②彼らは、その基準によって裁かれる。

(4) すべての人は罪人（3：9～20）

- ①ユダヤ人の失敗を証明した。
- ②それによって、全人類の失敗を証明した。

2. 救いの必要性

(1) 罪の擬人化

「私たちは前に、ユダヤ人もギリシヤ人も、すべての人が罪の下にあると責めたのです」(9 節)

- ①罪人は、罪の支配下にある。

(2) 当時のユダヤ教のテーマ

- ①人には 2 人の主人がいる。神か罪か。
- ②そのどちらに仕えるかによって、その人の生き方が決まって来る。
- ③この考え方は、福音書の中にも出てくる。

(3) 罪人は罪という主人に仕え、その支配下にある。

- ①その報酬は死である。  
「罪から来る報酬は死です」(ロマ 6:23a)

(4) 罪人は、罪の赦しと、罪の力からの解放を必要としている。

- ①神がくださる救いは、恵みによる。  
「しかし、神の下さる賜物は、私たちの主キリスト・イエスにある永遠のいのちです」(ロマ 6：23b)
- ②罪の赦しは義認である。
- ③罪の力からの解放は聖化である。  
(例話) N Z 地震で、子どもが見つからないで帰国してきた親たち。  
(例話) 熊本市で 3 日夜から行方不明となっていた女兒（3 歳）が 4 日夕方、遺体で発見された。警察は大学生 2 年の男を死体遺棄の疑いで緊急逮捕した。

## 「神の義（1）」

### 1. はじめに

(1) 序言（1：1～17）

(2) 義認（1：18～5：21）

①その前に、「有罪宣言」を論じた。

②1：18～3：20 は、長い挿入句である。

③1：17 は、3：21 につながる。

「なぜなら、福音のうちには神の義が啓示されていて、その義は、信仰に始まり信仰に進ませるからです。『義人は信仰によって生きる』と書いてあるとおりです」（1：17）

(3) きょうの箇所は、「義の提供」（3：21～26）である。

（例話）「義の提供」の前に、「有罪宣言」が来なければならない。

私の伝道メッセージに腹を立てた人がいた。罪が分かっていないから。

### 2. メッセージのアウトライン

(1) 義認の意味

(2) 神の義の啓示（21 節）

(3) 神の義を得る方法（22 節）

(4) 恵みの原則（23～24 節）

### 3. メッセージのゴール

(1) 義認の 7 つの側面

このメッセージは、義認とは何かを学ぶためのものである。

## I. 義認の意味

### 1. 義認とは

①「義とされること」「義と認められること」

②英語では、「justification」「being justified」

### 2. 救済論の中で最も重要な用語である。

(1) 私たちの本質が「義」となることではない。

(2) 私たちが「義である」との宣言を受けることである。

①義認とは、法律用語（法廷用語）である。

②転嫁された義である。

③英語で「imputed righteousness」と言う。

## II. 神の義の啓示（21 節）

1. 「しかし、今は、律法とは別に、しかも律法と預言者によってあかしされて、神の義が示されました」

(1) 「しかし」という接続詞は、その前の 20 節を受けている。

「律法によっては、かえって罪の意識が生じるのです」

(2) 神の義は、「律法とは別に」示された。

①「律法とは関係なく」（新共同訳）

②この「律法」には定冠詞が付いていない。つまり、「律法の原理」のことである。

③ここで論じている「神の義」は、律法を行うことによって得られる義ではない。

(3) 神の義は、「律法と預言者によってあかしされて」いた。

①この「律法」には定冠詞が付いている。つまり、モーセの律法のことである。

②ここで論じている「神の義」は、旧約聖書に預言されていた。

## III. 神の義を得る方法（22 節）

1. 「すなわち、イエス・キリストを信じる信仰による神の義であって、それはすべての信じる人に与えられ、何の差別もありません」

(1) 神の義は、イエス・キリストを信じる信仰によって得られる。

①人は、信仰によって救われる。信仰義認という。

②「信仰のみ」、「聖書のみ」、「万人祭司」は、宗教改革の三大原理である。

③信じた者にキリストの義が転嫁される。

④神は、信じた者を「義」と宣言される。

(2) すべての人が差別なしに同じ方法で救われる。

- ①ユダヤ人も異邦人と同じ方法で救われる。
- ②メシアニック・ジューと自称していても、信仰義認を認めていないなら、その人は救われていない。

#### IV. 恵みの原則（23～24 節）

1. 「すべての人は、罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができず、ただ、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いのゆえに、価なしに義と認められるのです」
  - (1) 「すべての人は、罪を犯したので」
    - ①野蛮な異教徒は、被造世界やその他一般啓示という光に背いた。
    - ②文化的異教徒は、良心という光に背いた。
    - ③ユダヤ人は、神のことばという光に背いた。
  - (2) 「神からの栄誉を受けることができず」
    - ①上記のような方法では、神の義に到達することができない。
  - (3) 「ただ、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いのゆえに、価なしに義と認められるのです」
    - ①イエスが十字架上で為してくださったことを信じるなら、イエスの義が私たちに転嫁される。
    - ②信仰によって、無代価の贈り物として、神の義が与えられる。

#### 結論：義認の 7 つの側面

（例話）パスポートを失くした人は、無国籍者と見なされる。

##### 1. 義認の源は、神である。

###### (1) ロマ 3：26

「それは、今の時にご自身の義を現すためであり、こうして神ご自身が義であり、また、イエスを信じる者を義とお認めになるためなのです」

###### (2) ロマ 8：30、33

「神はあらかじめ定めた人々をさらに召し、召した人々をさらに義と認め、義と認めた人々にはさらに栄光をお与えになりました」

「神に選ばれた人々を訴えるのはだれですか。神が義と認めてくださるのです」

2. 義認の土台は、キリストの血である。

(1) ロマ 3：25

「神は、キリスト・イエスを、その血による、また信仰による、なだめの供え物として、公にお示しになりました。それは、ご自身の義を現すためです。というのは、今までに犯されて来た罪を神の忍耐をもって見のがして来られたからです」

(2) ロマ 5：9

「ですから、今すでにキリストの血によって義と認められた私たちが、彼によって神の怒りから救われるのは、なおさらのことです」

3. 義認の方法は、信仰である。

(1) ロマ 3：22

「すなわち、イエス・キリストを信じる信仰による神の義であって、それはすべての信じる人に与えられ、何の差別もありません」

(2) 使 26：18

「それは彼らの目を開いて、暗やみから光に、サタンの支配から神に立ち返らせ、わたしを信じる信仰によって、彼らに罪の赦しを得させ、聖なるものとされた人々の中にあって御国を受け継がせるためである」

4. 義認の仲介者は、聖霊である。

(1) 1 コリ 12：3

「ですから、私は、あなたがたに次のことを教えておきます。神の御霊によって語る者はだれも、『イエスはのろわれよ』と言わず、また、聖霊によるのでなければ、だれも、『イエスは主です』と言うことはできません」

5. 義認の証拠は、行いである。

(1) ヤコ 2：21

「私たちの父アブラハムは、その子イサクを祭壇にささげたとき、行いによって義と認められたではありませんか」

(2) ヤコ 2：24～25

「人は行いによって義と認められるのであって、信仰だけによるのではないことがわかるでしょう。同様に、遊女ラハブも、使者たちを招き入れ、別の道から送り出したため、その行いによって義と認められたではありませんか」

6. 義認の結果は、「キリストの内にあること」である。

(1) 1 コリ 1：30

「しかしあなたがたは、神によってキリスト・イエスのうちにあるのです。キリストは、私たちにとって、神の知恵となり、また、義と聖めと、贖いとなりました」

(2) 2 コリ 5：21

「神は、罪を知らない方を、私たちの代わりに罪とされました。それは、私たちが、この方にあつて、神の義となるためです」

7. 義認の本質は、恵みである。

(1) ロマ 3：24

「ただ、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いのゆえに、価なしに義と認められるのです」

(2) テト 3：7

「それは、私たちがキリストの恵みによって義と認められ、永遠のいのちの望みによって、相続人となるためです」

## 「神の義（2）」

### 1. はじめに

(1) 序言（1：1～17）

(2) 義認（1：18～5：21）

①その前に、「有罪宣言」を論じた。

②1：18～3：20 は、長い挿入句である。

③1：17 は、3：21 につながる。

「なぜなら、福音のうちには神の義が啓示されていて、その義は、信仰に始まり信仰に進ませるからです。『義人は信仰によって生きる』と書いてあるとおりです」（1：17）

(3) きょうの箇所は、「義の提供」（3：21～26）である。

①前回は「義認」について論じた（3：21～24）。

②今回は「なだめの供え物」について論じる（3：25～26）。

### 2. メッセージのアウトライン

(1) 「なだめの供え物」とは何か。

(2) 「なだめの供え物」はなぜ必要なのか。

(3) 「なだめの供え物」を公に示した理由は何か。

### 4. メッセージのゴール

(1) 「義の提供」の箇所から導き出せる 4 つの適用

このメッセージは、なだめの供え物とは何かを学ぶためのものである。

## I. 「なだめの供え物」とは何か。

### 1. ギリシア語で「ヒラステイリオン」という。

(1) 訳語の問題

①「なだめの供え物」（新改訳）

②「あがないの供え物」（口語訳）

③「罪を償う供え物」（新共同訳）

(2) ④英語では「propitiation」と言う。なだめ、和解、贖いなどの意。

2. 「神は、キリスト・イエスを、その血による、また信仰による、なだめの供え物として、公にお示しになりました」（25 節 a）

(1) 義認の真理が、「なだめの供え物」という概念によって説明されている。

(2) イエスがその「なだめの供え物」となられた。

① 「その血による」とは、イエスが十字架上で血を流されたことを言う。

② ヘブ 9：22

「それで、律法によれば、すべてのものは血によってきよめられる、と言ってよいでしょう。また、血を注ぎ出すことがなければ、罪の赦しはないのです」

(3) 「また信仰による」とある。

① 「信仰をもって受くべき」（口語訳）

② 「信じる者のために」（新共同訳）

③ イエスの十字架上の死は、信仰をもってそれを受け取る人にのみ有効である。

④ パウロは、普遍的救い（universal salvation）を否定している。

(4) 「公にお示しになりました」とある。

① ギリシア語で「プロエセト（プロティセイミ）」

② 「このキリストを立てて、」（口語訳）

③ 「このキリストを立て、」（新共同訳）

④ 新改訳の訳が一番いい。

＊商品の陳列、競技の勝者への賞品

＊キリストは十字架上で、天使と人の目の前にさらしものとなられた。

＊キリストは密かに血を流したのではなく、白日の下でそうされた。

## II. 「なだめの供え物」はなぜ必要なのか。

1. 神は怒っておられる。

(1) ロマ 1：18

「というのは、不義をもって真理をはばんでいる人々のあらゆる不敬虔と不正に対して、神の怒りが天から啓示されているからです」

① 神は罪に対して怒っておられる。

② 神の怒りは、愛の一部である。



2. 罪に対する神の怒りを静める必要がある。

(1) ギリシア語の「ヒラスティリオン」は、新約聖書で 2 回しか出て来ない。

(2) ヘブ 9：5

「また、箱の上には、贖罪蓋を翼でおおっている栄光のケルビムがありました。しかしこれらについては、今いちいち述べることはできません」

①この聖句では、「ヒラスティリオン」は「贖罪蓋」と訳されている。

②至聖所に安置された契約の箱の蓋のこと。

③英語で「the mercy seat」という。

④つまり、「なだめの供え物」＝「贖罪蓋」である。

⑤この聖句の背景にあるのは、贖罪の日の儀式である。

(3) レビ 16：7～10

「アロンは自分のための罪のためのいけにえの雄牛をささげ、自分と自分の家族のために贖いをする。二頭のやぎを取り、それを【主】の前、会見の天幕の入口の所に立たせる。アロンは二頭のやぎのためにくじを引き、一つのかくじは【主】のため、一つのかくじはアザゼルのためとする。アロンは、【主】のかくじに当たったやぎをささげて、それを罪のためのいけにえとする。アザゼルのためのくじが当たったやぎは、【主】の前に生きたままで立たせておかなければならない。これは、それによって贖いをするために、アザゼルとして荒野に放つためである」

(4) レビ 16：15

「アロンは民のための罪のためのいけにえのやぎをほふり、その血を垂れ幕の内側に持って入り、あの雄牛の血にしたようにこの血にもして、それを『贖いのふた』の上と『贖いのふた』の前に振りかける」

3. 贖罪の日の 2 頭のやぎ

(1) キリストは、私たちの代理人として、神の怒りを受けてくださった。

①それが十字架上の死の意味である。

(2) それによって、私たちは解放された。

①キリストの死は、私たちの身代わりとしての死であった。

4. 新約聖書の聖句

(1) マタ 26：39

「それから、イエスは少し進んで行って、ひれ伏して祈って言われた。『わが父よ。できますならば、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの願うようにではなく、あなたのみこころのように、なさってください』」

(2) 2 コリ 5：21

「神は、罪を知らない方を、私たちの代わりに罪とされました。それは、私たちが、この方にあって、神の義となるためです」

5. 今や、神は怒ってはおられない。

(1) 神の怒りは、キリストの死によって静められた。

①信じる者は神の怒りから解放された。

(2) キリストを信じないままで死ぬ人は、神の怒りを受ける。

Ⅲ. 「なだめの供え物」を公に示した理由は何か。

1. 過去の忍耐を示す。

「それは、ご自身の義を現すためです。というのは、今までに犯されて来た罪を神の忍耐をもって見のがして来られたからです」(25 節 b)

(1) 旧約時代の聖徒たちには、罪に対する根本的な解決はなかった。

①いけにえを捧げても、心は空しい。

②翌年、また同じ儀式を繰り返さねばならない。

(2) モーセの律法が命じるいけにえでは、罪の解決にはならない。

①罪を覆う役割は果たした。

②しかし、罪を赦すことはできなかった。

③これがヘブル人への手紙のテーマである。

(3) 神は、旧約時代の聖徒たちの罪を、忍耐をもって見逃して来られた。

2. 今の時に神の義を示す。

「それは、今の時にご自身の義を現すためであり、こうして神ご自身が義であり、また、イエスを信じる者を義とお認めになるためなのです」(26 節)

(1) 旧約時代の聖徒たちの罪は、キリストが死んだ時に取り除かれた。

①それまでは、罪が一時的に覆われていただけである。

(2) 新約時代の聖徒たちの罪は、信じた瞬間から取り除かれている。

①神が、イエスを信じる者を義と認めてくださる。

(3) 神ご自身が義であることが証明された。

①単に赦すだけでは、神が義であるとは言えない。

②公にされた「なだめの供え物」が必要である。

#### 結論：「義の提供」の箇所から導き出せる 4 つの適用

1. イエスを信じる私たちは、義と宣言された。

ロマ 3：22

「すなわち、イエス・キリストを信じる信仰による神の義であって、それはすべての信じる人に与えられ、何の差別もありません」

2. イエスを信じる私たちは、神の怒りを受けない。

ロマ 4：6～8

「ダビデもまた、行いとは別の道で神によって義と認められる人の幸いを、こう言っています。『不法を赦され、罪をおおわれた人たちは、幸いである。主が罪を認めない人は幸いである』」

3. イエスを信じる私たちは、罪に定められることはない。

ロマ 8：1

「こういうわけで、今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません」

4. そして、義認は私たちの努力の範囲外にある祝福である。

ロマ 10：1～3

「兄弟たち。私が心の望みとし、また彼らのために神に願い求めているのは、彼らの救われることです。私は、彼らが神に対して熱心であることをあかしします。しかし、その熱心は知識に基づくものではありません。というのは、彼らは神の義を知らず、自分自身の義を立てようとして、神の義に従わなかったからです」

## 「義認と律法の調和」

### 1. はじめに

#### (1) 義認（1：18～5：21）

##### ①有罪宣言（1：18～3：20）

##### ②義の提供（3：21～26）

＊信仰義認の原則

＊イエスは「なだめの供え物」となられた。

＊3：23～24 が重要である。

#### (2) きょうの箇所ではパウロは、2つのことを論じている。

##### ①義認と律法の関係

##### ②義認と律法の調和

### 2. メッセージのアウトライン

#### (1) 人間の誇りはどこにあるのか。

#### (2) 救いの道は、ユダヤ人と異邦人で異なるのか。

#### (3) 信仰は律法を無効にするのか。

### 4. メッセージのゴール

#### (1) 義認のために、人間が付け加える余計なものについて論じる。

このメッセージは、義認と律法の関係について学ぶためのものである。

## I. 人間の誇りはどこにあるのか。

### 1. 1 コリ 1：22～24

「ユダヤ人はしるしを要求し、ギリシヤ人は知恵を追求します。しかし、私たちは十字架につけられたキリストを宣べ伝えるのです。ユダヤ人にとってはつまずき、異邦人にとっては愚かでしょうが、しかし、ユダヤ人であってもギリシヤ人であっても、召された者にとっては、キリストは神の力、神の知恵なのです」

#### (1) ユダヤ人も異邦人も、自らが大切だと思うものを持っていた。

#### (2) キリストの福音は、それらのものとは根本的に異なる。

## 2. ユダヤ人の誇り

### (1) アブラハムの子孫であることを誇りとした。

#### ①マタ 3：9

『われわれの父はアブラハムだ』と心の中で言うような考えではいけない。あなたがたに言うておくが、神は、この石ころからでも、アブラハムの子孫を起こすことがおできになるのです」

#### ②ヨハ 8：38

「彼らはイエスに答えた。『私たちはアブラハムの子孫であって、決してだれの奴隷になったこともありません。あなたはどのようにして、「あなたがたは自由になる」と言われるのですか』」

### (2) 割礼を誇りとしていた。

#### ①エペ 2：11

「ですから、思い出してください。あなたがたは、以前は肉において異邦人でした。すなわち、肉において人の手による、いわゆる割礼を持つ人々からは、無割礼の人々と呼ばれる者であって、」

### (3) 律法を持ち、それを守っていることを誇りとしていた。

#### ①ロマ 2：17～18

「もし、あなたが自分をユダヤ人となえ、律法を持つことに安んじ、神を誇り、みこころを知り、なすべきことが何であるかを律法に教えられてわきまえ、」

### (4) 神が自分たちの神であることを誇りとしていた。

#### ①「アブラハム、イサク、ヤコブの神」

#### ②自分たちは、イスラエル人である。ヤコブの子孫である。

## 3. 異邦人の誇り

### (1) 知恵（学問）（ギリシア文明）

### (2) 力（ローマ文明）

### (3) 自由（ローマ文明）

### (4) 自足している（自分のことは自分でできる）

（例話）東日本大震災で日本人の誇りが砕かれつつある。

## 4. 信仰義認の教理を受け入れた場合は、それらの誇りはどうなるのか。

### (1) 「それはすでに取り除かれた」

- ①部屋から閉め出された。鍵がかけられた。
- ②英語で「shut up once for all」
- ③ギリシア語の文法で、「アオリスト」という時制である。

(2) どういう原理（原則）によって閉め出されたのか。

- ①行いの原理によってではない。
  - \*行いのよる義の獲得は、誇りを生む。
- ②信仰の原理によって、誇りは閉め出された。

## II. 救いの道は、ユダヤ人と異邦人で異なるのか。

1. 信仰義認は、全ての人に適用される原理である。

「人が義と認められるのは、律法の行いによるのではなく、信仰によるというのが、私たちの考えです」(28 節)

- (1) 「それゆえ」という接続詞が入る。
  - ①これまでの議論をまとめている。
- (2) 「人が」とあり、ユダヤ人という言葉も、異邦人という言葉もない。
  - ①すべての人に同じ原理が適用される。
- (3) 同じ原理とは、「信仰義認」である。

2. 神はすべての人の神である。

(1) 3：29

「それとも、神はユダヤ人だけの神でしょうか。異邦人にとっても神ではないのでしょうか。確かに神は、異邦人にとっても、神です」(29 節)

- ①ユダヤ人は、神は自分たちだけの神だと考えて来た。
- ②しかし、神は異邦人にとっても神でもある。
  - \*アブラハム契約の中には、異邦人の救いが含まれている。
  - \*ロマ 11 章には、オリーブの木の神学が展開されている。

(2) 3：30

「神が唯一ならばそうです。この神は、割礼のある者を信仰によって義と認めてくださるとともに、割礼のない者をも、信仰によって義と認めてくださるのです」

①割礼のある者とは、ユダヤ人のこと。

②割礼のない者とは、異邦人のこと。

（例話）二契約神学（ユダヤ人の救い方法と、異邦人の救い方法は異なる）

### Ⅲ. 信仰は律法を無効にするのか。

1. では、律法は無駄だったのか、無益だったのか。

「それでは、私たちは信仰によって律法を無効にすることになるのでしょうか。絶対にそんなことはありません。かえって、律法を確立することになるのです」（31 節）

（1）驚愕の感情が背後にある。

①ユダヤ人の歴史の否定につながる。

②放縦につながる。

（2）パウロは強く否定する（顔をしかめて言葉を発しているような印象）。

①律法の否定ではない。

②律法の確立である。

③4：1～25 でその説明が入る（アブラハムの例）。

（3）とりあえず原理を説明しておく。

①律法により罪が示される。

②信仰義認の道を選ぶようになる。

③その結果、聖霊の内住が与えられる。

④聖霊の力によって、律法の要求を満たすようになる。

（4）（例話）札幌聖書塾（8 期生）M 姉のコメント

「私が所属していた教会は、霊の戦いが中心の教会で、私の確信をもってやっていました。しかし、霊の戦いをしてもなんの実もなく、霊の戦いにも教会形成にも疑問を持ち始めました。それと同時に、信仰に喜びも期待も持つ事ができなくなり、3 年間ほご過ごしていました。中川先生のメッセージに出会い、そのメッセージを聞くと、神さまの素晴らしさ、愛に感動し、喜びが溢れ、神に喜ばれるように歩みたいという願いがわくのです。「～しなければならない」「～すべきだ」ではなく、みことばを通して神様にふれた時、神様の御心に喜んで従いたくなるのだ、と分かりました。人を変えるのは、みころばの力であり、それを正しく理解しなければならないのだと思いました」

結論：人間が付け加える余計なもの

## 1. 罪の告白

### (1) 1 ヨハ 1：9

「もし、私たちが自分の罪を言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます」

- ①この聖句は、救いの方を教えたものではない。
- ②すでに救われている人に対して書かれたものである。
- ③信者の罪の処理に関する教えである。

### (2) この教えの問題点

- ①自分が犯した罪をすべて覚えている人などいない。
- ②もしすべての罪を告白することが救いの条件であるなら、救いは不可能である。

## 2. 洗礼

### (1) マコ 16：15～16

「それから、イエスは彼らにこう言われた。『全世界に出て行き、すべての造られた者に、福音を宣べ伝えなさい。信じてバプテスマを受ける者は、救われます。しかし、信じない者は罪に定められます』」

- ①この聖句は、バプテスマを受けなければ救われまいとは教えていない。
- ②否定的な言葉がない。
- ③当時は、信じた直後に洗礼を受けた。
- ④この聖句は、最も古い写本にはない。

### (2) 使 2：38

「そこでペテロは彼らに答えた。『悔い改めなさい。そして、それぞれ罪を赦していただくために、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けるでしょう』」

- ①訳語の問題 「エイヌ」という前置詞。「〇〇のために」
- ②「〇〇のゆえに」「〇〇だから」とも訳せる。
- ③「罪が赦されたのだから、バプテスマを受けなさい」という訳が正しい。

### (3) 使 22：16

「さあ、なぜためらっているのですか。立ちなさい。その御名を呼んでバプテスマを受け、自分の罪を洗い流しなさい」



①訳語の問題

②「Arise and be baptized, and wash away your sins, calling on the name of the Lord.」

③前半は、洗礼は「立つ」ことに続くことを教えている。

3・メシアの主権に従う（ロードシップ論）

(1) イエスをメシアとして信じるだけでなく、メシアの主権に従う必要がある。

(2) ロマ 12：1～2

「そういうわけですから、兄弟たち。私は、神のあわれみのゆえに、あなたがたにお願いします。あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です。この世と調子を合わせてはいけません。いや、むしろ、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に受け入れられ、完全であるのかをわきまえ知るために、心の一新によって自分を変えなさい」

①この聖句は、救いの条件を教えているのではない。

②すでに救われた者に、弟子となるための条件を教えている。

## 「アブラハムと義認（1）」

### 1. はじめに

#### (1) 義認（1：18～5：21）

- ①有罪宣言（1：18～3：20）
- ②義の提供（3：21～26）
- ③義認と律法の関係（3：27～31）

＊人間の誇りはない。

＊信仰は律法を確立する。

#### (2) パウロは、4：1～25 で上記の 2 つの主張を証明する。

- ①アブラハムと義認（1）（4：1～12）
- ②アブラハムと義認（2）（4：13～25）

### 2. メッセージのアウトライン

- (1) アブラハムの場合はどうか（4：1～5）。
- (2) ダビデの場合はどうか（4：6～8）。
- (3) 割礼をどう考えるか（4：9～12）。

### 4. メッセージのゴール（この箇所の適用）

- (1) 割礼と洗礼の関係
- (2) 神の長期計画
- (3) 神の恵み

このメッセージは、アブラハムの例を通して信仰と義認の関係について学ぶためのものである。

## I. アブラハムの場合はどうか（4：1～5）

### 1. はじめに（1 節）

「それでは、肉による私たちの父祖アブラハムの場合は、どうでしょうか」

#### (1) パウロは、旧約聖書の義認が業によるのか、信仰によるのかを論じる。

- ①アブラハムが信仰によって救われたとするなら、パウロの論点は証明される。
- ②「アブラハムはいかにして救われたのか」が論点である。

#### (2) アブラハムをモデルとして用いる理由

①紀元 1 世紀のユダヤ教（パリサイ派のユダヤ教）：パウロもその一員であった。

②アブラハムはイスラエル民族の創始者である。

＊イスラエルという名はヤコブから始まった。

③アブラハムは罪を犯したことがない（ユダヤの文献にある）。

＊エジプトに下った時の罪がある。

④モーセの律法への従順が、彼と神の関係の基である（文献にある）。

＊アブラハムの時代、モーセの律法は存在していなかった。

## 2. 仮定（2 節）

「もしアブラハムが行いによって義と認められたのなら、彼は誇ることができます。しかし、神の御前では、そうではありません」

## 3. 創世記からの証明（3 節）

「聖書は何と言っていますか。『それでアブラハムは神を信じた。それが彼の義とみなされた』とあります」

### （1）創 15：6 からの引用

「そして、彼を外に連れ出して仰せられた。『さあ、天を見上げなさい。星を数えることができるなら、それを数えなさい。』さらに仰せられた。『あなたの子孫はこのようになる。』彼は【主】を信じた。主はそれを彼の義と認められた」（創 15：5～6）

### （2）老年になっていたので、人間的には不可能に近いことであった。

①アダムとエバの罪は、神のことばを疑ったこと。

②神のことばを信用することが信仰である。

### （3）「みなされた」という言葉

①ギリシア語で「ロギゾマイ」

②「自分の収入でないのに、自分の口座に入る」という意味である。

③3～11 節の間に、8 回も出てくる。

＊3 節 「みなされた」

＊4 節 「みなされます」

＊5 節 「みなされる」

＊6 節 「認められる」

＊8 節 「認めない」

＊9 節 「みなされた」

＊10 節 「みなされた」

＊11 節 「認められる」

4. 雇用契約からの説明（4～5 節）

「働く者の場合に、その報酬は恵みでなくて、当然支払うべきものとみなされます。何の働きもない者が、不敬虔な者を義と認めてくださる方を信じるなら、その信仰が義とみなされるのです」

(1) 雇用契約では、雇い主は労働した従業員に給与を支払う義務がある。

①「当然支払うべきもの」

②もし働かないのに給与をもらえたなら、それは恵みである。

(2) アブラハムは、何の働きもないのに、信じたために義と認められた。

①「不敬虔な者を義と認めてくださる方を信じるなら」

Ⅱ. ダビデの場合はどうか（4：6～8）

1. ダビデが登場する理由

(1) 考えられる反論

①アブラハムの時代、モーセの律法はまだなかった。

(2) ユダヤ的論法

①律法（トーラー）を論証する際、預言書か諸書から引用し、補強する。

＊ここでは詩篇からの引用が出てくる。

②同じキーワードを探し、関係のない箇所を関連付ける。

2. 詩 32：1～2 の引用

「幸いなことよ。そのそむきを赦され、罪をおおわれた人は。幸いなことよ。【主】が、咎をお認めにならない人、その霊に欺きのない人は」

(1) 「お認めにならない」

(2) この詩篇の背景として考えられるのは、バテ・シェバ事件。

①ダビデは、姦淫と殺人の罪を犯した。

②詩篇 51 篇の続編として読む。

③ダビデが体験した「悔い改めと罪赦される喜び」がよく理解できる。

- (3) ダビデは「律法の時代」の人であるが、信仰によって義とされると証言している。

### Ⅲ. 割礼をどう考えるか（4：9～12）

#### 1. 割礼の説明が入る理由

- (1) パリサイ人からの批判が聞こえてくる。
- ①パリサイ派神学では、割礼は救いの保証である。
  - ②アブラハムは割礼を受けたではないか。
  - ③割礼は、行いなのではないか。

#### 2. アブラハムが義とされたタイミング

「どのようにして、その信仰が義とみなされたのでしょうか。割礼を受けてからでしょうか。まだ割礼を受けていないときにでしょうか。割礼を受けてからではなく、割礼を受けていないときにです」（10 節）

- (1) 創 15 章：アブラハムは無割礼の時に、信仰によって義とされた。
- (2) 創 17 章：アブラハムは割礼を受けた。
- ①割礼と義認とは無関係である。
  - ②創 15 章と 17 章の間には、14 年の歳月がある。

#### 3. 無割礼の時に義とされた理由

「彼は、割礼を受けていないとき信仰によって義と認められたことの証印として、割礼というしるしを受けたのです。それは、彼が、割礼を受けないままで信じて義と認められるすべての人の父となり、また割礼のある者の父となるためです。すなわち、割礼を受けているだけではなく、私たちの父アブラハムが無割礼のときに持った信仰の足跡に従って歩む者の父となるためです」（11～12 節）

- (1) 無割礼の者の父となるため
- ①無割礼の者とは、異邦人のことである。
- (2) 割礼のある者の父となるため
- ①割礼のある者とは、ユダヤ人のことである。
  - ②義認は、割礼後も続いた。
- (3) 「割礼というしるし」
- ①割礼は、アブラハム契約のしるしである。

②アブラハム契約は、無条件契約である。

(4)「証印」

①内面の変化を外面的に表すものである。

②外面的儀式が、内面を変化させるわけではない。

結論：この箇所の適用

1. 割礼と洗礼の関係

(1) 割礼は、誕生して8日目に男児が受けるもの。

①親の信仰の表現である。

(2) アブラハムの場合は、自らの意志で割礼を受けた。

①信仰義認の「証印」として

(3) 洗礼との関係

①前回は触れたように、洗礼は救われた者が自らの意志で受けるものである。

②幼児洗礼と幼児の割礼は似ている。親の信仰。

③親の信仰では、人は救われない。

2. 神の長期計画

(1) 4：11～12 で、異邦人の救いが想定されている。

①アブラハム契約の中に、全人類の救いが想定されている。

(2) ロマ書全体から見えてくる神の長期計画

①ユダヤ人のメシア拒否

②教会の誕生（神の永遠からの計画である）

③教会の携挙

④大患難時代

⑤ユダヤ人の民族的救い

⑥メシアの地上再臨

⑦メシア的王国の設立

(3) 神の長期計画と人生の長期計画

### 3. 神の恵み

#### (1) ロマ 4：5

「何の働きもない者が、不敬虔な者を義と認めてくださる方を信じるなら、その信仰が義とみなされるのです」

①業による救いではなく、信仰と恵みによる救い

#### (2) 無言の前提（創造主と被造物の関係）

①私たちが何をしたとしても、それによって神に負債を与えられるものではない。

②神はすべてのものを所有しておられる。

③私たちが持っているものは、すべて神からの贈り物である。

#### (3) 東日本大震災への反応

①「私は神を憎む」と発言した人がある。

②神は私たちによきものを与えてくださった。

③被造の世界は、人類の罪のゆえに墮落し、崩壊しつつある。

④天災は、被造の世界が呪いの中にあることを示している。

⑤それでも神は、恵み深いお方である。

⑥神は、被造の世界と、その中に住む主人公を再創造しようとしておられる。

## 「アブラハムと義認（2）」

### 1. はじめに

#### (1) 義認（1：18～5：21）

- ①有罪宣言（1：18～3：20）
- ②義の提供（3：21～26）
- ③義認と律法の関係（3：27～31）

＊人間の誇りはない。

＊信仰は律法を確立する。

#### (2) パウロは、4：1～25 で上記の 2 つの主張を証明する。

- ①アブラハムの場合はどうか（4：1～5）。
- ②ダビデの場合はどうか（4：6～8）。
- ③割礼をどう考えるか（4：9～12）。

### 2. メッセージのアウトライン

- ④相続人の約束をどう考えるか（4：13～16）。
- ⑤アブラハムの信仰の普遍性とは何か（4：17～22）。
- ⑥私たちへの適用とは何か（4：23～25）。

### 3. メッセージのゴール

- ①～⑥を復習する。

このメッセージは、アブラハムの例を通して信仰と義認の関係について学ぶためのものである。

## I. 相続人の約束をどう考えるか（4：13～16）。

### 1. 13 節

「というのは、世界の相続人となるという約束が、アブラハムに、あるいはまた、その子孫に与えられたのは、律法によってではなく、信仰の義によったからです」

#### (1) アブラハムとその子孫に約束が与えられた。

- ①世界の相続人となる
- ②「世界を受け継がせる」（新共同訳）



(2) 世界の相続人とは

①カナンの地がアブラハムとその子孫に約束された。

＊この概念（確信）は、ユダヤ人の思索と歴史に大きな影響を与えた。

＊バビロン捕囚からの帰還（詩 137）

＊紀元 70 年の世界離散

＊20 世紀のシオニズム運動

＊シオン（エルサレム）への帰還という夢が、ユダヤ民族を一つにした。

（例話）東日本大震災の被災地から去り難い人々

＊いつかアブラハムは復活し、約束の地を受け継ぐようになる。

②さらに、創 17：5 の約束がある。

「あなたの名は、もう、アブラムと呼んではならない。あなたの名はアブラハムとなる。わたしが、あなたを多くの国民の父とするからである」

(3) この約束は、律法を行うことによってではなく、信仰の義によって与えられた。

①アブラハムはモーセの律法よりも前の人

②救いも、アブラハム契約の約束も、律法を行うことによるのではない。

2. 14 節

「もし律法による者が相続人であるとするなら、信仰はむなしくなり、約束は無効になってしまいます」

(1) 律法を行う者が相続人であると言われた場合の問題点

①信仰はむなくしなる。無意味になる。役立たずになる。

②約束は無効になる。廃止されたことになる。誰もできないから。

（例話）David Neff（クリスチャニティ・トゥデイ・インターナショナル）

L.L.Bean の宣伝 E メール。（Double Coupon Dollars: Our Gift to You）

開けると、（Earn Double Coupon Dollars）とあった。

教会史は、ギフトと言いながら、獲得せよ、という事例で満ちている。

3. 15～16 節は、13～14 節を証明している。

「律法は怒りを招くものであり、律法のないところには違反ありません」（15 節）

(1) 私訳「律法は裁きをもたらします。なぜなら、律法がなければそれに対する違反もないのですが、律法が与えられたために違反が生じるからです」

(2) このテーマは、ロマ書 7 章でくわしく登場する。

①罪は、特定の命令があってもなくても、常に存在する。

- ②「違反」というのは、特定の命令に対する不従順である。
- ③罪と「違反」とは同じではない。
- ④律法が与えられると、罪の性質が活動の機会を得て、活発に動くようになる。
- ⑤それで、律法は怒りを招く（裁きを招く）ものとなるのです。  
（例話）有名な彫刻。「手を触れないでください」

「そのようなわけで、世界の相続人となることは、信仰によるのです。それは、恵みによるためであり、こうして約束がすべての子孫に、すなわち、律法を持っている人々にだけでなく、アブラハムの信仰にならう人々にも保証されるためなのです。『わたしは、あなたをあらゆる国の人々の父とした』と書いてあるとおりに、アブラハムは私たちすべての者の父なのです」（16 節）

（1）創 17 : 5 の引用

（2）世界の相続人となるのは、信仰と恵みによる。

- ①律法が入り込む余地はない。
- ②信仰があれば、ユダヤ人でも異邦人でも、義認を受け、相続人となる。

## II. アブラハムの信仰の普遍性とは何か（4 : 17～22）。

1. 信仰の対象は神である。

「このことは、彼が信じた神、すなわち死者を生かし、無いものを有るもののようにお呼びになる方の御前で、そうなのです」（17 節）

（1）力ある神

- ①死者を生かした。アブラハムとサラが老年になって子を産んだ。
- ②イサクはまだ生まれていないのに、神はその子を有るもののように呼んだ。  
「死者に命を与え、存在していないものを呼び出して存在させる神を、アブラハムは信じ、その御前でわたしたちの父となったのです」（新共同訳）

（2）神を信じる信仰によって、わたしたちの父となった。

2. 信仰の内容は神の約束である。

「彼は望みえないときに望みを抱いて信じました。それは、『あなたの子孫はこうになる』と言われていたとおりに、彼があらゆる国の人々の父となるためでした」（18 節）

（1）創 15 : 5 星の数ほどになる。

3. 希望に反して信じた。望み得ないのに信じた。

「アブラハムは、およそ百歳になって、自分のからだが生きたまま死んでも同然であることと、サラの胎の死んでいることとを認めても、その信仰は弱りませんでした」（19 節）

(1) 人間的には、絶望であった。

(2) 神の約束のゆえに希望があった。

4. 疑わないで信じた。

「彼は、不信仰によって神の約束を疑うようなことをせず、反対に、信仰がますます強くなって、神に栄光を帰し、神には約束されたことを成就する力があることを堅く信じました。だからこそ、それが彼の義とみなされたのです」（20～22 節）

(1) 「神に栄光を帰し」「神を賛美し」（新共同訳）

(2) 希望がなくなればなくなるほど、信仰が働く余地が増える。

(3) だからこそ、その信仰によって義認を受けた。

### Ⅲ. 私たちへの適用とは何か（4：23～25）。

1. 23～25 節

「しかし、『彼の義とみなされた』と書いてあるのは、ただ彼のためだけでなく、また私たちのためです。すなわち、私たちの主イエスを死者の中からよみがえらせた方を信じる私たちも、その信仰を義とみなされるのです。主イエスは、私たちの罪のために死に渡され、私たちが義と認められるために、よみがえられたからです」

(1) アブラハムに起こったことは、私たちにも起こる。

①アブラハムは、死者を生かす神を信じた（イサク誕生のこと）。

②私たちは、主イエスを死者の中からよみがえらせた方を信じた。

(2) 新約時代における信仰の内容

①主イエスは、私たちの罪のために死に渡された。

②主イエスは、私たちが義と認められるために、よみがえられた。

(3) 福音の内容

①十字架の死は、義認の成就。

②復活は、義認の承認。

結論：①～⑥の復習

かつてはパリサイ人だったパウロが、恵みを説いている。

現代のイスラエルの反宣教団体の論理

①アブラハムの場合はどうか（4 : 1～5）。

信仰によって義とされた。創 15 : 6

ロギゾマイ（働いていないのに、自分の口座に入金される）

②ダビデの場合はどうか（4 : 6～8）。

律法の時代に生きたダビデも、信仰によって義とされた。

③割礼をどう考えるか（4 : 9～12）。

アブラハムは割礼を受ける前に、信仰によって義とされた。

ユダヤ人も異邦人もともに、信仰によって義とされる。

④相続人の約束をどう考えるか（4 : 13～16）。

義認も、相続人の約束も、ともに信仰による。

⑤アブラハムの信仰の普遍性とは何か（4 : 17～22）。

信仰の対象は神。

信仰の内容は神の約束。

希望に反して信じた。

疑わないで信じた。

⑥私たちへの適用とは何か（4 : 23～25）。

信仰の対象は神であり、信仰の内容は福音である。

人は福音を信じる信仰によって義とされ、相続人とされる。

この約束は、信仰と恵みによるので、確実である。

それゆえ、ロマ 12 : 1～2 の献身につながる。

## 「義認の喜び（1）」

### 1. はじめに

#### (1) ロマ 5：1

「ですから、信仰によって義と認められた私たちは、」で始まる。

①私たちの今の状態（信仰によって義とされた）を確認しておく必要がある。

#### (2) ロマ 5：1 の最初の句は、ここまでの義認に関する議論のまとめである。

##### ①有罪宣言（1：18～3：20）

＊ユダヤ人も異邦人も罪人である。人類の普遍的罪の証明がなされた。

##### ②義の提供（3：21～26）

＊ユダヤ人にも異邦人にも、キリストを信じる信仰による義が提供された。

##### ③義認と律法の関係（3：27～31）

＊ユダヤ人から来るであろう質問に答えた。

＊信仰による義と律法をいかに調和させるかという問題である。

＊信仰は結果的に律法を確立する。

##### ④アブラハムの例（4：1～25）

＊アブラハムは律法が与えられる前の時代に、信仰によって義とされた。

＊また、割礼を受ける前に義とされた（業による救いではない）。

#### (3) きょうの箇所では、義認の後に何が起こるかという議論が展開される。

①過去の問題は、義認で解決した。

②将来に不安がある。さまざまな試練や苦難が待っている。

③しかし、将来の問題も、義認で解決する。

④義認の結果、信者に与えられた 5 つの祝福が列挙される。

### 2. メッセージのアウトライン

#### (1) 神との平和（1 節）

#### (2) 恵みへのアクセス（利用する権利）（2 節 a）

#### (3) 栄光の希望に関する誇り（2 節 b）

#### (4) 今の時の忍耐力（3～10 節）

#### (5) 神に関する誇り（11 節）

今回は、(1) ～ (3) を取り上げる。

次回は、(4) ～ (5) を取り上げる。

### 3. メッセージのゴール

- (1) 義認を受けた者に与えられている位置
- (2) 義認を受けた者に与えられている力
- (3) 義認を受けた者に与えられている希望

このメッセージは、義認を受けた者のその後の歩みを教えるものである。

## I. 神との平和（5：1）

### 1. 1 節

「ですから、信仰によって義と認められた私たちは、私たちの主イエス・キリストによって、神との平和を持っています」

- (1) 私たちの状態は、「信仰によって義と認められた」というものである。
  - ①動詞の時制は、アオリストである。
  - ②一度限りの行為であり、再度繰り返されることはない。決定的事実である。
  - ③それゆえ、過去を振り返るのではなく、将来を見るのである。

- (2) 神との平和もまた、義認と同様に、イエス・キリストを通して与えられる。

#### ①ロマ 1：18

「というのは、不義をもって真理をはばんでいる人々のあらゆる不敬虔と不正に対して、神の怒りが天から啓示されているからです」

#### ②ロマ 5：1 では、神との平和が語られている。

（例話）創 33 章のヤコブとエサウ

- ③神の怒りがイエス・キリストに注がれ、神は満足された。怒りが静められた。
- ④それゆえ、イエス・キリストを信じる者は、神との平和を得ている。
- ⑤神との平和は、最も重要な祝福である。

### 2. 感情的なものではなく、成就した真理である。

- (1) これは心に平安があるかどうかを論じているのではない。

- ①感情に頼る信仰生活の危険性
- ②聖書研究と神のことばに信頼することの重要性

- (2) 「持っている」という動詞は、現在形である。

- ①これは、継続する動作や状態を表す時制である。
- ②義認はすでに起こった事実であり、神との平和は現在進行形の事実である。

(3) 神と私たちの間にあった敵意が取り去られた。

① 先ず神が、罪人に対する態度を変化させた。

② 次に罪人が、その事実に応答した。

③ 2 コリ 5：19～20

「すなわち、神は、キリストにあって、この世をご自分と和解させ、違反行為の責めを人々に負わせないで、和解のことは私たちにゆだねられたのです。こういうわけで、私たちはキリストの使節なのです。ちょうど神が私たちを通して懇願しておられるようです。私たちは、キリストに代わって、あなたがたに願います。神の和解を受け入れなさい」

## II. 恵みへのアクセス（利用する権利）（2 節 a）

### 1. 2 節 a

「このキリストのお陰で、今の恵みに信仰によって導き入れられ、」（新共同訳）

(1) キリストにあって、これが真理となっている（位置的真理）。

① 動詞の時制は、完了形である。今も継続している事実である。

(2) 信者には、恵みへのアクセス（利用権）が与えられている。

① 恵みへの道は、「オープン・ドア」の状態にある。

② 義認が恵みにより成就したように、信者としての生活にも恵みが必要である。

③ いかなる不安や試練も、恵みによって乗り越えることができる。

### 2. ヘブ 4：14～16

「さて、私たちのためには、もろもろの天を通られた偉大な大祭司である神の子イエスがおられるのですから、私たちの信仰の告白を堅く保とうではありませんか。私たちの大祭司は、私たちの弱さに同情できない方ではありません。罪は犯されませんでした。すべての点で、私たちと同じように、試みに会われたのです。ですから、私たちは、あわれみを受け、また恵みをいただいて、おりにかなった助けを受けるために、大胆に恵みの御座に近づこうではありませんか」

(1) 信仰から離れそうになっている人たちへの、励ましの言葉である。

① 離れて行く理由は、恵みにアクセスしないからである。

(2) 恵みとは、信者を祝福し、守り、支える超自然的な神の御手である。

- ①祝された生活の秘訣が、「恵み（カリス）」という言葉で表現されている。
  - ②大切なのは、この恵みを自分のものとして受け取り、体験することである。
  - ③日々恵みにより頼むことが、祝されたクリスチャン生活の鍵である。
- （例話）母親にプレゼントを届ける娘

### Ⅲ. 栄光の希望に関する誇り（2 節 b）

#### 1. 2 節 b

「神の栄光にあずかる希望を誇りにしています」（新共同訳）

- (1) 「カウカオマイ」という動詞は、「誇りとする」、次に「喜ぶ」という意味。

①ロマ 2：17

「もし、あなたが自分をユダヤ人となえ、律法を持つことに安んじ、神を誇り、」

②ロマ 2：23

「律法を誇りとしているあなたが、どうして律法に違反して、神を侮るのですか」

③ロマ 5：2、3、11

新改訳はともに、「喜ぶ」と訳している。

- (2) クリスチャンの希望は、聖化の完成である。これを栄化という。

①恵みにより聖化され、恵みにより栄化される。

②霊的指導者の役割は、霊的幼子に「恵みへのアクセス」を教えることである。

(3) ロマ 8：17

「もし子どもであるなら、相続人でもあります。私たちがキリストと、栄光をともに受けるために苦難をともにしているなら、私たちは神の相続人であり、キリストとの共同相続人です」

①キリストと、栄光をともに受ける。

②そのために苦難をともにしている。

③「体の贖われることを待ち望んでいる」（8：23）

④「目に見える望みは、望みではありません」（ロマ 8：24）

#### 2. コロ 3：4

「私たちのいのちであるキリストが現れると、そのときあなたがたも、キリストとともに、栄光のうちに現れます」

- (1) 自分が栄化されるだけでなく、神の栄光の中に入る。



結論：

(1) 義認を受けた者に与えられている位置

- ①神との平和
- ②人との平和ではない。
- ③すでに成就した真理（神との平和）を、実践によって体験して行く。

(2) 義認を受けた者に与えられている力

- ①恵みへのアクセス
- ②真剣に神の恵みにより頼み、神の恵みを体験する。  
（例話）ローマ時代の殉教者の死（火あぶりの刑）

(3) 義認を受けた者に与えられている希望

- ①復活の希望
- ②死は、クリスチャンにとっては悲劇ではない。

## 「義認の喜び（2）」

### 1. はじめに

(1) ここまでの「義認」についての議論（1：18～4：25）

- ①ユダヤ人も異邦人も、罪人である。
- ②ユダヤ人も異邦人も、信仰により、恵みによって救われる。

(2) きょうの箇所では、義認の後に何が起こるかという議論が展開される。

- ①過去の問題は、義認で解決した。
- ②将来に不安がある。さまざまな試練や苦難が待っている。
- ③義認の結果、信者に与えられた 5 つの祝福が列挙される。

### 2. メッセージのアウトライン

- (1) 神との平和（1 節）
- (2) 恵みへのアクセス（利用する権利）（2 節 a）
- (3) 栄光の希望に関する誇り（2 節 b）
- (4) 今の時の忍耐心（3～10 節）
- (5) 神に関する誇り（11 節）

前回は、(1) ～ (3) を取り上げる。

今回は、(4) ～ (5) を取り上げる。

### 3. メッセージのゴール

- (1) 初代教会に広がっていた患難に関する教え
- (2) 神に関する誇りの具体的内容

このメッセージは、義認を受けた者のその後の歩みを教えるものである。

## IV. 今の時の忍耐心（3～5 節）

### 1. 3 節 a

「そればかりではなく、苦難をも誇りとします」（新共同訳）

(1) 「カウカオマイ」という動詞

①新改訳と口語訳は、「喜ぶ」と訳している。

(2) 「そればかりではなく」の意味

- ①「神の栄光にあずかる希望」を誇るのは当然のことである。
- ②これは、聖化の完成、つまり栄化の希望のことである。
- ③義認の恵みを受けた者は、それ以上のことを誇りとしている。
- ④普通は誰もが嫌がる苦難（患難）をも誇りとしている。

(3) 患難の種類

- ①この世から来る憎しみ
- ②サタンの誘惑
- ③肉の思い
- ④神の御心による患難

2. 3 節 b～4 節

「それは、患難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと知っているからです」

(1) 患難を誇る理由が書かれている。

- ①患難は、私たちの内にキリストの似姿を作り出す原動力となる。

(2) 霊的公式

- ①患難＋恵み＝忍耐
- ②忍耐＋恵み＝練られた品性（練達）

＊ギリシア語の「ドキメイ」。金属を火で試し、品質を確かめること。

＊試された結果、純粋であることが証明されたもの。

＊神の承認がある品性という意味である。

- ③練られた品性＋恵み＝希望

＊神の承認があるので生まれる希望である。

3. 5 節

「この希望は失望に終わることがありません。なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです」

(1) 失望しない理由は、神の愛が注がれているという認識があるからである。

(2) この認識は、内住の聖霊を通して与えられる。

- ①信じた瞬間新生し、内住の聖霊を与えられている。
- ②ロマ 8：9

「けれども、もし神の御霊があなたがたのうちに住んでおられるなら、あなたが

たは肉の中にではなく、御霊の中にいるのです。キリストの御霊を持たない人は、キリストのものではありません」

③1 コリ 3：16

「あなたがたは神の神殿であり、神の御霊があなたがたに宿っておられることを知らないのですか」

④エレ 31：33

「彼らの時代の後に、わたしがイスラエルの家と結ぶ契約はこうだ。——【主】の御告げ——わたしはわたしの律法を彼らの中に置き、彼らの心にこれを書きしるす。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる」

4. 感動的脱線（6～10 節）

（1）6 節

「私たちがまだ弱かったとき、キリストは定められた時に、不敬虔な者のために死んでくださいました」

①「弱かったとき」とは、神に応答する力がなかったときという意味。

＊病人に使う言葉

＊道徳的な意味でも使える言葉

＊受動的な意味での罪人

②「定められた時」とは、あらかじめ決定されていた時という意味。

＊神の怒りが限界に達した時、神の怒りはキリストの上に注がれた。

③キリストは私たちのために死んでくださった。

（2）7～9 節

「正しい人のためにでも死ぬ人はほとんどありません。情け深い人のためには、進んで死ぬ人があるいはいるでしょう。しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。ですから、今すでにキリストの血によって義と認められた私たちが、彼によって神の怒りから救われるのは、なおさらのことです」

①「罪人であったとき」とは、神に敵対する者という意味。

＊能動的な意味での罪人

②敵のために死ぬ人はいない。

③正しい人のためでも死ぬ人はいない。

④情け深い人の場合は、そういう可能性もあり。感情に対するアピールがある。

⑤キリストの死は、常識ではありえないことである。

⑥それによって神は、私たちに対する愛を明らかにされた。

⑦ラビ的議論：大から小への議論

\*大を証明することによって、小が真理であることを示す。

\*罪人のために死ぬという愛が示された。これが大である。

\*義とされた私たちは、神の怒りか救われる。これが小である。

(3) 10 節

「もし敵であった私たちが、御子の死によって神と和解させられたのなら、和解させられた私たちが、彼のいのちによって救いにあずかるのは、なおさらのことです」

①ここでも大から小への議論がある。

\*敵である者が、御子の死によって神と和解させられた。これが大である。

\*和解させられたのだから、キリストの内にあって救われる。少である。

②2 コリ 5：17～18

「だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。これらのことはすべて、神から出ているのです。神は、キリストによって、私たちをご自分と和解させ、また和解の務めを私たちに与えてくださいました」

③コロ 3：4

「私たちのいのちであるキリストが現れると、そのときあなたがたも、キリストとともに、栄光のうちに現れます」

④「永遠の救い」を失う道はない。

## V. 神に関する誇り（11 節）

### 1. 11 節

「それだけでなく、わたしたちの主イエス・キリストによって、わたしたちは神を誇りとしています。今やこのキリストを通して和解させていただいたからです」（新共同訳）

(1)「そればかりでなく」は、3 節の「そればかりでなく」と並列関係にある。

①つまり、6～10 節の感動的脱線が終わったのである。

②その意味は、「神の栄光の望みを誇りとするだけでなく、患難さえも誇りとする。さらに、神ご自身を誇りとする」ということ。

(2) 誇りとする理由は、キリストを通して神と和解させられたから。

①それゆえ、キリストによって（あって）誇るのである。

結論：

1. 初代教会に広がっていた患難に関する教え

(1) 公同書簡の教えと共通する。

①パウロ書簡と公同書簡がある。

(2) ヤコブとペテロ

①ヤコ 1：2～4

「私の兄弟たち。さまざまな試練に会うときは、それをこの上もない喜びと思いなさい。信仰がためされると忍耐が生じるということを、あなたがたは知っているからです。その忍耐を完全に働かせなさい。そうすれば、あなたがたは、何一つ欠けたところのない、成長を遂げた、完全な者となります」

②1 ペテ 1：6～7

「そういうわけで、あなたがたは大いに喜んでいます。いまは、しばらくの間、さまざまな試練の中で、悲しまなければならないのですが、あなたがたの信仰の試練は、火で精錬されつつなお朽ちて行く金よりも尊く、イエス・キリストの現れのとくに称賛と光栄と栄誉になることがわかります」

(3) 初代の教会の信者が受けていた教えの共通性

①信者にも試練が襲う。

②その試練は、信者を成長させ、完成させる力となる。

③それゆえ、信者は試練の中でも喜ぶことができる。

④さらに、試練そのものを喜ぶようになる。

⑤キーワードは、「恵み」である。

2. 神に関する誇りの具体的内容

(1) 神に関する誇りは、義認の結果である。

(2) 具体的内容

①神の存在を喜ぶ。

②神の性質を喜ぶ（義、聖、憐れみ、真実、愛）。

③神が自然界を支えておられる。

④罪人にはない感覚であり、体験である。

## 「義認の真理の適用」

### 1. はじめに

#### (1) ここまでの「義認」についての議論（1：18～5：11）

- ①ユダヤ人も異邦人も、罪人である。
- ②ユダヤ人も異邦人も、信仰により、恵みによって救われる。
- ③義認の結果、信者には5つの祝福が与えられる。

#### (2) きょうの箇所は、ロマ書の中で最も難解な箇所である。

##### ①2 ペテ 3：15～16

「また、私たちの主の忍耐は救いであると考えなさい。それは、私たちの愛する兄弟パウロも、その与えられた知恵に従って、あなたがたに書き送ったとおりです。その中で、ほかのすべての手紙でもそうなのですが、このことについて語っています。その手紙の中には理解しにくいところもあります。無知な、心の定まらない人たちは、聖書の他の箇所の場合もそうするのですが、それらの手紙を曲解し、自分自身に滅びを招いています」

- ②それゆえ、罪に関する予備知識を持っておく必要がある。

### 2. 3 種類の罪

#### (1) 個人的罪（複数形の罪）：これまでに論じて来た罪

- ①日常生活で経験する、神の性質に反した行為や思いをすべて含む。

#### (2) 罪の性質（単数形の罪）

- ①いわゆる「原罪」のことである。
- ②個人的罪を犯すのは、人には「罪の性質（原罪）」があるから。
  - \*現代のユダヤ教では、人は罪を犯すから罪人であると教える。
  - \*新約聖書は、人は罪人だから罪を犯すと教える。

#### (3) 転嫁された罪

- ①全人類は、アダムの罪に参加したとみなされる。

### 2. メッセージのアウトライン

- (1) アダムの行い（12～14 節）
- (2) キリストの行い（15～17 節）
- (3) 適用（18～21 節）

### 3. メッセージのゴール

- (1) 歴史的事実の確認
- (2) 3 種類の罪の確認

このメッセージは、義認の真理を適用しようとするものである。

#### I. アダムの行い（12～14 節）

##### 1. 12 節

「そういうわけで、ちょうどひとりの人によって罪が世界に入り、罪によって死が入り、こうして死が全人類に広がったのと同様に、——それというのも全人類が罪を犯したからです」

##### (1) 「そういうわけで」

- ①これまでに述べた「義認の結果」が正しいなら、次のことが言える、という意。

##### (2) 「ひとりの人」とはアダム（14 節）である。

- ①アダムは固有名詞である。
- ②と同時に、普通名詞でもある。「人」を指す。

##### (3) アダムは人類の代表である。

- ①アダムによって罪が世界に入った。

\*最初に罪を犯したのはエバであるが、エバについては触れられていない。

- ②罪によって肉体的死が入った。それが全人類に及んだ。

\*肉体的死は、アダムの罪の結果である。

\*私たちは、個人的罪のためではなく、アダムの罪に参加していたので死ぬ。

\*赤子でも死ぬのは、そのためである。

\*これが転嫁された罪である。

- ③ピレ 18～19

「彼があなたに何か損害を与えたり、負債を負ったりしていたら、それはわたしの借りにしておいてください」

\*「エロゲオウ」というギリシア語である。

\*13 節の「認められないものです」という動詞も同じ言葉である。

\*オネシモの罪をパウロが負う。



## 2. 13～14 節

「というのは、律法が与えられるまでの時期にも罪は世にあったからです。しかし罪は、何かの律法がなければ、認められないものです。ところが死は、アダムからモーセまでの間も、アダムの違反と同じようには罪を犯さなかった人々をさえ支配しました。アダムはきたるべき方のひな型です」

(1) モーセの律法が与えられる前の時代、アダムからモーセまでの人たちも死んだ。

①死は、モーセの律法に対する違反の結果ではないことが分かる。

(2) 人はアダムの罪に参加したので死ぬ。

①人は、キリストを信じないから地獄に行くのではない。

②人は、アダムにあって罪を犯したので、死を通過し、地獄に行くのである。

(3) アダムは、「きたるべき方」のひな型である。

①「きたるべき方」とは、キリストのこと。

②ひな型とは、予表のこと。「前もって表す者」（新共同訳）

③キリストは、「最後のアダム」である（1 コリ 15：45）。

## II. キリストの行い（15～17 節）

### 1. 15～16 節

「ただし、恵みには違反の場合とは違う点があります。もしひとりの違反によって多くの人が死んだとすれば、それにもまして、神の恵みとひとりの人イエス・キリストの恵みによる賜物とは、多くの人々に満ちあふれるのです。また、賜物には、罪を犯したひとりによる場合と違った点があります。さばきの場合、一つの違反のために罪に定められたのですが、恵みの場合は、多くの違反が義と認められるからです」

(1) 恵みと違反の対比

①アダムの違反によって、多くの人が死んだ。

②キリストの従順によって、多くの人が恵みを受けた。

(2) 「それにもまして」とは、質的素晴らしさを意味している。

①恵みを受けるのは、キリストを信じた人だけである。

### 2. 17 節

「もしひとりの違反により、ひとりによって死が支配するようになったとすれば、なおさ

らのこと、恵みと義の賜物とを豊かに受けている人々は、ひとりのイエス・キリストにより、いのちにあって支配するのです」

- (1) アダムの変反によって、死が王（支配者）となった。
- (2) 信者は、キリストにあって王となった。

### Ⅲ. 適用（18～21 節）

#### 1. 18～19 節（結論）

「こういうわけで、ちょうどひとりの変反によってすべての人が罪に定められたのと同様に、ひとりの義の行為によってすべての人が義と認められ、いのちを与えられるのです。すなわち、ちょうどひとりの人の不従順によって多くの人が罪人とされたのと同様に、ひとりの従順によって多くの人が義人とされるのです」

- (1) ひとりの変反によって、すべての人が罪に定められた。
  - ①エデンの園でのアダムの変反
  - ②ひとりの人の不従順
- (2) ひとりの義の行為によって、すべての人が義と認められ、いのちを与えられる。
  - ①キリストの十字架の死
  - ②ひとりの従順
  - ③義認は、信じる人にだけ与えられる。

#### 2. 20 節

「律法が入って来たのは、変反が増し加わるためです。しかし、罪の増し加わるころには、恵みも満ちあふれました」

- (1) 律法が入って来る前から、罪はあった。
- (2) 律法の目的
  - ①罪を示すため
  - ②より罪を犯させるため
    - \*7 章のテーマになる。
  - ③恵みを満ち溢れさせるため

#### 3. 21 節

「それは、罪が死によって支配したように、恵みが、私たちの主イエス・キリストにより、

義の賜物によって支配し、永遠のいのちを得させるためなのです」

- (1) アダムのは、死を世にもたらした。
- (2) キリストは、義の行為によって、義と永遠のいのちを世にもたらした。
  - ①これは、恵みの支配である。
  - ②「では、恵みが増し加わるために、罪の中にとどまるべきか」  
\*ここでは、習慣的罪のことを言っている。
  - ③6：1 から、聖化のテーマに入っていく。

結論：

#### 1. 歴史的事実の確認

- (1) パウロは、エデンの園での出来事を歴史的事実として理解している。
- (2) キリストもまた、アダムとエバを歴史的人物として語っている。
  - ①マタ 19：4～6 結婚の箇所
  - ②マコ 10：6～9 同様
- (3) もしアダムが歴史上の人物でないなら、救いの教理は崩壊する。

#### 2. 3 種類の罪

##### (1) 個人的罪（複数形の罪）

- ①日常生活で経験する、神の性質に反した行為や思いをすべて含む。
- ②認罪の過程では、この罪が最も認識されやすい。
- ③この罪に対する解決策
  - \*赦し。イエスをメシアと信じた人は、罪が取り除かれる。
  - \*イエスにその罪が転嫁される。
  - \*義認。その人は、義と宣告される。
  - \*イエスの義がその人に転嫁される。
- ④ここまで論じて来たのは、個人的罪の解決であった。

##### (2) 罪の性質（単数形の罪）

- ①いわゆる「原罪」のことである。
- ②個人的罪を犯すのは、人には「罪の性質（原罪）」があるから。
- ③アダム以降の全人類が「罪の性質」を持っている。

- \* アダムとエバから引き継がれた罪である。
- \* すべての個人的罪の原因になっている罪である。
- \* 原罪は、最初に創造された時点での人の必然的な性質ではない。
- \* イエスは、原罪を持たず、個人的罪とも無関係であった。

#### ④ 原罪の継承

- \* 各人がアダムから直接原罪を受け継ぐわけではない。
- \* 両親が仲介役となって、原罪が継承されて行く。
- \* 詩 51：5  
「ああ、私は咎ある者として生まれ、罪ある者として母は私をみごもりまし  
た」
- \* エペ 2：3  
「私たちもみな、かつては不従順の子らの中にあって、自分の肉の欲の中に  
生き、肉と心の望むままを行い、ほかの人たちと同じように、生まれながら  
御怒りを受けるべき子らでした」

#### ⑤ 原罪の解決法（霊的人生への道）

- \* 新生
- \* 贖い
- \* 聖霊の内住

### (3) 転嫁された罪

- ① 全人類は、アダムの罪に参加したとみなされる。
  - \* 全人類が、アダムと同じ罪責を負っている。
  - \* この罪は、原罪とは区別される概念である。
- ② アダムは全人類の代理人として行動したので、その影響はすべての人に及ぶ。
  - \* 「アダムにあって」、私たちも行動したとみなされる。
  - \* I コリ 15：22  
「すなわち、アダムにあってすべての人が死んでいるように、キリストによ  
ってすべての人が生かされるからです」
  - \* 人は、個人的罪だけでなく、アダムの罪のためにも、有罪なのである。
- ③ 原罪の継承と、転嫁された罪との違い
  - \* 原罪は、仲介者（両親）を通して継承されてきた。
  - \* 転嫁された罪は、アダムから各個人に直接伝達される。
- ④ 転嫁された罪の解決法
  - \* 「メシアの義の転嫁」が解決法である。

## 「聖化の土台—キリストとの一体化」

### 1. はじめに

(1) ここから「聖化」についての議論に入る（6：1～8：17）。

(2) 聖書が教える「救い」に関する復習：3 種類の説明法

#### 第 1 の説明法

- ①義認：罪責からの解放
- ②聖化：罪の力からの解放
- ③栄化：救いの完成。聖化の完成。

#### 第 2 の説明法

- ①義認：過去形の救い。一度限りの出来事。
- ②聖化：現在進行形の救い。
- ③栄化：未来形の救い。

#### 第 3 の説明法

- ①義認：神の義の転嫁
- ②聖化：神の義の賦与
- ③栄化：義なる神との一致

(3) 学びの重要性（福音派の教会には、往々にして学びの軽視が見られる）

- ①神学校に行くと、信仰がなくなる。  
（どういう内容の学びをするかが問題である）
- ②自分は、聖書以外は読まない。  
（過去の学びの成果を否定する態度である）
- ③学びよりも、愛の実践が重要である。  
（不可能なことを命じる結果になる）
- ④日本の教会に最も必要なことは、基本的教理の学びと実践である。

### 2. メッセージのアウトライン

- (1) 予想される質問（1 節）
- (2) 回答：神学的議論（2～11 節）
- (3) 真理の適用（12～14 節）

### 3. メッセージのゴール

- (1) 他のパウロ書簡との比較（3つの聖句を選ぶ）
- (2) 聖化の教理の大枠の理解

このメッセージは、聖化の土台について学ぼうとするものである。

## I. 予想される質問（1 節）

### 1. 1 節

「それでは、どういうことになりますか。恵みが増し加わるために、私たちは罪の中にとどまるべきでしょうか」

- (1) 「それでは、どういうことになりますか」

- ①義認の議論から聖化の議論に移ったことを示す。
- ②読者の注意を喚起する。

- (2) 「恵みが増し加わるために、私たちは罪の中にとどまるべきでしょうか」

- ①「Shall we continue in sin that grace may abound?」（NKJV）
- ②ここでの動詞は、現在形である。
- ③罪の中にとどまるとは、習慣的に罪を犯し続けること。

### 2. その質問が予想される理由は、ロマ 5：20 にある。

「律法が入って来たのは、違反が増し加わるためです。しかし、罪の増し加わるころには、恵みも満ちあふれました」

- (1) 罪が増せば、恵みも増す。

- ①パウロは、義認は信仰により、恵みによると説いた。
- ②「福音の 3 要素 + 0」で人は救われる。
- ③一度救われた人が、救いを失うことはない。

- (2) ならば、罪にとどまり続ける方が、恵みが増すのではないかという質問が出る。

- ①自分のしたいことをし続ければよいではないか、という疑問。
- ②恵みによる救いを説けば、昔も今も、必ずこの質問が出てくる。
- （例話）私が数年前に受け取ったある手紙。無条件の救いを否定する内容。

- (3) パウロは、「罪が増せば、恵みも増す」という真理は否定していない。

- ①彼が否定しているのは、恵みを放縱な生き方をする口実にすること。

## Ⅱ. 回答：神学的議論（2～11 節）

### 1. 2 節

「絶対にそんなことはありません。罪に対して死んだ私たちが、どうして、なおもその中に生きていられるでしょう」

(1) 「絶対にそんなことはありません」

- ①最も強い否定形（メイ・ゲノイト）
- ②ロマ 3：4、6、31 にすでに出て来た。

(2) 私たちはすでに死んだのだ。

- ①罪に対して死んだ。
- ②死んだ者は、棺桶を空けて動き出すことはない。この世の事項には反応しない。
- ③それと同じように、死んだ人は罪の影響を受けることはない。
- ④私たちが死んだと言える理由は、キリストとの一体化があるから。

### 2. 3～4 節

「それとも、あなたがたは知らないのですか。キリスト・イエスにつくバプテスマを受けた私たちはみな、その死にあずかるバプテスマを受けたではありませんか。私たちは、キリストの死にあずかるバプテスマによって、キリストとともに葬られたのです。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたように、私たちも、いのちにあつて新しい歩みをするためです」

(1) 「それとも、あなたがたは知らないのですか」

- ①もちろん、知っているはずだ。
- ②教理的にも、体験的にも。

(2) 「イエスにつくバプテスマ」

- ①信じた時に受けた聖霊のバプテスマ
- ②バプテスマの基本的意味は、一体化である。
- ③聖霊のバプテスマによって、私たちはキリストと一体化させられた。

(3) キリストに起こったことは、私たちにも起こった。

- ①キリストは、十字架について死んだ。私たちも死んだ。
- ②キリストは、墓に葬られた。私たちも葬られた。
- ③キリストは、復活した。私たちも復活した。

\* 私たちには新しい命があり、新しい歩みがある。

### 3. 5～7 節

「もし私たちが、キリストにつき合わされて、キリストの死と同じようになっているのなら、必ずキリストの復活とも同じようになるからです。私たちの古い人がキリストとともに十字架につけられたのは、罪のからだが減びて、私たちがもはやこれからは罪の奴隷でなくなるためであることを、私たちは知っています。死んでしまった者は、罪から解放されているのです」

#### (1) 「私たちの古い人」

- ① 古い罪の性質
- ② アダムにつながっていた時の私たち
- ③ 古い罪の性質を宿していた私たちは、死んだ。

#### (2) 「死んでしまった者は、罪から解放されているのです」

- ① 死んだ古い性質は、私たちの上に支配権を振う権利がなくなった。
- ② 信者でも罪の誘惑を感じることもある。
- ③ しかし、罪の性質は私たちに罪を犯せと要求する権利はない。
- ④ 未信者の時は、いかなる善行を行っても、罪の支配下にあった。
- ⑤ 信者は、罪を犯すことがあるかもしれないが、犯す必要はない。

(例話) DV のために、必死になって離婚を勝ち取った女性が元の夫に出会った時

### 4. 8～10 節

「もし私たちがキリストとともに死んだのであれば、キリストとともに生きることにもなる、と信じます。キリストは死者の中からよみがえって、もはや死ぬことはなく、死はもはやキリストを支配しないことを、私たちは知っています。なぜなら、キリストが死なれたのは、ただ一度罪に対して死なれたのであり、キリストが生きておられるのは、神に対して生きておられるのだからです」

#### (1) キリストとともに死んだ私たちは、キリストとともに生きることになる。

#### (2) キリストの死

- ① 「ただ一度罪に対して死なれた」
- ② 「神に対して生きておられる」

#### (3) 私たちの死（キリストと一体化）

- ① 義認は一度かぎり。



②その後のクリスチャン生活は、継続したもの。

＊聖化の過程のこと

#### 5. 11 節

「このように、あなたがたも、自分は罪に対しては死んだ者であり、神に対してはキリスト・イエスにあって生きた者だと、思いなさい」

(1) 「思いなさい」

①ロギゾマイというギリシア語

②基本的な意味は、算数の用語。よく計算して、答えを出しなさい。

③感情ではなく、知的理解である。

④口語訳では、「認むべきである」。新共同訳では、「考えなさい」。

⑤現在形の命令形。つまり、認め続けるべきという意味。

(2) これまでの議論

①私たちはキリストとの一体化によって、罪に対して死んだ。

②罪の性質はまだ内に残っているが、それは私に対する法的権利を失った。

③以上のことを、真実だと認め続けよ。

### Ⅲ. 真理の適用（12～13 節）

#### 1. 12 節

「ですから、あなたがたの死ぬべきからだを罪の支配にゆだねて、その情欲に従ってはいけません」

(1) 新共同訳

「従って、あなたがたの死ぬべき体を罪に支配させて、体の欲望に従うようなことがあってはなりません」

①「支配させて」は、現在形。つまり、継続した行為や状態。

#### 2. 13 節

「また、あなたがたの手足を不義の器として罪にささげてはいけません。むしろ、死者の中から生かされた者として、あなたがた自身とその手足を義の器として神にささげなさい。というのは、罪はあなたがたを支配することがないからです。なぜなら、あなたがたは律法の下ではなく、恵みの下にあるからです」

(1) 「罪にささげてはいけません」

- ①現在形。継続した動作や状態。
- ②私たちの手足は、不義の器となりうる。

(2) 「神にささげなさい」

- ①同じ動詞（パリステイミ）であるが、アオリストである。
- ②一度限りの、決定的決断のこと。
- ③私たちの手足は、義の器となりうる。

(3) 「というのは、罪はあなたがたを支配することがないからです。なぜなら、あなたがたは律法の下にはなく、恵みの下にあるからです」

- ①この原理は、7 章、8 章で詳細に解説される。

結論：

1. 他のパウロ書簡との比較（3つの聖句を選ぶ）

(1) 1 コリ 12：13

「なぜなら、私たちはみな、ユダヤ人もギリシヤ人も、奴隷も自由人も、一つのからだとなるように、一つの御霊によってバプテスマを受け、そしてすべての者が一つの御霊を飲む者とされたからです」

(2) ガラ 2：20

「私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が肉にあって生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです」

(3) 2 コリ 5：17

「だれでもキリストのうちにあらば、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。」

2. 聖化の教理の大枠の理解

- (1) 6 章 聖化の土台：キリストとの一体化
- (2) 7 章 人間的な努力では聖化は不可能である。
- (3) 8 章 聖霊によって聖化は可能になる。
- (例話) 囚人と自由（ロバート・サルツマンの体験）

## 「義の奴隷」

### 1. はじめに

(1) 「義認」を終えて、「聖化」に入った（6：1～8：17）。

(2) 聖書が教える「救い」の全体像

①義認：過去形の救い。一度限りの出来事。

②聖化：現在進行形の救い。

③栄化：未来形の救い。

(3) 前回の内容：「聖化の土台：キリストとの一体化」

①質問「恵みが増し加わるために、罪の中にとどまるべきか」

②回答：私たちは罪に対して死んだ。

キリストに起こったことは私たちに起こった。

私たちは、キリストとともに死に、葬られ、復活した。

### 2. メッセージのアウトライン

(1) 第2の質問（15 節）

(2) 回答：奴隷の例話（16～22 節）

(3) まとめ（23 節）

### 3. メッセージのゴール

(1) 無律法主義（Antinomianism）

(2) 聖化の速度

このメッセージは、聖化の原理について学ぼうとするものである。

## I. 予想される第2の質問（15 節）

### 1. 15 節

「それではどうなのでしょう。私たちは、律法の下にではなく、恵みの下にあるのだから罪を犯そう、ということになるのでしょうか」

(1) 1 節との比較

「それでは、どういうことになりますか。恵みが増し加わるために、私たちは罪の中

にとどまるべきでしょうか」

①ともに修辭的質問である。

②動詞の時制が異なる。

\*1 節は、現在形。継続した動作。つまり、習慣的に罪を犯し続けること。

\*15 節は、アオリスト形。時々罪を犯すこと。

(2) この質問の背景にある論理

①律法の下にいれば裁きが恐ろしい。

②今は恵みによって赦されるのだから、時々罪を犯してもよいではないか。

(3) パウロの論理

①「罪が増せば、恵みも増す」という真理は否定していない。

②「信者は律法の下ではなく、恵みの下にいる」という真理も否定していない。

③彼が否定しているのは、恵みを放縱な生き方をする口実にすること。

2. 「絶対にそんなことはありません」

(1) 最も強い否定形（メイ・ゲノイト）

①ロマ 3：4、6、31、6：2 にすでに出て来た。

(2) パウロは、第 1 の質問も、第 2 の質問も、強く否定する。

## II. 回答：例話（16～22 節）

1. 19 節

「あなたがたにある肉の弱さのために、私は人間的な言い方をしています」

(1) 肉の弱さとは、靈的理解力が欠如していること。

①本来なら、靈的話題だけを取り上げて説明すべきところである。

②ローマのクリスチャンたちは、まだ靈的に成熟していない。

(2) 人間的な言い方をするとは、例話を用いるということである。

①例話は、当然、聞き手が熟知しているものでなければならない。

②聖書から実例を引用して例話とすることの当否。

③2 列 18：4

「彼は高き所を取り除き、石の柱を打ちこわし、アシェラ像を切り倒し、モーセ

の作った青銅の蛇を打ち碎いた。そのころまでイスラエル人は、これに香をたいていたからである。これはネフシュタンと呼ばれていた」

(3) パウロが用いている例話は、奴隷と主人の関係である。

①今の私たちには、分かりにくい。

②ローマ時代の人たちには常識である。

＊当時の都市生活者の多くが、借金のために自分を奴隷に売った。

＊これは、意志に反して奴隷になっている人である。

＊自発的に奴隷になっている人もいる。

＊ともに、主人には絶対服従である。

＊ただし、この時代の奴隷は、アメリカ南部での奴隷のようにではない。

＊コリントの町の人口の 3 分の 1 が奴隷であったと言われている。

③今の時代の人に分かるように、私は「DV 状況にある夫婦関係」を例話とした。

## 2. 16 節

「あなたがたはこのことを知らないのですか。あなたがたが自分の身をささげて奴隷として服従すれば、その服従する相手の奴隷であって、あるいは罪の奴隷となって死に至り、あるいは従順の奴隷となって義に至るのです」

(1) 「あなたがたはこのことを知らないのですか」

①当然知っているはずだ。

(2) 人間には、完全な自立はあり得ない。

①未信者は、クリスチャンになると不自由になると誤解している。

②人間は、誰か（何か）に仕える必要がある。

③イエスの教え。マタ 6：24

「だれも、ふたりの主人に仕えることはできません。一方を憎んで他方を愛したり、一方を重んじて他方を軽んじたりするからです。あなたがたは、神にも仕え、また富にも仕えるということはできません」

④ヨシ 24：15

「もしも【主】に仕えることがあなたがたの気に入らないなら、川の向こうにいたあなたがたの先祖たちが仕えた神々でも、今あなたがたが住んでいる地のエモリ人の神々でも、あなたがたが仕えようと思うものを、どれでも、きょう選ぶがよい。私と私の家とは、【主】に仕える」

(3) 主人は 2 人いる。

- ①罪という主人の奴隷となるなら、死に至る。
  - \*これは不従順の道である。
  - \*「死」とは、神からの分離（霊的死）のことである。
- ②キリストという主人の奴隷になるなら、義に至る。
  - \*これは従順の道である。
  - \*「義」とは、永遠のいのちである。
- ③主人を変えると、劇的な変化が起こる。

### 3. 17～18 節

「神に感謝すべきことには、あなたがたは、もとは罪の奴隷でしたが、伝えられた教えの規準に心から服従し、罪から解放されて、義の奴隷となったのです」

#### (1) 私たちが置かれている状態の説明

- ①かつての姿：罪の奴隷
- ②今の姿：自発的に義の奴隷になった。
  - \*この状態を日々実践する。

#### (2) 今の状態は、「伝えられた教えの規準に心から服従し」たから与えられた。

- ①「伝えられた教えの規範を受け入れ」（新共同訳）
- ②「伝えられた教の基準に心から服従して」（口語訳）

#### (3) 訳語の問題

- ①「教えの規準」が私たちに伝えられた（委ねられた）のではない。
- ②私たちが、「教えの規準」に委ねられたのである。主客が転倒してはならない。
- ③神のことは永遠に変わらず、私たちを救う力がある。

#### (4) 「規準」という言葉について

- ①「教え」とは、福音のことであり、キリストとの一体化のことである。
- ②「規準」とは、ギリシア語で「トゥポス」という。

#### (5) 「トゥポス」の使用例

- ①ヨハ 20：25（衝撃を受けた痕跡）

「それで、ほかの弟子たちが彼に『私たちは主を見た』と言った。しかし、トマスは彼らに『私は、その手に釘の跡を見、私の指を釘のところに差し入れ、また私の手をそのわきに差し入れてみなければ、決して信じません』と言った」
- ②使 7：43（偶像。型に入れて作られた物）

「あなたがたは、モロクの幕屋とロンパの神の星をかついでいた。それらは、あなたがたが拝むために作った偶像ではないか。それゆえ、わたしは、あなたがたをバビロンのかなたへ移す」

③使 7：44（神から示された型）

「私たちの父祖たちのためには、荒野にあかしの幕屋がありました。それは、見たとおりの形に造れとモーセに言われた方の命令どおりに、造られていました」

\*ヘブ 8：5 参照

④使 23：25（文章の要約）

「そして、次のような文面の手紙を書いた」

⑤ロマ 5：14（予表。予型）

「ところが死は、アダムからモーセまでの間も、アダムの違反と同じようには罪を犯さなかった人々をさえ支配しました。アダムはきたるべき方のひな型です」

⑥ピリ 3：17（手本。模範）

「兄弟たち。私を見ならう者になってください。また、あなたがたと同じように私たちを手本として歩んでいる人たちに、目を留めてください」

\*1 テサ 1：7、2 テサ 3：9、1 テモ 4：12、テト 2：7、1 ペテ 5：3 など参照

(4) 私たちが受け入れた教えには力がある。

①福音の 3 要素

②キリストとの一体化

\*キリストにあつて死に、葬られ、キリストにあつて生かされている。

③この教えの本質

\*神からの型であり、模範である。

\*私たちの人格に衝撃を与え、私たちをキリストに似た者に変える力である。

4. 19～22 節

「あなたがたにある肉の弱さのために、私は人間的な言い方をしています。あなたがたは、以前は自分の手足を汚れと不法の奴隷としてささげて、不法に進みましたが、今は、その手足を義の奴隷としてささげて、聖潔に進みなさい。罪の奴隷であつた時は、あなたがたは義については、自由にふるまっていました。その当時、今ではあなたがたが恥じているそのようなものから、何か良い実を得たでしょうか。それらのものの行き着く所は死です。しかし今は、罪から解放されて神の奴隷となり、聖潔に至る実を得たのです。その行き着く所は永遠のいのちです」

(1) 以前：罪の奴隷として自分の手足を汚れにささげていた。

①それ以外の選択肢はなかった。

- ②その結果、今では恥じているようなことをしてきた。
- ③終着点は、死である（霊的死）。

(2) 今：自発的に義の奴隷（神の奴隷）となり、聖潔に進むべきである。

- ①罪から自由になったという前提がある。
- ②聖潔に至る実を得た。
- ③終着点は、永遠のいのちである。

### III. まとめ (23 節)

#### 1. 23 節

「罪から来る報酬は死です。しかし、神の下さる賜物は、私たちの主キリスト・イエスにある永遠のいのちです」

(1) かつての私たちは、罪の奴隷であった。

- ①罪が主人である。
- ②主人から報酬が来る。それが死である。
- ③当然の報いである。
- ④ギリシア語で「オプソウニオン」である。
- ⑤将軍が兵士に支払う給与である。
- ⑥毎日支払われる。

(2) 今の私たちは、キリストの内にある。

- ①キリストが主人である。
- ②主人から賜物が与えられる。それが永遠のいのちである。
- ③賜物は、報酬ではない。
- ④ギリシア語で「カリスマ」である。

(3) 以上のことが、神が創造した世界にある霊的法則である。

#### 結論：

##### 1. 無律法主義 (Antinomianism)

(1) パウロに対する非難（ガラ 5：13）

「兄弟たち。あなたがたは、自由を与えられるために召されたのです。ただ、その自



由を肉の働く機会としないで、愛をもって互いに仕えなさい」

(2) ペテロに対する非難（1 ペテ 2：16）

「あなたがたは自由人として行動しなさい。その自由を、悪の口実に用いないで、神の奴隷として用いなさい」

(3) ユダに対する非難（ユダ 4）

「というのは、ある人々が、ひそかに忍び込んで来たからです。彼らは、このようなさばきに会うと昔から前もってしるされている人々で、不敬虔な者であり、私たちの神の恵みを放縱に変えて、私たちの唯一の支配者であり主であるイエス・キリストを否定する人たちです」

## 2. 聖化の速度

(1) クリスチャンの祝福

- ①一度キリストを信じたなら、救いを失うことはない。
- ②永遠のいのちが保障されている。
- ③聖化の完成も保障されている。

(2) 聖化の速度が各人によって異なる。

- ①クリスチャンになっても、罪を犯すことはありうるが、それは必然ではない。
- ②日々、キリストの奴隷としての選びをしている人は、聖化の速度が速い。
- ③不従順な人は、神からの矯正的裁きを受ける。

(3) 努力によって聖化の速度を速めようとする、失敗する（7章の内容）。

(4) 聖化は、聖霊の働きによって可能となる（8章の内容）。

## 「律法からの解放（1）―結婚の例話―」

### 1. はじめに

(1) 「聖化」について 2 度学んだ。

① 質問「恵みが増し加わるために、罪の中にとどまるべきか」

\* 回答：私たちは罪に対して死んだ。

② 質問「律法の下ではなく、恵みの下にあるのだから罪を犯そう、ということになるのか」

\* 回答：私たちは、キリストとともに死に、葬られ、復活した。

(2) クリスマンにとっての最大の悲劇

① 律法が示す倫理的・道徳的規準に従って生きていくことが、クリスマン生活だと考えること。

② 多くのクリスマンがそう考え、多くの未信者もそう考えている。

③ この理解は、クリスマン生活を律法主義的生活に追い込む。

\* こういうクリスマンは、自らを偽善者として責めながら生きている。

\* あるいは、苦しいので、信仰生活が停止した状態になる。

④ これは、聖書が教える救いを誤解しているところから来ている。

\* 義認は、信仰により、恵みによる。

\* 聖化は、律法を实践する努力による。

④ 聖書が教える救いの正しい理解とは：

\* 義認（過去形の救い）は、信仰により、恵みによる。

\* 聖化（現在進行形の救い）もまた、信仰により、恵みによる。

\* 栄化（未来形の救い）もまた、信仰により、恵みによる。

(3) ロマ 7：1～6 は、ロマ 6：14 の解説になっている。

「というのは、罪はあなたがたを支配することがないからです。なぜなら、あなたがたは律法の下ではなく、恵みの下にあるからです」

① 罪が私たちを支配することがないとは、どういう意味か。

② 私たちが律法の下ではなく、恵みの下にあるとは、どういう意味か。

### 2. メッセージのアウトライン

(1) 律法に関する原則（1 節）

(2) 結婚関係の例話（2～3 節）

(3) 例話の適用（4～6 節）

### 3. メッセージのゴール

- (1) 救いの原理の復習
- (2) キリストとの一体化の復習

このメッセージは、聖化の原理について学ぼうとするものである。

## I. 律法に関する原則（1 節）

### 1. 1 節

「それとも、兄弟たち。あなたがたは、律法が人に対して権限を持つのは、その人の生きている期間だけだ、ということを知らないのですか——私は律法を知っている人々に言っているのです。——」

- (1) パウロは、ロマ 3 章～4 章で、義認と律法の関係について論じた。

- ①律法によっては、義とされない。
- ②義認は、信仰により、恵みによる。

- (2) そこまでは認めても、聖化の過程では、律法に従う必要があると考える人がいた。

- ①教会史を通して、そう考える人が絶えることはなかった。
- ②冒頭で述べたように、これがクリスチャンにとっての最大の悲劇である。
- ③救いは、義認、聖化、栄化から成っていることを忘れてはならない。

- (3) この節でパウロは、読者の注意を喚起し、律法に関する原則を述べている。

### 2. 「律法」という言葉について

- (1) ここでは、定冠詞がない「ノモス」である。

- ①単に、モーセの律法ではない。
- ②学者の中には、ローマ法と考える人もいる。
- ③一般的な概念の「律法（法律）」と考えるのが一番いいと思う。

＊つまり、モーセの律法、ローマ法、その他の法を、すべて含む概念である。

- (2) 「私は律法を知っている人々に言っているのです」

- ①ローマ教会の信徒たち（ユダヤ人も異邦人もいた）
- ②必ずしも法律の専門家ではない。

③常識的に、法律の効力を理解している人々のことである。

### 3. 律法の大原則

「あなたがたは、律法が人に対して権限を持つのは、その人の生きている期間だけだ、ということを知らないのですか」

#### (1) 修辭的質問

①知っているはずだ、という意味になる。

#### (2) 大原則

①律法は、人に対して権限を持つ。

②律法は、死んだ人には権限を持たない。

## II. 結婚関係の例話（2～3 節）

### 1. ロマ 6：19

「あなたがたにある肉の弱さのために、私は人間的な言い方をしています」

(1) 肉の弱さとは、靈的理解力が欠如していること。

①本来なら、靈的話題だけを取り上げて説明すべきところである。

②ローマのクリスチャンたちは、まだ靈的に成熟していない。

③そこでパウロは、奴隸と主人の関係を例話として語った。

(2) ここでは、結婚関係の例話が出てくる。

①これもまた、当時の人たちに理解されやすい例話である。

### 2. 2 節

「夫のある女は、夫が生きている間は、律法によって夫に結ばれています。しかし、夫が死ねば、夫に関する律法から解放されます」

(1) 「夫のある女」

①「結婚した女」（新共同訳）

②ギリシア語は「ヒュパンドロス」

\* 「under the power of a man」 「subordinated to a man」

\* 「男の權威の下にある女」

\* 民 5：20、29 参照（LXX 訳では同じ言葉が使われている）

(2) 「夫が活着ている間は、律法によって夫に結ばれています」

- ①モーセの律法では、女性から離婚を申し出る権利はなかった。
- ②夫だけに離婚の権利があった。
- ③これは、ユダヤ教でも、現代のイスラエル法でも、同じである。
- ④マタ 19：8

「イエスは彼らに言われた。『モーセは、あなたがたの心がたくななので、その妻を離別することをあなたがたに許したのです。しかし、初めからそうだったのではありません』」

＊申 24：1～4

＊この規定は、積極的な勧めではなく、消極的な許可である。

(3) 「しかし、夫が死ねば、夫に関する律法から解放されます」

- ①律法の原則から、そう言える。
- ②律法は、死人に適用されない。

### 3. 3 節

「ですから、夫が活着ている間に他の男に行けば、姦淫の女と呼ばれるのですが、夫が死ねば、律法から解放されており、たとい他の男に行っても、姦淫の女ではありません」

(1) 夫が活着ている間は、結婚の律法によって制約されている。

- ①それを破れば、姦淫の女と呼ばれる。

(2) 夫が死ねば、結婚の律法から解放される。

- ①再婚しても、姦淫の女ではない。

## III. 例話の適用（4～6 節）

### 1. 4 節

「私の兄弟たちよ。それと同じように、あなたがたも、キリストのからだによって、律法に対しては死んでいるのです。それは、あなたがたが他の人、すなわち死者の中からよみがえった方と結ばれて、神のために実を結ぶようになるためです」

(1) 結婚の例話と信者の状態の対比

- ①妻は、信者である。
- ②元の夫は、律法、あるいは罪の性質、である。
- ③新しい夫は、キリストである。

(2) 例話の限界

- ①結婚の例話では、死んだのは夫である。
- ②信者の状態では、死んだのは妻（信者自身）である。
- ③この対比のポイントは、「死んだ者には律法は無力である」という点である。

(3) 「律法に対しては死んでいる」

- ①動詞は、受動態、アオリストである。
- ②「you also were made to die to Law」(NASB)
- ③私たちは死んだのは、神の業によるのであり、一度限りのことである。

(4) 「それは、あなたがたが他の人、すなわち死者の中からよみがえった方と結ばれて、神のために実を結ぶようになるためです」

- ①他の人とは、キリストのことである。
- ②キリストは、死者の中からよみがえった方である。
- ③律法に死に、キリストと結ばれることが、実を結ぶための前提条件である。

＊神のために実を結ぶとは、新しい結婚関係から生まれてくる祝福である。

(5) 福音の 3 要素に別の何かをプラスしたものを信じて、人は救われない。

- ①恵みに人間の業をプラスしていることになる。

2. 5 節

「私たちが肉にあったときは、律法による数々の罪の欲情が私たちのからだの中に働いていて、死のために実を結びました」

(1) 救われる前の状態

- ①私たちは、律法と罪と死の支配下にあった。

(2) 「私たちのからだ」

- ①「わたしたちの肢体」（口語訳）
- ②「五体」（新共同訳）
- ③「members」
- ④罪を犯すということは、抽象的な概念ではなく、肢体の行為である。
- ⑤その肢体を動かしているのは、主人（律法と罪と死）である。

3. 6 節

「しかし、今は、私たちは自分を捕らえていた律法に対して死んだので、それから解放され、その結果、古い文字にはよらず、新しい御霊によって仕えているのです」

(1) 救われてからの状態

- ①「律法に対して死んだ」
- ②新しい御霊（聖霊）によって生きている。

(2) もし今、律法による聖化を求めるなら、どういうことになるのか。

- ①死んだ夫との関係が復活する。
- ②律法が働き始めるので、罪の性質が活発化する。

(3) では、律法は悪いものなのか。その回答は、次回学ぶ。

## 結論：

### 1. 救いの原理の復習

(1) 人間の業による救い

- ①律法が土台になっている。
- ②当然、罪の性質が活発に動き出す。
- ③これは、義認にも聖化にも言えることである。

(2) 信仰による救い

- ①恵みが土台になっている。
- ②律法に対して死んでいる。
- ③聖霊によって、聖化が進められる。

(3) 聖書塾の永山太兄の感想

悔い改めが、「自らの罪を深く悲しむ」という意味ではなく、「心を変える」という意味であることを学び、目から鱗であった。というのも、悪人正機説「善人なおもて往生す、いわんや悪人をや」の中で、親鸞は、救われて極楽浄土に行くためには、自分の罪を悔い改める発心（ほっしん）が大事としているが、このことは、バプテスマのヨハネの「悔い改めなさい。神の国が近づいたから」と、同じで、非常に聖書的ではあるが、根本的に繋がる相手（阿弥陀如来とイエス・キリスト）が違っていると私は理解していたのです。しかし全く「悔い改め」の意味が違っていた。これはとても面白い発見でした。そもそもバプテスマのヨハネのいう「悔い改め」も「メタノエオウ」なのであれば、さらに大きな発見です。救いが、聖書の約束の確かさに基礎を置いて

いるのであるから、人間側の業の入る余地、入る必要などありません。そう考えると浄土真宗の発心も、結局は自力本願なんだと、今、気が付きました。

（私の応答：この発見は、すごいですね。私も「なるほど」と頷きました。多くの人に伝えてください）

## 2. キリストとの一体化の復習

### (1) ロマ 6：11

「このように、あなたがたも、自分は罪に対しては死んだ者であり、神に対してはキリスト・イエスにあつて生きた者だと、思いなさい」

- ①「思いなさい」は、ロギゾマイというギリシア語
- ②基本的な意味は、算数の用語。よく計算して、答えを出しなさい。
- ③感情ではなく、知的理解である。
- ④現在形の命令形。つまり、認め続けるべきという意味。

### (2) キリストに起こったことは私にも起こった。

- ①キリストとともに死んだ。
- ②キリストとともに葬られた。
- ③キリストとともに復活した（霊的復活）。

### (3) 罪の性質はまだ内に残っているが、それは私に対する法的権利を失った。

- ①信者は罪を犯す可能性はあるが、そうする必然性はない。



## 「律法からの解放（2）―罪と律法の関係―」

### 1. はじめに

(1) 「聖化」について3度学んだ。これは4回目のメッセージ。

①最大の悲劇は、律法を行うことによって聖化を達成しようとする事。

②この理解は、クリスチャン生活を律法主義的生活に追い込む。

③聖書が教える救いの正しい理解とは：

＊義認（過去形の救い）は、信仰により、恵みによる。

＊聖化（現在進行形の救い）もまた、信仰により、恵みによる。

＊栄化（未来形の救い）もまた、信仰により、恵みによる。

(2) きょうは、罪と律法の関係について学ぶ。

①本来よいものであるはずの律法が、どうして死をもたらすのか。

(3) きょうの箇所は、パウロの体験が土台になっている。

①「私」という一人称が、9回使われている。

②自分の体験を基に、普遍的真理を述べている。

③パウロの「私」は、私の「私」でもある。

### 2. メッセージのアウトライン

(1) 律法の目的 (1) (7 節)

(2) 律法の目的 (2) (8～12 節)

(3) 律法の目的 (3) (13 節)

### 3. メッセージのゴール

(1) 律法に関する誤解

(2) 聖化に関する誤解

(3) 罪に関する誤解

このメッセージは、聖化の原理について学ぼうとするものである。

## I. 律法の目的 (1)：「私」に罪を示す。

### 1. 7 節 a

「それでは、どういうことになりますか。律法は罪なののでしょうか。絶対にそんなことはありません」

(1) 「律法は罪なのか」

- ①パウロは、前回の箇所では律法に関して否定的なことを言った。
- ②これは、論理的帰結であり、当然の疑問である。

(2) 絶対にそんなことはありません。

- ①ギリシア語の強意の否定形。メイ・ゲノイト
- ②ロマ 6：2、15
- ③問題は律法にではなく、人間の側にある。

## 2. 7 節 b

「ただ、律法によらないでは、私は罪を知ることがなかったでしょう。律法が、『むさぼってはならない』と言わなかったら、私はむさぼりを知らなかったでしょう」

(1) パウロは、自分に罪はなかったと言っているのではない。

- ①罪の性質は、アダム以来、全人類が引き継いでいる。
- ②罪の性質に従って生きていても、それが罪であるという認識はない。  
(例話) テレビのメッセージの中で、偶像礼拝を指摘した経験
- ③律法が与えられて初めて、罪の認識が起こる。

(2) 「むさぼってはならない」

①出 20：17

「あなたの隣人の家を欲しがってはならない。すなわち隣人の妻、あるいは、その男奴隷、女奴隷、牛、ろば、すべてあなたの隣人のものを、欲しがってはならない」

②申 5：21

(3) 「むさぼりを知らなかった」

- ①むさぼりが罪であることを知らなかった、という意味。
- ②知らなかったとは、体験的知識がなかったという意味。

## II. 律法の目的 (2) (8～12 節)：律法は、「私」にもっと罪を犯させる。

### 1. 8 節

「しかし、罪はこの戒めによって機会を捕らえ、私のうちにあらゆるむさぼりを引き起こしました。律法がなければ、罪は死んだものです」

(1) この聖句は、非常に重要である。

- ①「戒め」（エントレイ）は、個々の掟のこと。
- ②集合体としての「律法」（ノモス）と同じ意味で使用されている。

(2) 「機会」という言葉が、罪と律法のことをよく説明している。

- ①ギリシア語で「アフォルメイ」という。
- ②これは、軍事用語である。

＊base of operation（敵地に築く作戦基地）

＊橋頭堡（bridgehead）

＊上陸拠点（beachhead）

③律法は、罪という敵が、人間の性質に侵入する時の拠点である。

(3) 「むさぼってはならない」という戒めが与えられた。

- ①罪という敵は、その戒めを橋頭堡にして、私の内に侵入した。
- ②その結果、私はあらゆるむさぼりをするようになった。
- ③律法が命じることと正反対のことをしたくなるのが、罪の性質である。

(4) 「律法がなければ、罪は死んだものです」

- ①罪は存在する。
- ②しかし、破るものがなければ、罪は罪として認識されない。

## 2. 9 節

「私はかつて律法なしに生きていましたが、戒めが来たときに、罪が生き、私は死にました」

(1) 「律法なしに生きていた」とは、いつのことか。

- ①バール・ミツバの前のこと
- ②信者になりたての頃
  - ＊「律法とはかかわりなく、生かされていた」
  - ＊②の解釈がよい。

(2) パウロ自身の回心体験

- ①使 9 章の体験
- ②使 9：9

「彼は三日の間、目が見えず、また飲み食いもしなかった」

③救われて 3 日後に、義認は恵みによることを理解した。

④彼は「律法とはかかわりなく、生かされる」状態になった。

(2) 「戒めが来たときに、罪が生き、私は死にました」

①律法を行うことによって、聖化は可能と考えた。

②聖霊の内住があるので、律法を実行する力があると考えた。

③しかし、そう考えた途端に、罪が侵入し、私は死んだ。

④1 コリ 15：56

「死のとげは罪であり、罪の力は律法です」

「死は人を傷つける力を罪から得、罪はその力を律法から得る」（意識）

### 3. 10～12 節

「それで私には、いのちに導くはずのこの戒めが、かえって死に導くものであることが、わかりました。それは、戒めによって機会を捕らえた罪が私を欺き、戒めによって私を殺したからです。ですから、律法は聖なるものであり、戒めも聖であり、正しく、また良いものなのです」

(1) 律法はいのちに導く。

①レビ 18：5

「あなたがたは、わたしのおきてとわたしの定めを守りなさい。それを行う人は、それによって生きる。わたしは【主】である」

(2) 律法は、聖であり、正しく、良いものである。

(3) しかし、罪は律法によって機会を捕えた。

①罪は、律法によって聖化が得られるかのように、私を欺いた。

②しかし、律法を守れないので、それは死に導いた。

③分かったとは、パウロの体験的知識である。

## Ⅲ. 律法の目的 (3)：律法は、罪がいかに深いものであるかを「私」に教える (13 節)。

### 1. 13 節

「では、この良いものが、私に死をもたらしたのでしょうか。絶対にそんなことはありません。それはむしろ、罪なのです。罪は、この良いもので私に死をもたらすことによって、

罪として明らかにされ、戒めによって、極度に罪深いものとなりました」

- (1) 問題は、律法ではなく、罪にある。
- (2) 律法は、「私」の罪がいかに深いものであるかを示した。
  - ①絶望に追い込まれる。
  - ②それゆえ、神の恵みによる聖化しかないことが分かる。

#### 結論：

##### 1. 律法に関する誤解

- (1) 律法はよいものである。
- (2) 律法と、律法主義を区別する。
- (3) ユダヤ人伝道において、非常に重要な理解である。

##### 2. 聖化に関する誤解

- (1) 律法によるのではない。
- (2) 信仰により、恵みによって聖化の過程が進む。

##### 3. 罪に関する誤解

- (1) 罪は現実に存在する力である。
- (2) 人間の可能性だけを言うのが、現代の傾向である。
- (3) パウロは、ロマ 7 章で、大いなる心理学的洞察を与えている。

(例話) 精神科医と罪

カール・メニンガー (Karl Menninger、1893 - 1990)

アメリカの医学者、精神科医、精神分析家。

カンザス州トピカに医者の子として生まれる。

1925 年メニンガークリニックを創設する。

### 「律法からの解放（3）ーロマ書 7 章クリスチャンー」

#### 1. はじめに

(1) 「聖化」に関する 5 回目の学びである。

- ①最大の悲劇は、律法を行うことによって聖化を達成しようとする事。
- ②この理解は、クリスチャン生活を律法主義的生活に追い込む。

(2) 一見矛盾したように聞こえるイエスの約束

①ヨハ 10：10

「盗人が来るのは、ただ盗んだり、殺したり、滅ぼしたりするだけのためです。  
わたしが来たのは、羊がいのちを得、またそれを豊かに持つためです」

②ヨハ 16：33

「わたしがこれらのことをあなたがたに話したのは、あなたがたがわたしにあって  
平安を持つためです。あなたがたは、世にあっては患難があります。しかし、  
勇敢でありなさい。わたしはすでに世に勝ったのです」

③クリスチャン生活は、戦いの生活である。

④「聖化」の過程で、信者は「霊的戦い」に巻き込まれる。

(3) パウロの苦しみは、救われる前の体験ではなく、救われた後の体験である。

- ①この箇所の動詞は、すべて動詞が現在形である。今の状態を指している。
- ②ロマ書の文脈では、聖化を扱っている箇所である。

#### 2. アウトライン

- (1) 信者は罪の奴隷である（14～17 節）。
- (2) 信者は無力である（18～20 節）。
- (3) 信者は 2 つの性質を持っている（21～24 節）。

#### 3. メッセージのゴール

- (1) まとめ（25 節）
- (2) 聖化と霊的戦い
- (3) 聖化の過程

このメッセージは、聖化の原理について学ぼうとするものである。

## I. 信者は罪の奴隷である（14～17 節）

### 1. 14 節

「私たちは、律法が霊的なものであることを知っています。しかし、私は罪ある人間であり、売られて罪の下にある者です」

(1) これはパウロ自身の体験である。

①体験的知識がある。

(2) 律法は霊的なものである。

①聖霊によって啓示された。

②神の本質を示す。

(3) 自分は、「罪ある人間」である。

①「わたしは肉の人であり」（新共同訳）

②「わたしは肉につける者であって」（口語訳）

③ギリシア語は、サークス（サーキコス）である。

④「肉」とはアダムに属する古い性質のことである。

(4) 自分は、「売られて罪の下にある者」である。

①パウロは奴隷のたとえによって、自分の状態を説明している。

②新生した信者が、なぜこのような状態にあるのか。

③これは、律法を行うことによって聖化を達成しようとしている信者の姿である。

### 2. 15 節

「私には、自分のしていることがわかりません。私は自分がしたいと思うことをしているのではなく、自分が憎むことを行っているからです」

(1) ひとりの人間の中に、2つの性質が宿っている。

①分裂症のことではない。

②したいと思うことがある（新しい性質）。

③憎むことを行っている（古い性質）

(2) 人類は3つに分類される（1 コリ 3：1）。

「さて、兄弟たちよ。私は、あなたがたに向かって、御霊に属する人に対するように話すことができないで、肉に属する人、キリストにある幼子に対するように話しました」

- ①未信者
- ②肉に属する人（キリストにある幼子）
- ③御霊に属する人（成長した信者）

(3) 古い人と新しい人の葛藤がある。

①未信者の時には、この葛藤はなかった。一つの性質しかなかったから。

### 3. 16～17 節

「もし自分のしたくないことをしているとすれば、律法は良いものであることを認めているわけです。ですから、それを行っているのは、もはや私ではなく、私のうちに住みついている罪なのです」

(1) 罪の性質が、本当の私の性質に反して働いている。

- ①これは責任逃れではない。
- ②罪の力がどれほど強いかを説明している。

(2) 罪が私のうちに住みついている。

(例話) ユダヤ教のラビ。罪を客に迎えれば、最後には罪が主人になってしまう。

## II. 信者は無力である（18～20 節）

### 1. 18～19 節

「私は、私のうち、すなわち、私の肉のうちに善が住んでいないのを知っています。私には善をしたいという願いがいつもあるのに、それを実行することがないからです。私は、自分でしたいと思う善を行わないで、かえって、したくない悪を行っています」

(1) 願っている自分と、それとは異なったことを行う自分とがいる。

(2) ジョン・ストットのコメント

- ①パウロの時代のユダヤ人信者の典型的な姿である。
- ②彼らは新生したが、解放されていない。
- ③律法の下にいるが、聖霊の支配下にいない。
- ④彼はこのような信者を「旧約聖書のクリスチャン」と呼ぶ。
- ⑤今も多くの信者が同じ問題で苦しんでいる。「ロマ書 7 章クリスチャン」

### 2. 20 節



「もし私が自分でしたくないことをしているのであれば、それを行っているのは、もはや私ではなくて、私のうちに住む罪です」

(1) 罪の性質が、本当の私の性質に反して働いている（16～17 節と同じ）。

①これは責任逃れではない。

②罪の力がどれほど強いかを説明している。

### Ⅲ. 信者は 2 つの性質を持っている（21～24 節）

#### 1. 21～22 節

「そういうわけで、私は、善をしたいと願っているのですが、その私に悪が宿っているという原理を見いだすのです。すなわち、私は、内なる人としては、神の律法を喜んでいるのに、」

(1) 本当のパウロ（新生したパウロ）は、神の律法を喜んでいる。

①詩 1：2 にある祝福されている人である。

#### 2. 23 節

「私のからだの中には異なった律法があつて、それが私の心の律法に対して戦いをいどみ、私を、からだの中にある罪の律法のとりこにしているのを見いだすのです

(1) しかし、内側では 2 つの性質が戦っている。

①神の律法＝私の心の律法

②異なった律法＝罪の律法

(2) ガラ 5：17～18

「なぜなら、肉の願うことは御霊に逆らい、御霊は肉に逆らうからです。この二つは互いに対立していて、そのためあなたがたは、自分のしたいと思うことをすることができないのです。しかし、御霊によって導かれるなら、あなたがたは律法の下にはいません」

①肉と御霊の対立

②これは、肉の性質と御霊の性質の対立である。

(3) 信者の希望（1 ヨハ 3：2）

「愛する者たち。私たちは、今すでに神の子どもです。後の状態はまだ明らかにされていません。しかし、キリストが現れたなら、私たちはキリストに似た者となることがわかっています。なぜならそのとき、私たちはキリストのありのままの姿を見るか

らです」

①信者の希望がここにある。

②今は分からないが、キリストに似た者となる。

### 3. 24 節

「私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか」

(1) この叫びは、本当に新生した人の叫びなのか。

①神の聖さが分かると、自分の行動がいかに関わり合っているかが分かる。

②罪の深みが分かると、自力で聖化を進めるのが不可能であることが分かる。

## 結論：

### 1. まとめ (25 節)

「私たちの主イエス・キリストのゆえに、ただ神に感謝します。ですから、この私は、心では神の律法に仕え、肉では罪の律法に仕えているのです」

(1) 神に感謝

①聖化の可能性

②終末的喜びも含まれている。

(2) 信者の内にある 2 面性の確認

### 2. 聖化と霊的戦い

(1) ロマ 6：23

「罪から来る報酬は死です」

①「報酬」は軍隊用語（オブソウニオン）

②将軍が兵士に払う日当

(2) ロマ 7：11

「それは、戒めによって機会を捕らえた罪が私を欺き、戒めによって私を殺したからです」

①「機会」は軍隊用語（アフォルメイ）

②戦略基地

③同じく ロマ 7：18

(3) その他の箇所

- ①「戦いを挑み」(23 節)
- ②「とりこ」(23 節)

3. 聖化の過程

(1) 時間がかかる。

- ①肉の力によるか、恵みによるか。
- ②らせん階段を上るように、両者の間を揺れ動きながら上に向かう。
- ③葛藤があることこそ、信者になっている証拠である。

(2) 肉の力に頼れば、失望する。

- ①この箇所には、「私」という言葉が 23 回出てくる（新改訳）。
- ②英語（ASV）訳では、38 回出てくる。
- ③しかし、聖霊という言葉は一度も出てこない。

(3) この箇所は、絶望と希望を結びつける連結器のような役割を果たしている。

## 「聖化の力（聖霊）（1）―罪からの解放―」

### 1. はじめに

(1) 「聖化」に関する 6 回目の学びである。

- ①最大の悲劇は、律法を行うことによって聖化を達成しようとする事。
- ②この理解は、クリスチャン生活を律法主義的生活に追い込む。

(2) ロマ書 7 章クリスチャンとロマ書 8 章クリスチャンの違い

- ①前者は、自分で自分に重荷を課している。
- ②その人が苦しむのは、自然の成り行きである。
- ③後者は、聖霊の導きで歩む。
- ④その結果として、祝福と平安が与えられる。

(3) 聖化の教理の重要性について（前回のアンケートの内容の紹介）

### 2. アウトライン

- (1) ロマ書 7 章の復習（まとめ）（1～2 節）。
- (2) その真理の適用（行為）（3～4 節）。
- (3) 信者の前にある 2 つの選択肢（5～8 節）。

### 3. メッセージのゴール

- (1) 位置的真理について

このメッセージは、聖化の力について学ぼうとするものである。

## I. ロマ書 7 章の復習（まとめ）（1～2 節）

### 1. 1 節

「こういうわけで、今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません」

(1) 「こういうわけで」の意味

- ①広くはロマ書 6～7 章（聖化の議論）を受けている。
- ②狭くは、ロマ 7：1～6 を受けている。
- ③ロマ 7：7～25 は、脇道にそれた議論である（挿入句と呼んでもいい）。

(2) ロマ 7：1～6 の要約

①律法の大原則

- \* 律法は、人に対して権限を持つ。
- \* 律法は、死んだ人には権限を持たない。

②結婚関係の例話

- \* 夫が生きている間は、結婚の律法によって制約されている。
- \* それを破れば、姦淫の女と呼ばれる。
- \* 夫が死ねば、結婚の律法から解放される。
- \* 再婚しても、姦淫の女ではない。

③例話の適用

- \* 信者は、律法に対して死んだ。
- \* 今は、新しい御霊（聖霊）によって生きている。
- \* もし今、律法による聖化を求めるなら、死んだ夫との関係が復活する。
- \* 律法が働き始めるので、罪の性質が活発化する。

(3) 「今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません」

- ①福音を信じた瞬間に、私たちは新生した。
- ②聖霊の内住が与えられた。
- ③聖霊のバプテスマによってキリストと一体化させられた。
- ④以上のことが、私たちの新しい状態である。
- ⑤「キリスト・イエスにある者」という言葉は、私たちの新しい位置を示している。
  - \* 「キリスト・イエスに結ばれている者」（新共同訳）
  - \* これを「位置的真理 (positional truth)」という。

(4) 「罪に定められることは決してありません」

- ①キリストにある者は、罪の責めから解放されている（義認）。
- ②聖化もまた、同じ方法で実現する。
  - \* 恵みによる
  - \* 聖霊による
  - \* 位置的真理による
- ③これは客観的真理である。
  - \* 主観的に罪の責めを感じる余地はない。
  - \* 神との平和を得ているのに、主観的には自分を責めている信者の悲劇。
  - \* 罪責感を強調するのは、神を助けようとする人間の愚かな行為である。

## 2. 2 節

「なぜなら、キリスト・イエスにある、いのちの御霊の原理が、罪と死の原理から、あなたを解放したからです」

### (1) 新しい原理

#### ①「キリスト・イエスにある」

＊キリストとの一体化

＊神は私たちに、武器なしで戦えとは命じておられない。

#### ②ヨハ 15：5

「わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人の中にとどまっているなら、そういう人は多くの実を結びます。わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないからです」

#### ③「いのちの御霊の原理」

#### ④ヨハ 7：38～39

『わたしを信じる者は、聖書が言っているとおり、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになる。』これは、イエスを信じる者が後になってから受ける御霊のことを言われたのである。イエスはまだ栄光を受けておられなかったもので、御霊はまだ注がれていなかったからである」

### (2) 古い性質

#### ①「罪と死の原理」。7 章で見た原理のこと。

#### ②自力で律法を行う生活は不可能であり、やがて死に至る。

### (3) 「あなたを解放した」

#### ①動詞はアオリスト。

#### ②信じたときに起こった一度限りの出来事である。

#### ③「罪と死の原理」は、私たちに対する法的権威を失った。

## Ⅱ. その真理の適用（行為）（3～4 節）

### 1. 3 節

「肉によって無力になったため、律法にはできなくなっていることを、神はしてくださいました。神はご自分の御子を、罪のために、罪深い肉と同じような形でお遣わしになり、肉において罪を処罰されたのです」

(1) 神は、律法にはできないことをしてくださった。

①律法自体に問題があるのではなく、肉の弱さこそが問題である。

(2) 神は、ご自分の御子を遣わされた。

①「罪深い肉と同じような形で」

＊人間として来られたが、罪はなかった。

②「罪のために」

＊罪の問題の解決を解決するために。

③神は、肉において罪を処罰された。

＊私たちの罪は、御子の上に転嫁された。

④ピリ 2：7～8

「ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられました。人としての性質をもって現れ、自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われました」

＊人でなければ死ねない。

＊神でなければ罪人を救えない。

## 2. 4 節

「それは、肉に従って歩まず、御霊に従って歩む私たちの中に、律法の要求が全うされるためなのです」

(1) キリストを信じた瞬間、私たちは罪に対して死に、解放された。

(2) その結果、御霊に従って歩む自由が与えられた。

①御霊に従って歩むなら、結果的に律法の要求が全うされる。

②これが聖化である。

## Ⅲ. 信者の前にある 2 つの選択肢 (5～8 節)

### 1. 5 節

「肉に従う者は肉的なことをもっぱら考えますが、御霊に従う者は御霊に属することをひたすら考えます」

(1) 肉に従う者と、御霊に従う者の対比

①古い性質と、新しい性質の対比

②アダムから引き継いだ性質と、新生した性質の対比

③未信者には古い性質しかない。

(2) 人は、心に抱いているものによって考え、行動する。

①ガラ 5：19～23

「肉の行いは明白であって、次のようなものです。不品行、汚れ、好色、偶像礼拝、魔術、敵意、争い、そねみ、憤り、党派心、分裂、分派、ねたみ、酩酊、遊興、そういった類のものです。前にもあらかじめ言ったように、私は今もあなたがたにあらかじめ言うておきます。こんなことをしている者たちが神の国を相続することはありません。しかし、御霊の実は、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制です。このようなものを禁ずる律法はありません」

## 2. 6～8 節

「肉の思いは死であり、御霊による思いは、いのちと平安です。というのは、肉の思いは神に対して反抗するものだからです。それは神の律法に服従しません。いや、服従できないのです。肉にある者は神を喜ばせることができません」

(1) 肉の思い

①神に対して反抗的

\*ヤコ 4：4 「貞操のない人たち。世を愛することは神に敵することであることがわからないのですか。世の友になりたいと思ったら、その人は自分を神の敵としているのです」

②神の律法に服従しない。

③死に至る。

(2) 御霊による思い

①神に心が開かれている。

②御霊に導かれて神の律法に服従する。

③いのちと平安に至る。

(3) 「肉にある者は神を喜ばせることができません」

①正統派のユダヤ人がいくら熱心に律法を守っても

②モルモン教徒がいくら熱心に死者のためのバプテスマを行っても

③エホバの証人がいくら熱心に輸血を拒んでも

④セブンスデイアドベンチストがいくら土曜安息日を守っても

⑤イスラム教徒がいくら熱心に戒律を守っても



結論：

1. 位置的真理について（ロマ書のみを取り上げる）

（例話）壊れた窓。ネジがひとつ見つかったので修理ができた。

①位置的真理は、クリスチャン生活の「失われたネジ」である。

（1）ロマ 3：24（義とされた）

「ただ、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いのゆえに、価なしに義と認められるのです」

（2）ロマ 6：11（生かされた）

「このように、あなたがたも、自分は罪に対しては死んだ者であり、神に対してはキリスト・イエスにあって生きた者だと、思いなさい」

（3）ロマ 8：2（罪と死の原理から解放された）

「なぜなら、キリスト・イエスにある、いのちの御霊の原理が、罪と死の原理から、あなたを解放したからです」

（4）ロマ 12：5（一つのからだに属する）

「大ぜいいる私たちも、キリストにあって一つのからだであり、ひとりひとり互いに器官なのです」

（5）ロマ 16：3、9（同労者である）

「キリスト・イエスにあって私の同労者であるプリスカとアクラによりしく伝えてください。…キリストにあって私たちの同労者であるウルバノと、私の愛するスタキスとによりしく」

（6）聖めを受けた、恵みの受け手、新しく造られた者、自由にされた、

天にあるすべての祝福の受け手、アブラハム契約の祝福の受け手、

ユダヤ人とともに約束に与る、善い行いをするために造られた、などなど。

## 「聖化の力（聖霊）（2）―死ぬべきからだからの解放―」

### 1. はじめに

(1) 「聖化」に関する 7 回目の学びである。

- ①最大の悲劇は、律法を行うことによって聖化を達成しようとする事。
- ②この理解は、クリスチャン生活を律法主義的生活に追い込む。

(2) ロマ書 7 章クリスチャンとロマ書 8 章クリスチャンの違い

- ①前者は、自分で自分に重荷を課している。
- ②その人が苦しむのは、自然の成り行きである。
- ③後者は、聖霊の導きで歩む。
- ④その結果として、祝福と平安が与えられる。

(3) 今回も、聖化の力として与えられている聖霊について教えられている。

### 2. アウトライン

- (1) 信者と未信者の違い（9 節）。
- (2) 信者にすでに起こったこと（10 節）。
- (3) 信者にこれから起ころうとしていること（11 節）

### 3. メッセージのゴール

- (1) 三位一体の教理について
- (2) クリスチャン生活への適用

このメッセージは、聖化の力について学ぼうとするものである。

## I. 信者と未信者の違い（9 節）

### 1. 9 節 a

「けれども、もし神の御霊があなたがたのうちに住んでおられるなら、あなたがたは肉の中にではなく、御霊の中にいるのです」

- (1) 私たちは、否定的な解釈をしてしまう傾向がある。
  - ①もし聖霊の内住があるなら → 聖霊の中にいる。
  - ②しかし、聖霊の内住があるように思えないので → 自分は聖霊の中にいない。

(2) 原文と日本語訳の比較

- ①「あなたがたは肉の中にはなく、御霊の中にいます」が先に出てくる。
- ②「あなたがた」に強調がある。
- ③信者は、すでに御霊の中にいるのである。
- ④「もし神の御霊があなたがたのうちに住んでおられるなら」が後に続く。
- ⑤「もし」という言葉は、「なぜなら」と訳すべき言葉である。

2. 9 節 b

「キリストの御霊を持たない人は、キリストのものではありません」

(1) これは未信者のことを指している。

- ①未信者は御霊を持たないので、肉の中にある。

(2) ロマ 8：9 は、信じた瞬間に聖霊の内住が与えられることを最も明確に教えている聖句である。

- ①もし、聖霊の内住は聖化のある段階で与えられるとするなら、新生からその時点まで、聖霊の内住を持たない信者が存在することになる。

②「キリストの御霊を持たない人は、キリストのものではありません」とあるので、その人は救われていないことになり、救いの教理で矛盾が生じる。

③1 コリ 12：13

「なぜなら、私たちはみな、ユダヤ人もギリシヤ人も、奴隷も自由人も、一つのからだとなるように、一つの御霊によってバプテスマを受け、そしてすべての者が一つの御霊を飲む者とされたからです」

④1 ヨハ 4：13

「神は私たちに御霊を与えてくださいました。それによって、私たちが神のうちにおり、神も私たちのうちにおられることがわかります」

3. 御霊とキリストの御霊

(1) 御霊とは、神の御霊である。

(2) 「神の御霊」と「キリストの御霊」は同じお方である。

- ①つまり、聖霊は父なる神に対するのと同じ関係を、キリストに対して持つておられるということ。

②これは、三位一体の真理を暗示している。

#### 4. 適用

(1) 内住の聖霊なしの救いはない。

①新生、聖霊のバプテスマ、聖霊の内住は、救いの瞬間に同時に起こる。

(2) 内住の聖霊が信者を導いてくださる。

①未信者は肉の中にいる。つまり、古い性質にあって生きている。

②信者は御霊の中にいる。つまり、新しい性質にあって生きている。

③「内住」とは「永住」、「全面的影響」のことである。

(3) 信者には罪を犯す可能性が残っている。

①これは、古い性質の影響を受けて行動してしまうことである。

②これは、未信者の時のように古い性質にあって生きているということではない。

③古い性質にあって生きることと、古い性質の影響を受けることとを区別する。

## II. 信者にすでに起こったこと（10 節）

### 1. 10 節

「もしキリストがあなたがたのうちにおられるなら、からだは罪のゆえに死んでいても、  
霊が、義のゆえに生きています」

(1) 「もしキリストがあなたがたのうちにおられるなら」

①信者の今の状態を示している。

(2) 「からだは罪のゆえに死んでいても」

①アダムの罪によって死がこの世に入った。

②私たちもまた、罪のゆえに肉体的には死ぬ。

③信者には死はやって来る。

(3) 「霊が、義のゆえに生きています」

①義認のゆえに、信者の霊は生きている。

②義認とは、神の怒りから解放され、神との平和が与えられること。

③信者の霊は、今はすでに生かされて、神との交わりを楽しんでいる。

### 2. 聖霊とキリストの関係

(1) 御霊、キリストの御霊、そして、キリストという 3 つの言葉

①キリストもまた内住される。

(2) 三位一体の教理の暗示

①聖霊とキリストとは、区別可能である。

②しかし、分離不可能である。

### Ⅲ. 信者にこれから起ころうとしていること（11 節）

#### 1. 11 節

「もしイエスを死者の中からよみがえらせた方の御霊が、あなたがたのうちに住んでおられるなら、キリスト・イエスを死者の中からよみがえらせた方は、あなたがたのうちに住んでおられる御霊によって、あなたがたの死ぬべきからだをも生かしてくださるのです」

(1) キリストの復活と信者の復活が関連づけられている。

①2 コリ 4：14

「それは、主イエスをよみがえらせた方が、私たちをもイエスとともによみがえらせ、あなたがたといっしょに御前に立たせてくださることを知っているからです」

②1 コリ 6：14

「神は主をよみがえらせましたが、その御力によって私たちをもよみがえらせてくださいます」

③1 テサ 4：14

「私たちはイエスが死んで復活されたことを信じています。それならば、神はまたそのように、イエスにあって眠った人々をイエスといっしょに連れて来られるはずです」

(2) 内住の聖霊は、復活の保障である。

①「あなたがたの死ぬべきからだをも生かしてくださるのです」

②終末的な意味での肉体の復活を意味している。

(3) 三位一体の教理の暗示

①「イエスを死者の中からよみがえらせた方の御霊」とは、「父なる神の御霊」。

②父なる神は聖霊によって、朽ちるべき私たちのからだを生かしてくださる。

結論：

1. 三位一体の教理について

(1) 用語の確認

- ①「神の御霊」(9 節)
- ②「御霊」(9 節)
- ③「キリストの御霊」(9 節)
- ④「キリスト」(10 節)
- ⑤「イエスを死者の中からよみがえらせた方の御霊」(11 節)
- ⑥「キリスト・イエスを死者の中からよみがえられた方」(11 節)
- ⑦「あなたがたのうちに住んでおられる御霊によって、あなたがたの死ぬべきからだをも生かしてくださるのです」

(2) 父なる神が計画し、子なる神が実行し、聖霊なる神が完成する。

(3) 三位一体の教理は、救済史全体の流れの中で捉える必要がある。

- ①父、子、聖霊は区別可能な位格である。
- ②そして、分離不可能な位格でもある。

2. この箇所の適用

(1) 未信者の時の自分と、信者になってからの自分とは違う。

- ①未信者の生活原則は、「肉の中」である。
- ②信者の生活原則は、「御霊の中」である。

(2) 信者になってからも、罪を犯す可能性は残されている。

- ①信じた瞬間に聖霊の内住が与えられた。
- ②それは、聖霊の永住であり、全面的影響力のことである。
- ③従って、信者が未信者の生活原則である「肉の中」に戻ることはない。
- ④しかし、信者は「肉の性質」に協力してしまうことがある。
- ⑤内住の聖霊は信者を支配するが、それは隷属的支配ではない。
- ⑥信者には自由が与えられている。
- ⑦罪を犯す度合いは、信者によってそれぞれである。
- ⑧しかし、信者が完全に「肉」によって支配されることはない。

(3) 信者の心構え

①「自分は罪を犯すかもしれない。きっとそうだ」と思ってはならない。

②1 ヨハ 3：9

「だれでも神から生まれた者は、罪を犯しません。なぜなら、神の種がその人のうちにとどまっているからです。その人は神から生まれたので、罪を犯すことができないのです」

③罪を犯さないという前提で生きることが大切である。

④聖霊が、私たちを習慣的罪から解放してくださる。

### 「聖化の力（聖霊）（3）―養子の霊―」

#### 1. はじめに

(1) 「聖化」に関する 8 回目の学びである。最終回。

①最大の悲劇は、律法を行うことによって聖化を達成しようとする事。

②この理解は、クリスチャン生活を律法主義的生活に追い込む。

(2) 救いの 3 つの側面は、すべて信仰により、恵みによって達成される。

①義認（過去形）

②聖化（現在進行形）

③栄化（未来形）

(3) 今回は、「養子の霊」について学ぶ。

#### 2. アウトライン

(1) 神の子の義務とは何か（12 節）。

(2) 神の子の地位は永遠か（13～14 節）。

(3) 神の子にされるとはどういうことか（15～16 節）。

(4) 神の子の特権とは何か（17 節）。

#### 3. メッセージのゴール

(1) クリスチャンの義務

(2) 苦難の意味

このメッセージは、聖化の力について学ぼうとするものである。

#### I. 神の子の義務とは何か（12 節）

##### 1. 12 節

「ですから、兄弟たち。私たちは、肉に従って歩む責任を、肉に対して負ってはいません」

「それで、兄弟たち、わたしたちには一つの義務がありますが、それは、肉に従って生きなければならないという、肉に対する義務ではありません」（新共同訳）

(1) 「ですから」の意味

①その前の 11 節で、聖霊が復活の保障であると教えられた。



②祝福に伴う義務がある。

(2)「責任を負っている」「義務がある」

①英語では「debtor」、債務者である（オフエイレテイス）。

②肉の性質（古い性質）の奴隷状態から解放された。

③今や、御霊に従って生きる義務が与えられた。

## 2. 人間の本質

（例話）カルトから解放された人は、相当数が不安定になったり、元に戻ったりする。

(1) 人間には、完全に自立した状態などあり得ない。これは神のみに可能。

①クリスチャンになるとは、主人を変えること。

②肉の性質から解放されて自由になり、自発的にキリストのしもべになる。

## II. 神の子の地位は永遠か（13～14 節）。

### 1. 13 節

「もし肉に従って生きるなら、あなたがたは死ぬのです。しかし、もし御霊によって、からだの行いを殺すなら、あなたがたは生きるのです」

(1) ここでは「因果の法則（因果律）」が語られている。

①「肉に従って生きるなら、死ぬ」

②「御霊によって、からだの行いを殺すなら、生きる」

＊継続した行為である。

(2) 比較の内容

①肉的信者と霊的信者の比較ではない。

②未信者と信者の比較である。

### 2. 14 節

「神の御霊に導かれる人は、だれでも神の子どもです」

(1) 私たちが神の子であることは、御霊に対する従順によって証明される。

①御霊が私たちを導かれる。主体は神（御霊）にある。

②御霊は常に、私たちを導かれる。

③ここには、羊飼いが羊を導いて行くイメージがある。

(2) 神は常に私たちが御霊に従順であることを期待される。

①しかし、私たちは時には不従順になる。

②それでも御霊は、私たちを導かれる。

3. 13 節を肉的信者と霊的信者の比較と解釈した場合の問題点

(1) アルミニウス主義の立場である。

①義認の恵みを受けた人でも、救いを失う可能性はある。

②確かに、聖書の中にはそのように読める箇所もある（信者への戒め）。

(2) カルビン主義はそれに反対する立場である。

①神は常に信者を導かれる。

②神の子の定義は、イエスをメシアと信じ、聖霊に導かれている人。

(3) ピリ 1：6

「あなたがたのうちに良い働きを始められた方は、キリスト・イエスの日が来るまでにそれを完成させてくださることを私は堅く信じているのです」

（例話）スボルジョン。信者は船に乗っている人。甲板でつまずいても外に落ちない。

(4) ピリ 2：12 にある命令に注目する。

「そういうわけですから、愛する人たち、いつも従順であったように、私がいるときだけでなく、私のいない今はなおさら、恐れおののいて自分の救いの達成に努めなさい」

(5) ヨハ 10：28～29、コロ 3：3～4：1、1 ペテ 1：3～5 参照。

Ⅲ. 神の子にされるとはどういうことか（15～16 節）。

1. 15 節

「あなたがたは、人を再び恐怖に陥れるような、奴隷の霊を受けたのではなく、子としてくださる御霊を受けたのです。私たちは御霊によって、『アバ、父』と呼びます」

(1) 神の子にされるとは、「養子の霊」を受けること。

①「子としてくださる御霊」は「the spirit of adoption」である。

②養子となったと認識させる霊である。

③それは「奴隷の霊」ではない。

④2 テモ 1：7

「神が私たちに与えてくださったものは、おくびょうの霊ではなく、力と愛と慎みとの霊です」

(2) 養子に迎えられたので、過去の関係は全て終了した。

- ①新しい親子関係に入った。
- ②その関係に伴う特権と責務が与えられている。

(3) 「私たちは御霊によって、『アバ、父』と呼びます」

- ①「アバ」あるいは「アッバ」は、親密な呼びかけの言葉である。
- ②呼ぶとは、深い感情が伴った動詞である。
- ③英語で「call」ではなく、「cry」である（クラゾウ）。

(4) マコ 14：36に見られるイエスと父なる神の関係

「またこう言われた。『アバ、父よ。あなたにおできにならないことはありません。どうぞ、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの願うことではなく、あなたのみこころのままを、なさってください』」

- ①ゲツセマネの園での神の御子の祈り
- ②私たちは、この関係に入ることを許されている。

## 2. 16 節

「私たちが神の子どもであることは、御霊ご自身が、私たちの霊とともに、あかししてくださいます」

(1) ユダヤ人は神を「アバ」とは呼ばない。

(2) 私たちは、神を「アバ」と呼ぶ。

- ①自らの信仰の実行である。
- ②御霊が、私たちの霊に確証を与えてくださる。

## IV. 神の子の特権とは何か（17 節）。

### 1. 17 節

「もし子どもであるなら、相続人でもあります。私たちがキリストと、栄光をともに受けるために苦難をともにしているなら、私たちは神の相続人であり、キリストとの共同相続人です」

(1) 「もし」とは、「神の子どもなのだから」という意味である。

① 私たちに与えられている特権は、相続人とされたということである。

② ガラ 4：7

「ですから、あなたはもはや奴隷ではなく、子です。子ならば、神による相続人です」

③ テト 3：7

「それは、私たちがキリストの恵みによって義と認められ、永遠のいのちの望みによって、相続人となるためです」

(2) キリストとの共同相続人である。

① キリストが受けるものを私たちも受ける。

② キリストは地上の王国を受ける。預言的言葉である。

③ この約束は、次の「栄化」というテーマに私たちを導く。

## 2. 苦難は栄光への道

(1) キリストは苦難を通過して栄光に入られた。

① キリストに起こったことは、私たちにも起こる。

② 私たちは、キリストが通過したのと同じ道を通る。

## 結論：

### 1. クリスチャンの義務：祝福には義務が伴う。

(1) ロマ 13：8

「だれに対しても、何の借りもあつてはいけません。ただし、互いに愛し合うことについては別です。他の人を愛する者は、律法を完全に守っているのです」

(2) ロマ 15：1

「私たち力のある者は、力のない人たちの弱さをになうべきです。自分を喜ばせるべきではありません」

(3) ロマ 15：27

「彼らは確かに喜んでそれをしたのですが、同時にまた、その人々に対してはその義務があるのです。異邦人は霊的なことでは、その人々からもらいものをしたのですから、物質的な物をもって彼らに奉仕すべきです」

(4) 1 ヨハ 2：6

「神のうちにとどまっていると言う者は、自分でもキリストが歩まれたように歩まなければなりません」

(5) 1 ヨハ 3：16

「キリストは、私たちのために、ご自分のいのちをお捨てになりました。それによって私たちに愛がわかったのです。ですから私たちは、兄弟のために、いのちを捨てるべきです」

(6) 1 ヨハ 4：11

「愛する者たち。神がこれほどまでに私たちを愛してくださったのなら、私たちもまた互いに愛し合うべきです」

## 2. 苦難の意味

(1) 1 ペテ 4：12～13

「愛する者たち。あなたがたを試みるためにあなたがたの間に燃えさかる火の試練を、何か思いがけないことが起こったかのように驚き怪しむことなく、むしろ、キリストの苦しみにあずかれるのですから、喜んでいなさい。それは、キリストの栄光が現れるときにも、喜びおどる者となるためです」

- ①信者が通過する苦難は、贖罪のための苦難ではない。
- ②それは、この世との戦いという苦難である。
- ③苦難があるのは、神から愛されていないからではない。
- ④苦難は、栄光への道をたどっている証拠である。

(2) 共同相続人として苦難の道をたどっているという事実が「栄化」につながる。

## 「現在の苦難（1）―被造物のうめき―」

### 1. はじめに

（1）救いの 3 つの側面は、すべて信仰により、恵みによって達成される。

- ①義認（過去形）
- ②聖化（現在進行形）
- ③栄化（未来形）

（2）きょうの箇所から「栄化」のテーマに入る。

①ロマ 8：18～27 で 3 つの「うめき」が記されている。

＊被造物のうめき（8：17～22）

＊神の子たちのうめき（8：23～25）

＊御霊のうめき（8：26～27）

②今回は、被造物のうめきを取り上げる。

③次回は、神の子たちのうめき、御霊のうめき、を取り上げる。

### 2. 東日本大震災に関連して

4 月 22 日、ローマ法王ベネディクト 16 世が、イタリア国営テレビのカトリック教徒向け番組に出演し、東日本大震災を体験した 7 歳の日本人少女（イタリア人の父、日本人の母を持つ千葉市の少女。自宅近くが液状化の被害を受けた）の質問に答えた。

「私は今、とても怖いんです。大丈夫だと思っていた私の家がとても揺れたり、私と同じ年ぐらいの子供がたくさん死んだり、公園に遊びに行けないからです。なんでこんなに悲しいことにならないといけないのですか」

「私も同じように『なぜ』と自問しています。答えは見つかりませんが、神はあなたとともにあります。この痛みは無意味ではありません。私たちは苦しんでいる日本の子供たちとともにあります。ともに祈りましょう」

### 3. 私たちの心構え

- （1）キリスト教を世界観、歴史観として理解する必要がある。
- （2）ロマ書 8 章は、実にタイムリーな箇所である。

### 4. アウトライン

- （1）パウロの資格（18 節）
- （2）被造物のうめきの原因（19～20 節）
- （3）被造物のうめきの解決（21～22 節）

### 3. メッセージのゴール

- (1) 被造世界は、どこに向かっているのか。
- (2) それでは、私たちはいかに生きるべきか。

このメッセージは、被造物のうめきの原因と解決について学ぼうとするものである。

## I. パウロの資格（18 節）

### 1. 18 節

「今の時のいろいろの苦しみは、将来私たちに啓示されようとしている栄光に比べれば、取るに足りないものと私は考えます」

- (1) クリスマン生活における苦難を否定していない。
  - ①「いろいろの苦しみ」（複数形）
  - ②苦難は不信仰のしるしでも、神から見放されていることのしるしでもない。
- (2) パウロは比較を行っている。
  - ①現在の苦難と将来私たちに啓示されようとしている栄光の比較
  - ③栄光があまりにも素晴らしいので、比較する価値すらない。
- (3) 「私は考えます」（ロギゾマイ）
  - ①ロマ 6：11 に出てきた。

「このように、あなたがたも、自分は罪に対しては死んだ者であり、神に対してはキリスト・イエスにあって生きた者だと、思いなさい」
  - ②「思いなさい」という現在形の命令形。
  - ③基本的な意味は、算数の用語。よく計算して、答えを出しなさい。
  - ④感情ではなく、知的理解である。

### 2. パウロの資格

- (1) パウロほど苦難を経験した人はいない。
  - ①本からの知識によってではなく、体験から語っている。

（例話）文芸春秋（8 月号）：松本清張の講演  
菊池寛と夏目漱石、芥川龍之介の対比。菊池寛は、パウロ的人物である。

(2) 2 コリ 6：3～5

「私たちは、この務めがそしられないために、どんなことにも人につまずきを与えないようにと、あらゆることにおいて、自分を神のしもべとして推薦しているのです。すなわち非常な忍耐と、悩みと、苦しみと、嘆きの中で、また、むち打たれるときにも、入獄にも、暴動にも、労役にも、徹夜にも、断食にも、」

(3) 2 コリ 11：23～28

「彼らはキリストのしもべですか。私は狂気したように言いますが、私は彼ら以上にそうなのです。私の労苦は彼らよりも多く、牢に入れられたことも多く、また、むち打たれたことは数えきれず、死に直面したこともしばしばでした。ユダヤ人から三十九のむちを受けたことが五度、むちで打たれたことが三度、石で打たれたことが一度、難船したことが三度あり、一昼夜、海上を漂ったこともあります。幾度も旅をし、川の難、盗賊の難、同国民から受ける難、異邦人から受ける難、都市の難、荒野の難、海上の難、にせ兄弟の難に会い、労し苦しみ、たびたび眠られぬ夜を過ごし、飢え渴き、しばしば食べ物もなく、寒さに凍え、裸でいたこともありました。このような外から来ることのほかに、日々私に押しかかるすべての教会への心づかいがあります」

## II. 被造物のうめきの原因（19～20 節）

### 1. 19～20 節

「被造物も、切実な思いで神の子どもたちの現れを待ち望んでいるのです。それは、被造物が虚無に服したのが自分の意志ではなく、服従させた方によるのであって、望みがあるからです」

#### (1) 被造物の擬人化はヘブル的手法

##### ①詩 98：8

「もろもろの川よ。手を打ち鳴らせ。山々も、こぞって【主】の御前で喜び歌え」

##### ②イザ 55：12

「まことに、あなたがたは喜びをもって出て行き、安らかに導かれて行く。山と丘は、あなたがたの前で喜びの歌声をあげ、野の木々もみな、手を打ち鳴らす」

#### (2) 被造物に責任はない。

①自分の意志で虚無に服したのではない。

②服従させた方がおられる。

③だから希望がある。



(3) 責任はアダムにある。

①創 3：17～18

「また、人に仰せられた。『あなたが、妻の声に聞き従い、食べてはならないとわたしが命じておいた木から食べたので、土地は、あなたのゆえにのろわれてしまった。あなたは、一生、苦しんで食を得なければならない。土地は、あなたのために、いばらとあざみを生えさせ、あなたは、野の草を食べなければならない」

②アダムの罪の影響が被造物世界に及んだ。

(4) 被造物には望みがある。

①神の子どもたちの現れを待ち望んでいる。

②アダムの罪による呪いが栄光に変えられることを待ち望んでいる。

### Ⅲ. 被造物のうめきの解決（21～22 節）

#### 1. 21 節

「被造物自体も、滅びの束縛から解放され、神の子どもたちの栄光の自由の中に入れられます」

(1) キリストの再臨との関係

①復活の体を持った神の子たちが出現する。

②これは栄光の体である。栄化の成就である。

(2) 次に地上に千年王国が成就する。

①エデンの園の状態が回復するということである。

②これは、被造物が滅びの束縛から解放されることである。

#### 2. 22 節

「私たちは、被造物全体が今に至るまで、ともにうめきともに産みの苦しみをしていることを知っています」

(1) アダムの墮落以来、今に至るまで、自然界は崩壊しつつある。

①「ともに」とは、私たちとともに、という意味である。

(2) 「産みの痛み」

①意味のない痛みではない。新しい世界が現れるための痛みである。

②ヨハ 16：20～21

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。あなたがたは泣き、嘆き悲しむが、世は喜ぶのです。あなたがたは悲しむが、しかし、あなたがたの悲しみは喜びに変わります。女が子を産むときには、その時が来たので苦しみます。しかし、子を産んでしまうと、ひとりの人が世に生まれた喜びのために、もはやその激しい苦痛を忘れてしまいます」

結論：

1. 被造物はどこに向かっているのか。

(1) 神は天と地を創造した。

①これが最初の理想的な状態である。

(2) 創 1：1 と 1：2 の間で、サタンの墮落が起こった。

①被造世界は混沌とした状態になった。

(3) 再創造によって、秩序ある世界が出現した。

①人類はエデンの園に置かれた。

(4) アダムの墮落によって、世界は呪いを受けた。

①今の世界は崩壊しつつある。

②それは、新しい世界を産み出すための苦しみである。

(5) 千年王国（メシア的王国）

①キリストの再臨

②神の子たちの出現（栄化の成就）

③これはエデンの園の状態の回復である。

④2 ペテ 3：10～13

「しかし、主の日は、盗人のようにやって来ます。その日には、天は大きな響きをたてて消えうせ、天の万象は焼けてくずれ去り、地と地のいろいろなわざは焼き尽くされます。このように、これらのものはみな、くずれ落ちるものだとすれば、あなたがたは、どれほど聖い生き方をする敬虔な人でなければならないことでしょう。そのようにして、神の日の来るのを待ち望み、その日の来るのを早めなければなりません。その日が来れば、そのために、天は燃えてくずれ、天の万象は焼け溶けてしまいます。しかし、私たちは、神の約束に従って、正義の住む

新しい天と新しい地を待ち望んでいます」

(6) 新天新地

①旧約聖書の預言のピークは千年王国（メシア的王国）である。

②その先を預言しているのが、ヨハネの黙示録である。

③新天新地は、永遠の秩序である。

④これは、サタンの墮落が起こる前の状態の回復である。

④黙 21：1～2

「また私は、新しい天と新しい地とを見た。以前の天と、以前の地は過ぎ去り、もはや海もない。私はまた、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために飾られた花嫁のように整えられて、神のみもとを出て、天から下って来るのを見た」

2. それでは、私たちはいかに生きるべきか。

(1) 終末的視点で生きる。

①地上での生活は一時的なものである。

②質的に異なった世界が実現する。

③富であれ苦難であれ、地上のものに目を注ぐならそれによって束縛される。

④上のものに目を注ぐ生き方をする。

(2) 2 コリ 4：16～18

「ですから、私たちは勇気を失いません。たとい私たちの外なる人は衰えても、内なる人は日々新たにされています。今の時の軽い患難は、私たちのうちに働いて、測り知れない、重い永遠の栄光をもたらすからです。私たちは、見えるものにではなく、見えないものにこそ目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものはいつまでも続くからです」

(3) ピリ 3：18～21

「というのは、私はしばしばあなたがたに言って来たし、今も涙をもって言うのですが、多くの人々がキリストの十字架の敵として歩んでいるからです。彼らの最後は滅びです。彼らの神は彼らの欲望であり、彼らの栄光は彼ら自身の恥なのです。彼らの思いは地上のことだけです。けれども、私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます。キリストは、万物をご自身に従わせることのできる御力によって、私たちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じ姿に変えてくださるのです」

## 「現在の苦難（2）―神の子たちのうめき―」

### 1. はじめに

(1) 救いの 3 つの側面は、すべて信仰により、恵みによって達成される。

- ①義認（過去形）
- ②聖化（現在進行形）
- ③栄化（未来形）

(2) 今私たちは、「栄化」のテーマについて学んでいる。

①ロマ 8：18～27 で 3 つの「うめき」が記されている。

＊被造物のうめき（8：17～22）

＊神の子たちのうめき（8：23～25）

＊御霊のうめき（8：26～27）

②前回は、被造物のうめきを取り上げた。

③今回は、神の子たちのうめき、御霊のうめき、を取り上げる。

### 2. アウトライン

(1) 神の子たちのうめき（23～25 節）

(2) 御霊のうめき（26～27 節）

### 3. メッセージのゴール

(1) 第一の復活

(2) 第二の復活

このメッセージは、2 つのうめきの原因と解決について学ぼうとするものである。

## I. 神の子たちのうめき：(23～25 節)

### 1. 23 節

「そればかりでなく、御霊の初穂をいただいている私たち自身も、心の中でうめきながら、子にさせていただくこと、すなわち、私たちのからだの贖われることを待ち望んでいます」

(1) 「そればかりでなく」

①被造物だけでなく私たちも、うめいている。

②被造物は、新しい世界を産むための「産みの苦しみ」を通過している。

- ③その「うめき」は、意味あるものである。
- ④私たちもまた、意味ある「うめき」をしている。

(2)「心の中でうめきながら」

- ①被造物のうめきは、言葉にならないものである。
- ②私たちもうめきも、それと同じように言葉にならない。

2. 私たちが得ているもの

(1)「御霊の初穂をいただいている」：旧約聖書の背景がある。

①出 23：19

「あなたの土地の初穂の最上のものを、あなたの神、【主】の家に持って来なければならない」

②レビ 23：10～11

「イスラエル人に告げて言え。わたしがあなたがたに与えようとしている地に、あなたがたが入り、収穫を刈り入れるときは、収穫の初穂の束を祭司のところに持って来る。祭司は、あなたがたが受け入れられるために、その束を【主】に向かって揺り動かす。祭司は安息日の翌日、それを揺り動かさなければならない…」

(2)「初穂」の意味

- ①その年の最初の収穫
- ②次に続く収穫を保障するもの

(3) 新約聖書への適用

①2 コリ 1：22

「神はまた、確認の印を私たちに押し、保証として、御霊を私たちの心に与えてくださいました」

②2 コリ 5：5

「私たちをこのことにかなう者としてくださった方は神です。神は、その保証として御霊を下さいました」

(4)「御霊の初穂」の意味

- ①信じた瞬間に、神の恵みの初穂として御霊は与えられた。
- ②御霊は、保証（手付金）である。
- ③終末的保証である。

### 3. うめきの原因

(1) 「すでに」（得ている）と「いまだ」（まだ得ていない）の間における葛藤

①御霊の初穂は、すでに得ている。

②完成は、いまだ成っていない。

(2) 肉体的弱さ、道徳的弱さのゆえに、うめいている。

(3) 救いの完成を求めて、うめいている。

①「子にさせていただくこと」

＊すでに神の子になっているが、完成していない。

②「私たちのからだの贖われること」

＊復活のからだを持つこと

＊私たちが復活のからだを持つことと、新世界が出現することが連動。

### 4. 24 節

「私たちは、この望みによって救われているのです。目に見える望みは、望みではありません。だれでも目で見ていることを、どうしてさらに望むでしょう」

(1) 「私たちは、この望みによって救われているのです」（新改訳）

「わたしたちは、このような希望によって救われているのです」（新共同訳）

① “by this hope” ではなく、“in this hope” である。

②私たちが受けた救いが、23 節の希望と結びついているという意味である。

(2) 神の子の完成への 3 段階

①神による予定（エペ 1：5）

「神は、みむねとみこころのままに、私たちをイエス・キリストによってご自分  
のみにしようと、愛をもってあらかじめ定めておられました」

②神による守り（ロマ 8：14）

「神の御霊に導かれる人は、だれでも神の子どもです」

③復活

(3) この望みは、終末的望みである。

①目に見えていない。

②それゆえ、望みがある。

### 5. 25 節

「もしまだ見ていないものを望んでいるのなら、私たちは、忍耐をもって熱心に待ちます」

(1) 苦難の時こそ、希望が必要である。

①まだ見ていない望みとは、復活の望みのことである。

(2) 復活の望みを持っている人は、忍耐をもって熱心に待ち続ける。

①2 コリ 5：2

「私たちはこの幕屋にあつてうめき、この天から与えられる住まいを着たいと望んでいます」

②2 コリ 5：4

「確かにこの幕屋の中にいる間は、私たちは重荷を負って、うめいています。それは、この幕屋を脱ぎたいと思うからでなく、かえって天からの住まいを着たいからです。そのことによって、死ぬべきものがいのちにのまれてしまうためです」

## Ⅱ. 御霊のうめき（26～27 節）

### 1. 26 節

「御霊も同じようにして、弱い私たちを助けてくださいます。私たちは、どのように祈ったらよいかわからないのですが、御霊ご自身が、言いようもない深いうめきによって、私たちのためにとりなしてください」

(1) 私たちは弱い。

①肉体的、道徳的弱さ

②理解力において弱い

③1 コリ 13：12

「今、私たちは鏡にぼんやり映るものを見ていますが、その時には顔と顔とを合わせて見ることになります。今、私は一部分しか知りませんが、その時には、私が完全に知られているのと同じように、私も完全に知ることになります」

④どう祈っていいかわからないことがある。

(2) 御霊は助けてくださる。

①「同じようにして」とは、私たちと同じように御霊もうめいているということ。

②御霊のうめきは、私たちのための執りなしの祈りである。

(3) 「言いようもない深いうめき」

「言葉に表せないうめき」（新共同訳）

- ①ペンテコステ派では、これを異言と解釈する。
- ②しかし、これは異言ではない。
- ③「cannot be uttered」
- ④言葉にはできない内なるうめき
- ⑤イエスの祈りには深い感情が伴っていた。

ルカ 22 : 44

「イエスは、苦しみもだえて、いよいよ切に祈られた。汗が血のしずくのように地に落ちた」

- ⑥御霊の祈りにも同じような深い感情が伴っている。

## 2. 27 節

「人間の心を探り窮める方は、御霊の思いが何かをよく知っておられます。なぜなら、御霊は、神のみこころに従って、聖徒のためにとりなしをしてくださるからです」

### (1) 「人間の心を探り窮める方」

- ①父なる神は、人間の心に何があるかをご存じである。
- ②1 サム 16 : 7

「しかし【主】はサムエルに仰せられた。『彼の容貌や、背の高さを見てはならない。わたしは彼を退けている。人が見るようには見ないからだ。人はうわべを見るが、【主】は心を見る』」

### (2) 父なる神は、御霊の思いが何かをよく知っておられる。

### (3) 祈りの神秘

- ①私たちの祈りは、不十分である。
- ②御霊が私たちの祈りの欠点を修正し、不足を補ってくださる。
- ③私たちのうめき（23 節）が、御霊のうめき（26 節）となる。
- ④御霊のとりなしは父なる神の御心に従っている。
- ⑤それゆえ、私たちの祈りは神に聞かれている。

### (4) 私たちの救いは保証されている。

- ①エペ 4 : 30

「神の聖霊を悲しませてはいけません。あなたがたは、贖いの日のために、聖霊によって証印を押されているのです」

（例話）「神様の下さる救いは永遠だけど、人間が自由意志をもって信仰から離れ



続け、内住してくださる聖霊を死の瞬間まで否定し続けるなら、救いは失われると私は思います。そのために、神様は絶えず立ち返りなさいと叫んでおられるのだと思います」

＊そういう人は救われていない可能性が高い。

＊救われている場合は、いつか必ず神に立ち返る。

＊悔い改めのない状態が続くと、サタンに引き渡される（1 コリ 5 : 5）。

「このような者をサタンに引き渡したのです。それは彼の肉が減ぼされるためですが、それによって彼の霊が主の日に救われるためです」

＊自由意志によって救われたり、救いを失くしたりすると考えるのは、誤解。

＊神の恵みを軽視している。

## 結論：

### 聖句

#### (1) ダニ 12 : 2

「地のちりの中に眠っている者のうち、多くの者が目をさます。ある者は永遠のいのちに、ある者はそしりと永遠の忌みに」

#### (2) ヨハ 5 : 28～29

「このことに驚いてはなりません。墓の中にいる者がみな、子の声を聞いて出て来る時が来ます。善を行った者は、よみがえっていのちを受け、悪を行った者は、よみがえってさばきを受けるのです」

### 1. 第一の復活：信者の復活（黙 20 : 5～6）

#### (1) キリストの復活（初穂）

#### (2) 携挙の時の復活

##### ① 1 テサ 4 : 16～17

② 教会時代の聖徒で、死んだ者が先に復活する。

③ 生きている者は、死を通過しないで栄光の体に変えられる。

#### (3) 地上再臨の時の復活

##### ① 大患難時代の殉教者たちの復活（黙 20 : 4）

##### ② 旧約時代の聖徒たちの復活（イザ 26 : 19）

### 2. 第二の復活：不信者の復活（黙 20 : 11～15）

#### (1) 千年王国が終わる時の復活

##### ① 白い御座の裁きのための復活

##### ② 第 2 の死が続く。

## 「将来の栄光—摂理—」

### 1. はじめに

(1) 救いの 3 つの側面は、すべて信仰により、恵みによって達成される。

- ①義認（過去形）
- ②聖化（現在進行形）
- ③栄化（未来形）

(2) 「栄化」の過程で起きる苦難と 3 つの慰め

①苦しみには意味がある。「産みの苦しみ」

＊被造物のうめき

＊神の子たちのうめき

②聖霊の執りなし

③神の永遠の目的

＊その目的を成就するのが、神の摂理の御手。

＊ロマ 8：28 は試練の中にある信者を励ましてきた。

(3) 「摂理」(providence) という用語

①聖書にはない言葉である（新改訳のヨブ 38：2、箴 8：14 は例外）。

②しかし、聖書が教える真理を最も適切に表現する神学用語である。

### 2. アウトライン

(1) 「摂理」について（28 節）

(2) 「摂理」を可能にする 5 つの動詞について（29～30 節）

- ①あらかじめ知っている（前もって知っている）
- ②あらかじめ定める
- ③召す
- ④義と認める（義認）
- ⑤栄光を与える（栄化）

### 4. メッセージのゴール

(1) 摂理についてのまとめ

このメッセージは、摂理について学ぼうとするものである。

## I. 「摂理」について（28 節）

「神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています」

### 1. 「私たちは知っています」

- (1) 初代教会では、日常的に口にされた言葉であったと思われる。
- (2) 救われた人の、すなおな実感がここに表現されている。

### 2. この文の主語は何か。

- (1) 新改訳は「神」を主語としている。

①「すべてのことが働いて益となることを」（異本）と欄外にある。

- (2) 新共同訳は「万事」を主語としている。

「神を愛する者たち、つまり、御計画に従って召された者たちには、万事が益となるように共に働くということを、わたしたちは知っています」

- (3) 写本上は、「万事」を主語とするのがよい。

- ①「神」という言葉は後代の追加であろう。
- ②しかし、意味においては同じである。動作の主体は、神である。
- ③神が、すべてのことを働かせて益としてくださる。

- (4) 「働かせて」という動詞

- ①「スネルゲオウ」という動詞
- ②現在形。動作が継続していることを示す。

### 3. 誰のために「益となる」のか。

- (1) 人間一般ではない。

- ①「人間万事塞翁が馬」という格言は、すべての人に当てはまる。
- ②ロマ 8 : 28 は、そうではない。

- (2) 人間の視点から：「神を愛する人々」

- ①愛する（アガパオウ）
- ②分詞の現在形である。継続した動作。

(3) 神の視点から：「神のご計画に従って召された」

①「クレイトス」という形容詞

#### 4. 摂理のまとめ

(1) 摂理は、神を愛し続ける者への神の継続的な守りと導きである。

(2) 「益となる」とは、必ずしも私たち人間が考える内容とは合致しない。

①ましてや、物質的祝福のことではない。

(3) 「益となる」とは、御子の姿に似るという目標に対して益となるという意味。

①試練は、神のトータルプランの一部であることが分かる。

## II. 「摂理」を可能にする 5 つの動詞について（29～30 節）

「なぜなら、神は、あらかじめ知っておられる人々を、御子のかたちと同じ姿にあらかじめ定められたからです。それは、御子が多くの兄弟たちの中で長子となられるためです。神はあらかじめ定めた人々をさらに召し、召した人々をさらに義と認め、義と認めた人々にはさらに栄光をお与えになりました」

はじめに

(1) 義認、聖化、栄化の前に、3 つの段階がある。

①事前の知識、②事前の選び、③召し（招き）

### 1. あらかじめ知っている（前もって知っている）

(1) 「プロ・ギノウスコウ」という動詞

①「プロ」とは「前もって」という意味である。

②「ギノウスコウ」とは「知っている」という意味である。

(2) 神は、どのようにして私たちが存在する前から、私たちを知っておられたのか。

①神の知識は、第 2 の動詞と深く関係する。

### 2. あらかじめ定める

(1) 「プロ・オリゾウ」という動詞

①「プロ」とは「前もって」という意味である。

②「オリゾウ」とは「境界線を引く」という意味である。

③「私たちが救われるように、前もって境界線を定めた」という意味になる。

(2) 神は計画を立てられたので、事前の知識を持っておられた。

(例話) 私は、2011 年 8 月 7 日と 8 日に、32 回目のロマ書講解メッセージをすることを事前に知っていた。それは、私が計画したからである。

(3) 事前の選びの目的

①「御子のかたちと同じ姿に」なるように、あらかじめ定めた。

②2 コリ 3：18

「私たちはみな、顔のおおいを取りのけられて、鏡のように主の栄光を反映させながら、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられて行きます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです」

③「御子が多く兄弟たちの中で長子となられるためです」

＊私たちは、キリストの兄弟となる。

＊神の家族は多くなる。

(4) キリストの優位性（長子）

①時間的優位性

②位置的優位性

③聖句

＊コロ 1：15

「御子は、見えない神のかたちであり、造られたすべてのものより先に生まれた方です」

＊コロ 1：18

「また、御子はそのからだである教会のかしらです。御子は初めであり、死者の中から最初に生まれた方です。こうして、ご自身がすべてのことにおいて、第一のものとなられたのです」

(5) 神学的論争

①カルバン主義

＊神の選びがあり、それに基づく神の予知がある。

②アルメニウス主義（予定説への反発）

＊神は全知全能であるので、誰が信仰によって応答するかを知っていた。

＊その人たちが、「御子のかたちと同じ姿に」なるように、あらかじめ定めた。

③問題点

\* ロマ 3：9～18 で、神を求める人はいないとされた。

\* 自由意志に基づいて神を求める人がいると考えるのは、矛盾である。

\* 出現するはずのない人を事前に知るの、不可能なことである。

### 3. 召す

#### (1) 「カレオウ」という動詞

① 28 節の「召された」（クレイトス）は形容詞である。

② 選んだ、知っていた、そして、救われるように召した。

#### (2) 聖句

① ロマ 11：29 ユダヤ人に関して

「神の賜物と召命とは変わることがありません」

② 1 コリ 1：9

「神は真実であり、その方のお召しによって、あなたがたは神の御子、私たちの主イエス・キリストとの交わりに入れられました」

③ 1 テサ 2：12

「ご自身の御国と栄光とに召してくださる神にふさわしく歩むように勧めをし、慰めを与え、おごそかに命じました」

④ 1 ペテ 2：9

「しかし、あなたがたは、選ばれた種族、王である祭司、聖なる国民、神の所有とされた民です。それは、あなたがたを、やみの中から、ご自分の驚くべき光の中に招いてくださった方のすばらしいみわざを、あなたがたが宣べ伝えるためなのです」

### 4. 義と認める（義認）

#### (1) 「ディカイオウ」という動詞

① 神との関係が正される。

② 無罪宣言を受ける。

③ 神の怒りから救われる。

### 5. 栄光を与える（栄化）

#### (1) 「ドクサゾウ」という動詞

① これは「体の贖われること」であり、救いの完成である。

② 摂理は、このゴールに私たちを導く神の御手である。

(2) なぜ「聖化」が出てこないのか。

①聖化は、栄化の始まりである。

②栄化は、聖化の完成である。

#### まとめ

(1) 以上の 5 つの動詞は、すべてアオリスト形である。

①すでに起こった事実である。

(2) 栄化は未来形で語られることがある。

①1 ヨハ 3：2

「愛する者たち。私たちは、今すでに神の子どもです。後の状態はまだ明らかにされていません。しかし、キリストが現れたなら、私たちはキリストに似た者となることがわかっています。なぜならそのとき、私たちはキリストのありのままの姿を見るからです」

(3) しかし、ロマ 8：30 は栄化をすでに完成したものとみなしている。

①救いの完成を保証するのは、摂理である。

#### 結論：摂理についてのまとめ

##### 1. 聖書の例

(1) 創 50：20

「あなたがたは、私に悪を計りましたが、神はそれを、良いことのための計らいとなさいました。それはきょうのようにして、多くの人々を生かしておくためでした」

(2) 創 46：34

「あなたがたは答えなさい。『あなたのしもべどもは若い時から今まで、私たちも、また私たちの先祖も家畜を飼う者でございます』と。そうすれば、あなたがたはゴシェンの地に住むことができるでしょう。羊を飼う者はすべて、エジプト人に忌みきらわれているからです」

(3) ルツ 2：3

「ルツは出かけて行って、刈る人たちのあとについて、畑で落ち穂を拾い集めたが、それは、はからずもエリメレク一族に属するボアズの畑のうちであった」

(4) 使 11：19～20

「さて、ステパノのことから起こった迫害によって散らされた人々は、フェニキヤ、キプロス、アンテオケまでも進んで行ったが、ユダヤ人以外の者にはだれにも、みことばを語らなかった。ところが、その中にキプロス人とクレネ人が幾人かいて、アンテオケに来てからはギリシヤ人にも語りかけ、主イエスのことを宣べ伝えた」

2. 摂理は私たち人間の責任を軽減しない。

(1) アッシリヤやバビロンは、イスラエルの民を裁く神の器となったが、彼らもまた神から裁かれた。

(2) 私たちの罪や失敗によって神の業が進んだとしても、それを肯定することはできない。

3. 摂理は、運命論とはちがう。

(1) 神を信じなくても、運命を信じている人は多い。

(2) あるいは、諦めでもない。

① (Que sera sera／ケ・セラ・セラ) は、スペイン語に由来するフレーズ。

② 英語では「Whatever Will Be, Will Be」。

③ ヒッチコックの映画『知りすぎていた男』(1956 年) でアメリカ女優・歌手ドリス・デイが歌った。ペギー葉山による日本語詞(訳詞：音羽たかし)あり。

(3) 摂理とは、神を信じる人とともに働く神の御手である。

4. 摂理は、キリスト中心に理解する必要がある。

(1) 摂理は、人間の期待通りには動いて行かない。

(2) 摂理のゴール

① キリストが第一になること。

② キリストを長子とした多くの兄弟たちが誕生すること。

③ そして私たちが、その中のひとりになること。



## 「確信と賛美の歌」

### 1. はじめに

(1) 救いの 3 つの側面は、すべて信仰により、恵みによって達成される。

①義認（過去形）

②聖化（現在進行形）

③栄化（未来形）

(2) この箇所は、1～8 章のまとめとなっている。

①神学的議論というよりは、賛美の歌であり、礼拝である。

②3 の疑問文（修辭的疑問文）を中心に見ていく。

### 2. アウトライン

イントロダクション（31 節）

「では、これらのことからどう言えるでしょう」

(1) 疑問文その 1（31～32 節）

「神が私たちの味方であるなら、だれが私たちに敵対できるでしょう」

(2) 疑問文その 2（33 節）

「神に選ばれた人々を訴えるのはだれですか」

(3) 疑問文その 3（34 節）

「罪に定めようとするのはだれですか」

結論（35～39 節）

### 3. メッセージのゴール

(1) 1～8 章のまとめ

(2) 9～11 章の展望

(3) 12～16 章の準備

このメッセージは、大いなる救いを与えてくださった神を賛美するためのものである。

### イントロダクション（31 節）

「では、これらのことからどう言えるでしょう」（新改訳）

「では、これらのことについて何と言ったらよいだろうか」（新共同訳）

1. 「これらのこと」とは何か。

- (1) 1～8 章全体か
- (2) 直前の文脈か
- (3) すべて、信仰により、恵みによって与えられたものである。

2. ロマ 8 章に書かれていた祝福を列挙する。

- (1) 私たちは、神の養子とされた（15 節）。

「あなたがたは、人を再び恐怖に陥れるような、奴隷の霊を受けたのではなく、子としてくださる御霊を受けたのです。私たちは御霊によって、『アバ、父』と呼びます」

- (2) 私たちは、キリストとの共同相続人とされた（17 節）。

「もし子どもであるなら、相続人でもあります。私たちがキリストと、栄光をともに受けるために苦難をともにしているなら、私たちは神の相続人であり、キリストとの共同相続人です」

- (3) 救いの保証として御霊を受けた（23 節）。

「そればかりでなく、御霊の初穂をいただいている私たち自身も、心の中でうめきながら、子にさせていただくこと、すなわち、私たちのからだの贖われることを待ち望んでいます」

- (4) 聖霊の執りなしがある（26 節）。

「御霊も同じようにして、弱い私たちを助けてくださいます。私たちは、どのように祈ったらよいかわからないのですが、御霊ご自身が、言いようもない深いうめきによって、私たちのためにとりなしてください」

- (5) 罪の赦しと栄化の保証が与えられている（30 節）。

「神はあらかじめ定めた人々をさらに召し、召した人々をさらに義と認め、義と認めた人々にはさらに栄光をお与えになりました」

3. 真理は私たちを自由にし、私たちを賛美する民に変える。

I. 疑問文その 1（31～32 節）

1. 31 節 a

「神が私たちの味方であるなら、だれが私たちに敵対できるでしょう」

(1) 特に、試練に会ったときに発する疑問である。

(2) 神は私たちの側についておられる。

①神+私（たった一人でも）＝多数

②つまり、私たちに敵対できる人（もの）は存在しないということ。

## 2. 32 節

「私たちすべてのために、ご自分の御子をさえ惜しまずに死に渡された方が、どうして、御子といっしょにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがありましょう」

(1) 背景にあるのは、アブラハムがイサクを捧げた出来事である。

①創 22：12

「御使いは仰せられた。『あなたの手を、その子に下してはならない。その子に何もしてはならない。今、わたしは、あなたが神を恐れることがよくわかった。あなたは、自分の子、自分のひとり子さえ惜しまないでわたしにささげた』」

②創 22：16

「これは【主】の御告げである。わたしは自分にかけて誓う。あなたが、このことをなし、あなたの子、あなたのひとり子を惜しまなかったから、」

③「ひとり子」

\*アブラハムとイサクは、同じ本質を持っていた。

\*父なる神とイエスは、同じ本質を持っている。

(2) 「惜しまずに」は、「フェイドマイ」という動詞である。

①LXX の訳では、創 22：12 と 16 の「惜しまないで」が「フェイドマイ」である。

②イサクは死なずに済んだが、イエスは死なれた。

(3) ラビ的議論である。大から小への議論。

①大は、ご自分の御子をさえ惜しまれなかった。

②小は、すべてのものを、私たちに恵んでくださる。

\*「すべてのもの」とは、被造の世界すべて。

(4) 「ご自分の御子をさえ惜しまずに死に渡された」

①日本語訳はすべて「死に渡された」となっている。

②原文では、「渡された」だけで、「死」という言葉は補足である。

③この補足によって、意味が狭められたのは残念である。

④ヨハ 3：16 との関連で、「渡された」という言葉を理解する。

「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである」

(5) 私たちの神は、その本質において「与える神」である。

## II. 疑問文その 2 (33 節)

### 1. 33 節 a

「神に選ばれた人々を訴えるのはだれですか」

(1) 「訴える」は、エンカレオウという動詞である。

①これは法廷用語である。

②時制は、未来形である。

③想定されているのは、終わりの日の裁きである。

(2) この訴えは、違法な訴えである。

①もし私たちが訴える人（もの）がいたとしても、それは違法な訴えである。

### 2. 33 節 b

「神が義と認めてくださるのです」

(1) 「神」（セオス）という言葉が連続して出てくる文章構造である。

①「神」の強調がある。

②神が選び、神が義とされる。

(2) 33 節は、ロマ 1～5 章の義認のまとめである。

①神は、いわば最高裁である。

②それ以上の裁判所はない。

## III. 疑問文その 3 (34 節)

### 1. 34 節 a

「罪に定めようとするのはだれですか」

(1) それはキリストですか、という言葉が隠されている。

## 2. 34 節 b

「死んでくださった方、いや、よみがえられた方であるキリスト・イエスが、神の右の座に着き、私たちのためにとりなしていてくださるのです」

(1) キリストが私たちを罪に定めるはずがない。

(2) キリスト・イエスの実態

①死んでくださった。

②よみがえられた。

③神の右の座（栄光の座）に着いている。

④私たちのために執りなしをしておられる。

\*聖霊は私たちの心の中にあって、執りなしをしておられる。

\*キリストは栄光の座で、執りなしをしておられる。

(3) これは、ロマ 6～8 章のまとめである。

## 結論（35～39 節）

### 1. 35～36 節

「私たちをキリストの愛から引き離すのはだれですか。患難ですか、苦しみですか、迫害ですか、飢えですか、裸ですか、危険ですか、剣ですか。『あなたのために、私たちは一日中、死に定められている。私たちは、ほふられる羊とみなされた。』と書いてあるとおりです」

(1) 苦難のリストその 1

①「だれが」とあるが、必ずしも人ではない。

②「なにが」ではなく、「だれが」と言った理由

\*擬人法（苦難は現実的なものである）

\*苦難は「人格的存在」から発せられるものである。

(2) 試練は神の民の普遍的な経験である。

①詩 44 : 22 の引用

(3) 「患難」という言葉は、大患難時代を思わせる。

### 2. 37 節

「しかし、私たちは、私たちを愛してくださった方によって、これらすべてのことの中にあっても、圧倒的な勝利者となるのです」

(1) 苦難を免れるという約束ではない。

(2) 約束の内容

① 苦難の「中にあっても」

② 「私たちを愛してくださった方によって」

③ 「圧倒的な勝利者」：この言葉が結論である。

### 3. 38～39 節

「私はこう確信しています。死も、いのちも、御使いも、権威ある者も、今あるものも、後に来るものも、力ある者も、高さも、深さも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません」

(1) 苦難のリストその 2

① ひとつひとつの意味を探るよりも、パウロの精神を味わうことが大切。

(2) 構造

① 第 1 のペア：「死、いのち」 この世で味わうもの。

② 第 2 のペア：「御使い、権威ある者」 霊界の存在。

③ 第 3 のペア：「今あるもの、後に来るもの」 時間的要因。

④ 単独の言葉：「力ある者」 天使や悪霊

⑤ 第 4 のペア：「高さ、深さ」 空間的要因。

⑥ 総まとめ：「そのほかのどんな被造物」 残りのものを拾い上げている。

(3) 私たちを神の愛から引き離すものは、被造世界に存在しない。

## メッセージの結論

### 1. 1～8 章のまとめ

(1) 義認

(2) 聖化

(3) 栄化

### 2. 9～11 章の展望

- (1) 神の義がテーマである。
- (2) イスラエルの救いはまだ成就していない。
- (3) 神の義は、イスラエルに関しては揺らいでいる。
- (4) パウロは、神の義を弁護するために、イスラエルの救いに言及する。
  - ①反ユダヤ的神学の巧妙さ
  - ②ロマ 9～11 章を忠実に解説する人でも、無意識的に反ユダヤ的神学に立つことが多い。

### 3. 12～16 章の準備

- (1) 教理の後に、適用が来る。
- (2) 神の義の実践と、神の義の伝達である。

## 「拒否の現実（1）ーイスラエル人の 7 つの特権ー」

### 1. はじめに

#### （1）福沢諭吉の「福翁自伝」

- ①豊前（ぶぜん）国下毛（しもげ）郡中津（現 大分県中津市）
- ②中津藩の下級武士出身
- ③幕末から明治にかけての、民主主義者、啓蒙家の第一人者となった。
- ④パウロとの共通点がある。

#### （2）ロマ書 9～11 章の扱いについて

- ①省略する（置換神学の立場。教会は新しいイスラエルであると考える）。
- ②軽視する（これは挿入句的なものである）。
- ③神が 3 章も使って啓示しておられる内容が軽いものであるはずがない。

#### （3）ロマ書全体の中での 9～11 章の位置づけ

### 2. 1～8 章の復習

#### （1）序言（手紙の紹介）：1：1～17

- ①パウロの自己紹介
- ②福音は、先ずユダヤ人に、そして異邦人に。

#### （2）義認（過去形の救い）：1：18～5：21

- ①神の義の規準
- ②すべての人は神の義から外れている。
  - \*野蛮な異邦人
  - \*文化的な異邦人
  - \*ユダヤ人
- ③神は、信仰と恵みによる義認を用意してくださった。

#### （3）聖化（現在進行形の救い）：6：1～8：18

- ①聖化もまた、信仰により恵みによる。
- ②聖化は聖霊に業である。

#### （4）栄化（未来形の救い）：8：19～39

- ①摂理は私たちを聖化へと導く。



②キリスト・イエスにある神の愛から私たちを引き離すものはない。

### 3. 9～11 章の展開

(1) 本来ならば、「神の義の適用」（12～15 章）に進むはず。

①パウロ書簡の特徴は、先ず教理、そして実践の順である。

②理解せずして、神の愛に応答することは不可能である。

③聖書研究の重要性がここにある。

(2) パウロは、当然の疑問に答えようとしている。

①イスラエル人に対する神の愛は、どうなったのか。

②9～11 章は、「イスラエル人に関する神の義」の弁護である。

③きょうの箇所は、「イスラエル人の 7 つの特権」を扱っている。

### 4. アウトライン

(1) パウロの悲しみ（1～3 節）

(2) イスラエル人の 7 つの特権（4～5 節）

①子とされる

②栄光

③契約（複数形）

④律法を与えられること

⑤礼拝

⑥約束（複数形）

⑦先祖たち（族長たち）

### 5. メッセージのゴール

(1) 誤解①

(2) 誤解②

(3) 誤解③

このメッセージは、イスラエルの特権について学ぶものである。

## I. パウロの悲しみ（1～3 節）

### 1. 1～2 節

「私はキリストにあって真実を言い、偽りを言いません。次のことは、私の良心も、聖霊によってあかししています。私には大きな悲しみがあり、私の心には絶えず痛みがあります」

(1) 真実な告白

- ①「キリストにあって」：キリストは真理そのもの。
- ②「真実を言い」、「偽りを言いません」：同じ意味の繰り返し
- ③パリサイ派の伝統：2、3 の証人の口による証言が必要。

＊私の良心（キリストにある良心）

＊聖霊（内住の聖霊）

(2) 告白の内容

- ①大きな悲しみがある。
- ②絶えず痛みがある。
- ③同胞の救いに関する痛みである。

2. 3 節

「もしできることなら、私の同胞、肉による同国人のために、この私がキリストから引き離されて、のろわれた者となることさえ願いたいのです」

(1) 「もしできることなら」

- ①これは不可能な願いである。
- ②キリスト・イエスにある神の愛から切り離されることはない。

(2) 「私の同胞、肉による同国人のために」

- ①パウロが感じている痛みは、人類一般に対してではない。
- ②同国人、つまり、ユダヤ人のための痛みである。

(3) 「のろわれた者」

- ①「神から見捨てられた者」（新共同訳）
- ②ギリシア語では「アナテマ」である。
- ③ヘブル語の「ヘレム」を LXX では「アナテマ」という言葉に訳した。
- ④ヨシ 6：17

「この町と町の中のすべてのものを、【主】のために聖絶しなさい。ただし遊女ラハブと、その家に共にいる者たちは、すべて生かしておかなければならない。あの女は私たちの送った使者たちをかくまってくれたからだ」

## Ⅱ. イスラエル人の 7 つの特権 (4～5 節)

ロマ 3：1～2

「では、ユダヤ人のすぐれたところは、いったい何ですか。割礼にどんな益があるのですか。それは、あらゆる点から見て、大いにあります。第一に、彼らは神のいろいろなおことばをゆだねられています」

ロマ 9：4～5

「彼らはイスラエル人です。子とされることも、栄光も、契約も、律法を与えられることも、礼拝も、約束も彼らのものです。父祖たちも彼らのものです。またキリストも、人としては彼らから出られたのです。このキリストは万物の上にあり、とこしえにほめたたえられる神です。アーメン」

(1) 1～8 章では、「ユダヤ人」という呼び名が使用されていた。

①民族的なアイデンティティを示す言葉である。

(2) 9～11 章では、「イスラエル」が 12 回出てくる。

①ユダヤ人は 2 回だけ (9：24、10：12)。

②イスラエルとは、神との契約関係を示す言葉である。

③イスラエル人の特権は、すべてこの契約関係を土台としたものである。

### 1. 子とされる

(1) 出 4：22

「そのとき、あなたはパロに言わなければならない。【主】はこう仰せられる。『イスラエルはわたしの子、わたしの初子である』」

①イスラエルは民族的に「神の子」とされている。

②クリスチャンは、個人的に「神の子」とされている。

(2) ホセ 11：1

「イスラエルが幼いころ、わたしは彼を愛し、わたしの子をエジプトから呼び出した」

(3) この関係は、今も壊れていない。

①イザ 63：16

②エレ 3：17～19、31：9、20

## 2. 栄光

### (1) 出 13：20～21

「【主】は、昼は、途上の彼らを導くため、雲の柱の中に、夜は、彼らを照らすため、火の柱の中にいて、彼らの前を進まれた。彼らが昼も夜も進んで行くためであった。昼はこの雲の柱、夜はこの火の柱が民の前から離れなかった」

#### ① シャカイナグローリー

### (2) シャカイナグローリーの現れ

#### ① 荒野

#### ② 幕屋

#### ③ 神殿

#### ④ メシアであるイエス

## 3. 契約（複数形）

### (1) 神がイスラエルと結んだ 4 つの無条件契約

#### ① アブラハム契約

#### ② 土地の契約

#### ③ ダビデ契約

#### ④ 新しい契約

### (2) 無条件という意味

① これらの契約は、イスラエルの不信実によって破棄されるものではない。

② 今も有効である。

## 4. 律法を与えられること

### (1) シナイ契約とモーセの律法

#### ① 出 19：16～20：1

### (2) これは条件付き契約である。

① 神の民に生活の指針を与えた。

② キリストの十字架によって、その要求は満たされたので、今は廃棄された。

## 5. 礼拝

### (1) 「神への奉仕」とも訳せる。

① ギリシア語で「ラトレイア」である。

②神への最大の奉仕は、礼拝である。

(2) レビ記の規定

①祭司職

②幕屋

③いけにえのささげ物

6. 約束（複数形）

(1) メシア預言

①初臨

②再臨

(2) メシア的王国の預言

①人類一般に対する約束

②特に、イスラエル人に対する約束

7. 先祖たち（族長たち）

(1) 申 10：15

「【主】は、ただあなたの先祖たちを恋い慕って、彼らを愛された。そのため彼らの後の子孫、あなたがたを、すべての国々の民のうちから選ばれた。今日あるとおりである」

①アブラハム、イサク、ヤコブのことである。

(2) キリストとの関係

①人間としては、族長たちから出た。つまり、ユダヤ人である。

②キリストは、万物の上にある。

③とこしえにほめたたえられる神である。

## 結論

1. イスラエルの救いに関する誤解

(1) 7つの特権は、彼らに救いを与えるものではない。

(2) キリストに対する信頼がなければ、これらの特権は無意味である。

## 2. 神の愛に関する誤解

(1) パウロの悲しみと痛みは、理性ではなく、心で受け止める必要がある。

①彼は、裏切り者としていつも攻撃にさらされた。

②しかし、彼の本当の姿はそうではない。

(2) モーセの祈りが背景にある（出 32：31～32）。

「そこでモーセは【主】のところに戻って、申し上げた。『ああ、この民は大きな罪を犯してしまいました。自分たちのために金の神を造ったのです。今、もし、彼らの罪をお赦しくだされるものなら——。しかし、もしも、かないませんなら、どうか、あなたがお書きになったあなたの書物から、私の名を消し去ってください』」

①民はモーセを信用しなかった。

②しかし、彼の本当の姿はそうではない。

(3) イエスはエルサレムのために涙された（ルカ 19：41～42）。

「エルサレムに近くなったころ、都を見られたイエスは、その都のために泣いて、言われた。『おまえも、もし、この日のうちに、平和のことを知っていたのなら。しかし今は、そのことがおまえの目から隠されている』」

①イスラエルの不信仰は、神に責任があるのではなく、彼ら自身の問題である。

②神は、裁く時に涙しておられる。

## 3. イスラエルの役割に関する誤解

(1) 神の国の原則：後の者が先になり、先の者が後になる。

(2) 将来、イスラエルの救いは成就する。

①もしイスラエルが見放されたとするなら、私たちの救いも不安定なものとなる。

(3) イスラエルの救いは、キリストの再臨の条件である。

①再臨信仰を持つ者は、イスラエルの救いのために祈るべきである。

## 「拒否の現実(2)―2つのイスラエル―」

### 1. はじめに

#### (1) ロマ書 9～11 章の扱いについて

- ①省略する（置換神学の立場。教会は新しいイスラエルであると考ええる）。
- ②軽視する（これは挿入句的なものである）。
- ③神が 3 章も使って啓示しておられる内容が軽いものであるはずがない。

#### (3) ロマ書全 9～11 章で、パウロはイスラエルに関する神の義の弁護をしている。

### 2. 文脈の確認

#### (1) 前回の内容（9：1～5）

- ①パウロの悲しみ（1～3 節）
- ②イスラエル人の 7 つの特権（4～5 節）
  - \*子とされる
  - \*栄光
  - \*契約（複数形）
  - \*律法を与えられること
  - \*礼拝
  - \*約束（複数形）
  - \*先祖たち（族長たち）

#### (2) こういう特権が与えられているのに、イスラエルはメシアを拒否した。

- ①神の約束、計画は、挫折したのではないか。
- ②これは、私たちにとっても重大問題である（100%でなければ信頼できない）。
- ③この疑問に、パウロは答える。

### 3. アウトライン

- (1) 2つのイスラエル（6 節）
- (2) アブラハムの 2 人の息子（7～9 節）
- (3) イサクの 2 人の息子（10～13 節）

### 4. メッセージのゴール（適用）

- (1) 現代の教会について
- (2) 救いについて

(3)使命について

このメッセージは、2つのイスラエルについて学ぶものである。

I. 2つのイスラエル（6 節）

1. 6 節 a

「しかし、神のみことばが無効になったわけではありません」

(1)「しかし」

- ①1～5 節で述べたことへの疑問
- ②では、神のことばは効力を失ったのか。
- ③パウロはそれに答える。

(2)「神のみことばが無効になったわけではありません」

- ①「無効になる」は、ギリシア語で「エクピプトウ」である。
- ②コースから外れる。

(3)聖書の用例（非常に絵画的な言葉で、意味の広がりを感じる）

①ヤコ 1：11 （草花が枯れる）

「太陽が熱風を伴って上って来ると、草を枯らしてしまいます。すると、その花は落ち、美しい姿は滅びます。同じように、富んでいる人も、働きの最中に消えて行くのです」

②使 12：7 （鎖が外れる）

「すると突然、主の御使いが現れ、光が牢を照らした。御使いはペテロのわき腹をたたいて彼を起こし、『急いで立ち上がりなさい』と言った。すると、鎖が彼の手から落ちた」

③ガラ 5：4 （恵みから落ちる）

「律法によって義と認められようとしているあなたがたは、キリストから離れ、恵みから落ちてしまったのです」

④使 27：26 （打ち上げられる。漂流する）

「私たちは必ず、どこかの島に打ち上げられます」



## 2. 6 節 b

「なぜなら、イスラエルから出る者がみな、イスラエルなのではなく、」

### (1) 「なぜなら」

①神のことは今も有効であることの理由を、これから説明しようとしている。

### (2) 「イスラエルから出る者がみな、イスラエルなのではなく、」

①ここからパウロは、神の選びについて説明する。

②その説明が、11 章の終わりまで続く。

③ロマ書 9～11 章が難解に感じる理由

\*パウロの主張が論理的に理解し難いわけではない。

\*「神の選び」という教理に反発を感じるのである。

### (3) 2 つのイスラエル

①「イスラエルから出る者」とは、民族的イスラエル。

\*彼らは、アブラハム、イサク、ヤコブの子孫である。

②「イスラエルなのではなく」とは、霊的イスラエル。

③よくある誤解

\*イスラエルと教会の区別ではない。

\*イスラエルと異邦人の区別でもない。

④民族としてのイスラエルの中に、少数の信仰のあるイスラエルが存在する。

\*肉体的にイスラエル人であれば受ける祝福もある。

\*しかし、霊的祝福（救い）は、信仰のあるイスラエル人にのみ与えられる。

⑤信仰のあるイスラエルの呼称

\*霊的イスラエル

\*神のイスラエル（ガラ 6：16）

\*レムナント（残りの者）

\*まことのイスラエル人（ヨハ 1：47）

## II. アブラハムの 2 人の息子(7～9 節)

### 1. 7～8 節

「アブラハムから出たからといって、すべてが子どもなのではなく、『イサクから出る者があなたの子孫と呼ばれる』のだからです。すなわち、肉の子どもがそのまま神の子どもではなく、約束の子どもが子孫とみなされるのです」

(1) 創 21：12 の引用

「すると、神はアブラハムに仰せられた。『その少年と、あなたのはしためのことで、悩んではならない。サラがあなたに言うことはみな、言うとおりに聞き入れなさい。イサクから出る者が、あなたの子孫と呼ばれるからだ』

- ①アブラハムの子孫と言う呼び名は、イサクから出る者に与えられる。
- ②その背後には、神の選びがある。

(2) アブラハム契約を継承するのは、ひとりである。

- ①肉の子どもではない。
- ②約束の子どもである。

2. 9 節

「約束のみことばはこうです。『私は来年の今ごろ来ます。そして、サラは男の子を産みます』」

(1) 創 18：10 の引用

- ①イサクは、アブラハムの肉の子であると同時に、約束の子です。

(2) イシュマエルとイサクは、同じ父親から生まれた異母兄弟である。

- ①神は、女奴隷の息子ではなく、正妻の息子を選ばれたのか、という疑問がわく。
- ②もしそうなら、神の選びは血筋によって影響されたことになる。
- ③その誤解を解くために、パウロは次の例を取り上げる。

### Ⅲ. イサクの 2 人の息子(10～13 節)

1. 10 節

「このことだけでなく、私たちの父イサクひとりによってみごもったリベカのこともあります」

「それだけではなく、リベカが、一人の人、つまりわたしたちの父イサクによって身ごもった場合にも、同じことが言えます」(新共同訳)

(1) 同じ父と、同じ母から誕生した 2 人の息子の場合

- ①エサウとヤコブ
- ②しかも彼らは、双子であった。
- ③神の選びが、より鮮明に証明される。

## 2. 11～12 節

「その子どもたちは、まだ生まれてもおらず、善も悪も行わないうちに、神の選びの計画の確かさが、行いにはよらず、召してくださる方によるようにと、『兄は弟に仕える』と彼女に告げられたのです」

### (1) 創 25：23 からの引用

① アブラハム契約の祝福は、イサク、ヤコブと継承される。

### (2) 神の計画の確実性

① 誕生前から、行いによらずに、神の選びがあった。

## 3. 13 節

『わたしはヤコブを愛し、エサウを憎んだ』と書いてあるとおりです」

### (1) マラ 1：2～3 の引用

① 「愛し」、「憎む」を誤解してはならない。

(例話) 求道中に通った教会でのメッセージ。エサウのような人は神に憎まれる。

② 「憎む」とは、感情ではなく、理性的判断である。選びからもれたということ。

③) メシア的約束の継承者は、ひとりの息子である。

④ 神は主権によって、弟のヤコブを選ばれた。

### (2) 聖書の歴史を振り返ると、神の選びによって少数の者が選ばれたことが分かる。

① イシュマエルではなく、イサクが選ばれた。

② エサウではなく、ヤコブが選ばれた。

③ 肉のイスラエルの中から、霊的イスラエルが選ばれた。

④ 神の約束が無効になったわけではない。

## 結論

### 1. 現代の教会について

#### (1) 普遍的教会と地域教会の違い

① 普遍的教会とは、ペンテコステから携挙までの間に救われる人の総体である。

② 地域教会とは、各地に存在する信者の集合体である。

#### (2) 地域教会の問題点

① イスラエル全体の中に、霊的イスラエルが存在していた。

② 地域教会には、真の信仰者とそうでない者が混在している。

- ③ちょうど、イスラエル全体と霊的イスラエルの関係のようである。
- ④教会籍を持っていることは、救いの保証ではない。

(3) 私たちへのチャレンジ

- ①信仰のオーナーシップを回復する。
- ②主との生きた関係を保持し続けているかどうか、問題である。

2. 救いについて

- (1) アブラハム、イサク、ヤコブの子孫というだけでは救われない。
  - ①クリスチャンホームに生まれ、育ったというだけでは救われない。
- (2) 行いによっては義とされない。
  - ①誕生の前から、神の選びがある。

(3) ヨハ 1：12～13

「しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった。この人々は、血によってではなく、肉の欲求や人の意欲によってでもなく、ただ、神によって生まれたのである」

- ①血によってではない。
- ②肉の欲求や人の意欲によってでもない。
- ③神によって生まれた。
- ④その名を信じるとは、神の選びに対して霊的に応答することである。

3. 使命について

- (1) 選びには、使命が伴っている。
  - ①イスラエルはそれを理解しなかった。
- (2) 選びには、苦難が伴う。
  - ①預言者たちの例
  - ②パウロの例
  - ③何よりも、メシアの例
  - ④そして、私たちも。

### 「拒否の現実（3）—神の選び—」

#### 1. はじめに

##### （1）ロマ書 9 の文脈

- ①イスラエル人は 7 つの特権を与えられているがメシアを拒否した（1～5 節）。
- ②しかし、イスラエル人の一部しか救われていないのは、神の計画である。

＊2 つのイスラエル（6 節）

＊アブラハムの 2 人の息子（7～9 節）

＊イサクの 2 人の息子（10～13 節）

##### （2）きょうの箇所

- ①神の選び（予定説）に関する人間の側からの疑問がある。

＊前回のメッセージの後で、質問を受けた。

- ②パウロは 2 つの質問を想定している。

＊「神に不正があるのですか」（14 節）

＊「それなのになぜ、神は人を責められるのですか」（19 節）

- ③パウロは明らかに「神の選び」を教えている。

＊それゆえ、こういう質問が出る。

＊前回のメッセージも、「神の選び」を語ったので、同じ質問が出た。

- ④ロマ書 9～11 章の難しさは、知的なものというよりは、感情的なものである。

##### （3）私たちの取るべき態度（イザ 55：8～9）

「わたしの思いは、あなたがたの思いと異なり、わたしの道は、あなたがたの道と異なるからだ。——【主】の御告げ——天が地よりも高いように、わたしの道は、あなたがたの道よりも高く、わたしの思いは、あなたがたの思いよりも高い」

#### 2. アウトライン

##### （1）前半（14～18 節）

- ①質問その 1

- ②回答

##### （2）後半（19～29 節）

- ①質問その 2

- ②例話による叱責

- ③例話の適用

④まとめ

3. メッセージのゴール（適用）

- (1) 神の選びの必要性
- (2) 伝道と祈りの役割
- (3) 信者への励まし

このメッセージは、神の選び（予定説）について学ぶものである。

I. 前半（14～18 節）

1. 質問その 1（14 節 a）

「それでは、どういうことになりますか。神に不正があるのですか」

(1) 「それでは、どういうことになりますか」

- ①パウロは、反論するための質問を出すときは、こういう言い方をする。
- ②「神の選び」の教理に反発を感じる人を想定している。

(2) 不正（不義）であると感じる理由

- ①人間の性質や行為に関係なしに、神の選びがある。
- ②イスラエルの中に少数の選ばれたレムナントが存在する。
- ③ヤコブは選ばれたが、エサウは選ばれなかった。公平ではない。

2. 回答

(1) 14 節 b

「絶対にそんなことはありません」

①ギリシア語で最も強い否定形。「メイ・ゲノイト」

(2) 15～16 節

「神はモーセに、『わたしは自分のあわれむ者をあわれみ、自分のいつくしむ者をいつくしむ』と言われました。したがって、事は人間の願いや努力によるのではなく、あわれんでくださる神によるのです」

①出 33：19 の引用

「主は仰せられた。『わたし自身、わたしのあらゆる善をあなたの前に通らせ、【主】の名で、あなたの前に宣言しよう。わたしは、恵もうと思う者を恵み、あわれもうと思う者をあわれむ』」

\*モーセは神の栄光を見ることを願った。

\*岩の裂け目に入れられ、主の手によって守られた。

\*シャカイナグローリーの残影を見ることができた。

②神には、自分の御心を行う権利がある。

③イスラエルの中からレムナントだけが選ばれたのは、神の主権による。

### (3) 17～18 節

「聖書はパロに、『わたしがあなたを立てたのは、あなたにおいてわたしの力を示し、わたしの名を全世界に告げ知らせるためである』と言っています。こういうわけで、神は、人をみこころのままにあわれみ、またみこころのままにかたくなにされるのです」

#### ①出 9：16 の引用

「それにもかかわらず、わたしは、わたしの力をあなたに示すためにあなたを立てておく。また、わたしの名を全地に告げ知らせるためである」

②【主】が語っているのに、「聖書は」とある。ユダヤ人にとって説得力がある。

③あの歴史的な状況の中で、あのパロが立てられた。

\*人間的に、歴史上の説明をすることは可能である。

\*しかし、聖書の視点からは、神の計画があったということ。

④2 つの目的があった。

\*神の力を示すため。パロがかたくなになったので、10 の災害が下った。

\*御名を全地に告げ知らせるため（ヨシ 2：8～11 参照）

### (4) 以上の 2 つの例からの結論

①モーセはあわれみを受け、パロはかたくなにされた。

②だからと言って、パロの責任を免除しているわけではない。

\*彼自身がかたくなになった（最初は出 7：13～14、最後は 9：34～35）。

## II. 後半（19～29 節）

### 1. 質問その 2（19 節）

「すると、あなたはこう言うでしょう。『それなのになぜ、神は人を責められるのですか。だれが神のご計画に逆らうことができましょう』」

#### (1) 人間の側からの質問

①パウロはこの質問には直接答えないで、この質問をする態度を問題にする。

②創造主と人間の間を思い出させている。

## 2. 例話による叱責（20～21 節）

「しかし、人よ。神に言い逆らうあなたは、いったい何ですか。形造られた者が形造った者に対して、『あなたはなぜ、私をこのようなものにしたのですか』と言えるでしょうか。陶器を作る者は、同じ土のかたまりから、尊いことに用いる器でも、また、つまらないことに用いる器でも作る権利を持っていないのでしょうか」

（1）イザ 29：16

「ああ、あなたがたは、物をさかさに考えている。陶器師を粘土と同じにみなしてよかろうか。造られた者が、それを造った者に、『彼は私を造らなかった』と言い、陶器が陶器師に、『彼はわからずやだ』と言えようか」

（2）イザ 45：9

「ああ。陶器が陶器を作る者に抗議するように自分を造った者に抗議する者。粘土は、形造る者に、『何を作るのか』とか、『あなたの作った物には、手がついていない』などと言うであろうか」

（3）この例話は、神と人間の間を正常化させるのに役立つ。

## 3. 例話の適用（22～23 節）

「ですが、もし神が、怒りを示してご自分の力を知らせようと望んでおられるのに、その滅ぼされるべき怒りの器を、豊かな寛容をもって忍耐してくださったとしたら、どうでしょうか。それも、神が栄光のためにあらかじめ用意しておられたあわれみの器に対して、その豊かな栄光を知らせてくださるためなのです」

（1）ロマ 3：11 で、すべての人は罪人であることを学んだ。

「悟りのある人はいない。神を求める人はいない」

①人は罪人であるので、かたくなになっている。

②パロの例もそれと同じである。

（2）神は、滅ぼされるべき怒りの器に対して、豊かな寛容をもって忍耐された。

（3）あわれみの器は、神によって選ばれた。

①もし神の選びがなかったら、すべての人は滅びたのである。

## 4. まとめ（24～29 節）



(1) 24 節

「神は、このあわれみの器として、私たちを、ユダヤ人の中からだけでなく、異邦人の中からも召してくださったのです」

①ユダヤ人信者だけでなく、異邦人信者も神の選びを受けた。

(2) 25～26 節

「それは、ホセアの手紙でも言っておられるとおりです。『わたしは、わが民でない者をわが民と呼び、愛さなかった者を愛する者と呼ぶ。『あなたがたは、わたしの民ではない』と、わたしが言ったその場所で、彼らは、生ける神の子どもと呼ばれる』」

①ホセ 2：23 と 1：10 からの引用

②ラビ的引用法

＊文字通りの解釈と適用

＊本来はイスラエルに関する預言である。

＊それを、異邦人の救いに適用している。

(3) 27～29 節

「また、イスラエルについては、イザヤがこう叫んでいます。『たといイスラエルの子どもたちの数は、海べの砂のようであっても、救われるのは、残された者である。主は、みことばを完全に、しかも敏速に、地上に成し遂げられる』。また、イザヤがこう預言したとおりです。『もし万軍の主が、私たちに子孫を残されなかったら、私たちはソドムのようになり、ゴモラと同じものとされたであろう』」

①イザ 10：22～23 と 1：9 からの引用

②神の計画は、レムナントを通して実行される。

③ユダヤ人が滅亡しなかったのは、レムナントが存在していたからである。

④ユダヤ人にメシアを伝えることは、イスラエルという国を守ることになる。

## 結論

### (1) 神の選びの必要性

①神の主権と人間の自由意志の問題は、常に私たちの理性を揺さぶるテーマである。

②両方のことが教えられているので、両方を受け入れるしかない。

③神の選びに関しては、それがなければ誰も救われないということを覚えておく。

④すべての人は、罪人である。

＊アダムの罪責

＊原罪

**\*個人的罪**

⑤聖書は、2重予定を教えていない。

**\*滅びに予定されている人がいるとは教えていない。**

**(2)伝道と祈りの役割**

①神の予定があるなら、伝道と祈りの役割はどこにあるのか。

②神は、人が救われる方法も予定しておられる。

③運命論（predeterminism）と予定論（predestination）とは違う。

④福音伝達と、聖徒の祈りによって、人は救われる。

⑤1 コリ 1：21

「事実、この世が自分の知恵によって神を知ることがないのは、神の知恵によるのです。それゆえ、神はみこころによって、宣教のことばの愚かさを通して、信じる者を救おうと定められたのです」

**(3)信者への励まし**

①使 18：9～10

「ある夜、主は幻によってパウロに、『恐れなくて、語り続けなさい。黙ってはいけない。わたしがあなたとともにいるのだ。だれもあなたを襲って、危害を加える者はない。この町には、わたしの民がたくさんいるから』と言われた」

②救いに予定されている人がいるから、福音を語る。

③過剰な責任感から解放される。

④日本のような収穫の少ない宣教地でも、働きを継続する意欲が湧いてくる。

## 「拒否の理由（1）一民のつまずき」

### 1. はじめに

#### （1）ロマ書 9 の文脈

- ①イスラエル人は7つの特権を与えられているがメシアを拒否した（1～5 節）。
- ②しかし、イスラエル人の一部しか救われていないのは、神の計画である。
- ③神は、権威をもって救われる人たちを選んでおられる。

＊陶器師と陶器の関係

＊滅ぼされるべき怒りの器が、あわれみの器とされた。

＊神の選びがなければ、すべての人が滅びる。

＊ユダヤ人だけでなく、異邦人の中からも「あわれみの器」となる者が出た。

#### （2）きょうの箇所

- ①前回は、イスラエルの拒否の理由を、神の視点から解説した。

＊神の主権による選び

- ②今回は、イスラエルの拒否の理由を、人間の視点から解説する。

＊人間の側の責任

### 2. アウトライン

#### （1）パラドックス①（30 節）

「逆説」「矛盾」のこと

#### （2）パラドックス②（31 節）

#### （3）2つの石（32～33 節）

### 3. メッセージのゴール（適用）

- （1）初代教会時代のメシアニック・ジューの信仰告白
- （2）少数の人しか救われない理由

このメッセージは、少数の人しか救われない理由について、学ぼうとするものである。

## I. パラドックス①（30 節）

### 1. 30 節

「では、どういうことになりますか。義を追い求めなかった異邦人は義を得ました。すな

わち、信仰による義です」

(1) 「では、どういうことになりますか」

①9：14 では、2 つの質問を導き出すための言葉であった。

②ここでは、2 つのパラドックスを引き出すための言葉となっている。

(2) 「義を追い求めなかった異邦人は義を得ました。すなわち、信仰による義です」

①異邦人は、ユダヤ人のように律法を持たなかった。

②つまり、自分たちの生活を導く義の規準がなかったということである。

③それゆえ、律法を行うことによって義を得るという考え方はなかった。

④「義」とは「義認」のこと。神との正しい関係に置かれるということ。

⑤その異邦人が、義を得た。

⑥それは、信仰による義である。

2. 人は、信仰により、恵みによって、救われる。

(1) それ以外の付加物はない。

①神が罪人を受け入れる方法は、律法の行いではない。

②神が、ご自身と罪人の間に橋を架け、救いの道を用意された。

③その救いの道を信仰によって受け入れることが、義認の方法である。

(2) 自らの罪の深さを認識しない限り、神の方法を受け入れることはない。

## Ⅱ. パラドックス② (31 節)

1. 31 節

「しかし、イスラエルは、義の律法を追い求めながら、その律法に到達しませんでした」

(1) 「しかし」

①異邦人の場合と対照的

(2) 「イスラエルは、義の律法を追い求めながら、その律法に到達しませんでした」

①律法に熱心な民

②イエスの時代のユダヤ教：口伝律法の存在

③パウロもまた、パリサイ人のひとりとして律法に熱心であった。

④しかし、彼らは律法が要求する義の規準には到達しなかった。

⑤最初から、律法は救いのために与えられていたわけではない。

(3) 異邦人とユダヤ人の関係の説明（例話）

- ①ハイテク機器を備えて金鉱探索を行うが、発見できない。ユダヤ人のこと。
- ②酔いどれ男が、石につまずいて倒れ、偶然金鉱を発見する。異邦人のこと。

### Ⅲ. 2つの石（32～33 節）

#### 1. 32 節 a

「なぜでしょうか。信仰によって追い求めることをしないで、行いによるかのように追い求めたからです」

(1) 「なぜでしょうか」

- ①なぜユダヤ人は、律法が教える義の規準に到達しなかったのか。

(2) 「信仰によって追い求めることをしないで、行いによるかのように追い求めたからです」

「なぜですか。イスラエルは、信仰によってではなく、行いによって達せられるかのように、考えたからです」（新共同訳）

- ①ユダヤ人には、義認に関する誤解があった。
- ②いつの時代でも、救いは、信仰による。

#### 2. 32 節 b～33 節

「彼らは、つまずきの石につまずいたのです。それは、こう書かれているとおりです。『見よ。わたしは、シオンに、つまずきの石、妨げの岩を置く。彼に信頼する者は、失望させられることがない』」

(1) 「彼らは、つまずきの石につまずいたのです」

- ①行い重視の態度の中に、すでに、メシアを不要とする姿勢が存在している。
- ②「つまずきの石」とは、メシア（キリスト）のことである。

(2) 「それは、こう書かれているとおりです。『見よ。わたしは、シオンに、つまずきの石、妨げの岩を置く。彼に信頼する者は、失望させられることがない』」

- ①「つまずきの石」と「妨げの岩」
- ②ともに、キリストのことである。

#### 3. イザヤ書からの2つの引用

(1) イザ 8：14

「そうすれば、この方が聖所となられる。しかし、イスラエルの二つの家には妨げの石とつまずきの岩、エルサレムの住民にはわなとなり、落とし穴となる」

①「つまずきの岩」と「つまずきの石」

＊キリストのこと

＊イメージとしては、ぶつかったならこちらが破壊される巨大な岩。

②「妨げの石」と「妨げの岩」

＊キリストのこと

＊ギリシア語で「スカンダロン」。

＊スキャンダル（醜聞）の語源。

＊英語訳は「rock of offence」である。

＊ユダヤ人はつまずきだけでなく、気分を害する、立腹する、傷つく。

(2) イザ 28：16

「だから、神である主は、こう仰せられる。『見よ。わたしはシオンに一つの石を礎として据える。これは、試みを経た石、堅く据えられた礎の、尊いかしら石。これを信じる者は、あわてることがない』」

①メシアに関する別の呼称

＊「試みを経た石」

＊「堅く据えられた礎の、尊いかしら石」

＊これは、建物を建てる時に最初に置く礎石である。

②メシアを信じる者は、失望することがない。

4. 以上のことは、ユダヤ人とクリスチャンの対比ではない。

(1) 信仰のないユダヤ人にとって

①キリストは「つまずきの石」、「妨げの岩」。

(2) 信仰のあるユダヤ人にとって

①キリストは「尊いかしら石」。

## 結論

### 1. 初代教会時代のメシアニック・ジューの信仰告白

#### 1 ペテ 2：4～10

「主のもとに來なさい。主は、人には捨てられたが、神の目には、選ばれた、尊い、生け

る石です。あなたがたも生ける石として、霊の家に築き上げられなさい。そして、聖なる祭司として、イエス・キリストを通して、神に喜ばれる霊のいけにえをささげなさい。なぜなら、聖書にこうあるからです。『見よ。わたしはシオンに、選ばれた石、尊い礎石を置く。彼に信頼する者は、決して失望させられることがない』。したがって、より頼んでいゝあなたがたには尊いものですが、より頼んでいない人々にとっては、『家を建てる者たちが捨てた石、それが礎の石となった』のであって、『つまずきの石、妨げの岩』なのです。彼らがつまずくのは、みことばに従わないからですが、またそうなるように定められていたのです。しかし、あなたがたは、選ばれた種族、王である祭司、聖なる国民、神の所有とされた民です。それは、あなたがたを、やみの中から、ご自分の驚くべき光の中に招いてくださった方のすばらしいみわざを、あなたがたが宣べ伝えるためなのです。あなたがたは、以前は神の民ではなかったのに、今は神の民であり、以前はあわれみを受けない者であったのに、今はあわれみを受けた者です」

(1) 旧約聖書の引用

①イザ 28：16

②詩 118：22

(2) 救われた者の使命は、祭司としてのそれである。

①これはパウロの使命意識と重なる。

②異邦人に福音を伝えることは、パリサイ派のユダヤ人にとっては異端である。

2. 少数の人しか救われない理由（人間の側から見た）

(1) ユダヤ人に関しては、現在も同じ状態が続いている。

①もし、この岩につまずかないなら、その人はメシアニック・ジューである。

②信じるかどうかの問題は、最終的には人間の側のプライドの問題に帰結する。

(2) クリスチャン人口（世界で最大の信者を擁する宗教）

①2002 年の集計で約 20.4 億人

（カトリック約 10.8 億人、プロテスタント諸派計約 3.5 億人、正教会約 2.2 億人、その他教派約 3.9 億人）

②イスラム教徒 11 億人

③ヒンドゥー教徒 10.5 億人

④真に救われている人の人数は、これよりもはるかに低いと思われる。

(3) ユダヤ人に言えることは、異邦人にも言える。

①日本人にも律法がある。儒教の教え、武士道、共同体意識などなど。

②誠実であればあるほど、救いから遠くなる危険性がある。

③人間関係において徳であることを、神との関係に持ち込むことの危険性。

補足：福音の3要素について

質問：

先生はいつも「福音の三要素」という言い方をされており、イエス様が「私たちの罪のために死なれたこと」、「葬られたこと」、「よみがえられたこと」と教えておられます。実はこれを聴くたびに私は若干の違和感を感じてしまいます。といいますのは、私は福音の二要素というふうに学んできましたし、長年人々にもそう伝えてきたからです。二要素というのは「イエス様が私たちの罪のために死なれ、葬られたこと」そして、「よみがえられて弟子たちにあらわれてくださったこと」です。なぜなら、三要素というからにはそれぞれの要素にはほぼ対等といえるほどの重要性があるべきと思うのです。イエス様の死と復活にはそれぞれとてつもないほどの意味があります。しかしイエス様の葬りはもちろん大切なことではあるけれども、死と復活ほどには重要性を見い出せないのではないのでしょうか。また、日本語聖書の表現も「聖書の示す通り」との言葉に続いて「死」と「葬り」が記され、もう一度「聖書の示す通り」と繰り返されてから「よみがえられたこと」と「現れたこと」となっています。

回答：

1 コリ 15 : 3~4

「私があなたがたに最もたいせつなこととして伝えたのは、私も受けたことであつて、次のことです。キリストは、聖書の示すとおりに、私たちの罪のために死なれたこと、また、葬られたこと、また、聖書の示すとおりに、三日目によみがえられたこと、また、ケパに現れ、それから十二弟子に現れたことです」

(1)同意する点

①埋葬は、死の証拠である。

②目撃証人の存在は、復活の証拠である。

③「聖書の示すとおりに」という言葉は、2回しか出てこない。

(2)考慮すべき点

①埋葬の重要性

\*十字架にかけられた犯罪人は、通常は埋葬されない。

\*イエスの場合は、例外的なことが起こった。

\*アリマタヤのヨセフの存在と、ピラトの心情。これは恩赦である。

②埋葬の預言

\*イザ 53 : 9



「彼は不法を働かず／その口に偽りもなかったのに／その墓は神に逆らう者と共にされ／富める者と共に葬られた」（新共同訳）

\*詩 16：8～11

「私はいつも、私の前に【主】を置いた。【主】が私の右におられるので、私はゆるぐことがない。それゆえ、私の心は喜び、私のたましいは楽しんでいる。私の身もまた安らかに住まおう。まことに、あなたは、私のたましいをよみに捨ておかず、あなたの聖徒に墓の穴をお見せにはなりません。あなたは私に、いのちの道を知らせてくださいます。あなたの御前には喜びが満ち、あなたの右には、楽しみがとこしえにあります」

\*これは、使徒 13：35 でメシアの復活の預言とされている（ステパノのメッセージ）。

\*パウロが、イエスは「聖書の示すとおりに」埋葬されたと考えていたことは明白。

\*もし埋葬が起ころなかったら、イエスはメシアではなかったことになる。

③埋葬は、死のゴールではなく、復活の始まりである。

\*マタ 27：52

「また、墓が開いて、眠っていた多くの聖徒たちのからだが生き返った」

\*埋葬に関して、内容のあるメッセージを語ることは可能である。

④イエスを「死んで、また生きた方」と言い、埋葬に言及しないのは、それが福音の要素ではなく、イエスを描写しているから、

## 「拒否の理由（2）一的外れの熱心さ」

### 1. はじめに

#### (1) ロマ書 9 の文脈

- ①イスラエル人は7つの特権を与えられているがメシアを拒否した（1～5 節）。
- ②しかし、イスラエル人の一部しか救われていないのは、神の計画である。
- ③神は、権威をもって救われる人たちを選んでおられる。
- ④イスラエルの拒否の理由は、彼らの頑なさにある。

＊神の主権による選び

＊人間の側の責任

#### (2) きょうの箇所では、神の義についての無知が取り上げられている。

- ①頑なさは、無知から来ている。
- ②重要であるが、難解な箇所が出てくる。

### 2. アウトライン

- (1) パウロの願い（1～2 節）
- (2) 律法による義（3～5 節）
- (3) 信仰による義（6～11 節）

### 3. メッセージのゴール（適用）

- (1) パウロの回心
- (2) 「イエスは主なり」という告白

このメッセージは、ユダヤ人の拒否の理由を学ぼうとするものである。

## I. パウロの願い（1～2 節）

### 1. 1 節

「兄弟たち。私が心の望みとし、また彼らのために神に願い求めているのは、彼らの救われることです」

#### (1) パウロの個人的願望が表明されている。

- ①ロマ 9：1 と同じ。

#### (2) パウロは、同胞の救いを望み、そのために祈っている。

- ①神の選びの教理を取り扱う際には注意が必要である。
- ②その教理は、救われている者には、さらなる確信を与えるものである。
- ③しかし、人間の側の責任を無視してはならない。
- ④神の神秘（誰が救われるか分からない）によって、伝道と祈りの意欲が制限されてはならない

## 2. 2 節

「私は、彼らが神に対して熱心であることをあかしします。しかし、その熱心は知識に基づくものではありません」

- (1) パウロは自らを証人にしている。
  - ①彼自身が、かつてパリサイ派に属していた。
  - ②目撃者の証言である。
- (2) ユダヤ人たちは、神に対して熱心である。
  - ①「熱心に神に仕えている」（新共同訳）
  - ②つまり彼らは、神についての知識を有している。
  - ③その熱心さが、パウロの痛みの原因となっている。
- (3) しかし、その熱心は知識に基づくものではない。
  - ①知識 「グノーシス」
  - ②ここでの知識は、「エピグノーシス」
  - ③「この熱心さは、正しい認識に基づくものではありません」（新共同訳）
  - ④「その熱心は深い知識によるものではない」（口語訳）
  - ⑤神に関する知識を持っていたが、キリストにあって神を知ることはなかった。
- (4) ホセ 4：6

「わたしの民は知識がないので滅ぼされる。あなたが知識を退けたので、わたしはあなたを退けて、わたしの祭司としない。あなたは神のおしえを忘れたので、わたしもまた、あなたの子らを忘れよう」
- (5) 人は、熱心さや誠実さだけで救われるのではない。

（例話）モルモンの家庭にホームステイした。

## Ⅱ. 律法による義（3～5 節）

### 1. 3 節

「というのは、彼らは神の義を知らず、自分自身の義を立てようとして、神の義に従わなかったからです」

(1) 彼らは、神の義について無知であった。

①パウロが、1～8 章で論じてきた内容である。

②神は、信仰と恵みによって、人を義としてくださる。

(2) 彼らは、自分自身の義を立てようとした。

①律法を行うことによる義である。

(3) 自分自身の義を立てることは、神の義を拒否することである。

(例話) マサダのケーブルカー（登れる山だと思ふ人、自分の足に自信のある人）

### 2. 4 節

「キリストが律法を終わらせられたので、信じる人はみな義と認められるのです」

(1) 彼らは、4 節の真理について無知であった（非常に難解な聖句である）。

「キリストは、すべて信じる者に義を得させるために、律法の終りとなられたのである」(口語訳)

「キリストは律法の目標であります、信じる者すべてに義をもたらすために」(新共同訳)

(2) 「テロス」というギリシア語が問題

①「終わり」という意味。その場合は、「律法の終わり」となる。

②「目標（ゴール）」という意味。その場合は、「律法の目標」となる。

③両方の意味があると考えてよい。

\*キリストは、律法の要求をすべて満たし、それを終わらせた。

\*律法が与えられた目的は、人をキリストに導くためである。

(3) ユダヤ人たちは、その両方を見失った。

①つまり、信仰による義を受け入れなかったということ。

### 3. 5 節

「モーセは、律法による義を行う人は、その義によって生きる、と書いています」

(1) 律法による義が不可能であることを証明するために、レビ記を引用する。

「あなたがたは、わたしのおきてとわたしの定めを守りなさい。それを行う人は、それによって生きる。わたしは【主】である」（レビ 18：5）

- ①「それを行う人は、それによって生きる」
- ②行わなかったなら、生きられない。
- ③律法を完全に行うことは不可能である。

(2) 律法による義が不可能なら、信仰による義しか救いの道は残されていない。

### Ⅲ. 信仰による義（6～11 節）

#### 1. 6～7 節

「しかし、信仰による義はこう言います。『あなたは心の中で、だれが天に上るだろうか、と言ってはいけない』。それはキリストを引き降ろすことです。また、『だれが地の奥底に下るだろうか、と言ってはいけない』。それはキリストを死者の中から引き上げることです」

(1) この聖句は、信仰の義について、説明している。

(2) 申 30：11～13

「まことに、私が、きょう、あなたに命じるこの命令は、あなたにとってむずかしすぎるものではなく、遠くかけ離れたものでもない。これは天にあるのではないから、『だれが、私たちのために天に上り、それを取って来て、私たちに聞かせて行わせようとするのか』と言わなくてもよい。また、これは海のかなたにあるのではないから、『だれが、私たちのために海のかなたに渡り、それを取って来て、私たちに聞かせて行わせようとするのか』と言わなくてもよい」

①この箇所は、神の義は近くにあることを教えている。

\*天に上って、それを取って来る必要はない。

\*海のかなたに渡り、それを取って来る必要はない。

(3) パウロは、この聖句をキリストに適用している。

- ①神の義を得るために、天に上ったり、地の奥底に下ったりする必要はない。
- ②神の義は、人間の業とは無関係に与えられるからである。
- ③キリストはすでに、地上に下られた（受肉）。
- ④キリストはすでに、よみがえられた（復活）。
- ⑤人間の側で何かを付け加える必要はない。

## 2. 8 節

「では、どう言っていますか。『みことばはあなたの近くにある。あなたの口にあり、あなたの心にある』。これは私たちの宣べ伝えている信仰のことばのことです」

### (1) 申 30：14 の引用

- ①神の義は、すぐ近く、手を伸ばせば届くところにある。
- ②口で告白し、心で信じるのが神の義を得る方法である。
- ③これが、パウロが伝えている「信仰のことば」（福音）である。

## 3. 9～10 節

「なぜなら、もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせてくださったと信じるなら、あなたは救われるからです。人は心に信じて義と認められ、口で告白して救われるのです」

### (1) 極めて重要な聖句である。

### (2) 交差対句法（chiasm）

- ①口で告白し→心で信じる
- ②心に信じて→口で告白して
- ③告白と信じることが、同時に起こっている。

### (3) 信仰の内容

- ①「神はイエスを死者の中からよみがえらせてくださった」ということ
- ②復活は、イエスの教えと行いとが、すべて真理であることを証明する。

### (4) 告白の内容

- ①「イエスは主なり」ということ。

## 4. 11 節

「聖書はこう言っています。『彼に信頼する者は、失望させられることがない』」

### (1) イザ 28：16

「だから、神である主は、こう仰せられる。『見よ。わたしはシオンに一つの石を礎として据える。これは、試みを経た石、堅く据えられた礎の、尊いかしら石。これを信じる者は、あわてることがない』」

- ①信仰だけが救いの条件である。

## 結論

### 1. パウロの回心

(1) 同胞たちの今の状態は、かつての自分と同じ。

- ①神に仕えることに熱心である。
- ②その熱心さは、正しい知識に基づくものではない。
- ③熱心であるがゆえに、かえって、神の義を拒否している。

(2) パウロは、ダマスコ途上で復活のキリストと出会った。

使 9：3～8

「ところが、道を進んで行って、ダマスコの近くまで来たとき、突然、天からの光が彼を巡り照らした。彼は地に倒れて、『サウロ、サウロ。なぜわたしを迫害するのか』という声を聞いた。彼が、『主よ。あなたはどなたですか』と言うと、お答えがあった。『わたしは、あなたが迫害しているイエスである。立ち上がって、町に入りなさい。そうすれば、あなたのしなければならないことが告げられるはずです』。同行していた人たちは、声は聞こえても、だれも見えないので、ものも言えずに立っていた。サウロは地面から立ち上がったが、目は開いていても何も見えなかった。そこで人々は彼の手を引いて、ダマスコへ連れて行った」

使 9：17～19a

「そこでアナニヤは出かけて行って、その家に入り、サウロの上に手を置いてこう言った。『兄弟サウロ。あなたの来る途中、あなたに現れた主イエスが、私を遣わされました。あなたが再び見えるようになり、聖霊に満たされるためです』。するとただちに、サウロの目からうろこのような物が落ちて、目が見えるようになった。彼は立ち上がって、バプテスマを受け、食事をして元気づいた」

(3) パウロはこの体験を同胞にもして欲しいと願った。

### 2. 「イエスは主なり」という告白

(1) 初代教会の信者たちの告白

1 コリ 12：3

「ですから、私は、あなたがたに次のことを教えておきます。神の御霊によって語る者はだれも、『イエスはのろわれよ』と言わず、また、聖霊によるのでなければ、だれも、『イエスは主です』と言うことはできません」

(2) 主とは「キュリオス」である。

- ①LXX では、ヤハウエをギリシア語のキュリオスと訳した（6000 回以上）。
- ②旧約聖書に慣れ親しんだユダヤ人信者たちは、イエスをキュリオスと呼んだ。
- ③直訳すれば、「イエスはヤハウエである」という信仰告白になる。

(3) 聖書的キリスト論

- ①キリストの人間性と神性が告白されている。
- ②イエスは、全知全能の神ご自身である。



### 「拒否の理由（3）—2つの誤解—」

#### 1. はじめに

##### （1）ロマ書 9～10 章の文脈

- ①イスラエル人は7つの特権を与えられているがメシアを拒否した（1～5 節）。
- ②しかし、イスラエル人の一部しか救われていないのは、神の計画である。
- ③神は、権威をもって救われる人たちを選んでおられる。
- ④イスラエルの拒否の理由は、彼らの頑なさにある。

＊神の選びと人間の側の責任

- ⑤イスラエルの頑なさは、神の義についての無知から来ている。

##### （2）きょうの箇所

- ①ぼたんの掛け違い
- ②3 つのぼたん
  - ＊神の義
  - ＊救いを受ける人
  - ＊伝道の必要性

#### 2. アウトライン

- （1）第 1 の誤解：救いを受ける人（12～13 節）
- （2）第 2 の誤解：宣教の必要性（14～21 節）

#### 3. メッセージのゴール（適用）

- （1）異邦人信者の役割
- （2）神とイスラエルとの契約

このメッセージは、ユダヤ人の拒否の理由を学ぼうとするものである。

#### I. 第 1 の誤解：救いを受ける人（12～13 節）

##### 1. ユダヤ人だけが救われるという誤解

- （1）選民としてのプライドがあった。
  - ①ユダヤ人の 7 つの特権
  - ②律法が与えられているのは、ユダヤ人だけ。
  - ③割礼も同じ。

(2) 異邦人には律法も割礼も与えられていない。

①神はユダヤ人のみを救う。

（例話）西壁でのユダヤ人との会話。異邦人にはイエス・キリストがいる。

## 2. 12 節

「ユダヤ人とギリシヤ人との区別はありません。同じ主が、すべての人の主であり、主を呼び求めるすべての人に対して恵み深くあられるからです」

(1) この節の冒頭に、「ガー」（なぜなら、because）という接続詞が付いている。

①11 節の理由を説明している。

(2) 「ユダヤ人とギリシヤ人との区別はありません」

①ギリシア人とは、異邦人のこと。

②「区別」とは「差異」「違い」のこと。

③両者の差異は今も存在する。

④これは、「義認の方法に関しては」という意味である。

⑤パウロは、選民意識を持ったユダヤ人に対して、驚くべきことを語っている。

(3) 主のご性質からそう言える。

①主とはイエス・キリストのことである。

②イエス・キリストは、すべての人の主である。

③イエス・キリストは、信仰を告白するすべての人を恵みによって救われる。

## 3. 13 節

「『主の御名を呼び求める者は、だれでも救われる』のです」

(1) この節の冒頭にも、「ガー」（なぜなら、because）という接続詞が付いている。

①12 節の理由を説明している。

②ヨエ 2：32 の引用

(2) 「主の御名を呼び求める」

①「主の御名」とは、ヘブル的には主ご自身のことである。

②「呼び求める」とは、「信仰により、救いを求めて祈る」ことである。

(3) ペテロはペンテコステメッセージ（使 2：21）で、ヨエ 2：32 を引用している。

①この預言をイエス・キリストに適用している。

②使徒たちは、旧約聖書を用いて伝道メッセージを語った。

## Ⅱ. 第 2 の誤解：宣教の必要性（14～21 節）

1. 異邦人は救われないのだから、宣教の必要はないという誤解。

(1) 預言者ヨナの例

(2) 使 11：1～3

「さて、使徒たちやユダヤにいる兄弟たちは、異邦人たちも神のみことばを受け入れた、ということを耳にした。そこで、ペテロがエルサレムに上ったとき、割礼を受けた者たちは、彼を非難して、『あなたは割礼のない人々のところに行って、彼らといっしょに食事をした』と言った」

2. 14～15 節

「しかし、信じたことのない方を、どうして呼び求めることができるでしょう。聞いたことのない方を、どうして信じることができるでしょう。宣べ伝える人がなくて、どうして聞くことができるでしょう。遣わされなくては、どうして宣べ伝えることができるでしょう。次のように書かれているとおりです。『良いことの知らせを伝える人々の足は、なんとつばでしょう』」

(1) 4つの修辭的質問が、鎖の輪のようにつながっている。

①質問ではなく、強調である。その通りということ。

(2) 4つの否定文として読む。

①「信じたことのない方を、呼び求めることはできない」

②「聞いたことのない方を、信じることはできない」

③「宣べ伝える人がいなくては、聞くことはできない」

④「遣わされなくては、宣べ伝えることはできない」

(3) イザ 52：7

「良い知らせを伝える者の足は山々の上にあつて、なんと美しいことよ。平和を告げ知らせ、幸いな良い知らせを伝え、救いを告げ知らせ、『あなたの神が王となる』とシオンに言う者の足は」

①バビロン捕囚からの解放を告げる使者がここでのテーマ

②この聖句を、福音の使者に適用している。

- ③「りっぱな足」、「美しい足」（口語訳）、「美しい足」（新共同訳）
- ④「足」は、その人物全体を指す。

(4) ユダヤ人たちを弁護する質問

- ①ユダヤ人たちは、福音を聞く機会がなかったのではないか。
- ②聞いていたとしても、理解ができなかったのではないか。
- ③これらの質問に対する回答が、16～21 節に出てくる。

3. 16～17 節

「しかし、すべての人が福音に従ったものではありません。『主よ。だれが私たちの知らせを信じましたか』とイザヤは言っています。そのように、信仰は聞くことから始まり、聞くことは、キリストについてのみことばによるのです」

(1) 「すべての人が福音に従ったものではありません」

- ①信じた人は非常に少ないということの、婉曲的表現である。
- ②これは、ユダヤ人のことを言っている。

(2) イザ 53：1

「私たちの聞いたことを、だれが信じたか。【主】の御腕は、だれに現れたのか」

(3) 新約時代

①ヨハ 12：37～38

「イエスが彼らの目の前でこのように多くのしるしを行われたのに、彼らはイエスを信じなかった。それは、『主よ。だれが私たちの知らせを信じましたか。また主の御腕はだれに現されましたか』と言った預言者イザヤのことばが成就するためであった」

- ②パウロの時代も、信じたのは少数であった。

(4) 「信仰は聞くことから始まり、聞くことは、キリストについてのみことばによるのです」

- ①救いの方法の再確認
- ②聞くことが信仰の始まりである。信仰には、信じるための内容が必要である。
- ③「キリストについてのみことば」とは、福音のメッセージのことである。

4. 18 節

「でも、こう尋ねましょう。『はたして彼らは聞こえなかったのでしょうか』。むろん、そ

うではありません。『その声は全地に響き渡り、そのことばは地の果てまで届いた』

(1) ユダヤ人たちは、聞いていた。

①詩 19：4 の引用

＊一般啓示のこと

②詩 19：7～11

「【主】のみおしえは完全で、たましいを生き返らせ、【主】のあかしは確かで、わきまのない者を賢くする。【主】の戒めは正しくて、人の心を喜ばせ、【主】の仰せはきよくて、人の目を明るくする。【主】への恐れはきよく、とこしえまでも変わらない。【主】のさばきはまことであり、ことごとく正しい。それらは、金よりも、多くの純金よりも好ましい。蜜よりも、蜜蜂の巣のしたたりよりも甘い。また、それによって、あなたのしもべは戒めを受ける。それを守れば、報いは大きい」

＊特別啓示のこと

(2) パウロがこの手紙を書いた頃、離散の地のユダヤ人に福音が伝えられていた。

#### 5. 19～20 節

「でも、私はこう言いましょう。『はたしてイスラエルは知らなかったのでしょうか』。まず、モーセがこう言っています。『わたしは、民でない者のことで、あなたがたのねたみを起こさせ、無知な国民のことで、あなたがたを怒らせる』。またイザヤは大胆にこう言っています。『わたしは、わたしを求めない者に見いだされ、わたしをたずねない者に自分を現した』」

(1) イスラエルは、理解できたはずである。

(2) モーセが言っている。申 32：21

①「民でない者」、「無知な国民」とは、異邦人のこと。

②律法を持たない異邦人でも信じている。イスラエルに理解できないはずがない。

＊これは、大から小の議論である。

(3) イザヤが言っている。イザ 65：1

①イスラエルが心を頑なにしたので、神は異邦人にご自身を表された。

#### 6. 21 節

「またイスラエルについては、こう言っています。『不従順で反抗する民に対して、わたしは一日中、手を差し伸べた』」

(1) イザ 65：2 の引用

- ①神は、イスラエルを見捨てておられない。
- ②今も、イスラエルが立ち返るのを待っておられる。

## 結論

### 1. 異邦人信者の役割

(1) 伝道の必要性

- ①13 節から 15 節の動詞を、逆に並べてみると、宣教の順序が分かる。
- ②遣わされる→宣べ伝える→聞く→信じる→呼び求める→救われる。
- ③神は、ご自分のしもべたちを通して人を救いに導く。
- ④ユダヤ人たちの場合は、聞く/信じる、の間に鎖が切れている。
- ⑤現代のユダヤ人たちは、遣わされる/宣べ伝える、の間に鎖が切れている。
- ⑥私たちの宣教は、どうなっているか。

(2) ユダヤ人伝道の必要性

- ①19 節は、申 32：21 の引用であった。
- ②このテーマは、ロマ 11：11～14 で展開される。
- ③異邦人信者の役割は、ユダヤ人にねたみを起こさせることである。

### 2. 神とイスラエルとの契約

(1) 神がイスラエルを見捨てない理由は、アブラハム契約にある。

(2) これは、無条件契約である。

- ①イスラエルが失敗しても、破棄されない。
- ②片務契約である。
- ③何をしてもいいというものではない。神の矯正的裁きが下る。

(3) 新しい契約もまた、無条件契約である。

- ①一度救われた人は、救いを失うことはない。
- ②では、何をしてもいいのか。
- ③神の矯正的裁きが下る。

## 「拒否の解決（1）ーレムナントの存在ー」

### 1. はじめに

#### （1）ロマ書 9～11 章の文脈

- ①拒否の現実：イスラエル人の一部しか救われていないのは、神の計画である。
- ②拒否の理由：イスラエルの拒否の理由は、彼らの頑なさにある。
  - \*イスラエルの頑なさは、神の義についての無知から来ている。
- ③拒否の解決：全人類の救い、またイスラエルの救いは、神の計画通りに進んでいる。

#### （2）きょうの箇所

- ①神はイスラエル人を退けたのではない。
- ②イスラエル人の全員がメシアを拒否したのではない。
- ③レムナントの存在がある。
  - \*イスラエルの残れる者
  - \*真のイスラエル
  - \*霊的イスラエル

### 2. アウトライン

- （1）パウロの例（1 節）
- （2）エリヤの例（2～4 節）
- （3）現代への適用（5～10 節）

### 3. メッセージのゴール（適用）

- （1）今日のレムナント
- （2）救いの方法

このメッセージは、ユダヤ人の拒否の解決について学ぼうとするものである。

## I. パウロの例（1 節）

### 1. 1 節 a

- 「すると、神はご自分の民を退けてしまわれたのですか。絶対にそんなことはありません
- （1）「すると」という言葉は、10：21 との関係を示している。

- ①「そこで、わたしは問う」（口語訳）
- ②「では、尋ねよう」（新共同訳）

(2) これは修辞疑問文である。

- ①ギリシア語では、「NO」という答えを期待する構文である。

(3) 「絶対にそんなことはありません」

- ①メイ・ゲノイト
- ②最も強い否定形

## 2. 1 節 b

「この私もイスラエル人で、アブラハムの子孫に属し、ベニヤミン族の出身です」

(1) パウロは、自分を例に出す。

- ①彼は教会を迫害していた。
- ②その彼が、救われた。
- ③もし神がイスラエルの民を退けたとするなら、彼もまた救われなかったはずだ。

(2) パウロの経歴

- ①イスラエル人
- ②アブラハムの子孫に属する
- ③ベニヤミン族の出身

- \*イスラエルの地で誕生した唯一の息子
- \*エルサレムはベニヤミン族の地にあった。
- \*ユダ族に最後まで忠実。
- \*最初の王サウルは、ベニヤミン族出身。
- \*紅海を渡った最初の部族（ユダヤ教の伝承）

(3) ピリ 3：5～6

「私は八日目の割礼を受け、イスラエル民族に属し、ベニヤミンの分かれの者です。きっすいのヘブル人で、律法についてはパリサイ人、その熱心は教会を迫害したほどで、律法による義についてならば非難されるところのない者です」

(4) 1 テモ 1：15～16

『キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世に来られた』ということばは、まことであり、そのまま受け入れるに値するものです。私はその罪人のかしらです。しか



し、そのような私があわれみを受けたのは、イエス・キリストが、今後彼を信じて永遠のいのちを得ようとしている人々の見本にしようと、まず私に対してこの上ない寛容を示してくださったからです」

## II. エリヤの例（2～4 節）

### 1. 2 節 a

「神は、あらかじめ知っておられたご自分の民を退けてしまわれたのではありません」

（1）神とイスラエルの関係は、「予知（foreknowledge）」による。

- ①イスラエルが反抗することを知っておられた。
- ②それにもかかわらず、イスラエルを選んだ。
- ③それゆえ、イスラエルがメシアを拒否したとしても、彼らを退けることはない。

### （2）エレ 31：37

「【主】はこう仰せられる。『もし、上の天が測られ、下の地の基が探り出されるなら、わたしも、イスラエルのすべての子孫を、彼らの行ったすべての事のために退けよう。——【主】の御告げ——』」

### 2. 2 節 b

「それともあなたがたは、聖書がエリヤに関する個所で言っていることを、知らないのですか。彼はイスラエルを神に訴えてこう言いました」

（1）「エリヤに関する箇所」

- ①「エリヤについて」（口語訳、新共同訳）
- ②ユダヤ人は、旧約聖書をパラグラフに分け、それに名称を付けた。
- ③ちなみに、2011 年 10 月 8 日はレビ記 16 章で「ヨム・キプール」という名称。
- ③「エリヤ」は、次回、2012 年 7 月 14 日に朗読される。

（2）エリヤは北王国イスラエルで活躍した預言者。

- ①バアル礼拝と戦った。
- ②カルメル山で、450 人のバアルの預言者と 400 人のアシェラの預言者と戦った。
- ③イゼベルの脅迫の恐れをなし、ベエル・シェバまで逃げた。
- ④えにしだの木の陰に座り、死を願った。

### 3. 3 節

「『主よ。彼らはあなたの預言者たちを殺し、あなたの祭壇をこわし、私だけが残されまし

た。彼らはいま私のいのちを取ろうとしています』

(1) 1 列 19：10 と 14

(2) エリヤの認識

- ①自分ひとりが、真の信仰者として残された。
- ②自分は、最後の預言者になる。

#### 4. 4 節

「ところが彼に対して何とお答えになりましたか。『バアルにひざをかがめていない男子七千人が、わたしのために残してある』

(1) 1 列 19：18

(2) レムナント（イスラエルの残れる者）という概念の誕生

- ①預言者エリヤの時代に、この概念が明確になった。
- ②エリヤの時代には、7000 人がレムナントであった。

(3) エリヤの箇所から、神がイスラエルを退けていないということが明白になった。

### Ⅲ. 現代への適用（5～10 節）

#### 1. 5～6 節

「それと同じように、今も、恵みの選びによって残された者がいます。もし恵みによるのであれば、もはや行いによるものではありません。もしそうでなかったら、恵みが恵みでなくなります」

(1) レムナントが誕生する方法は、「恵みの選び」である。

- ①人は、恵みにより、信仰によって救われる。
- ②「恵みの選び」に応答するのが、信仰である。

(2) 恵みによる方法と、行いによる方法とは、二者択一の関係にある。

- ①行いによる方法が真理であるなら、恵みが恵みでなくなる。

#### 2. 7 節

「では、どうなるのでしょうか。イスラエルは追い求めていたものを獲得できませんでした。選ばれた者は獲得しましたが、他の者は、かたくなにされたのです」

(1) イスラエルの中の 2 つのグループ

- ①律法による義を追求した者は、それを獲得することができなかった。
- ②選ばれた者は信じたので、神の義を獲得した。

(2) 信仰によって応答しないなら、その心はますます頑なになる。

- ①頑なになると、自分の霊的状态が見えなくなる。

3. 8～10 節

「こう書かれているとおりです。『神は、彼らに鈍い心と見えない目と聞こえない耳を与えられた。今日に至るまで』。ダビデもこう言います。『彼らの食卓は、彼らにとってわなとなり、網となり、つまずきとなり、報いとなれ。その目はくらんで見えなくなり、その背はいつまでもかがんでおれ』」

(1) 申 29：4

「しかし、【主】は今日に至るまで、あなたがたに、悟る心と、見る目と、聞く耳を、下さなかった」

(2) イザ 29：10

「【主】が、あなたがたの上に深い眠りの霊を注ぎ、あなたがたの目、預言者たちを閉じ、あなたがたの頭、先見者たちをおおわれたから」

(3) 詩 69：22～23

「彼らの前の食卓はわなとなれ。彼らが栄えるときには、それが落とし穴となれ。彼らの目は暗くなって、見えなくなれ。彼らの腰をいつもよろけさせてください」

(4) パウロは、旧約聖書の 3 区分（律法、預言者、諸書）から引用している。

- ①イスラエルには、レムナントと非レムナントの 2 つの流れがある。
- ②これは、昔も、今も、変わらない。
- ③神はイスラエルを退けていない。
- ④それどころか、神の計画はゴールに向かって進展しつつある。

## 結論

### 1. 今日のレムナント

- (1) レムナントは、どの時代にも存在している。

(2) レムナントは、少数である。

(3) エリヤの時代、パウロの時代、そして今も、この状態が続いている。

(4) ガラ 6：16

「どうか、この基準に従って進む人々、すなわち神のイスラエルの上に、平安とあわれみがありますように」（新改訳）

「この法則に従って進む人々の上に、平和とあわれみとがあるように。また、神のイスラエルの上にあるように」（口語訳）

①新改訳は、「この基準に従って進む人々」＝「神のイスラエル」としている。

②新共同訳も、これと同じ解釈である。

③口語訳は、異邦人信者とユダヤ人信者とを区別している。

(5) 現代のレムナントは、メシアニック・ジューたちである。

## 2. 救いの方法

(1) 律法による義ではなく、信仰と恵みによる義。

(2) 詩 69：22～23

「彼らの前の食卓はわなとなれ。彼らが栄えるときには、それが落とし穴となれ。彼らの目は暗くなって、見えなくなれ。彼らの腰をいつもよろけさせてください」

①「食卓」とは、神から霊的糧を受ける場所。

②それが、わなとなり、落とし穴となる。

③律法は、彼らに祝福をもたらすためのものであったが、わなとなった。

(3) ガラ 3：24

「こうして、律法は私たちをキリストへ導くための私たちの養育係となりました。私たちが信仰によって義と認められるためなのです」

(4) ピリ 3：7～9

「しかし、私にとって得であったこのようなものをみな、私はキリストのゆえに、損と思うようになりました。それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損と思っています。私はキリストのためにすべてのものを捨てて、それらをちりあくたと思っています。それは、私には、キリストを得、また、キリストの中にある者と認められ、律法による自分の義ではなくて、キリストを信じる信仰による義、すなわち、信仰に基づいて、神から与えられる義を持つことができる、という望みがあるからです」

(5) 日本での伝道

①救われる者は少数であるが、必ず存在する。

②日本人にとって誇りとするものが、わなとなり落とし穴となっている。

③これらのものを、キリストのゆえに、損と思う人が起こされるように祈ろう。

## 「拒否の解決（2）―異邦人の救い―」

### 1. はじめに

#### (1) 末日聖徒イエス・キリスト教会のこと

- ①今では「モルモン教」とは言わない。
- ②Church of Jesus Christ of Latter-day Saints (LDS)
- ②異端や新興宗教を信じることは、「ばくち」の世界に似ている。
- ③聖書の信仰は、文脈の中で捉える必要がある。

＊日本の伝道における人間関係の文脈

＊キリスト教を歴史観として捉えることの重要性

#### (2) ロマ書 9～11 章の文脈

- ①拒否の現実：イスラエル人の一部しか救われていないのは、神の計画である。
- ②拒否の理由：イスラエルの拒否の理由は、彼らの頑なさにある。
  - ＊イスラエルの頑なさは、神の義についての無知から来ている。
- ③拒否の解決：神の計画通りに進んでいる。
  - ＊レムナントの存在がある。イスラエル全体が拒否したのではない。

#### (3) きょうの箇所

- ①イスラエルの拒否は一時的である。
- ②やがてイスラエルは民族的救いを経験する。
- ③終末論は、イスラエルの救いを土台にして考えなければ、開かれてこない。

### 2. アウトライン

- (1) 異邦人の救いの目的（11～12 節）
- (2) パウロの異邦人伝道の目的（13～16 節）
- (3) 異邦人への警告（17～21 節）
- (4) まとめ（22～24 節）

### 3. メッセージのゴール（適用）

- (1) 異邦人信者の使命
- (2) 置換神学からの脱却

このメッセージは、異邦人の救いの目的について学ぼうとするものである。

## I. 異邦人の救いの目的（11～12 節）

### 1. 11a

「では、尋ねましょう。彼らがつまずいたのは倒れるためなのでしょうか」（新改訳）

「では、尋ねよう。ユダヤ人がつまづいたとは、倒れてしまったということなのか」

（新共同訳）

#### （1）訳の違い

①新改訳は、「目的」という意味で訳している。

②新共同訳は、「結果」という意味で訳している。こちらの方がよい。

#### （2）「彼ら」とは、大半のユダヤ人のこと。

①レムナントではない、不信仰なユダヤ人。

②ロマ 9：30～33

#### （3）「つまづいた」とは、メシアを拒否したということ。

#### （4）「倒れる」とは、決定的な失敗のこと。

①ギリシア語で「ピプトウ」という。

②再び立ち上がることのできない、修復不可能な倒れ方のこと。

### 2. 11b

「絶対にそんなことはありません。かえって、彼らの違反によって、救いが異邦人に及んだのです。それは、イスラエルにねたみを起こさせるためです」

#### （1）「絶対にそんなことはありません」

①ギリシア語で「メイ・ゲノイト」。

②英語で「God forbid」。

③神の忠実な性質から考えて、あり得ないこと。

④新約聖書に 15 回出てくる。

＊14 回がパウロによる使用

＊11 回がロマ書に出てくる。

＊3 回がガラテヤ書に出てくる。

＊修辞疑問文が多い箇所では、これは当然である。

#### （2）神の人類救済計画のステップ

- ①イスラエルの大半がメシアを拒否する。
- ②その結果、救いが異邦人に行く。
- ③イスラエルがねたみを起こし、やがて民族的救いを経験する。  
（例話）放蕩息子のたとえ話

(3)「それは、イスラエルにねたみを起こさせるためです」

- ①すでにロマ 10：19 に出ていた。  
「でも、私はこう言いましょう。『はたしてイスラエルは知らなかったのでしょうか。』まず、モーセがこう言っています。『わたしは、民でない者のことで、あなたがたのねたみを起こさせ、無知な国民のことで、あなたがたを怒らせる。』」
- ②申 32：21 からの引用
- ③ギリシア語で「パラゼイロタイ」という動詞。
  - \*パラ（そばにいる）
  - \*ゼイロタイ（嫉妬させる）

### 3. 12 節

「もし彼らの違反が世界の富となり、彼らの失敗が異邦人の富となるのなら、彼らの完成は、それ以上の、どんなにかすばらしいものを、もたらすことでしょう」

- (1) 小から大への議論がある。
- (2) 小とは、「彼らの違反が世界の富となり、彼らの失敗が異邦人の富となる」。
  - ①「彼らの違反」、「彼らの失敗」とは、メシアを拒否したこと。
  - ②「世界の富となる」とは、人類にとって益となるということ。
  - ③「異邦人の富となる」とは、異邦人が救われるということ。
- (3) 大とは、「彼らの完成」と、それがもたらす祝福のこと。
  - ①「彼らが全部救われたなら」（口語訳）
  - ②「彼らが皆救いにあずかる」（新共同訳）
  - ③ギリシア語で「プレイロウマ」。
  - ④英語で「their fulness」。
  - ⑤それがもたらす祝福とは、メシアの再臨、千年王国の成就。

## Ⅱ. パウロの異邦人伝道の目的（13～16 節）

1. 13 節

「そこで、異邦人の方々に言いますが、私は異邦人の使徒ですから、自分の務めを重んじています」（新改訳）

「では、あなたがた異邦人に言います。わたしは異邦人のための使徒であるので、自分の務めを光栄に思います」（新共同訳）

(1) 「あなたがた」という言葉に強調点がある。

① ロマ 9～11 章は、イスラエルの救いについて論じている箇所である。

② 突然パウロは、このテーマが異邦人にも関係していることを思い出させている。

(2) 「異邦人の使徒」

① 定冠詞がないので、「an apostle of Gentiles」である。

② つまり、他にも異邦人伝道をしている人がいたということ。

(3) 「自分の務めを重んじています」

① ギリシア語では「ドクサゾウ」。

② 英語では、「glorify」「praise」。

③ 彼はこの務めを、光栄に思っている。

2. 14 節

「そして、それによって何とか私の同国人にねたみを引き起こさせて、その中の幾人でも救おうと願っているのです」

(1) 異邦人の救いは、イスラエル人にねたみを起こさせる。

① 11 節と同じこと

(2) 「幾人でも」

① 今は、少数のイスラエル人しか救われない。

② イスラエルの民族的救いは、終末的出来事である。

3. 15 節

「もし彼らの捨てられることが世界の和解であるとしたら、彼らの受け入れられることは、死者の中から生き返ることではなくて何でしょう」

(1) 12 節と対句になっている。小から大への議論。

(2) 小とは

① 「彼らの捨てられること」



②これは、「世界の和解」につながる。つまり、異邦人の救いのこと。

(3) 大とは

①「彼らの受け入れられること」

②これは、「死者の中から生き返ること」につながる。

\*ユダヤ人の霊的覚醒の素晴らしさを表現している。

#### 4. 16 節

「初物が聖ければ、粉の全部が聖いのです。根が聖ければ、枝も聖いのです」

(1) 民 15：17～21 初物奉獻の規定

(2) 「初物」と「根」

①アブラハム、イサク、ヤコブ（族長たち）

②神のために選び分けられたという意味で、聖い。

(3) 「粉の全部」と「枝」

①イスラエル全体のこと

②民族的救いの根拠

### Ⅲ. 異邦人への警告（17～21 節）

#### 1. 17～18 節

「もしも、枝の中のあるものが折られて、野生種のオリーブであるあなたがその枝に混じってつがれ、そしてオリーブの根の豊かな養分をともに受けているのだとしたら、あなたはその枝に対して誇ってはいけません。誇ったとしても、あなたが根をささえているのではなく、根があなたをささえているのです」

(1) 不自然な接ぎ木

①通常は、野生種の木に栽培種の枝を接ぐ（粘土をかぶせ、布で覆う）。

②パウロの例話は、あり得ない接ぎ木である。

③異邦人の救いは、あり得ないことが起こったのだというのがパウロの論点。

④24 節 「もとの性質に反して」

(2) 例話の内容

①折られた枝とは、レムナントでないイスラエル人。

②接ぎ木された野生種の枝とは、異邦人信者。

- ③「ともに受けている」とは、レムナントとともにという意味。
- ④オリーブの木はイスラエルのことではない。イスラエルはこの木の所有者。
- ⑤この木（根の豊かな養分）は霊的祝福の源である。
  - \*アブラハム契約のこと
  - \*神がイスラエルと結んだ契約
  - \*異邦人は、アブラハム契約の祝福に接ぎ木されたのである。

(3) 例話の適用

- ①誇ってはならない。
- ②異邦人信者は、根によって支えられている。

2. 19～21 節

「枝が折られたのは、私がつぎ合わされるためだ、とあなたは言うでしょう。そのとおりです。彼らは不信仰によって折られ、あなたは信仰によって立っています。高ぶらないで、かえって恐れなさい。もし神が台木の枝を惜しまれなかったとすれば、あなたをも惜しまれないでしょう」

- (1) これは、一度救われても、その救いを失う可能性があるという教えではない。
  - ①これは、イスラエル人と異邦人の対比である。
  - ②個人の救いを論じているのではない。
- (2) この聖句から、誤った結論を出してはならない。
  - ①これは、「霊的祝福の源」から切り離されるという意味。
  - ②神の矯正的裁きが来る。
  - ③頑なな状態に放置される。

IV. まとめ (22～24 節)

1. 22 節

「見てごらんなさい。神のいつくしみときびしさを。倒れた者の上にあるのは、きびしさです。あなたの上にあるのは、神のいつくしみです。ただし、あなたがそのいつくしみの中にとどまっていればであって、そうでなければ、あなたも切り落とされるのです」

- (1) 神の性質：いつくしみときびしさのバランス
  - ①いつくしみを強調すると、普遍的救いに流れやすい。
  - ②きびしさを強調すると、喜びのないクリスチャン生活になる。

(2) イスラエルの上にある「きびしさ」を見ると、信仰に留まることの必要性を学ぶ。

## 2. 23～24 節

「彼らであっても、もし不信仰を続けなければ、つぎ合わされるのです。神は、彼らを再びつぎ合わせる事ができるのです。もしあなたが、野生種であるオリーブの木から切り取られ、もとの性質に反して、栽培されたオリーブの木につがれたのであれば、これらの栽培種のものは、もっとたやすく自分の台木につがれるはずです」

### (1) 大から小の議論

- ①大は、異邦人の接ぎ木。
- ②小は、イスラエル人の接ぎ木。

### (2) 「自分の台木」

#### ①神がイスラエルと結んだ4つの無条件契約

- \*アブラハム契約
- \*土地の契約
- \*ダビデ契約
- \*新しい契約

②彼らを押しとどめているのは、不信仰だけである。

## 結論

### 1. 異邦人信者の使命

#### (1) ユダヤ人に「ねたみ」を起こさせること

- ①クリスチャンという名称は、「メシア」と関係がある。
  - ②異邦人信者は、ユダヤ人のメシア待望を先に体験した人々である。
  - ③私たちは、メシアニック・ジャパニーズである。
  - ④米国の調査では、メシアニック・ジューの大半が異邦人の伝道で救われている。
- (例話) フルクテンバウム師の救い：Ruth Wardell の導き

(2) 教会は、ユダヤ人に「ねたみ」ではなく、「怒り」を起こさせてきた。

### 2. 置換神学からの脱却

(1) きょうの箇所には、傲慢な異邦人信者へのパウロの怒りが見える。

- ①イスラエルが不信仰に陥ったので、イスラエルを見下す異邦人がいた。
- ②彼らは、異邦人の救いこそ神の計画のクライマックスであると考えた。
- ③聖書のクライマックスは、神の計画がすべて成就し、神の栄光が現れること。

(2) 置換神学の内容

- ①イスラエルは不信仰のゆえに、契約の民としての特権を失った。
- ②旧約聖書でイスラエルに約束されていた祝福の預言は、教会が引き継いだ。
  - \*「イスラエル」という言葉を、異邦人教会に適用する。
  - \*当然、教会を「新しいイスラエル」、「霊的イスラエル」と呼ぶようになる。
- ③基本的には、反ユダヤ的神学である。
- ④もしイスラエルと結んだ契約が破棄されたとするなら、私たちの救いも破棄される可能性がある。

### 「拒否の解決（3）ーイスラエルの救いー」

#### 1. はじめに

(1) 10 月 13 日（木）の日没から仮庵の祭りが始まった。

①第 7 の月の 15 日。満月。

②満月を眺めながら、イスラエルにいる友人たちのことを思った。

③国際クリスチャン大使館（ICEJ）の呼びかけ

＊80 カ国以上から 6 千人のクリスチャンが集まった。

＊地元への経済効果は 1800 万ドル（14 億 4 千万円）にも及ぶ。

④イスラエル人への関心は、かつてなかったほどのレベルになっている。

(2) ロマ書 9～11 章の文脈

①拒否の現実：イスラエル人の一部しか救われていないのは、神の計画である。

②拒否の理由：イスラエルの拒否の理由は、彼らの頑なさにある。

＊イスラエルの頑なさは、神の義についての無知から来ている。

③拒否の解決：神の計画通りに進んでいる。

＊レムナントの存在がある。イスラエル全体が拒否したのではない。

＊イスラエルは、異邦人が救われるためにつまづいた。

(3) きょうの箇所

①ロマ書 9～11 章の結論である。

②と同時に、ロマ書の中の神学的議論の結論である。

③終末におけるイスラエルの救いが論じられる。

#### 2. アウトライン

(1) イスラエルの最終的な救い（25～29 節）

(2) 普遍的救いの原則（30～32 節）

(3) 頌栄（33～36 節）

#### 3. メッセージのゴール（適用）

(1) 異邦人に対する戒め

(2) 神学に対する戒め

このメッセージは、イスラエルの救いについて学ぼうとするものである。

## I. イスラエルの最終的な救い（25～29 節）

### 1. 25 節

「兄弟たち。私はあなたがたに、ぜひこの奥義を知っていただきたい。それは、あなたがたが自分で自分を賢いと思うことがないようにするためです。その奥義とは、イスラエル人の一部がかたくなになったのは異邦人の完成のなる時までであり、」

(1) 「なぜなら」、「というのは」という言葉が入る。ギリシア語で「ガー」。

①11：24 との接続詞になっている。

②11：25～26 で、イスラエルの最終的な救いが宣言される。

(2) 「兄弟たち。私はあなたがたに、ぜひこの奥義を知っていただきたい」

「兄弟たち、…次のような秘められた計画をぜひ知ってもらいたい」（新共同訳）

①ギリシア語で「ムステリオン」。

②カルト宗教では、秘め事を知らされることが救いであり、特権である。

③聖書では、「かつて隠されていたことが、啓示によって明らかにされたこと」。

\*内容は神秘的でなくても、難解でなくても構わない。

\*今は知られるようになったという開放性に強調点がある。

(3) 「それは、あなたがたが自分で自分を賢いと思うことがないようにするためです」

「自分を賢い者とうぬぼれないように、」（新共同訳）

①異邦人信者の中に、神の救済計画はすべて分かったと思っている人がいた。

②彼らは、うぬぼれていた。

(4) 奥義の内容は何か。

①イスラエルの救いのことではない。

\*これは、旧約聖書で預言されていた。

②イスラエルよりも先に異邦人が救われたことである。

③内容の分解

\*イスラエルは、「終末におけるイスラエルの救い」という期待を持っていた。

\*しかし、一時的なつまづきによって、救いが異邦人に及んだ。

\*しかし、最終的にはイスラエルは救われる。

(5) 「イスラエル人の一部がかたくなになったのは異邦人の完成のなる時までであり、」

- ①イスラエルのつまづきは、一部であり、一時的なものである。
- ②「異邦人の完成のなる時まで」  
「異邦人全体が救いに達するまで」（新共同訳）
- ③ギリシア語で「プレイロウマ」で、数が満ちること。
- ④救いに予定されている異邦人がすべて救われた時、イスラエルの救いが来る。
- ⑤オリーブの木に接ぎ木される異邦人の数は決まっている（16～24 節参照）。

## 2. 26 節 a

「こうして、イスラエルはみな救われる、ということです」

「こうして全イスラエルが救われるということです」（新共同訳）

### (1) 「こうして」

- ①「異邦人の完成のなる時」とは、携挙の時である。
- ②携挙の後、大患難時代が来るが、その最後にイスラエル人の救いが起こる。

### (2) 「イスラエルはみな」に関して、種々の解釈がある。

- ①「イスラエル」とは、異邦人とイスラエル人を含む言葉である。  
\*これは違う。文脈では、イスラエル人について論じている箇所である。
- ②「イスラエルはみな」とは、「ほとんどのイスラエル人」という意味である。
- ③ここを字義通りに解釈してはいけない理由はない。  
\*その時代に生きているイスラエル人全員が救われる。

### (3) 救いの方法に関する再確認

- ①異邦人もイスラエル人も同じ方法で救われる。
- ②終末時代に救われるイスラエル人も、同じ方法で救われる。
- ③「イスラエルはみな」は、不信仰のままで死んだイスラエル人を含まない。
- ④今ユダヤ人伝道をする必要がある。

## 3. 26b～27 節

「こう書かれているとおりです。『救う者がシオンから出て、ヤコブから不敬虔を取り払う。これこそ、彼らに与えたわたしの契約である。それは、わたしが彼らの罪を取り除く時である』」

### (1) 終末時代のイスラエルの救いを信じる根拠として、イザヤ書から引用する。

- ①イザ 59：20～21
- ②イザ 27：9

(2) 「救う者」

- ①英語で「Deliverer」である。解放者。
- ②大患難時代からの解放者
- ③再臨のメシア

(3) 「これこそ、彼らに与えたわたしの契約である。それは、わたしが彼らの罪を取り除く時である」

- ①エレ 31：33～34 の成就（新しい契約の成就）
- ②石の上ではなく、心に律法が書き記される時代が来る。

4. 28～29 節

「彼らは、福音によれば、あなたがたのゆえに、神に敵対している者ですが、選びによれば、父祖たちのゆえに、愛されている者なのです。神の賜物と召命とは変わることがありません」

(1) イスラエル人の現状の 2 面性

- ①福音については、イスラエル人は神に敵対している。
  - \*これは、異邦人の益となっている。
- ②選びについては、神が先祖たちと結んだ契約のゆえに、愛されている。
  - \*選びとは、民族的選びである。
  - \*先祖たちとは、族長たちのこと。
  - \*この愛は、契約に基づく愛である。
  - \*特に重要なのは、アブラハム契約である。

(2) 不変のものが 2 つある。

- ①神の賜物。これは、契約がもたらす祝福のことである。
- ②神の召命。これは、民族的選びのことである。
- ③以上の 2 つは、取り消すことができない（無条件契約のゆえ）。

## II. 普遍的救いの原則（30～32 節）

1. 30～31 節

「ちょうどあなたがたが、かつては神に不従順であったが、今は、彼らの不従順のゆえに、あわれみを受けているのと同様に、彼らも、今は不従順になっていますが、それは、あなたがたの受けたあわれみによって、今や、彼ら自身もあわれみを受けるためなのです」



(1) 非常に繊細、かつ、複雑な内容を、バランスを取りながら書いている。

①異邦人はかつて神に不従順であった。

②しかし、イスラエル人の不従順のゆえに、神のあわれみを受けた。

③それなら、今は不従順なイスラエル人も、異邦人と同じようにあわれみを受けるはずだ。

## 2. 32 節

「なぜなら、神は、すべての人をあわれもうとして、すべての人を不従順のうちに閉じ込められたからです」

「神はすべての人を不従順の状態に閉じ込められましたが、それは、すべての人を憐れむためだったのです」（新共同訳）

(1) 「すべての人」とは、すべての個人ではなく、イスラエル人と異邦人のこと。

①神は、人間の不従順を救いをもたらすための方法として用いられた。

②イスラエル人も異邦人も、信仰により、恵みによって救われる。

## Ⅲ. 頌栄（33～36 節）

### 1. 33～36 節

「ああ、神の知恵と知識との富は、何と底知れず深いことでしょう。そのさばきは、何と知り尽くしがたく、その道は、何と測り知りがたいことでしょう。なぜなら、だれが主のみこころを知ったのですか。また、だれが主のご計画にあずかったのですか。また、だれが、まず主に与えて報いを受けるのですか。というのは、すべてのことが、神から発し、神によって成り、神に至るからです。どうか、この神に、栄光がとこしえにありますように。アーメン」

(1) 神学的議論のフィナーレである。

①「神の知恵と知識」を思い、神をたたえている。

②キリスト教は啓示宗教である。

③イスラエルに対する神の計画を神の視点から理解したなら、驚嘆させられる。

(2) 実践的教えへの序曲である。

①ロマ 12～16 章に入る準備ができた。

## 結論

1. 異邦人に対する戒め

- (1) 異邦人の救いが、神の計画のクライマックスではない。
- (2) もしそうなら、ロマ書 9～11 章は不要になる。
- (3) イスラエルの救いこそ、神の計画のクライマックスである。

2. 神学に対する戒め

- (1) 神学的議論は、頌栄で終わっている。
  - ①パウロの自筆か？
  - ②神学なしの礼拝はない。
- (2) 礼拝なしの、神学はない。
  - ①神学に礼拝の要素がないなら、それは真の神学ではない。
  - ②ロマ書の中で、パウロは神の栄光をたたえてきた。

(3) 大阪月例会の 2 つのアンケート

- ①パウロの「無知でいて欲しくない」という呼びかけ（11：25）
- ②常に、「アデルフォイ」とともに
- ③聖句

\*ロマ 1：13、1 コリ 10：1、12：1、2 コリ 1：8、1 テサ 4：13

- ④「日本の霊的覚醒（目覚め）は、聖書研究から」

## 「献身の勧め（1）」

### 1. はじめに

#### (1) 前回のメッセージ

- ①神学のない礼拝はない。
- ②礼拝のない神学もない。
- ③この言葉に感動した方々が多くいた（アンケート紹介）。

#### (2) 同じ意味で、神学のない実践はない。また、実践のない神学もない。

- ①パウロ書簡の特徴は、教理、そして、適用である。
- ②エペソ書：1～3 章が教理、4～6 章が適用。
- ③ロマ書の場合
  - \*1～8 章が教理
  - \*9～11 章がイスラエルの救い
  - \*12～16 章が適用

#### (3) きょうの箇所

- ①学んだ真理を適用するための基本原則が書かれている。
- ②それ以降の具体的な行為は、すべてこの基本原則から出てくる。
- ③ロマ 12：1～2 節ほど、神学的概念が盛り込まれた箇所は他にはないと思う。
- ④きょうは 1 節だけを取り上げる。

### 2. アウトライン

- (1) 学んだ真理の復習
- (2) 真理適用の基本原則

### 3. メッセージのゴール（クリスチャンの自己認識）

- (1) キリストのしもべ
- (2) キリスト教の神髄

このメッセージは、真理適用の基本原則を学ぼうとするものである。

## I. 学んだ真理の復習

1. 接続詞に注目

「そういうわけですから、兄弟たち」（新改訳）

「こういうわけで、兄弟たち、」（新共同訳）

「兄弟たちよ。そういうわけで、」（口語訳）

（1）ギリシア語で「ウーン」、英語で「therefore」である。

①聖研では、これがキーワードとなる。

②どこまで戻って考えるべきかを、吟味する。

③9～11 章か。

④1 から 11 章が正解である。

2. 12～16 章は、神学的議論を基にした勧めである。

（1）1～8 章（神の義の神学）

①義認（過去形の救い）

②聖化（現在進行形の救い）

③栄化（未来形の救い）

「私はこう確信しています。死も、いのちも、御使いも、権威ある者も、今あるものも、後に来るものも、力ある者も、高さも、深さも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません」（8：38～39）

（2）9～11 章（イスラエルの救い）

①イスラエルはイエスを拒否した。

②しかし、神の計画が挫折したわけではない。

＊彼らがメシアを拒否することは、旧約聖書に預言されていた。

＊もし彼らがイエスを信じていたなら、イエスはメシアではないことになる。

③救いは、異邦人に及んだ。

＊ユダヤ人も異邦人も、個人的なベースで救われる時代に入った。

④最後に、イスラエルは民族的救いを経験する。

（3）以上の真理を踏まえて、適用に入る。

## II. 真理適用の基本原則（1 節）

1. パウロの勧告

「私は、神のあわれみのゆえに、あなたがたにお願いします」（新改訳）

「神の憐れみによってあなたがたに勧めます」（新共同訳）

「神のあわれみによってあなたがたに勧める」（口語訳）

(1) 「パラカロウ」という動詞が、1 節の冒頭に出てくる。

①それだけでも、この動詞が強調されていることが分かる。

②この動詞は、呼ぶ、励ます、促す、強く勧める、などの意味がある。

(2) この動詞から、「パラクレイトス」という名詞が出てくる。

①ヨハ 14：16、26、15：26、16：7

「わたしは父にお願いします。そうすれば、父はもうひとりの助け主をあなたがたにお与えになります。その助け主がいつまでもあなたがたと、ともにおられるためにです」（ヨハ 14：16）

②「助け主」＝聖霊

(3) 「パラカロウ」＝「パラ」（そば）＋「カロウ」（呼ぶ）

①ここでパウロは、聖霊の働きを実行している。

②新改訳の「あなたがたにお願いします」では、弱い。

③直訳は、「あなたがたを呼び、励まし、促し、強く勧める」となる。

## 2. 勧告の土台

(1) 「神のあわれみ」である。

(2) これは、1～11 章の要約である。

①信仰により義とされた。

②キリストにあつて数々の特権と祝福が与えられた。

③聖霊の内住が与えられた。

④神の命令に応答できる状態になった。

## 3. 勧告の内容

「あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい」（新改訳）

「自分の体を神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして献げなさい」（新共同訳）

「あなたがたのからだを、神に喜ばれる、生きた、聖なる供え物としてささげなさい」（口語訳）

(1) 献身の勧め

- ①旧約聖書の背景がある。
- ②「ささげる」は、「パラステイミ」である。
- ③七十人訳:いけにえをささげるという動詞は、「パラステイミ」と訳されている。

(2) からだを捧げる。

- ①からだは、内なる人の器である。
- ②からだは、聖霊の宮である（1 コリ 6：19～20）。
- ③自分の全存在を捧げる。

(3) 「生きた供え物」

- ①旧約時代の供え物は、死んだ動物であった。
- ②新約時代の供え物は、他の命を犠牲にしない。
- ③それは、自発的な供え物である。

(4) 「聖なる供え物」

- ①神のために選び分ち、ささげるがゆえに、それは「聖なる供え物」となる。

(5) 「神に受け入れられる」

- ①自発的な供え物であるがゆえに、神に受け入れられるのである。

4. 勧告の結論

「それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です」（新改訳）

「これこそ、あなたがたのなすべき礼拝です」（新共同訳）

「それが、あなたがたのなすべき霊的な礼拝である」（口語訳）

(1) 「霊的」、「なすべき」、「なすべき霊的な」

- ①ギリシア語で「ログコス」である。
- ②「ログス」は、言葉、理性である。
- ③「なすべき」

＊神の恵みを熟慮した結果、全的献身は理性的な結論である。

＊英語では、「reasonable」「rational」な礼拝である。

④「霊的」

＊旧約時代のいけにえは、「殺されたいけにえ」である。

＊新約時代のいけにえは、「自発的ないけにえ」である。

＊そういう意味で、これは「霊的」である。

(2) 「礼拝」

- ①ギリシア語で「ラツレイアン」である。
- ②奉仕のこと、キリストにあって行う業のすべてを指す。
- ③英語では、「service」がこれに相当する。

## 結論

### 1. キリストのしもべ（第 2 回目のメッセージ語った内容の復習）

- (1) クリスマンとしての献身は、キリストのしもべとなること。
- (2) しもべとは、ギリシア語で「デューロス」である。
  - ①奴隷のことである。
- (3) 奴隷には 2 種類あった。
  - ①自分の意志に反して奴隷となった者
  - ②自由意思に基づいて奴隷となった者
- (4) パウロが経験した 3 つのステップ
  - ①罪の奴隷から解放された。
  - ②自由の身となった。
  - ③自らの選択によって神の奴隷となった。
- (5) 「キリスト・イエスのしもべ」とは、逆説的言葉である。
  - ①最も不自由であるかに見えて、最も自由である。
  - ②最も低き所に降ろされたように見えて、最も高き所に引き上げられている。
  - ③最も弱い者になったように見えて、最も強い者にされている。
  - ④以上のことは、献身している者にだけ体験できる祝福である。

### 2. キリスト教の神髄

- (1) キリスト教の教理の中心は、「恵み」である。
- (2) キリスト教の倫理・道徳の中心は、「感謝」である。
- (3) 「恵み」も「感謝」も「カリス」というギリシア語である。

## 「献身の勧め（2）」

### 1. はじめに

#### (1) 文脈の確認

- ①神学のない礼拝はない。
- ②礼拝のない神学もない。
- ③同じ意味で、神学のない実践はない。また、実践のない神学もない。
- ④パウロ書簡の特徴は、教理、そして、適用である。
- ⑤ロマ書の場合
  - \*1～8 章が教理
  - \*9～11 章がイスラエルの救い
  - \*12～16 章が適用

#### (2) 前回のメッセージ

- ①神の恵みの理解（1～11 章）が土台
- ②自発的ささげ物をささげる。
  - \*旧約時代のささげ物は、死んだ動物の犠牲
  - \*新約時代のささげ物は、生きた聖なるささげ物
- ③自発的ささげ物は、当然の（理性的帰結としての）応答である。
- ④アンケートの紹介

#### (3) きょうの箇所

- ①ロマ 12：2 だけを取り上げる。
- ②ロマ 12：1 は、一度限りの決断。
- ③ロマ 12：2 は、継続した行動。
- ④ロマ 12：1～2 は、それ以降の行動を導く基本原則である。

### 2. アウトライン

- (1) 否定形の命令（外的要素）
- (2) 肯定形の命令（内的要素）
- (3) 命令の目標

### 3. メッセージのゴール（クリスチャンの自己認識）

- (1) 「この世」について
- (2) 「天国人」について



このメッセージは、真理適用の基本原則を学ぼうとするものである。

## I. 否定形の命令（外的要素）

### 1. 訳文の比較

「この世と調子を合わせてはいけません」（新改訳）

「あなたがたはこの世に倣ってはなりません」（新共同訳）

「あなたがたは、この世と妥協してはならない」（口語訳）

### 2. 「この世」とは何か。

(1) ギリシア語で、「コスモス」（ヨハ 3：16）ではなく、「アイオウン」。

①2001 年、総合スーパー「ジャスコ」は「イオン」に社名を変更した。

②ラテン語の「イオン」（永遠）から取られたと言われている。

③ギリシア語の中心的な意味は、「時代」である。

＊宇宙、世界のシステム、大昔、永遠などの意味もある。

### 3. 否定形の命令の内容

(1) 3 つの訳はすべて、能動態に訳している。

(2) ギリシア語は、「サスケイマチゾウ」という動詞である。

①受動態（あるいは、中間態。その行動が自分に戻ってくる）

②「この時代」が何かの行動を起こし、その影響を受けるということ。

③否定的命令形の要点は、「この時代」の要求に同意しないということ。

(3) 私訳

「この時代は、あなたがたを一定の『型』にはめようとするが、それに同意してはならない」

①時代は私たちを攻撃してくる。外からの影響。

②それに対して、パウロは、攻撃的守備を提唱している。

③そうすれば、「型」にはめられることはない。

④「サスケイマチゾウ」＝「スン」（一致）＋「スキーム」（構想、陰謀、計画）

## Ⅱ. 肯定形の命令（内的要素）

### 1. 訳文の比較

「いや、むしろ、…心の一新によって自分を変えなさい」（新改訳）

「むしろ、心を新たにしておいて自分を変えていただき、」（新共同訳）

「むしろ、心を新たにすることによって、造りかえられ、」（口語訳）

### 2. 「変える」という動詞

(1) ギリシア語で「メタモルフォウ」という動詞である。

①これは受動態である。

②新改訳はこれを能動態に訳しているが、問題あり。

＊ロマ書 7 章クリスチャンに回帰する危険性がある。

＊アンケートの中でそれを指摘した方がいる。

（例話）受動態命令形に関する私の疑問（神学校時代）

(2) 受動態命令形

①動作の主体は自分以外である。

②その主体によって自分は影響を受けるが、それに対してどういう態度を取るか。

＊否定形の場合は、それを拒否する。「この時代」に対する態度。

＊肯定形の場合は、それを受け入れる。「神」に対する態度。

③神が主体の場合、「divine passive」（神的受動態）という言葉がある。

＊聖化は、「divine passive」（神的受動態）の結果起こる祝福である。

(3) この動詞の意味

①マタ 17：2

「そして彼らの目の前で、御姿が変わり、御顔は太陽のように輝き、御衣は光のように白くなった」

②2 コリ 3：18

「私たちはみな、顔のおおいを取りのけられて、鏡のように主の栄光を反映させながら、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられて行きます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです」

③まさに変貌である。完全に変化すること。

### 3. 「心の一新によって」

(1) 「心」という名詞

- ①ギリシア語で「ヌース」。
- ②英語では「mind」であろう。
- ③知的、道徳的判断の土台になる部分。
- ④自分という車の運転席に座っている部分。

(2) 「一新」という名詞

- ①ギリシア語で「アナカイノウシス」
- ②「アナ」（再び）＋「カイノス」（新しい）

(3) 動詞の使用例

- ①2 コリ 4：16

「ですから、私たちは勇気を失いません。たとえ私たちの外なる人は衰えても、内なる人は日々新たにされています」

- ②コロ 3：9～10

「互いに偽りを言うてはいけません。あなたがたは、古い人をその行いといっしょに脱ぎ捨てて、新しい人を着たのです。新しい人は、造り主のかたちに似せられてますます新しくされ、真の知識に至るのです」

- ③パウロが使用している「アナカイノウシス」の意味が分かる。

＊神に関する知識が日々更新されること

＊それは、精神、知性、判断力の更新である。

(4) 私訳

「神に関する知識を日々更新することによって、キリストの似姿に作り変えていただきなさい」

- ①動作の主体は神である。
- ②私たちはそれを受け入れる。
- ③私たちの側の責務は、神に関する知識を日々更新することである（聖書研究）。

### Ⅲ. 命令の目標

#### 1. 訳文の比較

「神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に受け入れられ、完全であるのかをわきまえ知るために、」（新改訳）

「何が神の御心であるか、何が善いことで、神に喜ばれ、また完全なことであるかをわき

まえるようになりなさい」（新共同訳）

「何が神の御旨であるか、何が善であって、神に喜ばれ、かつ全きことであるかを、わきまえ知るべきである」（口語訳）

（1）目的か（新改訳）

（2）結果か（新共同訳）（口語訳）

## 2. 「わきまえ知る」

（1）ギリシア語では「ドキマゾウ」という動詞。

①「わきまえ知る」＝わきまえる＋知る

②試し、検証した結果、欠点がない、よいことだと、判断する。

（2）「この時代」の型から自由になっている。

## 3. 「神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に受け入れられ、完全であるのか」

（1）神の御心を知って、それを実行することが人生である。

①良いこと

②神に受け入れられること

③完全なこと

（2）神の働きかけに日々応答している人は、この判断ができるようになる。

## 結論

### 1. 「この世」について

（1）歴史の中でのある区切られた期間

①単に、墮落した世とそこに住む人々を指すのではない。

②「時代」には、哲学がある。

③世界観がある。

④信念がある。

⑤戦略がある。

⑥背後にサタンの存在がある。

（2）「モダン（近代）」から「ポストモダン（Postmodern）」へ

①近代の行詰りを克服しようとする動き

②定義は一律ではない。また、時代区分としてふさわしいのかも分からない。

③最大の違い

\*モダニズムでは自己同一性は保たれている。

\*ポストモダニズムでは自己同一性が曖昧になる。

\*「私はだれなのかが分からない」時代である。

(3) この時代の型

①同性愛、性同一性障害の問題

②家族制度、結婚関係の問題

③永遠よりも一時的な価値観を重視

2. 「天国人」について

(1) ガラ 1：4

「キリストは、今の悪の世界から私たちを救い出そうとして、私たちの罪のためにご自身をお捨てになりました。私たちの神であり父である方のみこころによったのです」

(2) ピリ 3：20

「けれども、私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます」

(3) コロ 3：2

「あなたがたは、地上のものを思わず、天にあるものを思いなさい」

(4) 一度限りの献身の決心

①「ささげる」という動詞は、アオリストである。

(5) 継続した選び

①「調子を合わせる」と「変えていただく」は、現在形である。

②聖化は、現在形である。

## 「謙遜の勧め」

### 1. はじめに

#### (1) 文脈の確認

- ①1～8 章が教理
- ②9～11 章がイスラエルの救い
- ③12～16 章が適用

#### (2) ロマ 12：1～2（それ以降の行動を導く基本原則）

- ①神の恵みの理解（1～11 章）が土台
- ②自発的ささげ物をささげる。
  - \*一度限りの決断
- ③「この時代」と戦い、精神を一新することによって、日々神に変えていただく。
  - \*日々の決断
- ④アンケートの紹介

#### (3) きょうの箇所

- ①教会内での行動（12：3～21）
- ②謙遜の勧め（3～8 節）
- ③愛の勧め（9～21 節）

### 2. アウトライン

- (1) 警告（3 節）
- (2) みからだの教理（4～5 節）
- (3) 御霊の賜物の行使（6～8 節）

### 3. メッセージのゴール

- (1) 自分の立場
- (2) 自分の能力
- (3) 自分の人生のゴール

このメッセージは、謙遜について学ぼうとするものである。

#### I. 警告（3 節）

## 1. プライドの問題

(1) 献身の生涯を妨げる最大の要因は、プライドである。

①御霊の賜物は、教会内で行使されるもの。

②御霊の賜物の行使について語る前に、謙遜について語る必要がある。

③ここでのテーマは、霊的プライドである。

(2) この箇所は、御霊の賜物の解説というよりは、その行使の方法の解説である。

## 2. 3 節 a

「私は、自分に与えられた恵みによって、あなたがたひとりひとりに言います」（新改訳）

「わたしに与えられた恵みによって、あなたがた一人一人に言います」（新共同訳）

「わたしは、自分に与えられた恵みによって、あなたがたひとりびとりに言う」（口語訳）

(1) 指導者だけでなく、すべての信徒に対する警告である。

(2) パウロの立場

①「恵み」とは、ギリシア語で「カリス」。

②「御霊の賜物」とは、ギリシア語で「カリスマ」、「カリスマタ」（複数形）。

③パウロは、「カリス」に基づいて、「カリスマタ」を論じている。

④自分に適用していない真理を論じているのではない。

(3) ロマ 1：5

「このキリストによって、私たちは恵みと使徒の務めを受けました。それは、御名のためにあらゆる国の人々の中に信仰の従順をもたらすためです」

①使徒の務めもまた、恵みである。

②「私たち」とあるのは、パウロだけではないということ。

③ローマ教会は、他の人によって設立された。

(4) ロマ 15：15～16

「ただ私が所々、かなり大胆に書いたのは、あなたがたにもう一度思い起こしてもらうためでした。それも私が、異邦人のためにキリスト・イエスの仕え人となるために、神から恵みをいただいているからです。私は神の福音をもって、祭司の務めを果たしています。それは異邦人を、聖霊によって聖なるものとされた、神に受け入れられる供え物とするためです」

## 2. 3 節 b

「だれでも、思うべき限度を越えて思い上がってはいけません。いや、むしろ、神がおのおのに分け与えてくださった信仰の量りに応じて、慎み深い考え方をしなさい」（新改訳）

「自分を過大に評価してはなりません。むしろ、神が各自に分け与えてくださった信仰の度合いに応じて慎み深く評価すべきです」（新共同訳）

「思うべき限度を越えて思いあがることなく、むしろ、神が各自に分け与えられた信仰の量りにしたがって、慎み深く思うべきである」（口語訳）

(1) 似たような言葉の繰り返しによって、謙遜の重要性を強調している。

- ①「思うべき限度」は、「フロネオウ」。
- ②「思い上がる」は、「ヒュペアフロネオウ」。
- ③「慎み深く」は、「ソウフロネオウ」。
- ④「思うべきである」は、「フロネオウ」。

(2) 意味の比較

- ①基本形は、「フロネオウ」である（2 回出ている）。
- ②自分を過大評価するのは、「ヒュペア＋フロネオウ」である。
- ③正気で自分を見るのは、「ソウフロネオウ」である。

(3) 「ヒュペロオン」という名詞

「彼らは町に入ると、泊まっている屋上の間に上がった。この人々は、ペテロとヨハネとヤコブとアンデレ、ピリポとトマス、バルトロマイとマタイ、アルパヨの子ヤコブと熱心党员シモンとヤコブの子ユダであった」（使 1：13）

- ①「屋上の間」（使 1：13）
- ②「the upper room」
- ③自分を過大評価するとは、上から目線で人を見ることである。

(4) 3 節 b の「慎み深く」は、「ソウフロネオウ」。

- ①正気になって考えなさい、という言葉である。
- ②これは、酔った状態、中毒状態を暗示している。
- ③私にとって、私が一番大事である。
- ④この状態は、「エゴホリック」である。
- ⑤パウロは、正気になれると勧告している。

## 3. 信仰もまた、賜物である。

(1) 各人に、信仰の限度容量が与えられている。



- ①信仰の強さを誇ることは、赦されない。
- ②与えられた信仰の限度容量に従って考える。

(2) ピリ 2：3

「何事でも自己中心や虚栄からすることなく、へりくだって、互いに人を自分よりもすぐれた者と思いなさい」

## II. みからだの教理（4～5 節）

### 1. 人間の体と「みからだ」（教会）の対比

- (1) 一体性（同じからだに属する）
- (2) 多様性（異なった働きがある）
- (3) 調和（愛による賜物の行使）

### 2. 4～5 節

「一つのからだには多くの器官があって、すべての器官が同じ働きはしないのと同じように、大ぜいいる私たちも、キリストにあって一つのからだであり、ひとりひとり互いに器官なのです」

- (1) 「キリストにあって」がキーワードである。
  - ①教会内の問題の多くは、新生していない「信者」が原因となっている。
  - ②「キリストにあって」、私たちは、おなじからだの一部となる。
  - ③キリスト教は、共同体として信仰体験する宗教である。
- (2) プライドが入り込む余地はない。
  - ①御霊の賜物は、すべて恵みによって与えられたものである。
  - ②ひとりの人が、御霊の賜物をすべて所有していることはない。
  - ③ひとつの地域教会が、御霊の賜物をすべて所有していることもない。
  - ④私たちは、お互いを必要としている。
  - ⑤「一匹狼」クリスチャンは、存在しない。

## III. 御霊の賜物の行使（6～8 節）

## 1. 御霊の賜物

(1) 御霊の賜物それ自体の解説ではなく、それらを謙遜に行使せよとの勧め。

(2) 御霊の賜物は、合計 19 上げられている。

① I ペテ 4：10

② ロマ 12：4～8

③ エペ 4：11

④ I コリ 7：1、7

⑤ I コリ 12：14～16

(3) ここでは、7 つの御霊の賜物が上げられている。

① パウロは、2 年ほど前にコリント人への手紙第一を書いている。

② 1 コリ 12～14 章で、御霊の賜物の行使について、教えている。

＊御霊の賜物には、重要性の差があるが、それでもプライドは赦されない。

③ ロマ書に詳細なリストがない理由は、この教会が霊的に成熟していたからか。

## 2. 7 つの御霊の賜物

(1) 預言すること

＊神から直接の啓示を受ける人

＊アンテオケ教会（使 13：1）

＊アガボ（使 11：27～28、21：10～11）

＊ピリポの娘たち（使 21：8～9）

＊預言者が語ったことは、必ず成就せねばならない。

＊新約の完結とともに、この賜物は終わった。

(2) 奉仕すること

＊ギリシア語で「ディアコニア」。

＊奉仕は聖霊の賜物のひとつである。

＊執事は、奉仕の賜物のある人が就く役職である。

＊全的献身が勧められている。

(3) 教えること

＊真理をまとめ、聞く人に分かるように語る能力である。

＊霊的真理を伝達する能力である。

(4) 勧めをすること

\*真理を實際生活に適用するように人々を励ますことである。

\*教える賜物があっても、この賜物がない場合がある。

\*その逆もある。

(5) 分け与えること

\*すべての信者は、愛の実践として分け与えることを実行する。

\*この賜物を持った人は、より多くのものを分け与える。

\*収入の 90 パーセントを捧げるような人には、この賜物がある。

(6) 指導すること（管理すること）

\*長老職に就く人は、この賜物を持っていないなければならない。

\*サーバントリーダーシップ（神の権威の下にいる。マタ 8：9 参照）

(7) 慈善を行うこと

\*病人、貧しい人に助けの手を伸ばすことである。

\*この賜物のある人は、喜んでそれを行うべきである。

## 結論

### 1. 自分の立場

(1) ユダヤ人信者と異邦人信者の対立

(2) しかし、生きた供え物には、「立場」や「地位」はない。

(3) メシアニック・ジューを敬愛するが、卑屈になる必要はない。

### 2. 自分の能力

(1) 信仰さえも、神からの賜物である。

(2) 御霊の賜物には、重要性の順番がある。

(3) しかし、恵みによって与えられているので、誇ることはできない。

### 3. 自分の人生のゴール

(1) キリスト教は、自己実現の宗教ではない。

(2) 私たちは、神の栄光のために生きている。

(3) 御霊の賜物は、からだ全体を建て上げるためのものである。

(4) これこそ、真の自己実現である。

(例話)「鳥の鳴き声」

鳥の中で鳴き声を出すのは、小さな鳥だけ。

鷺や鷹、七面鳥やダチョウは、さえずらない。

小鳥たちはさえずる。カナリヤ、ミソサザイ、ヒバリなどは、美しい声で歌う。

人間の世界でも、最も美しい歌声は、主の前に謙遜で、自分を「小さな者」と考えているクリスチャンたちから出てくる。

## 「愛の勧め（1）」

### 1. はじめに

#### （1）文脈の確認

- ①1～8 章が教理
- ②9～11 章がイスラエルの救い
- ③12～16 章が適用

#### （2）これまでに学んだ 12 章の内容

- ①献身の勧め（1～2 節）
- ②謙遜の勧め（3～8 節）
- ③アンケートの紹介

#### （3）きょうの箇所

- ①愛の勧め（1）（9～13 節）
- ②13 の勧めが記されている。
- ③前提を確認しておく。

＊この勧めを未信者に語ることは、時には逆効果となる。

＊信者の中には、古い性質と新しい性質があり、それが戦っている。

＊この勧めを実行する力は、聖霊から来る。位置的真理の確認が重要である。

＊動詞（分詞）の時制はすべて現在形である。継続した行為を指す。

### 2. アウトライン（13 のポイントがある）

### 3. メッセージのゴール

#### （1）愛について考える。

このメッセージは、愛の勧告について学ぼうとするものである。

## I. 愛には偽りがあってはなりません。

### 1. 翻訳の比較（9 節）

「愛には偽りがあってはならない」（口語訳）

「愛には偽りがあってはなりません」（新改訳）

「愛には偽りがあってはなりません」（新共同訳）

2. この愛は、アガペイの愛である。

（1）この世の愛には、見かけだけのもの、毒を含んだものがある。

①信者もまた、そのような価値観に引き込まれる危険性がある。

（2）劇的な対比を見よ。

①アガペイの愛は、善の集大成。

②偽りとは、偽善のこと。悪のしるしである。

③「仮面をかぶった愛の行為は不可能である」

（3）これがクリスチャン生活の基本原則であり、要である。

①これ以降の勧告は、その要から出てくるものである。

## II. 悪を憎み、

1. 翻訳の比較（9 節）

「悪は憎み退け、」（口語訳）

「悪を憎み、」（新改訳）

「悪を憎み、」（新共同訳）

2. 愛は具体的に表現される必要がある。

（1）罪を憎むことは、その表現のひとつである。

①「憎む」は、忌み嫌う、ひどく嫌悪する、拒絶する。

②英語では、「abhor」である。

③「悪は憎み退け、」（口語訳）が一番良い。

④一例を上げると、テロ行為を見た時に示す反応である。

（2）「この世（時代）」の価値観は私たちに麻痺させる。

①寛容は善であるという理由が、敵に利用されている。

②罪に対して敏感であれという勧告である。

## III. 善に親しみなさい。

1. 翻訳の比較（9 節）

「善には親しみ結び、」（口語訳）

「善に親しみなさい」（新改訳）

「善から離れず、」（新共同訳）

2. 善との関係を示すギリシア語は、「コラオウ」である。

(1) 1 コリ 6：16

「遊女と交われば、一つからだになることを知らないのですか。『ふたりは一体となる』  
とされているからです」

①「交わる」は「コラオウ」である。

②男女の親密な関係を指す。

(2) 継続した行為である。

①みことばは、何が善であるかを私たちに教えている。

②日々の知識の更新が必要である。

#### IV. 兄弟愛をもって心から互いに愛し合い、

1. 翻訳の比較（10 節）

「兄弟の愛をもって互にいつくしみ、」（口語訳）

「兄弟愛をもって心から互いに愛し合い、」（新改訳）

「兄弟愛をもって互いに愛し、」（新共同訳）

2. 愛に関する 2 つの言葉が出てくる。

(1) とともに「フィロス」が付く。

①フィラデルフィア（兄弟愛）

②フィロストルゴス（親子愛）

(2) 兄弟姉妹への愛が、未信者への愛よりも優先される。

①ガラ 6：10

「ですから、私たちは、機会のあるたびに、すべての人に対して、特に信仰の家族の人たちに善を行いましょう」

#### V. 尊敬をもって互いに人を自分よりまさっていると思いなさい。

1. 翻訳の比較（10 節）

「進んで互に尊敬し合いなさい」（口語訳）

「尊敬をもって互いに人を自分よりまさっていると思いなさい」（新改訳）

「尊敬をもって互いに相手を優れた者と思いなさい」（新共同訳）

## 2. ピリ 2：3

「何事でも自己中心や虚栄からすることなく、へりくだって、互いに人を自分よりもすぐれた者と思いなさい」

（1）エゴホリック（自己中心性）が、教会内の争いの原因となる。

①相手の内に、キリストを見る。

②相手に対する敬愛と、相手は自分よりも優れているという認識。

## VI. 勤勉で怠らず、

### 1. 翻訳の比較（11 節）

「熱心で、うむことなく、」（口語訳）

「勤勉で怠らず、」（新改訳）

「怠らず励み、」（新共同訳）

### 2. コロ 3：23

「何をするにも、人に対してではなく、主に対してするように、心からしなさい」

（1）全身全霊を込めてそれをしなさい。

（例話）煙草を吸おうとしたカーペット職人の話

（2）信者の動機付けは、「主に対してするように」である。

## VII. 霊想に燃え、

### 1. 翻訳の比較（11 節）

「霊に燃え、」（口語訳）

「霊に燃え、」（新改訳）

「霊に燃えて、」（新共同訳）

### 2. 「霊において燃え」のことである。

（1）「霊」とは、人間の霊である。

①英語では、「on fire with the Spirit」である。



(2) 2つの注意点がある。

①聖霊の満たしによってこれが可能となる。聖霊の支配。

②知識のない熱心は、危険である。

「私は、彼らが神に対して熱心であることをあかしします。しかし、その熱心は知識に基づくものではありません」(10：2)

## VIII. 主に仕えなさい。

### 1. 翻訳の比較 (11 節)

「主に仕え、」(口語訳)

「主に仕えなさい」新改訳

「主に仕えなさい」(新共同訳)

### 2. ギリシア語の動詞は、「デューリユーオウ」である。

(1) 自発的なしもべとして仕える。

(2) 主に仕えるとは、みからだなる教会に仕えること。

①御霊の賜物をもって仕える。

## IX. 望みを抱いて喜び、

### 1. 翻訳の比較 (12 節)

「望みをいだいて喜び、」(口語訳)

「望みを抱いて喜び、」(新改訳)

「希望をもって喜び、」(新共同訳)

### 2. 希望(エルピス)とは、単なる願いではない。

(1) 確信に満ちた信頼のことである。

(2) 終末的未来に手を伸ばすことである。

### 3. 1 ペテ 1：3

「私たちの主イエス・キリストの父なる神がほめたたえられますように。神は、ご自分の大きなあわれみのゆえに、イエス・キリストが死者の中からよみがえられたことによって、

私たちを新しく生まれさせて、生ける望みを持つようにしてくださいました」

## **X. 患難に耐え、**

### 1. 翻訳の比較（12 節）

「患難に耐え、」（口語訳）

「患難に耐え、」（新改訳）

「苦難を耐え忍び、」（新共同訳）

### 2. 希望と忍耐の関係

#### （1）ロマ 5：3～4

「そればかりではなく、患難さえも喜んでいます。それは、患難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと知っているからです」

#### （2）人生は、患難に満ちている。

①想定外のことだと言うべきではない。

②終末的希望があれば、患難に耐えることができる。

## **XI. 絶えず祈りに励みなさい。**

### 1. 翻訳の比較（12 節）

「常に祈りなさい」（口語訳）

「絶えず祈りに励みなさい」（新改訳）

「たゆまず祈りなさい」（新共同訳）

### 2. 祈りは、患難に耐えるための力となる。

（1）祈りが困難な理由は、サタンが私たちが神から切り離そうとしているから。

## **XII. 聖徒の入用に協力し、**

### 1. 翻訳の比較（13 節）

「貧しい聖徒を助け、」（口語訳）

「聖徒の入用に協力し、」（新改訳）

「聖なる者たちの貧しさを自分のものとして彼らを助け、」（新共同訳）

2. 優先順位は、信者、そして教会外の人たちである。

(1) 初代教会では、経済的困窮者が多かった。

### **XIII. 旅人をもてなしなさい。**

1. 聖句の比較（13 節）

「努めて旅人をもてなしなさい」（口語訳）

「旅人をもてなしなさい」（新改訳）

「旅人をもてなすよう努めなさい」（新共同訳）

2. 時代の要請

(1) 宿は少なく、また、安心できない場合が多かった。

(2) 旅する伝道者、聖徒たちが多くいた。

3. 2つのギリシア語

(1) 「もてなし」は、ギリシア語で「フィロクセニア」。

①これは、「見知らぬ人への愛」という意味である。

(2) 「努めなさい」は、ギリシア語で「ディオウコウ」。

①これは、「追いかける」、「追及する」という意味である。

②機会を待つのではなく、こちらから積極的にその機会を追求する。

### **結論**

1. 愛こそがクリスチャン生活の基本原則であり、要である。

(1) ここでの 12 の勧告は、最初の勧告である愛から出てくるものである。

（例話）樋野興夫先生 2011 年 10 月 31 日のブログ

昨日は大学での解剖慰霊祭であった。病理解剖は「医学の真髄の学び」と「医療人としての人格養成」の原点である。筆者は実行委員長として「閉会の辞」を述べる機会が与えられた。若き日から病理解剖に従事し「人生の悲しみ・むなしさ」の体験は、人生の目的は、お金でも地位でもなく「人生の目的は品性の完成なり」の学びの「厳しい修練の場」であった。

2. この聖書箇所は、1 コリ 13 章と似ている。

「愛は寛容であり、愛は親切です。また人をねたみません。愛は自慢せず、高慢になりません。礼儀に反することをせず、自分の利益を求めず、怒らず、人のした悪を思わず、不正を喜ばずに真理を喜びます。すべてをがまんし、すべてを信じ、すべてを期待し、すべてを耐え忍びます」(1 コリ 13：4～7)

## 「愛の勧め（2）」

### 1. はじめに

#### (1) 文脈の確認

- ①1～8 章が教理
- ②9～11 章がイスラエルの救い
- ③12～16 章が適用

#### (2) これまでに学んだ 12 章の内容

- ①献身の勧め（1～2 節）
- ②謙遜の勧め（3～8 節）
- ③愛の勧め（1）（9～13 節）
- アンケートの紹介

#### (3) きょうの箇所

- ①愛の勧め（2）（14～16 節）
- ②6 つの勧めが記されている。
- ③教会内の人たちに対して
- ④前提を確認しておく。

＊この勧めを未信者に語ることは、時には逆効果となる。

＊信者の中には、古い性質と新しい性質があり、それが戦っている。

＊この勧めを実行する力は、聖霊から来る。位置的真理の確認が重要である。

＊動詞の時制はすべて現在形である。継続した行為を指す。

### 2. アウトライン（6 のポイントがある）

### 3. メッセージのゴール

#### (1) 一致について考える

このメッセージは、愛の勧告について学ぼうとするものである。

## I. 迫害する者を祝福する

### 1. 翻訳の比較（14 節）

「あなたがたを迫害する者を祝福しなさい。祝福して、のろってはならない」（口語訳）  
「あなたがたを迫害する者を祝福しなさい。祝福すべきであって、のろってはいけません」  
（新改訳）

「あなたがたを迫害する者のために祝福を祈りなさい。祝福を祈るのであって、呪ってはなりません」（新共同訳）

## 2. 祝福するという動詞

### （1）ユーロゲオウ

- ①その人に関して、良いことを言う。
- ②ヘブル的意味では、その人の上に祝福が下るように神に願う。

### （2）祝福の対象

- ①「あなたがたを迫害する者」
- ②「あなたがた」という言葉が落ちている写本がある。
- ③その場合は、より広い範囲の人々を指す（迫害している者すべて）。

## 3. この命令の実例

### （1）マタ 5：44

「しかし、わたしはあなたがたに言います。自分の敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい」

- ①ユダヤ教のシナゴグでは、祝福と呪いの祈りが行われていた。
- ②被害を受けても、自分で復讐しないというのが、新約聖書の原則である。
- ③キリスト教がローマの国教になる前、異教世界の中で「自分の敵を愛し、迫害する者のために祈る」ということが、教会の顕著な特徴であった。

### （2）使 7：55～60

「しかし、聖霊に満たされていたステパノは、天を見つめ、神の栄光と、神の右に立っておられるイエスとを見て、こう言った。『見なさい。天が開けて、人の子が神の右に立っておられるのが見えます』。人々は大声で叫びながら、耳をおおい、いっせいにステパノに殺到した。そして彼を町の外に追い出して、石で打ち殺した。証人たちは、自分たちの着物をサウロという青年の足もとに置いた。こうして彼らがステパノに石を投げつけていると、ステパノは主を呼んで、こう言った。『主イエスよ。私の霊をお受けください』。そして、ひざまずいて、大声でこう叫んだ。『主よ。この罪を彼らに負わせないでください』。こう言って、眠りについた」

- ①ステパノの祈りは、聖霊によって可能となった。

②また、サウロの回心に影響を与えた。

#### 4. 2つの性質の葛藤

(1) 古い性質は、「呪え」と命じてくる。

①必殺仕事人の世界

(2) 神は、「祝福せよ」と命じてくる。

①新しい性質への働きかけ。

②ステパノは、聖霊に満たされていた。

### ⅡとⅢ. 喜ぶ者と共に喜び、泣く者と共に泣く。

#### 1. 翻訳の比較（15 節）

「喜ぶ者と共に喜び、泣く者と共に泣きなさい」（口語訳）

「喜ぶ者といっしょに喜び、泣く者といっしょに泣きなさい」（新改訳）

「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい」（新共同訳）

#### 2. どちらが易しいか。

(1) クリュソストモス

①4 世紀の教父、コンスタンティノープルの大司教

②「金口の（golden mouthed）」を冠して呼ばれるようになった。

③彼は、共に喜ぶよりも、共に泣く方が易しいと言った。

(2) なぜ共に喜ぶのが難しいのか。

①泣く者は、私たちを必要としている。

②喜ぶ者は、私たちがいなくても喜ぶことができる。

#### 3. この命令の実例

(1) ルカ 15：25～28

「ところで、兄息子は畑にいたが、帰って来て家に近づくと、音楽や踊りの音が聞こえて来た。それで、しもべのひとりを呼んで、これはいったい何事かと尋ねると、しもべは言った。『弟さんがお帰りになったのです。無事な姿をお迎えしたというので、お父さんが、肥えた子牛をほふらせなさったのです』。すると、兄はおこって、家に入ろうともしなかった。それで、父が出て来て、いろいろなだめてみた」

①兄の問題は、父の心と遠く離れていたこと。

(2) ヨハ 11：35

「イエスは涙を流された」

①最も短い聖句

②悲しむ者たちとの一体化

4. 教訓

(1) この命令は、単独のクリスチャン生活はあり得ないことを教えている。

(2) 信者は、神の家族である。

①父の喜びと悲しみを共有するのが、最終的な目標である。

IV. 思いを一つにする。

1. 翻訳の比較（16 節）

「互に思うことをひとつにし、」（口語訳）

「互いに一つ心になり、」（新改訳）

「互いに思いを一つにし、」（新共同訳）

2. ローマ教会の中に不一致があったことを暗示している。

(1) ロマ 2：17～20

「もし、あなたが自分をユダヤ人となえ、律法を持つことに安んじ、神を誇り、みこころを知り、なすべきことが何であるかを律法に教えられてわきまえ、また、知識と真理の具体的な形として律法を持っているため、盲人の案内人、やみの中にいる者の光、愚かな者の導き手、幼子の教師だと自任しているのなら、」

(2) ロマ 11：17～18

「もしも、枝の中のあるものが折られて、野生種のオリーブであるあなたがその枝に混じってつがれ、そしてオリーブの根の豊かな養分をともに受けているのだとしたら、あなたはその枝に対して誇ってはいけません。誇ったとしても、あなたが根をささえているのではなく、根があなたをささえているのです」

(3) 社会的身分

①奴隷の信者が教会にいた。

②自由人の信者も教会にいた。



③かなりの身分の者も教会にいた。

3. 思いを一つにする方法

(1) プライドがいかに危険なものであるかを認識する。

(2) 譲歩して、他人の意見に歩み寄ることではない。

(3) 啓示された真理を理解し、それを共有することである。

(例話) 自転車の車輪。ハブとスポークの関係

V. 高ぶらない。

1. 翻訳の比較 (16 節)

「高ぶった思いをいだかず、」(口語訳)

「高ぶった思いを持たず、」(新改訳)

「高ぶらず、」(新共同訳)

2. ロマ 12：10

「尊敬をもって互いに人を自分よりまさっていると思いなさい」

①自分は他の人よりも優れているという思いが、問題を作り出す。

3. 「高いものに心を奪われるな」という意味にもなる。

①野望、野心、人の上に立とうとする思いが、問題を作り出す。

VI. 身分の低い人々と交わる。

1. 翻訳の比較 (16 節)

「かえって低い者たちと交わるがよい」(口語訳)

「かえって身分の低い者に順応しなさい」(新改訳)

「身分の低い人々と交わりなさい」(新共同訳)

2. 信者の中に、貧富の差、社会的身分の差があった。

3. 教会の指導者が、上流階級の人たちとしか交わらなくなったら、それは問題である。

(例話) 教会員の中に、大学教授がいる場合

#### 4. 最後のアドバイス（16 節）

「自分が知者だと思いがってはならない」（口語訳）

「自分こそ知者だなどと思っではいけません」（新改訳）

「自分を賢い者とうぬぼれてはなりません」（新共同訳）

（1）自分を賢い者だと思っている人は、他者から見ると愚かに見える。

（2）イザ 5：21

「ああ。おのれを知恵ある者とみなし、おのれを、悟りがある者と見せかける者たち」

（3）箴 3：7

「自分を知恵のある者と思うな。【主】を恐れて、悪から離れよ」

### 結論

#### 1. 啓示された真理を基に一致を求める。

（1）すべての人は罪人である。

（2）救いは、恵みによって与えられる。

（3）私たちの誇りは、取り去られた。

#### 2. ユダヤ人と異邦人の一致

（1）初期の教会の問題であった。

（2）そして今も、これが問題になりつつある。

（3）エペ 2：14～16

「キリストこそ私たちの平和であり、二つのものを一つにし、隔ての壁を打ちこわし、ご自分の肉において、敵意を廃棄された方です。敵意とは、さまざまの規定から成り立っている戒めの律法なのです。このことは、二つのものをご自身において新しいひとりの人に造り上げて、平和を実現するためであり、また、両者を一つのからだとして、十字架によって神と和解させるためなのです。敵意は十字架によって葬り去られました」

①「二つのもの」とは、ユダヤ人と異邦人。

②「隔ての壁」とは、モーセの律法。

③「新しいひとりの人」とは、教会。

## 「愛の勧め（3）」

### 1. はじめに

#### (1) 文脈の確認

- ①1～8 章が教理
- ②9～11 章がイスラエルの救い
- ③12～16 章が適用

#### (2) これまでに学んだ 12 章の内容

- ①献身の勧め（1～2 節）
  - ②謙遜の勧め（3～8 節）
  - ③愛の勧め（1）（9～13 節）
  - ④愛の勧め（2）（14～16 節）
- アンケートの紹介

#### (3) きょうの箇所

- ①愛の勧め（3）（17～21 節）
- ②6 つの勧めが記されている（6 番目はまとめになっている）。
- ③教会外の人たちも視野に入れている。
- ④前提を確認しておく。

＊この勧めを実行する力は、聖霊から来る。位置的真理の確認が重要である。

＊「キリストの弟子」としての自己認識が必要である。

### 2. アウトライン（6 のポイントがある）

### 3. メッセージのゴール

- (1) ロマ 12：1 の原則を再確認する。

このメッセージは、愛の勧告について学ぼうとするものである。

## I. 悪をもって悪に報いない

### 1. 17 節 a

「だれに対してでも、悪に悪を報いることをせず、」

(1) 教会外の人も視野に入っている。

① 先ず信者に対して、次に未信者に対して

## 2. 「キリスト」の弟子としての自己認識

(1) マタ 5：39～41

「しかし、わたしはあなたがたに言います。悪い者に手向かってはいけません。あなたの右の頬を打つような者には、左の頬も向けなさい。あなたを告訴して下着を取ろうとする者には、上着もやりなさい。あなたに一ミリオン行けと強いるような者とは、いっしょに二ミリオン行きなさい」

(2) ガラ 6：10

「ですから、私たちは、機会のあるたびに、すべての人に対して、特に信仰の家族の人たちに善を行いましょう」

(3) 1 テサ 5：15

「だれも悪をもって悪に報いないように気をつけ、お互いの間で、またすべての人に対して、いつも善を行うよう務めなさい」

(4) 1 ペテ 3：9

「悪をもって悪に報いず、侮辱をもって侮辱に報いず、かえって祝福を与えなさい。あなたがたは祝福を受け継ぐために召されたのだからです」

## II. すべての人が良いと思うことを図る

### 1. 17 節 b

「すべての人が良いと思うことを図りなさい」

(1) 「図る」は、「プロノエオウ」である。

① あらかじめ考える。

② みことばに親しみ、判断基準の準備ができている。

### 2. 旧約聖書の背景

(1) パウロはパリサイ派のラビであった。

(2) 箴 3：4

「神と人との前に好意と聡明を得よ」

### 3. 初期の信者たちの共通認識

(1) 教会外の人たちから好意を持たれることに留意した。

①宣教論的視点があった。

②1 テモ 3：7

「また、教会外の人々にも評判の良い人でなければいけません。そしりを受け、  
悪魔のわなに陥らないためです」

(2) 「すべての人が良いと思うこと」

①現実的には、これは不可能である。

②福音が示唆する生き方を実践すること。

## Ⅲ. すべての人と平和を保つ

### 1. 18 節

「あなたがたは、自分に関する限り、すべての人と平和を保ちなさい」

「あなたがたは、できる限りすべての人と平和に過ごしなさい」（口語訳）

### 2. キリストの弟子としての自己認識

(1) マタ 5：9

「平和をつくる者は幸いです。その人たちは神の子どもと呼ばれるから」

(2) ヘブ 12：14

「すべての人との平和を追い求め、また、聖められることを追い求めなさい。聖くな  
ければ、だれも主を見ることができません」

### 3. 「すべての人との平和」

(1) 信者だけでなく、未信者との平和も含まれる。

(2) 自分から平和な関係を破壊するようなことはしない、という意味である。

## Ⅳ. 自分で復讐しない

### 1. 19 節

「愛する人たち。自分で復讐してはいけません。神の怒りに任せなさい。それは、こう書  
いてあるからです。『復讐はわたしのすることである。わたしが報いをする、と主は言われ  
る』」

## 2. 旧約聖書の背景

### (1) 申 32：35

「復讐と報いとは、わたしのもの、それは、彼らの足がよろめくときのため。彼らのわざわいの日は近く、来るべきことが、すみやかに来るからだ」

### (2) レビ 19：18

「復讐してはならない。あなたの国の人々を恨んではならない。あなたの隣人をあなた自身のように愛しなさい。わたしは【主】である」

## 3. パウロの視点

### (1) 1 テサ 1：6～7

「つまり、あなたがたを苦しめる者には、報いとして苦しみを与え、苦しめられているあなたがたには、私たちとともに、報いとして安息を与えてくださることは、神にとって正しいことなのです。そのことは、主イエスが、炎の中に、力ある御使いたちを従えて天から現れるときに起こります」

## 4. 復讐が禁じられる理由

### (1) 創造論的理由

- ①個人的復讐は、被造世界の一部を裁き主にすることである。
- ②裁きは、神の専属的特権である。
- ③神は、私たちの助けを必要としておられない。

### (2) 宣教論的理由

- ①復讐心のある時に、福音を伝えることはできない。
- ②平和が保たれることは、宣教の秩序として重要である。

### (3) 終末論的理由

- ①神の裁きは、現在進行形であると同時に、終末に起こることである。

### (4) 実践的理由

- ①人間の判断は、必ずしも正確とは限らない。
- ②復讐心のある時は、聖霊よりも怒りに満たされている。
- ③そういう人は、クリスチャン生活の祝福を失っている。

（例話）

- ①ケンタッキー州で、ルシアンとサムの関係。8 年間の刑期が残っている。
- ②英会話の宣教師：ローリーさんの父の死
- ③金銭の貸借。クリスチャンの旅行社。個人的に貸した金。

## V. 敵にパンを与える。

### 1. 20 節

「もしあなたの敵が飢えたなら、彼に食べさせなさい。渴いたなら、飲ませなさい。そうすることによって、あなたは彼の頭に燃える炭火を積むことになるのです」

### 2. 旧約聖書の背景

#### （1）箴 25：21～22

「もしあなたを憎む者が飢えているなら、パンを食べさせ、渴いているなら、水を飲ませよ。あなたはこうして彼の頭に燃える炭火を積むことになり、【主】があなたに報いてくださる」

#### （2）2 列 6：21～23

「イスラエルの王は彼らを見て、エリシャに言った。『私が打ちましようか。私が打ちましようか。わが父よ』。エリシャは言った。『打ってはなりません。あなたは自分の剣と弓でとりこにした者を打ち殺しますか。彼らにパンと水をあてがい、飲み食いさせて、彼らの主君のもとに行かせなさい』。そこで、王は彼らのために盛大なもてなしをして、彼らに飲み食いをさせて後、彼らを帰した。こうして彼らは自分たちの主君のもとに戻って行った。それからはアラムの略奪隊は、二度とイスラエルの地に侵入して来なかった」

### 3. 「頭に燃える炭火を積む」

- （1）より深い地獄、より深い苦しみに落とすことではない。
- （2）善を受けた側が、深い痛み、悲しみを経験する。
  - ①これは、罪人を悔い改めへと導く行為である。

## VI. 善をもって悪に打ち勝つ。

### 1. 21 節

「悪に負けてはいけません。かえって、善をもって悪に打ち勝ちなさい」

(1) 17～20 節のまとめとなっている。

2. 悪を武器として悪と戦うなら、より深刻な対立を生む。

(1) 善こそ、最大の武器である。

(2) 敵を友人とすることこそ、悪との戦いのゴールである。

## 結論

### 1. ロマ 12：1

「そういうわけですから、兄弟たち。私は、神のあわれみのゆえに、あなたがたにお願いします。あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です」

### 2. パウロの勧告

(1) お願いとは、強い勧告である。

(2) 勧告の土台は、「神のあわれみ」である。

①信仰により義とされた。

②キリストにあって数々の特権と祝福が与えられた。

③聖霊の内住が与えられた。

④神の命令に応答できる状態になった。

(3) 勧告の内容は、「聖なる生けるいけにえ」である。

①旧約時代の供え物は、死んだ動物であった。

②新約時代の供え物は、他の命を犠牲にしない。

③それは、自発的な供え物である。

(4) 勧告の結論は、「なすべき、霊的な礼拝」である。

①神の恵みを熟慮した結果、全的献身は理性的な結論である。

②礼拝とは、キリストにあって行う業のすべてを指す。



## 「二重国籍者への勧め（1）」

### 1. はじめに

#### （1）文脈の確認

- ①1～8 章が教理
- ②9～11 章がイスラエルの救い
- ③12～16 章が適用

#### （2）これまでに学んだ 12 章の内容

- ①献身の勧め（1～2 節）
  - ②謙遜の勧め（3～8 節）
  - ③愛の勧め（9～16 節）
- アンケートの紹介

#### （3）13 章は、二重国籍者への勧めである。

- ①国家との関係（1～7 節）
- ②愛の律法（8～10 節）
- ③決断の時（11～14 節）

＊以上の勧めは、「生けるいけにえ」になった人に対するものである。

＊勧めの内容は容易に理解できる。

＊その周辺の情報や議論が、重要である。

### 2. アウトライン

命令：権威への服従（1 節 a）

理由①（1b～2 節）

理由②（3～4 節）

理由③（5～7 節）

### 3. メッセージのゴール

#### （1）権威への抵抗の可能性

このメッセージは、信者と国家の関係について学ぼうとするものである。

命令：権威への服従

1. 1 節 a

「人はみな、上に立つ權威に従うべきです」

(1) 12：1 は、勧告であった。

「そういうわけですから、兄弟たち。私は、神のあわれみのゆえに、あなたがたにお願いします」

(2) ここでは、「従う」は、現在形、受動態、命令形である。

「Let every soul be in subjection to the higher powers.」

(3) 「人はみな」は、「プシケイ」（魂）であって、霊ではない。

①信者も未信者も、この命令に従うべきであるということ。

(4) 「従う」は、「ヒュポタソウ」という動詞。39 回出てくる。

①テト 3：1 信者の政治権力への従順

「あなたは彼らに注意を与えて、支配者たちと權威者たちに服従し、従順で、すべての良いわざを進んでする者とならせなさい」

②コロ 3：18 妻の夫への従順

「妻たちよ。主にある者にふさわしく、夫に従いなさい」

③1 ペテ 5：5 若者の長老への従順

「同じように、若い人たちよ。長老たちに従いなさい。みな互いに謙遜を身に着けなさい。神は高ぶる者に敵対し、へりくだる者に恵みを与えられるからです」

④共通しているのは、神の權威への服従であり、祝福のためである。

2. ローマ帝国内でのキリスト教会

(1) 皇帝はいつでも、誰の命でも奪うことができた。

①マタ 2：16～18 ヘロデ大王は、ベツレヘムにいた 2 歳以下の子を殺した。

②マコ 6：14～29 30 年後、ヘロデの息子ヘロデ・アンテパスは、バプテスマのヨハネを殺した。

③帝国内では、人の運命は不安定なものであった。

(2) 新約聖書と初代教会に関係のある皇帝

①アウグスト（BC27～AD14 年）

\*ルカ 2：1 全世界の住民登録を命じた皇帝

②テベリオ（ティベリウス）（14～37 年）

＊ルカ 3：1

「皇帝テベリオの治世の第十五年、ポンテオ・ピラトがユダヤの総督、ヘロデがガリラヤの国主、その兄弟ピリポがイツリヤとテラコニテ地方の国主、ルサニヤがアビレネの国主であり、アンナスとカヤパが大祭司であったころ、神のことばが、荒野でザカリヤの子ヨハネに下った」

③カリギュラ（37～41 年）

- ＊キリストの復活と教会誕生の数年後に皇帝になった。
- ＊ローマに信者はいたであろうが（使 2：10）、迫害はなかった。
- ＊ユダヤ教は公認宗教であり、キリスト教はその一派とみなされた。
- ＊エルサレム神殿に自分の像を建てようとしたが、ユダヤ人の反対に会った。
- ＊即位の半年後に気が狂い、親戚のほとんどを殺した。
- ＊食事をしながら人々を拷問にかけ、殺した。
- ＊愛馬をカウンセラーにした。
- ＊自分を神と宣言し、諸神殿を建てたが、近衛兵によって殺害された。

④クラウデオ（クラウディウス）（41～54 年）

- ＊カリギュラの叔父
- ＊48 年、妻のメッサリーナを殺し、姪の小アグリッピナ（カリグラの妹）と再婚。54 年に、彼女によって毒殺された。
- ＊49 年、ユダヤ人をローマから追放した。
- ＊使 18：2

「ここで、アクラというポント生まれのユダヤ人およびその妻プリスキラに出会った。クラウデオ帝が、すべてのユダヤ人をローマから退去させるように命令したため、近ごろイタリアから来ていたのである。パウロはふたりのところに行き、」

⑤ネロ（54～68 年）

- ＊パウロがロマ書を書いたのは、ネロの時代である。57 年頃。
- ＊15 歳で皇帝になり、22 歳で母を殺した。
- ＊3 年後に離婚し、妻を殺した。
- ＊64 年のローマの大火の責任を、クリスチャンに負わせた。

(5) パウロは、不信者の政府、神なき組織にも従うように命じている。

理由①：すべての権威は神によって立てられているから

1. 1b 節

「神によらない権威はなく、存在している権威はすべて、神によって立てられたものです」

(1) 箴 8：15

「わたしによって、王たちは治め、君主たちは正義を制定する」

(2) ヨハ 19：11

「イエスは答えられた。『もしそれが上から与えられているのでなかったら、あなたにはわたしに対して何の権威也没有せん。ですから、わたしをあなたに渡した者に、もっと大きい罪があるのです』」

(3) いかなる方法で権威が誕生したのかは、問題ではない。

①現代の民主主義国家では、選挙という方法が取られる。

②国家権力は、民に安全と祝福をもたらすための神の方法である。

2. 2 節

「したがって、権威に逆らっている人は、神の定めにそむいているのです。そむいた人は自分の身にさばきを招きます」

(1) 権威に逆らうことは、神の定めにそむくことである。

(2) そむいた人は、自分の身にさばきを招く。

①定冠詞の「the」がない。

②必ずしも終末的なさばきではない。

理由②：自分自身の祝福のため

1. 3 節

「支配者を恐ろしいと思うのは、良い行いをするときではなく、悪を行うときです。権威を恐れたくないと思うなら、善を行いなさい。そうすれば、支配者からほめられます」

(1) 支配者が神の意図に従って政治（統治）を行うことを前提に話している。

①悪人は、支配者を恐れる。

②善人は、恐れる必要はなく、支配者の保護を受ける。

2. 4 節

「それは、彼があなたに益を与えるための、神のしもべだからです。しかし、もしあなた

が悪を行うなら、恐れなければなりません。彼は無意味に剣を帯びてはいないからです。彼は神のしもべであって、悪を行う人には怒りをもって報います」

(1) 不信者であっても、神のしもべとしての役割を果たしている。

①「神のしもべ」という言葉は、「神」に強調がある。

(2)「剣」とは、執行する力である。

①12：19 の復讐禁止命令と矛盾しない。

②個人的復讐は、憎しみから出る。公の報いは、善と平和を保持するためのもの。

### 理由③：自分自身の良心のため

#### 1. 5 節

「ですから、ただ怒りが恐ろしいからだけでなく、良心のためにも、従うべきです」

(1) 良心の問題として、権威に服従する。

①キリストに弟子にとって、最も大切な行動原理となる。

②後になって心が痛むようなことはしないということである。

#### 2. 6～7 節

「同じ理由で、あなたがたは、みつぎを納めるのです。彼らは、いつもその務めに励んでいる神のしもべなのです。あなたがたは、だれにでも義務を果たしなさい。みつぎを納めなければならない人にはみつぎを納め、税を納めなければならない人には税を納め、恐れなければならない人を恐れ、敬わなければならない人を敬いなさい」

(1) 権威に従順である 3 つの例

①「みつぎ（貢）」(tribute) とは、人頭税。

②「税」(custom) とは、物品税。

③「敬意」とは、心の税と考えるとよい。

### 結論：権威への抵抗の可能性

#### 1. 権威は神によって立てられていることを再確認する。

(1) ダニ 2：21

「神は季節と時を変え、王を廃し、王を立て、知者には知恵を、理性のある者には知識を授けられる」

(2) ダニ 2：31～35

「王さま。あなたは一つの大きな像をご覧になりました。見よ。その像は巨大で、その輝きは常ならず、それがあなたの前に立っていました。その姿は恐ろしいものでした。その像は、頭は純金、胸と両腕とは銀、腹とももとは青銅、すねは鉄、足は一部が鉄、一部が粘土でした。あなたが見ておられるうちに、一つの石が人手によらずに切り出され、その像の鉄と粘土の足を打ち、これを打ち砕きました。そのとき、鉄も粘土も青銅も銀も金もみな共に碎けて、夏の麦打ち場のもみがらのようになり、風がそれを吹き払って、あとかたもなくなりました。そして、その像を打った石は大きな山となって全土に満ちました」

①純金の頭：バビロン帝国

②銀の胸と両腕：メド・ペルシヤ連合帝国

③青銅の腹ともも：アレクサンドロスのギリシア帝国

④第 4 の帝国：帝国主義（ローマ帝国以上のもの）

＊統一王国の時代

＊二国に分裂した時代

＊十国に分裂した時代

⑤山：メシア的王国

＊人手によらない

＊切り出された一つの石は、メシアである。

2. 権威は、神によって与えられた使命から逸脱する可能性がある。

(1) 「権威」とは、「エクスーシア」である。

①エペ 2：2

「そのころは、それらの罪の中にあってこの世の流れに従い、空中の権威を持つ支配者として今も不従順の子らの中に働いている霊に従って、歩んでいました」

②墮天使と関連した言葉である。

③サタンは、権威が神に反抗した究極の例である。

(2) そのような場合、権威に従うなら、それは信者の使命を放棄したことになる。

①ポーランドのクリスチャンたちは、ユダヤ人をかくまわなかった。

②ヒトラーは、ロマ書 13 章を根拠に、教会に国家への従順を要求した。

3. 聖書に記された権威に反抗した例

(1) 出 1：15～17 神を恐れたユダヤ人の助産婦たち

(2) 使 4：19～20

「ペテロとヨハネは彼らに答えて言った。『神に聞き従うより、あなたがたに聞き従うほうが、神の前に正しいかどうか、判断してください。私たちは、自分の見たこと、また聞いたことを、話さないわけにはいきません』」

(3) 使 5：29

「ペテロをはじめ使徒たちは答えて言った。『人に従うより、神に従うべきです』」

4. パウロの心

(1) 教会を支配する論理を、敵に与えるために書いたのではない。

(2) 彼の心の中にあつた確信

①宣教のための秩序

②地上の支配者は過ぎ去る。

③しかし、信者に与えられたメッセージは、永遠に続く。

④ペテロは、ネロの迫害によりローマで殉教した（エウセビオス『教会史』）。

⑤パウロもまた、67 年頃、ネロの迫害によって殉教したと言われている。

⑥「生きたささげもの」となった。

(3) コンスタンチヌス帝の時（313 年のミラノ勅令）に、キリスト教が公認。

①これが教会にとってよかったかどうかは、分からない。

5. 私たちへの適用

(1) 地上の権威に従う。

(2) しかし、その権威が神に反抗する場合は、声を上げ、抵抗する。

（例話）杉原千畝氏

（例話）デートリッヒ・ボンヘッフアー

## 「二重国籍者への勧め（2）」

### 1. はじめに

#### （1）文脈の確認

- ①1～8 章が教理
- ②9～11 章がイスラエルの救い
- ③12～16 章が適用

（2）12 章は、基本的には教会内の行動についての勧めであった。

（3）13 章は、二重国籍者への勧めである。

- ①国家との関係（1～7 節）
- ②愛の律法（8～10 節）
- ③決断の時（11～14 節）

### 2. アウトライン

- （1）愛の律法（8～10 節）
- （2）決断の時（11～14 節）

### 3. メッセージのゴール

- （1）利己的解釈の例
- （2）時代の影響を受けた解釈の例
- （3）ユダヤ的視点を失った解釈の例

このメッセージは、クリスチャンの地上生活について学ぼうとするものである。

## I. 愛の律法（8～10 節）

### 1. 8 節（返すべき負債と、返せない負債）

「だれに対しても、何の借りもあってはいけません。ただし、互いに愛し合うことについては別です。他の人を愛する者は、律法を完全に守っているのです」

（1）「あなたがたは、だれにでも義務を果たしなさい」（7 節）とあった。

①この言葉に触発されて、隣人との関係における義務に話題が移ったのであろう。

（2）「何の借りもあってはいけません」とは、単なる借金以上のものを意味している。



- ①これは、銀行からの借入金を禁止しているのではない。
- ②人の世話になりっぱなしではいけないということ。

(3) 「ただし、互いに愛し合うことについては別です」

- ①互いに愛し合うという「借り」は、完済不可能なものである。
- ②それは、利子を支払っているようなものである。
- ③ここでの愛は、「アガペ」の愛、自己犠牲の愛である。
- ④ヨハ 13：34～35

「あなたがたに新しい戒めを与えましょう。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。もし互いの間に愛があるなら、それによってあなたがたがわたしの弟子であることを、すべての人が認めるのです」

(4) 「他の人を愛する者は、律法を完全に守っているのです」

- ①「他の人」とは、教会外の人も含む。
- ②隣人とは、私たちの周りにいる必要を抱えている人たちのこと。
- ③外面的な行為だけでは、律法を守ったことにならない。

2. 9～10 節（モーセの律法の要約）

『姦淫するな、殺すな、盗むな、むさぼるな』という戒め、またほかにどんな戒めがあっても、それらは、『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ』ということばの中に要約されているからです。愛は隣人に対して害を与えません。それゆえ、愛は律法を全うします」

(1) 十戒の「隣人との関係」の部分だけを引用している。

- ①姦淫するな。第 7 戒。
- ②殺すな。第 6 戒。
- ③盗むな。第 8 戒。
- ④むさぼるな。第 10 戒。

(2) レビ 19：18

「復讐してはならない。あなたの国の人々を恨んではならない。あなたの隣人をあなた自身のように愛しなさい。わたしは【主】である」

- ①「トーラ（律法）の一般原則の最高峰は、レビ 19：18 である」（ラビ・アキバ）
- ②マタ 22：39

『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ』という第二の戒めも、それと同じようにたいせつです」

③ガラ 5：14

「律法の全体は、『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ』という一語をもって全うされるのです」

(3) 愛の命令は、ロマ 8：1～4 の真理によって可能となる。

「こういうわけで、今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。なぜなら、キリスト・イエスにある、いのちの御霊の原理が、罪と死の原理から、あなたを解放したからです。肉によって無力になったため、律法にはできなくなっていることを、神はしてくださいました。神はご自分の御子を、罪のために、罪深い肉と同じような形でお遣わしになり、肉において罪を処罰されたのです。それは、肉に従って歩まず、御霊に従って歩む私たちの中に、律法の要求が全うされるためなのです」

①ロマ書 7 章クリスチャンに逆戻りしないように注意する必要がある。

②ロマ書 8 章クリスチャンの特徴

＊「キリストにあって」

＊「御霊によって」

## II. 決断の時（11～14 節）

### 1. 11 節（今という時代の認識）

「あなたがたは、今がどのような時か知っているのですから、このように行いなさい。あなたがたが眠りからさめるべき時刻がもう来ています。というのは、私たちが信じたころよりも、今は救いが私たちにもっと近づいているからです」

(1) 「今がどのような時か知っているのですから」

①クロノス（直線的な時間の流れのこと）

②カイロス（終末の時、決断の時）

(2) 「私たちが信じたころよりも、今は救いが私たちにもっと近づいている」

①救いの 3 要素（義認、聖化、栄化）

②ロマ 8：23

「そればかりでなく、御霊の初穂をいただいている私たち自身も、心の中でうめきながら、子にさせていただくこと、すなわち、私たちのからだの贖われることを待ち望んでいます」

③ここでの「救い」とは、復活か、携挙である。

④クリスチャン生活の一日一日が、そこに近づく過程である。

(3) それゆえ、今は「眠りからさめるべき時刻」である。

①怠惰なクリスチャン生活からの覚醒

## 2. 12～13 節（霊的覚醒の勧め）

「夜はふけて、昼が近づきました。ですから、私たちは、やみのわざを打ち捨てて、光の武具を着けようではありませんか。遊興、酩酊、淫乱、好色、争い、ねたみの生活ではなく、昼間らしい、正しい生き方をしようではありませんか」

(1) 闇と光の対比が語られている。

①主イエス

②ヨハネ

③クムラン文書（死海写本）

(2) 「夜」とは何か。

①キリストが地上を去っておられる状態

②サタンがこの世を支配している状態

③2 コリ 4：4

「その場合、この世の神が不信者の思いをくらませて、神のかたちであるキリストの栄光にかかわる福音の光を輝かせないようにしているのです」

④6つの悪徳は、「夜」の生活の特徴である。

⑤特に、ローマ帝国末期の特徴である。

⑥訳の比較（12 節）

「やみのわざを打ち捨てて、光の武具を着けようではありませんか」（新改訳）

「だから、闇の行いを脱ぎ捨てて光の武具を身に着けましょう」（新共同訳）

＊闇の行いを、ナイトガウンを脱ぐように脱ぎ捨てる（アポティセイミ）。

＊「光の武具」とは、キリストの性質のこと。

(3) 「昼」とは何か。

①キリストの現れ（再臨）

②ヨハ 14：2～3

「わたしの父の家には、住まいがたくさんあります。もしなかったら、あなたがたに言うておいたでしょう。あなたがたのために、わたしは場所を備えに行くのです。わたしが行って、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしのいる所に、あなたがたをもおらせるためです」

③愛の実践は、「昼」の生活の特徴である。

### 3. 14 節（まとめ）

「主イエス・キリストを着なさい。肉の欲のために心を用いてはいけません」

(1) キリストを着るとは、キリストの性質を身に付けること。

①キリストの内にあるという認識が重要である。

(2) ガラ 3：27

「バプテスマを受けてキリストにつく者とされたあなたがたはみな、キリストをその身に着たのです」

(3) 「肉」とは古い性質のこと

## 結論：

### 1. 利己的解釈の例

(1) ロマ 13：1～7 の誤用に注意する。

(2) 教会内の指導者と会衆の関係については、他の聖句がある。

(3) 1 ペテ 5：1～5

「そこで、私は、あなたがたのうちの長老たちに、同じく長老のひとり、キリストの苦難の証人、また、やがて現れる栄光にあずかる者として、お勧めします。あなたがたのうちにいる、神の羊の群れを、牧しなさい。強制されてするのではなく、神に従って、自分から進んでそれをなし、卑しい利得を求める心からではなく、心を込めてそれをしなさい。あなたがたは、その割り当てられている人たちを支配するのではなく、むしろ群れの模範となりなさい。そうすれば、大牧者が現れるときに、あなたがたは、しばむことのない栄光の冠を受けるのです。同じように、若い人たちよ。長老たちに従いなさい。みな互いに謙遜を身に着けなさい。神は高ぶる者に敵対し、へりくだる者に恵みを与えられるからです」

①指導者は、会衆に対して説明責任を負っている。

②指導者が聖書から逸脱している時は、従うべきではない。

### 2. 時代の影響を受けた解釈の例

(1) 「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ」

(2) 今は、「self-esteem」が強調される時代である。

①自尊心、自負心、自己尊重の強調

- (3) この聖句は、「自己愛」を自然の感情として理解している。
  - ①「自分を愛せよ」という命令はない。
  - ②アガペの愛は、自分に向かうものではない。無私の愛である。
  - ③自分に関心を向けることは、罪の本質である。
- (4) セルフイメージの低い人への助言は、いかにあるべきか。
  - ①キリストにあって、本来の自分を回復する。

### 3. ユダヤ的視点を失った解釈の例

- (1) クリスマン生活の動機は、終末論にある。
- (2) キリスト教は、歴史観である。
  - ①世的歴史観は、この世がいつまでも続くという前提に立っている。
  - ②聖書の歴史観は、歴史はゴールに向かって進んでいると考える。
- (3) 初代教会の信者たちの認識：再臨は近い。
  - ①批判的意見：彼らは、間違っていた。2 千年が経過している。
  - ②正しい理解
    - \*イエスは終末を来させた。
    - \*それ以降の時代は、イエスを信じるために用意された決断の時である。
    - \*人類の歴史は、イエス以降、エピローグの時代に入っている。

- (4) ユダヤ人の救いを論じなくなった時、何が起こったか。

- ①教会時代が千年王国であるという認識
- ②終末時代に対する興味の喪失
- ③キリストの再臨に関する無知
- ④クリスマン生活の動機の喪失
- ⑤1 テサ 5：4～5

「しかし、兄弟たち。あなたがたは暗やみの中にはいないのですから、その日が、盗人のようにあなたがたを襲うことはありません。あなたがたはみな、光の子ども、昼の子どもだからです。私たちは、夜や暗やみの者ではありません」

「教会内の調和を求めて（1）」

1. はじめに

（1）文脈の確認

- ①1～8 章が教理
- ②9～11 章がイスラエルの救い
- ③12～16 章が適用

（2）12 章は、基本的には教会内の行動についての勧めであった。

（3）13 章は、二重国籍者への勧めであった。

（4）14：1～15：13 は、雑多な問題を扱っている。

- ①14：1～4 は、「教会内の一致を求めて」がテーマである。
- ②超道徳的なテーマである。それ自体は、良くも悪くもない。
- ③聖書が明確に指示していない「グレーゾーン」である。

（例話）私の異文化体験

2. アウトライン

- （1）ローマ教会にあった問題（パウロは、体験的に、また噂により知っていた）
- （2）その問題の解決法（1～3 節）
- （3）問題を起こす人への警告（4 節）

3. メッセージのゴール

- （1）現代的課題

このメッセージは、教会内の調和について学ぼうとするものである。

**I. ローマ教会にあった問題**

1. ロマ書は 57 年頃に書かれた。

（1）キリストの死と復活から、20 数年しか経過していない。

- ①ローマ教会が教会として確立してから、20 年前後であろう。
- ②教理的な部分は理解したとしても、実生活の面で分からないことが多い。
- ③各人が、自らの経験や、文化的背景を持って教会に参加してくる。

(2) 律法の時代から恵みの時代に移行していく過程にある。

- ①ユダヤ人信者には、とまどいが多くあった。
- ②それまでの時代は、律法に導かれて生活してきた。
- ③今や、恵みと信仰によって義とされた。
- ④では、モーセの律法や口伝律法をどう考えたらいいのかという疑問がわく。

(例話) 昭和 30 年代初頭の日本

- \* 傷痍軍人がいた。
- \* 小学校の教師は戦時中のことをたびたび話していた。
- \* 「岸壁の母」 菊池章子（昭和 29 年）、リバイバルが二葉百合子（昭和 51 年）。

(3) ユダヤ人信者と異邦人信者の不協和音

- ①特に、肉と日に関する認識の違いがある。
- ②一般的には、ユダヤ人信者は、厳格に解釈する傾向にある。
- ③異邦人信者は、こまかいことにはとらわれない傾向にある。

2. パウロはこの問題に関してすでに触れている。

- (1) ガラテヤ書（48～49 年にかけてか）
- (2) エルサレム会議（49 年初頭）
- (3) 1 コリ（55 年頃）
- (4) ロマ書（57 年頃）
- (5) これから学ぶことは、愛の実践である。

## II. その問題の解決法（1～3 節）

1. 1～2 節

「あなたがたは信仰の弱い人を受け入れなさい。その意見をさばいてはいけません。何でも食べてよいと信じている人もいますが、弱い人は野菜よりほかには食べません」

(1) 信仰の弱い人

- ①自由に振る舞うことに良心の呵責を感じている人
- ②特に、食事の問題で良心の呵責を感じていた。
- ③彼らは肉を断ち、野菜しか食べない。
- ④2 つの理由が考えられる。

\* 偶像に捧げられた肉が、市場で売られている可能性

\*血抜きをしない肉が、売られている可能性

(2) 信仰の強い人

- ①キリストにある自由を満喫し、なんの束縛もなく生きている人
- ②弱い人、強い人は、大まかなグループ分けである。
- ③この用語の背後には、「信仰の強い人」になるのがいいとのニュアンスがある。
- ④パウロは、自分を「信仰の強い人」に含めている。

ロマ 15：1

「私たち力のある者は、力のない人たちの弱さをになうべきです。自分を喜ばせるべきではありません」

(3) 訳文の比較（1 節）

「あなたがたは信仰の弱い人を受け入れなさい。その意見をさばいてはいけません」

（新改訳）

「信仰の弱い者を受け入れなさい。ただ、意見を批評するためであってはならない」

（口語訳）

「信仰の弱い人を受け入れなさい。その考えを批判してはなりません」（新共同訳）

- ①「弱い人」に強調がある構文。この言葉が、文の最初に出てくる。
- ②信仰の弱い人を交わりの中に歓迎しなさい、という意味である。
- ③歓迎する目的は、あるがままでその人を受け入れるためである。
- ④その人の考え方を修正しようという動機で迎えてはならない。
- ⑤どちらでもよいことで、議論するな。

(4) 裁きが必要な時と、裁いてはいけない時

- ①マタ 18 章には、教会による裁きの手順が書かれている。
- ②1 コリ 5 章には、罪を犯している人への裁きが書かれている。
- ③ここでの文脈は、「グレーゾーン」に関する命令である。

2. 3 節

「食べる人は食べない人を侮ってはいけないし、食べない人も食べる人をさばいてはいけません。神がその人を受け入れてくださったからです」

(1) 強い人への警告

- ①その人は、肉を食べる。
- ②食べ物が自分の内面を汚さないことを知っている。
- ③その人は、弱い人を侮るようになる。



- ④優越感は、キリストの弟子にふさわしくない。
- ⑤ギリシア語では「エクスーセネオウ」という動詞である。非常に強い意味。
- ⑥ルカ 23：11  
「ヘロデは、自分の兵士たちといっしょにイエスを侮辱したり嘲弄したりしたあげく、はでな衣を着せて、ピラトに送り返した」

(2) 弱い人への警告

- ①その人は、良心のゆえに肉を食べない。
- ②食べている人を見て、裁くようになる。  
(例話) 受難週の断食
- ③神がその人を受け入れてくださったので、裁いてはならない。

### Ⅲ. 問題を起こす人への警告 (4 節)

1. 4 節

「あなたはいったいだれなので、他人のしもべをさばくのですか。しもべが立つのも倒れるのも、その主人の心次第です。このしもべは立つのです。なぜなら、主には、彼を立たせることができるからです」

(1) 越権行為への戒め

- ①「さばく」はギリシア語で「クリノウ」。分詞形。継続した行為を指す。
- ②マタ 7：1  
「さばいてはいけません。さばかれないためです」  
\*人間の規準でさばいてはいけないという意味。特にミシュナが問題。

(2) この戒めの背景にある比喻

- ①「しもべ」は、「デューロス」ではなく、「オイケテイス」である。
- ②家のしもべ (household servant) である。
- ③あなたにしもべがおり、あなたの隣人にもしもべがいる。
- ④あなたには他人のしもべをさばく権利はない。
- ⑤あなたの隣人にも、あなたのしもべを裁く権利はない。
- ⑥主人だけが、自分のしもべの評価をする。

(3) あなたがさばいているしもべは、キリストのしもべである。

- ①キリストはその人を立たせることができる。

## 結論：現代的課題

### はじめに

- (1) ロマ書が書かれた時代の信者たちは、20 年前後の信仰の歴史しかなかった。
- (2) 今は、2000 年近い歴史があるのに、いまだにパウロの意図を理解できていない。

### 1. アルコール

- (1) エペ 5：18

「また、酒に酔ってははいけません。そこには放蕩があるからです。御霊に満たされなさい」

- ①酒によって支配されることの禁止であって、飲酒を罪としているのではない。
- ②カナの婚礼での奇跡

- (2) 1 テモ 5：23

「これからは水ばかり飲まないで、胃のために、また、たびたび起こる病気のためにも、少量のぶどう酒を用いなさい」

- ①ぶどう酒を益に用いることを奨励している。

- (3) 飲まないことは素晴らしいが、飲んでも構わない。

（例話）聖地旅行での飲酒

### 2. ぜいたく品

- (1) 1 テモ 6：7～8

「私たちは何一つこの世に持って来なかったし、また何一つ持って出ることもできません。衣食があれば、それで満足すべきです」

- ①富の所有を否定しているのではない。

- (2) 1 ヨハ 3：17

「世の富を持ちながら、兄弟が困っているのを見ても、あわれみの心を閉ざすような者に、どうして神の愛がとどまっているでしょう」

- ①富を持つ者には、多くの責任が与えられている。

（例話）牧師会で、家の広さが問題となった。「自分の家よりも多きものは罪」

### 3. 衣装

(1) 1 ペテ 3：3～4

「あなたがたは、髪を編んだり、金の飾りをつけたり、着物を着飾るような外面的なものでなく、むしろ、柔和で穏やかな霊という朽ちることのないものを持つ、心の中の隠れた人がらを飾りにしなさい。これこそ、神の御前に価値あるものです」

- ①ローマ時代、多額のことを消費して着飾る婦人がいた。趣味が悪いとされた。
- ②ペテロは、飾りや衣装を否定しているのではない。
- ③私たちには、自分よりも美しいのは、罪であるとの意識がある。

(2) マタ 6：28～30

「なぜ着物のことで心配するのですか。野のゆりがどうして育つのか、よくわきまえなさい。働きもせず、紡ぎもしません。しかし、わたしはあなたがたに言います。栄華を窮めたソロモンでさえ、このような花の一つほどにも着飾ってはいませんでした。きょうあっても、あすは炉に投げ込まれる野の草さえ、神はこれほどに装ってくださるのだから、ましてあなたがたに、よくしてくだらないわけがありましょうか。信仰の薄い人たち」

- ①神への信頼がここでのテーマである。
  - ②神は、芸術家である。
  - ③私たちもまた、その性質を受け継いでいる。
- （例話）茶髪の男性。ピアスの男性。

4. 趣味

- (1) 映画
- (2) ダンス
- (3) 音楽
- (4) ゲーム
- (5) ゴルフ
- (6) これらのものは、それ自体は良くも悪くもない。

5. 律法主義の危険性

- (1) 業による救い
- (2) 聖書に書かれていないことをルール化し、それを他の人に強要すること

「教会内の調和を求めて（2）」

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①1～8 章が教理
- ②9～11 章がイスラエルの救い
- ③12～16 章が適用

(2) 12 章は、基本的には教会内の行動についての勧めであった。

(3) 13 章は、二重国籍者への勧めであった。

(4) 14：1～15：13 は、雑多な問題を扱っている。

- ①14：1～4 は、超道徳的なテーマ。それ自体は、良くも悪くもない。
- ②聖書が明確に指示していない「グレーゾーン」である。
- ③互いに裁き合わない。

（例話）アンケート紹介

(5) 14：5～12 は、さらに深刻な問題を取り上げている。

2. アウトライン

- (1) 個人的確信（5～8 節）
- (2) 神学的土台（9～12 節）

3. メッセージのゴール（恵みと律法の関係）

- (1) 割礼の問題
- (2) 曜日の問題
- (3) 什一献金の問題
- (4) 調和（一致）の意味

このメッセージは、教会内の調和について学ぼうとするものである。

I. 個人的確信（5～8 節）

1. 5 節 a

「ある日を、他の日に比べて、大事だと考える人もいますが、どの日も同じだと考える人もいます」

(1) 日にこだわるのは、主にユダヤ人信者であろう。

- ①安息日
- ②旧約聖書の例祭
- ③断食日

ルカ 18：11～12

「パリサイ人は、立って、心の中でこんな祈りをした。『神よ。私はほかの人々のようにゆする者、不正な者、姦淫する者ではなく、ことにこの取税人のようではないことを、感謝します。私は週に二度断食し、自分の受けるものはみな、その十分の一をささげております』」

- ④異教の影響を受けた幸運の日、不運の日

(2) どの日も同じだと考えるのは、主に異邦人信者であろう。

- ①結局は、すべてが神のものである。
- ②生活している毎日が、神に祈り、神を礼拝する機会となり得る。

## 2. 5b 節

「それぞれ自分の心の中で確信を持ちなさい」（新改訳）

「各自はそれぞれ心の中で、確信を持っておるべきである」（口語訳）

「それは、各自が自分の心の確信に基づいて決めるべきことです」（新共同訳）

(1) グレーゾーンに関しては、個人的確信が最も重要な要素となる。

（例話）ダニ 1：8～16

- ①ダニエルと 3 人の友人たちは、ごちそうとぶどう酒を断ち、野菜を食べた。
- ②その結果、同年輩の少年たちよりも顔色がよくなった。
- ③彼らは、この食習慣を他のヘブル人の少年たちに押し付けたわけではない。

## 3. 6 節

「日を守る人は、主のために守っています。食べる人は、主のために食べています。なぜなら、神に感謝しているからです。食べない人も、主のために食べないのであって、神に感謝しているのです」

(1) 弱い人も強い人も、同じ動機で動いている。

- ①特定の日を重んじる人は、主を尊ぶためにそうしている。
- ②（肉を）食べる人は、主に対して食べ、神に感謝している。
- ③（肉を）食べない人は、主を尊ぶためにそうしており、神に感謝している。

(2) それぞれの動機は正しいので、ともに神から許される。

① 私たちには、他の人をさばく権利はない。

#### 4. 7～8 節

「私たちの中でだれひとりとして、自分のために生きている者はなく、また自分のために死ぬ者もありません。もし生きるなら、主のために生き、もし死ぬなら、主のために死ぬのです。ですから、生きるにしても、死ぬにしても、私たちは主のものです」

(1) 信者は、自己中心的な生き方から解放されている。

① キリストのしもべとしての認識

(2) 動機は、生きるにしても、死ぬにしても、主のために行動したいということ。

① それゆえ、他の人をさばくべきではない。

## II. 神学的土台（9～12 節）

### 1. 神学と実践

(1) 神学のない実践はなく、実践のない神学もない。

① 神学のない礼拝はなく、礼拝のない神学もない。

② ここでパウロは、グレーゾーンに関する議論を、神学的高嶺に引き上げている。

### 2. 9～10 節

「キリストは、死んだ人にとっても、生きている人にとっても、その主となるために、死んで、また生きられたのです。それなのに、なぜ、あなたは自分の兄弟をさばくのですか。また、自分の兄弟を侮るのですか。私たちはみな、神のさばきの座に立つようになるのです」

(1) キリストの死、復活が、信者の実践の土台となる。

① キリストは、その死と復活によって、すべての人の主となられた。

＊この時点で、生きている人

＊すでに死んだ人

＊ローマ教会の中にあったすべてのグループの人々

② それゆえ、兄弟をさばいてはならない（弱い人への勧告）。

③ それゆえ、兄弟を侮ってはならない（強い人への勧告）。

(2) 終末的さばきの座（神のさばきの座）が、信者の実践の土台となる。

①キリストだけが、私たちの唯一のさばき主である。

②2 コリ 5：10

「なぜなら、私たちはみな、キリストのさばきの座に現れて、善であれ悪であれ、各自その肉体にあつてした行為に応じて報いを受けることになるからです」

③1 コリ 3：12～15

「もし、だれかがこの土台の上に、金、銀、宝石、木、草、わらなどで建てるなら、各人の働きは明瞭になります。その日がそれを明らかにするのです。というのは、その日は火とともに現れ、この火がその力で各人の働きの真価をためすからです。もしだれかの建てた建物が残れば、その人は報いを受けます。もしだれかの建てた建物が焼ければ、その人は損害を受けますが、自分自身は、火の中をくぐるようにして助かります」

(3)「キリストのさばきの座」

①救いに関するさばきではない。信者はすでに救われている。

②信者としての生活に関する評価である。

### 3. 11～12 節

「次のように書かれているからです。『主は言われる。わたしは生きている。すべてのひざは、わたしの前にひざまずき、すべての舌は、神をほめたたえる』。こういうわけですから、私たちは、おのおの自分のことを神の御前に申し開きすることになります」

(1) イザ 49：18 と 45：23 からの引用

①ピリ 2：10～11

「それは、イエスの御名によって、天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるもののすべてが、ひざをかがめ、すべての口が、『イエス・キリストは主である』と告白して、父なる神がほめたたえられるためです」

(2) イザヤ書を引用しているのは、ユダヤ人信者により多くの問題があったからか。

## 結論：恵みと律法の関係

### 1. 割礼の問題

(1) 異邦人も救われることは、コルネリオの救いによって証明された。

①ユダヤ人にとっては、驚きの事実

②聖霊の降臨がなければ、容易に信じられなかったであろう。

- (2) では、どういう条件のもとで、異邦人は救われるのかが問題になった。
  - ①割礼派（割礼を重視するユダヤ人）の存在
  - ②彼らは、アンテオケ教会に行って、割礼を受けなければ救われないと教えた。
  - ③これは、グレーゾーンではなく、福音の本質にかかわる問題である。
  
- (3) エルサレム会議（使 15 章。紀元 49 年初頭）
  - ①パウロとバルナバは、信仰と恵みによる救いを主張した。
  - ②異邦人は、ユダヤ人のようにならなくても救われるという決定がなされた。
  - ③ただし、4つのものを避けるようにとの勧告がなされた（在留異邦人への律法）。
    - \*偶像に供えて汚れた物
    - \*不品行
    - \*絞め殺した物
    - \*血
  
- (4) 今日のガイドライン
  - ①どこまで律法を守るかは、グレーゾーンである。
  - ②ただし、律法を守ることを救いの条件にしてはならない。
  - ③メシアニック・ジューには、律法を守る自由がある。
  - ④それを他の信者、特に異邦人に押し付けてはならない。
  - ⑤異邦人は、ユダヤ人のようになる必要はない。
  - ⑥異邦人がユダヤ的習慣を行う場合、それはあくまでも個人的選りによる。

## 2. 曜日の問題

- (1) 安息日の規定は、モーセの律法に含まれる。
  - ①モーセの律法は、新約時代の信者には適用されない。
  
- (2) 今は、すべての日が礼拝に適した日である。
  - ①日曜日を特別扱いする聖書的根拠はない。
  - ②新約聖書では、定期的に集うことが命令されている。
  
- (3) ユダヤ人には、安息日を守る自由がある。

## 3. 什一献金の問題

- (1) 什一献金の規定は、モーセの律法に含まれる。
  - ①モーセの律法は、新約時代の信者には適用されない。



(2) 今は、喜んで捧げる時代である。

①2 コリ 9：6～7

「私はこう考えます。少しだけ蒔く者は、少しだけ刈り取り、豊かに蒔く者は、豊かに刈り取ります。ひとりひとり、いやいやながらでなく、強いられてでもなく、心で決めたとおりにしなさい。神は喜んで与える人を愛してくださいます」

(3) 個人的確信として什一を捧げることは、許される。

①什一を捧げる人は、そうしない人をさばいてはならない。

②自由な献金を捧げる人は、什一を捧げる人を侮ってはならない。

#### 4. 調和（一致）の意味

(1) 画一的一致ではない。

(2) 独立と多様性を前提とした一致である。

①福音の真理に関しては、同じ確信を共有している。

②グレーゾーンに関しては、各人が自分の確信を持っている。

## 「キリスト者の自由」

### 1. はじめに

#### (1) 文脈の確認

- ①1～8 章が教理
- ②9～11 章がイスラエルの救い
- ③12～16 章が適用

(2) 12 章は、基本的には教会内の行動についての勧めであった。

(3) 13 章は、二重国籍者への勧めであった。

(4) 14：1～15：13 は、雑多な問題を扱っている。

- ①超道徳的なテーマ。それ自体は、良くも悪くもない。
  - ②聖書が明確に指示していない「グレーゾーン」である。
  - ③2 次的なことのついては、互いに裁き合わない。
  - ④繰り返しが多いのは、これが重要なテーマであるから。
- （例話）前回のアンケートの紹介

(5) 14：13～15：3 は、強い人への勧告になっている。

- ①強い人：キリストにあってすべてが許されているとの確信を持っている。
- ②弱い人：ユダヤ教の教えや伝統の影響を受けている。

### 2. アウトライン

- (1) まとめと新しいテーマの紹介（13～14 節）
- (2) 愛の律法（15～19 節）
- (3) クリスマン生活の原則（20～23 節）
- (4) キリストの手本（15：1～3 節）

### 3. メッセージのゴール（キリスト論と実践）

- (1) 詩 69：9
- (2) マコ 10：45
- (3) ピリ 2：6～11
- (4) コロ 1：27

このメッセージは、キリスト者の自由について学ぼうとするものである。

## I. まとめと新しいテーマの紹介（13～14 節）

### 1. まとめ（13a 節）

「ですから、私たちは、もはや互いにさばき合うことのないようにしましょう」

（1）霊的取締り官になってはならない。

①神のみが裁き主である。

②裁きは神に委ねる。

（2）他人に対する態度が問題にされてきた。

①弱い人は、強い人を裁かない。

②強い人は、弱い人を見下さない。

### 2. 新しいテーマの紹介（13b 節）

「いや、それ以上に、兄弟にとって妨げになるもの、つまずきになるものを置かないように決心しなさい」

（1）注意が自分に向けられている。

①他人を裁かないということ以上に重要なことがある。

②これ以降の勧告は、主に強い人に対するものである。

③兄弟喧嘩では、兄により多くの勧めがなされる。

（2）グレーゾーンで重要なのは、他者への配慮である。

①「妨げとなるもの」、「つまずきになるもの」とは、弱い人に関するものである。

②それは、弱い人に罪を犯させるようなもののことである。

### 3. パウロの確信（14 節）

「主イエスにあって、私が知り、また確信していることは、それ自体で汚れているものは何一つないということです。ただ、これは汚れていると認める人にとっては、それは汚れたものなのです」

（1）主イエスにある確信

①1 コリ 2：16

「いったい、『だれが主のみところを知り、主を導くことができたか。』ところが、私たちには、キリストの心があるのです」

（2）それ自体で汚れているものは何一つない。

①肉やぶどう酒のことを論じている。

②モーセの律法においては、汚れたものがあつた。

③キリストの律法においては、それ自体で汚れているものは何一つない。

＊豚、エビ、カニ、タコ、イカなども汚れていない。

(3) 汚れていると考える人には、汚れている。

①その人は、弱い人である。

②汚れは、その人の考えの中にある。

## II. 愛の律法 (15～19 節)

### 1. 15 節

「もし、食べ物の中で、あなたの兄弟が心を痛めているのなら、あなたはもはや愛によって行動しているではありません。キリストが代わりに死んでくださったほどの人を、あなたの食べ物の中で、滅ぼさないでください」

(1) 与えられている自由（権利）には、ある制限がある。

①愛によって行動するという制限である。

(2) 自由の行使によって、兄弟が心を痛める場合がある。

①強い人の信仰につまずく。

②自分も、良心に反して不本意な行為に走ることになる。

(3) キリストは、弱い人のためにも死んでくださった。

①1 コリ 8：11～12

「その弱い人は、あなたの知識によって、滅びることになるのです。キリストはその兄弟のためにも死んでくださったのです。あなたがたはこのように兄弟たちに対して罪を犯し、彼らの弱い良心を踏みにじるとき、キリストに対して罪を犯しているのです」

### 2. 16 節

「ですから、あなたがたが良いとしている事がらによって、そしられないようにしなさい」

(1) 信者の間に、あなたの悪評が広がる。

①それは、あなたの奉仕の妨げとなる。

(2) 未信者の間に、クリスチャンの悪評が広がる。

①信者同志の対立が、福音宣教の妨げとなる。

### 3. 17 節

「なぜなら、神の国は飲み食いのことではなく、義と平和と聖霊による喜びだからです」

(1) 文脈を無視した解釈の例（ご馳走がなくてもクリスチャンの集まりは楽しい）

(2) 「神の国」という言葉

- ①新約聖書で 65 回、パウロ書簡で 8 回
- ②ローマ帝国内を巡回したパウロは、この言葉を注意深く使用した？
- ③異邦人信者は、旧約聖書の背景を知らないから？
- ④ここでの「神の国」とは、「神の支配」か「メシア的王国」のこと。

(3) クリスチャン生活の 3 要素

- ①義（神との関係）
- ②平和（隣人との関係）
- ③喜び（自分の内面の状態）

＊「聖霊による」は、「喜び」にかかっている（修飾している）。

＊利己的願望が達成された結果の喜びではない。

＊むしろ、自我が死ぬことから来る喜びである。

### 4. 18～19 節

「このようにキリストに仕える人は、神に喜ばれ、また人々にも認められるのです。そういうわけですから、私たちは、平和に役立つことと、お互いの霊的成長に役立つこととを追い求めましょう」

(1) 「キリストに仕える人」

- ①弱い人への愛のゆえに、自由を制限している人。
- ②自由を行使しないことを、自由に選んだ人。

(2) その人は、神に喜ばれ、人々にも認められる。

- ①平和と霊的成長が、行動する際の最も重要な動機である。

## Ⅲ. クリスチャン生活の原則（20～23 節）

### 1. 20～21 節

「食べ物のことで神のみわざを破壊してはいけません。すべての物はきよいのです。しかし、それを食べて人につまずきを与えるような人の場合は、悪いのです。肉を食べず、ぶ

どう酒を飲まず、そのほか兄弟のつまずきになることをしないのは良いことなのです」

(1) 同じ教えの繰り返しである。

①食物と飲み物は、2 次的なことである。

②周りにいる人たちのことを考えて行動すべきである。

(2) 重要でないことで、教派の対立をするな。

(例話) 聖霊墳墓教会、生誕教会での、争い。

## 2. 22～23a 節

「あなたの持っている信仰は、神の御前でそれを自分の信仰として保ちなさい。自分が、良いと認めていることによって、さばかれない人は幸福です。しかし、疑いを感じる人が食べるなら、罪に定められます。なぜなら、それが信仰から出ていないからです」

(1) 各自が自分の確信を持つ。

①強い人は、その確信を放棄することはないが、制限することはある。

②弱い人は、疑いを感じながら行動に移してはならない。

(例話) ビールを飲むカトリックの司祭

## 3. 23b 節

「信仰から出ていないことは、みな罪です」

(1) これがクリスチャン生活の原則である。

①この箇所文脈を超えて、普遍的な真理である。

②疑いのある場合は、するな。

(2) 2 種類の罪

①強い人は、弱い人をつまづかせたときに、罪を犯している。

②弱い人は、疑いを持ちつつ行うなら、罪を犯している。

# IV. キリストの手本 (15：1～3 節)

## 1. 1～2 節

「私たち力のある者は、力のない人たちの弱さをになうべきです。自分を喜ばせるべきではありません。私たちはひとりひとり、隣人を喜ばせ、その徳を高め、その人の益となるようにすべきです」

(1) パウロは、自分を強い人に含めている。

(2) キリストに倣う者となるようにとの勧告

- ①キリストは、自分を喜ばせるよりも、人々に仕えることに専念された。
- ②クリスチャンとは、キリストの弟子である。
- ③弟子は、主人の行動に倣う者である。

2. 3 節

「キリストでさえ、ご自身を喜ばせることはなさらなかったのです。むしろ、『あなたをそしめる人々のそしりは、わたしの上にふりかかった』と書いてあるとおりです」

- (1) 詩 69：9 からの引用

結論：キリスト論と実践

はじめに

- (1) 実践のない神学はなく、神学のない実践もない。
- (2) ロマ書 1～11 章と 13 章～16 章は、車の両輪の関係にある。
- (3) パウロの内に、神学者と牧会者の賜物が併存している。

1. 詩 69：9

「それは、あなたの家を思う熱心が私を食い尽くし、あなたをそしめる人々のそしりが、私に降りかかったからです」

- (1) 詩 69 篇は、初代教会の信徒たちの信仰告白となっていた。

①彼らはこれを、メシア預言と理解した。

②ヨハ 2：17

「弟子たちは、『あなたの家を思う熱心がわたしを食い尽くす』と書いてあるのを思い起こした」

- (2) この聖句は、イエスの受難、十字架の死を預言したものである。

①御子イエスは、自分の思いではなく、御父の思いを優先された。

2. マコ 10：45

「人の子が来たのも、仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、また、多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるためなのです」

3. ペリ 2：6～11

「キリストは神の御姿である方なのに、神のあり方を捨てられないとは考えず、ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられました。人としての性質をもって現れ、自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われました。それゆえ神は、この方を高く上げて、すべての名にまさる名をお与えになりました。それは、イエスの御名によって、天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるもののすべてが、ひざをかがめ、すべての口が、『イエス・キリストは主である』と告白して、父なる神がほめたたえられるためです」

#### 4. コロ 1：27

「神は聖徒たちに、この奥義が異邦人の間にあってどのように栄光に富んだものであるかを、知らせたいと思われたのです。この奥義とは、あなたがたの中におられるキリスト、栄光の望みのことです」



「希望から希望へ」

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①1～8 章が教理
- ②9～11 章がイスラエルの救い
- ③12～16 章が適用

(2) 14：1～15：13 は、雑多な問題を扱っている。

- ①超道徳的なテーマ。それ自体は、良くも悪くもない。
- ②聖書が明確に指示していない「グレーゾーン」である。
- ③2 次的なことのついては、互いに裁き合わない。

(例話) 前回のアンケートの紹介

(3) きょうの箇所は、ロマ書全体の議論のまとめとなっている。

- ①キーワードは、「希望」である。
- ②これ以降は、パウロの個人的な挨拶に入っていく。

2. アウトライン

- (1) 聖書は希望を与える（4 節）。
- (2) 希望は一致を生む（5～6 節）。
- (3) 一致は神の栄光につながる（7～12 節）。ロマ 9～11 章のまとめ
- (4) 信じる者は希望に満たされる（13 節）。

3. メッセージのゴール

- (1) 礼拝の重要性

このメッセージは、クリスチャンの希望について学ぼうとするものである。

**I. 聖書は希望を与える（4 節）**

1. 絶望的な状況は、存在しない。

- (1) 人が絶望するだけである。
- (2) 目先のものととられるがゆえに、全体像が見えなくなる。
- (3) ロマ 8：28 は、聖書の世界観を教えている。

「神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています」

## 2. 4 節

「昔書かれたものは、すべて私たちを教えるために書かれたのです。それは、聖書の与える忍耐と励ましによって、希望を持たせるためなのです」（新改訳）

「かつて書かれた事柄は、すべてわたしたちを教え導くためのものです。それでわたしたちは、聖書から忍耐と慰めを学んで希望を持ち続けることができるのです」（新共同訳）

(1) この真理は、2000 年前も今も、変わらない。

①かつて書かれたことは、私たちを導くためのものである。

②私たちは、聖書から忍耐と慰めを学ぶ。

③過去の聖徒たちが忍耐を通して祝福を得たことを学び、そこから慰めを得る。

＊アブラハム、イサク、ヤコブ、ヨセフの信仰

(2) 1 コリ 10：11（否定的な例）

「これらのことが彼らに起こったのは、戒めのためであり、それが書かれたのは、世の終わりに臨んでいる私たちへの教訓とするためです」

(3) ロマ 4：23～24（肯定的な例）

「しかし、『彼の義とみなされた』と書いてあるのは、ただ彼のためだけでなく、また私たちのためです。すなわち、私たちの主イエスを死者の中からよみがえらせた方を信じる私たちも、その信仰を義とみなされるのです」

## 3. 聖書研究がもたらす恵み

(1) 希望は、自分で努力して作るものではない。

①神は、聖書を通してお語りになる。

(2) 3 つの恵み

①過去の聖徒の忍耐を学ぶ。

②現在の生活において慰めを受ける。

③未来に良きものが待っているとの希望を持つ。

＊聖書を通して与えられる希望こそ、困難な時代を生きる力である。

＊パウロにとっては、内憂外患の時代である。

＊しかし、希望を失わない。

（例話）日本を代表する 2 人の伝道者の発言（悲観と楽観）

## Ⅱ. 希望は一致を生む（5～6 節）

### 1. 5 節

「どうか、忍耐と励ましの神が、あなたがたを、キリスト・イエスにふさわしく、互いに同じ思いを持つようにしてくださいますように」

（1）私たちの神は、「忍耐と励ましの神」である。

①聖書の著者は、神ご自身である。

②その神が、私たちに希望を与えてくださる。

（2）共通の希望こそ、一致のための土台である。

①同じ思いを持つとは、意見が一致することではない。

②強い人と弱い人には、意見の相違がある。

③この一致とは、調和であり、キリストの臨在である。

（3）「キリスト・イエスにふさわしく」

①「キリスト・イエスに倣って」（新共同訳）

②キリストの価値観を持ち、キリストのように考え、行動すること。

### 2. 6 節

「それは、あなたがたが、心を一つにし、声を合わせて、私たちの主イエス・キリストの父なる神をほめたたえるためです」

（1）一致する目的は、主イエス・キリストの父なる神をほめたたえるためである。

①これは、クリスチャン生活のゴールである。

②これは、教会が存在している目的である。

（2）私たちの礼拝は、壮大なシンフォニーである。

## Ⅲ. 一致は神の栄光につながる（7～12 節）

1. 7～12 節は、この手紙のこれまでの議論のまとめとなっている。

（1）特に、ロマ 9～11 章の内容が短くまとめられている。

### 2. 7 節

「こういうわけですから、キリストが神の栄光のために、私たちを受け入れてくださったように、あなたがたも互いに受け入れなさい」

(1) キリストの手本がある。

①キリストは、先ずユダヤ人を受け入れ、次に異邦人を受け入れてくださった。

②そうされたのは、神の栄光のためである。

(2) キリストに従うとは、互いに受け入れ合うことである。

### 3. 8 節

「私は言います。キリストは、神の真理を現すために、割礼のある者のしもべとなられました。それは父祖たちに与えられた約束を保証するためであり、」

(1) 「割礼のある者」とは、ユダヤ人のこと。

①キリストはユダヤ人への奉仕を優先された。

(2) マタ 10：5～6

「イエスは、この十二人を遣わし、そのとき彼らにこう命じられた。『異邦人の道に行ってははいけません。サマリヤ人の町に入ってははいけません。イスラエルの家の失われた羊のところに行きなさい』」

(3) マタ 15：24

「しかし、イエスは答えて、『わたしは、イスラエルの家の失われた羊以外のところには遣わされていません』と言われた」

(4) その目的

①神の真理を現すため

②「神の真実を現すため」（新共同訳）

③父祖たち（アブラハム、イサク、ヤコブ）に与えられた約束を保証するため。

④メシアに関する種々の約束である。

### 4. 9 節 a

「また異邦人も、あわれみのゆえに、神をあがめるようになるためです」

(1) 福音は、異邦人にも伝えられるようになった。

①その目的は、異邦人もユダヤ人といっしょに神をあがめるようになるため。

5. 異邦人を救う計画が最初からあったことを示すために、4つの聖句が引用される。

(1) 9 節 b は、詩 18：49 と 2 サム 22：50 からの引用

「それゆえ、私は異邦人の中で、あなたをほめたたえ、あなたの御名をほめ歌おう」

- ①神はイスラエルを守られる。
- ②敵に勝利したダビデは、国々（異邦人）の中で、神の御名を称える。
- ③異邦人は、神が力ある方であることを知らされる。
- ④これは、旧約聖書における異邦人伝道の典型的な型である。

(2) 10 節は、申 32：43 からの引用

「異邦人よ。主の民とともに喜べ」

- ①申 32 章には、モーセの歌が記されている。
- ②その歌の最後で、モーセは異邦人（諸国の民）を招いている。
- ③パウロは、43 節の前半しか引用していない。
- ④43 節の後半には、神に敵対する者への裁きが書かれている。
- ⑤異邦人は、神との和解のテーブルに招かれている。

(3) 11 節は、詩 117：1 からの引用（2 節しかない。それゆえ、強烈である）

「すべての異邦人よ。主をほめよ。もろもろの国民よ。主をたたえよ」

- ①「すべての国々よ。【主】をほめたたえよ」となっている。
- ②異邦人が、礼拝に招かれている。

(4) 12 節は、イザ 11：10 からの引用

「エッサイの根が起こる。異邦人を治めるために立ち上がる方である。異邦人はこの方に望みをかける」

- ①エッサイは、ダビデの父。
- ②「エッサイの根」とは、キリストのこと。
- ③異邦人は、ユダヤ人のメシアに望みをかけるようになるという預言。

6. パウロは旧約聖書の 3 区分すべてから引用している。

(1) 律法、預言、諸書

(2) これは、ローマ教会内のユダヤ人信者を意識してのことであろう。

- ①異邦人の救いは、旧約聖書の時代から預言されていたことである。
- ②神は異邦人にも、あわれみを示された。
- ③それゆえ、異邦人を受け入れるように。

(3) ユダヤ人と異邦人がともに救われ、神をたたえるのは、神の栄光につながる。

#### IV. 信じる者は希望に満たされる（13 節）

##### 1. 13 節

「どうか、望みの神が、あなたがたを信仰によるすべての喜びと平和をもって満たし、聖霊の力によって望みにあふれさせてくださいますように」

(1) これは、頌栄である。

(2) 神は、「望みの神」である。

①神は、私たちが喜びと平和をもって満たしてくださる。

②その結果、希望に満ち溢れさせてくださる。

③これは、聖霊の働きである。

(3) 「信仰による」

①「信仰から来る」（口語訳）

②「信仰によって得られる」（新共同訳）

③人間が作り出す希望ではなく、信仰によって得られる神が与える希望である。

#### 結論：ロマ書の教えのまとめ

##### 1. 礼拝の重要性

(1) 一致の目的は、礼拝である。

(2) なぜ礼拝が重要なのか。

(例話) ある人の質問。「神様は、そんなにほめられたいのか」

①創造主と被造物の関係（ガソリン車はガソリンで走る）

②人は何かに満たされなければ、動かない。

③人は一番大事にしているものが、その人にとって神である。

(例話) ヘロイン中毒は、偶像礼拝の極致である。

(3) 真の神を礼拝することが、人間性の回復の方法である。

(例話) ゴルファーとしての夢。納得できる一打。

## 「執筆の目的」

### 1. はじめに

#### (1) 文脈の確認

- ①14：1～15：13 は、雑多な問題を扱っている。
- ②裁き合わないで心をひとつにして、神をたたえる。
- ③これが、神の栄光につながる。

#### (2) 今回から、「結論」に入る。

- ①執筆の目的（15：14～21）
- ②パウロの将来の計画（15：22～33）
- ③賛美と警告（16：1～27）

#### (3) パウロの心を知らなければ、ロマ書を理解することはできない。

- ①きょうの箇所では、召命に対する使命意識を理解する必要がある。  
（例話）ゴルフ場でアルバイトをした人の例話。今の仕事をいかにすべきか。

### 2. アウトライン

- (1) ローマ教会の評価（14 節）
- (2) 使徒としての使命（15～16 節）
- (3) 使徒としての誇り（17～19 節）
- (4) 使徒としての奉仕の原則（20～21 節）

### 3. メッセージのゴール

- (1) ローマ教会と私たち
- (2) アブラハム契約とパウロ
- (3) 使徒的使命と私たち

このメッセージは、パウロの心を学ぼうとするものである。

## I. ローマ教会の評価（14 節）

### 1. この手紙を受け取った側の反応

- (1) パウロとローマ教会の関係

- ①パウロはこの教会の設立者ではない。
- ②パウロはこの教会を訪問したことがない。
- ③その教会に、長い手紙を書いた。

(2) 長い手紙が会衆の前で読み上げられる。

- ①自分たちがすでに教えられ、知っている内容が書かれている。
- ②パウロは、自分たちの信仰や霊的状态を疑っている。
- ③少なくとも、高くは評価していない。

(3) パウロは非常に敏感で、他者への配慮に富んだ人である。

- ①パウロはローマ教会の中に人脈を持っていた（16 章）。
- ②ローマ教会を高く評価していた。

## 2. 14 節

「私の兄弟たちよ。あなたがた自身が善意にあふれ、すべての知恵に満たされ、また互いに訓戒し合うことができることを、この私は確信しています」

(1) 「さて、わたしの兄弟たちよ」（口語訳）は、よい訳である。

- ①英語では、「And」であるが、「Now」の方がいい。
- ②ここから話題が変わる。結論に入っていく。

(2) ローマ教会の 3 つの特徴（完ぺきということではない）

①「善意にあふれ」

「善意に満ち」（新共同訳）

\*新生した人の特徴である。

②「すべての知恵に満たされ」

「あらゆる知識で満たされ」（新共同訳）

\*信仰に関する基本的知識がある。

③「互いに訓戒し合うことができる」

「互いに戒め合うことができる」（新共同訳）

\*裁き合うことではなく、教え合うこと。

(3) 以上の 3 点は、パウロの確信である。

- ①では、なぜこの手紙を書く必要があったのか。
- ②使徒的使命がその動機になっている。



## Ⅱ. 使徒としての使命（15～16 節）

### 1. 15 節

「ただ私が所々、かなり大胆に書いたのは、あなたがたにもう一度思い起こしてもらうためでした」

「記憶を新たにしてもらおうと、この手紙ではところどころかなり思い切って書きました」  
（新共同訳）

(1) 「かなり大胆に」という言葉に、強調がある。

- ①パウロの性格から来るもの
- ②話題の重要性から来るもの

(2) 「所々」とは、どの箇所か。

- ①ロマ書 9～11 章
- ②ロマ書 12 : 1～15 : 13

(2) 目的は、学んだことの再確認にある。

- ①ローマの信徒たちはすでに知っていた。
- ②知っていることを、もう一度思い起こすため。

### 2. 16 節

「それも私が、異邦人のためにキリスト・イエスの仕え人となるために、神から恵みをいただいているからです。私は神の福音をもって、祭司の務めを果たしています。それは異邦人を、聖霊によって聖なるものとされた、神に受け入れられる供え物とするためです」

(1) パウロが大胆になれたのは、神からの恵みをいただいているからである。

- ①使徒の条件は、主イエスの洗礼から召天までともに働き、目撃したということ。
- ②パウロは、いわば部外者であった。
- ③恵みのゆえに、復活のキリストに出会い、使徒としての召命を受けた。
- ④しかも、異邦人のための使徒として召された。
- ⑤ロマ 11 : 13

「そこで、異邦人の方々に言いますが、私は異邦人の使徒ですから、自分の務めを重んじています」

⑥ローマ教会は異邦人中心の教会である。そこに手紙を書くのは当然である。

(2) 「仕え人」

- ①ギリシア語で「レイトゥルゴス」である。

- ②本来は、公の仕事をする人。今でいう公務員。
- ③新約聖書では、宗教的意味が加わる。祭司のこと。
- ④へブ 8：2 は、この言葉を大祭司イエスに適用している。  
「人間が設けたのではなくて、主が設けられた真実の幕屋である聖所で仕えておられる方です」

(3) 「祭司としての務めを果たしています」

- ①この認識が、ロマ書執筆の背景を理解する鍵である。
- ②祭司は、神に供え物をすることが使命である。
- ③異邦人を救いに導くことが、比喩的に「供え物とする」ということ。
- ④新生した異邦人は、聖霊によって聖なるものとされた。
- ⑤神は、そのような供え物を受け入れてくださる。

### Ⅲ. 使徒としての誇り（17～19 節）

1. 17 節

「それで、神に仕えることに関して、私はキリスト・イエスにあって誇りを持っているのです」

(1) 彼は、異邦人の使徒であることに誇りを持っている。

- ①個人的なプライドではない。
- ②「キリスト・イエスにあって」というのがキーワードである。

(2) 2 コリ 3：5

「何事かを自分のしたことと考える資格が私たち自身にあるというわけではありません。私たちの資格は神からのものです」

2. 18～19 節 a

「私は、キリストが異邦人を従順にならせるため、この私を用いて成し遂げてくださったこと以外に、何かを話そうなどとはしません。キリストは、ことばと行いにより、また、しるしと不思議をなす力により、さらにまた、御霊の力によって、それを成し遂げてくださいました」

(1) 「異邦人を従順にならせるため」

- ①異邦人が福音を聞き、信仰に導かれることを指す。

(2) パウロの成功は、内住のキリストの力によるものである。

①「ことばと行い」とは、パウロの「ことばと行い」である。

＊「ことば」とは、福音のメッセージである。

＊「行い」とは、福音伝達という行動である。

＊神とパウロとは、同労者であった。

②「しるしと不思議をなす力」

「しるしや奇跡の力」（新共同訳）

＊「しるし」とは、超自然的現象のこと。神学的意味を示す。

＊「不思議」とは、結果としての驚きに強調点がある言葉。

＊以上の 2 つは、使徒職に付随した奇跡である。

(3)「御霊の力によって」

①以上のことすべてが、聖霊の力によってなされた。

#### 19 節 b

「その結果、私はエルサレムから始めて、ずっと回ってイルリコに至るまで、キリストの福音をくまなく伝えました」

(1) エルサレムからイルリコまで

①パウロの伝道は、アンテオケ教会から始まっている。

②パウロは、エルサレム教会の優位性を認めている。

③イルリコとは、現在のユーゴスラビア（2003 年、「セルビア・モンテネグロ」）

④約 2,400 キロ

(2)「くまなく」

①パウロの戦略は、主要都市で伝道すること。

②距離的に見ても、大いなる成果である。

### IV. 使徒としての奉仕の原則（20～21 節）

#### 1. 20 節

「このように、私は、他人の土台の上に建てないように、キリストの御名がまだ語られていない所に福音を宣べ伝えることを切に求めたのです」

(1)「他人の土台の上に建てない」

①これは、パウロのエゴやプライドではない。

②宣教が少しでも早く進むためである。

③ローマ教会と関係を築こうとしているのは、スペイン伝道のためである。

## 2. 21 節

「それは、こう書いてあるとおりです。『彼のことを伝えられなかった人々が見るようになり、聞いたことのなかった人々が悟るようになる』」

### (1) イザ 52：15 からの引用

①苦難のしもべの預言（メシア預言）

②イザ 52：13～15

「見よ。わたしのしもべは栄える。彼は高められ、上げられ、非常に高くなる。多くの者があなたを見て驚いたように、——その顔だちは、そこなわれて人のようではなく、その姿も人の子らとは違っていた——そのように、彼は多くの国々を驚かす。王たちは彼の前で口をつぐむ。彼らは、まだ告げられなかったことを見、まだ聞いたこともないことを悟るからだ」

(2) パウロは、自分の宣教をこのメシア預言の成就としてとらえていた。

①未伝地区への伝道を主体に考えていた。

②それゆえ、ローマにも行けなかったのだ。

## 結論：

### 1. ローマ教会と私たち

#### (1) 成長した教会の 3 つの特徴

①道徳的特徴

「善意にあふれ」

②知的特徴

「すべての知恵に満たされ」

③機能的特徴

「互いに訓戒し合うことができる」

\*裁き合うことではなく、教え合うこと。

\*これは、公の場ではなく、日常生活におけることである。

\*教えることは、一人の人の独占ではない。

\*学ぶ必要のない人は、いない。

\*教えるものを何一つ持っていない人も、いない。

\*ネットワーク時代の交わりの危険性

## 2. アブラハム契約とパウロ

### (1) パウロの使命意識

- ①異邦人のための使徒として召された。
- ②イザ 52：15 のメシア預言の成就にかかわっているとの意識
- ③王の使者、先駆者 (herald)
  - \*町々を巡り、王の言葉だけを伝達する者

### (2) アブラハム契約との関係

- ①創 12：3
  - 「あなたを祝福する者をわたしは祝福し、あなたをのろう者をわたしはのろう。  
地上のすべての民族は、あなたによって祝福される」
- ②出 19：6
  - 「あなたがたはわたしにとって祭司の王国、聖なる国民となる。これが、イスラエル人にあなたの語るべきことばである」
- ③パウロは、異邦人の使徒として、ユダヤ民族が果たしてこなかった使命を果たしている。

## 3. 使徒的使命と私たち

### (1) パウロが、他の人の土台の上に建てないと語った理由

- ①少しでも早く、福音を伝えるため
- ②使徒職は、本来、土台作りであって、他人の土台の上に建てることではない。
- ③エペ 2：20
  - 「あなたがたは使徒と預言者という土台の上に建てられており、キリスト・イエスご自身がその礎石です」

### (2) 私たちは、すでに据えられた土台の上に建てるのである。

- ①パウロに啓示された奥義は、私たちの信仰の土台である。
- ②エペ 3：6
  - 「その奥義とは、福音により、キリスト・イエスにあって、異邦人もまた共同の相続者となり、ともに一つのからだに連なり、ともに約束にあずかる者となるということです」
- ③信仰生活のゴールは、多様性（ユダヤ人と異邦人）の中で調和を求め、ともに神をたたえること。

「パウロの将来の計画」

1. はじめに

(1) 文脈の確認

①15：14～16：27 は、「結論」の部分である。

②今回は、「執筆の目的」について学んだ。

＊ローマ教会の評価

＊使徒としての使命

＊使徒としての奉仕の原則

(2) 今回は、「パウロの将来の計画」について学ぶ。

①キリストにあって計画を立てる必要性

②計画を修正する柔軟性

③祈りの格闘の必要性

2. アウトライン

(1) 長期計画（22～24 節）

(2) 短期計画（25～29 節）

(3) 祈りの格闘（30～33 節）

3. メッセージのゴール

(1) 異邦人とユダヤ人の関係

このメッセージは、「パウロの将来の計画」について学ぼうとするものである。

**I. 長期計画（22～24 節）**

1. キリストにあって計画を立てる必要性

(1) パウロは、過去の成功の上に安住して、隠居生活を送ることもできたであろう。

①しかし、彼はそこに留まらないで、前進した。

②幻が、彼を捉え、彼に活力を与えた。

③クリスチャンは、死ぬまで現役である。

(2) 各年代における計画

- ①青年期の計画
- ②壮年期の計画
- ③熟年期の計画（これが最も難しい）

## 2. 22 節

「そういうわけで、私は、あなたがたのところに行くのを幾度も妨げられましたが、」

### (1) 「そういうわけで」

- ①他の人の土台の上に建てないことを原則にしてきた。
- ②エルサレムからイルリコに至るまで、巡回宣教をしてきた（19 節）。
- ③ローマ教会を訪問する時間的余裕がなかった。

### (2) 「あなたがたのところに行くのを幾度も妨げられました」

- ①願望はあったが、実現しなかった。
- ②「妨げられた」は、神や悪霊によってではなく、不可能であったという意味。

## 3. 23～24 節

「今は、もうこの地方には私の働くべき所がなくなりましたし、また、イスパニヤに行く場合は、あなたがたのところ立ち寄ることを多年希望していましたので ——というのは、途中あなたがたに会い、まず、しばらくの間あなたがたとともにいて心を満たされてから、あなたがたに送られ、そこへ行きたいと望んでいるからです、——」

### (1) 「もうこの地方には私の働くべき所がなくなりました」

- ①ローマ帝国の東側地区での働きを終えたということ。
- ②すべての町を巡ったということではなく、主要な町々をカバーしたという意味。
- ③開拓伝道をする場所がなくなったということ。
- ④パウロは、3 回の伝道旅行でそれを達成した。

### (2) イスパニヤに行きたいという希望

- ①スペインのこと
- ②当時スペインは、ローマ帝国の植民地で、帝国の最西端にあった。
- ③多くのユダヤ人と、奴隷になってここまで送られたギリシア人がいた。

### (3) パウロがイスパニヤに行ったかどうかは、不明。

- ①ローマでの幽閉が 1 度限りで、それ以降自由にならなかったと考える人。

＊パウロのイスパニヤ行きを否定する。

- ②ローマでの幽閉が 2 度あったと考える人。

＊その間に、イスパニヤに行った可能性があるとする。

(4) その途中で、ローマ教会に立ち寄りたいという。

①交わりによって心を満たされたい。

②「あなたがたに送られ、そこへ行きたいと望んでいるからです」

(5) 「プロペンポウ」という動詞の受動態

①旅立ちの最初の部分において、同行する。

②すでにその人が進んでいる方向に送り出す。

③初代教会においては、「プロペンポウ」という動詞は宣教のための派遣の意味。

使 15：3

「彼らは教会の人々に見送られ、フェニキヤとサマリヤを通る道々で、異邦人の改宗のことを詳しく話したので、すべての兄弟たちに大きな喜びをもたらした」

1 コリ 16：6

「そして、たぶんあなたがたのところに滞在するでしょう。冬を越すことになるかもしれません。それは、どこに行くとしても、あなたがたに送っていただこうと思うからです」

④その場合、その人の伝道旅行を援助するというニュアンスが含まれている。

＊祈りの援助

＊経済的援助

＊人的援助（同行者）

＊ネットワークによる援助

## II. 短期計画（25～29 節）

1. 夢や願いよりも、責務を優先する必要がある。

(1) 長期計画だけを論じている人は、地に足の付かない夢想家である。

(2) 短期計画だけにとらわれている人は、単なる実務家である。

2. 25 節

「ですが、今は、聖徒たちに奉仕するためにエルサレムへ行こうとしています」

(1) 使 19：21（エペソで奉仕の後）

「これらのことが一段落すると、パウロは御霊の示しにより、マケドニヤとアカヤを通ったあとでエルサレムに行くことにした。そして、『私はそこに行ってから、ローマも見なければならない』と言った」



(2) イスパニヤに行く（ローマ教会を訪問する）前に、エルサレムに行く必要がある。

- ①エルサレム教会の聖徒たちは、困窮していた。
- ②飢饉のために、エルサレムのユダヤ人たち全般が苦しんでいた。
- ③その上に信者たちは、迫害に苦しんでいた。
- ④母教会援助の旅である。

### 3. 26 節

「それは、マケドニヤとアカヤでは、喜んでエルサレムの聖徒たちの中の貧しい人たちのために醵金することにしたからです」

(1) 異邦人教会が、エルサレム教会を援助する。

- ①1 コリ 16：1～4
- ②2 コリ 8～9 章

(2) これは自発的な献金である。

- ①「喜んで」という言葉
- ②「醵金」とは、「コイノニア」である。

＊交わりを指す言葉

### 4. 27 節

「彼らは確かに喜んでそれをしたのですが、同時にまた、その人々に対してはその義務があるのです。異邦人は霊的なことでは、その人々からもらいものをしたのですから、物質的な物をもって彼らに奉仕すべきです」

(1) 異邦人がユダヤ人を援助することが、神学的真理へと引き上げられる。

- ①これは、自発的な愛の行為である。
- ②と同時に、霊的義務でもある。

(2) 「同時にまた、その人々に対してはその義務があるのです」

「しかし同時に、彼らはかの人々に負債がある」（口語訳）

「実はそうする義務もあるのです」（新共同訳）

- ①彼らは、その人々には負債者（オフエイレテイス）である。
- ②負債があるのだから、返済の義務がある。

(3) 「異邦人は霊的なことでは、その人々からもらいものをしたのですから、物質的な物をもって彼らに奉仕すべきです」

「異邦人はその人たちの霊的なものにあずかったのですから、肉のもので彼らを助ける義務があります」（新共同訳）

①異邦人が受けている霊的祝福は、すべてユダヤ人たちが受けるものであった。

＊それが「負債」である。

②負債を返すとは、肉のもの（物質的なもの）で彼らを援助することである。

＊これが、ユダヤ人伝道の財源となる。

（例話）昨年、イスラエル聖書大学に献金を送った。

#### 5. 28～29 節

「それで、私はこのことを済ませ、彼らにこの実を確かに渡してから、あなたがたのところを通してイスパニヤに行くことにします。あなたがたのところに行くときは、キリストの満ちあふれる祝福をもって行くことと信じています」

##### （1）パウロの計画の全貌

①ローマ帝国東部の宣教は終えた。

②これから、エルサレムに行く（異邦人の献金をエルサレム教会に届けるため）。

③次に、イスパニヤに行く。ローマ帝国西部の宣教のため。

④途中で、ローマ教会を訪問する。そこからイスパニヤ宣教に派遣されるため。

##### （2）この計画が祝されることを信じている。

①と同時に、人間の計画は不確定である。

②それゆえ、神の守りを祈り求める必要がある。

### Ⅲ. 祈りの格闘（30～33 節）

#### 1. 30 節

「兄弟たち。私たちの主イエス・キリストによって、また、御霊の愛によって切にお願いします。私のために、私とともに力を尽くして神に祈ってください」

##### （1）パウロの謙遜

①祈りの援護をいつも要請している。

②三位一体の神のすべての位格が、この節に登場している。

＊主イエス・キリスト

＊「御霊の愛」：「御霊によって与えられる愛」

＊神（父なる神）

(2) 「私のために、私とともに力を尽くして神に祈ってください」

① 「スナゴニゾマイ」：激しい格闘に加勢すること。

② 祈りとは、霊的な戦いそのものである。

③ クリスマスは、会ったことがなくても、共通の祈りを捧げることができる。

## 2. 31～32 節

「私がユダヤにいる不信仰な人々から救い出され、またエルサレムに対する私の奉仕が聖徒たちに受け入れられるものとなりますように。その結果として、神のみこころにより、喜びをもってあなたがたのところへ行き、あなたがたの中で、ともにいこいを得ることができますように」

(1) 安全のための祈り

① パウロは、ユダヤ人に捉えられる。

② しかし、百人隊長によって救われ、国外に退去させられる。

(2) 異邦人の献金が受け入れられるように。

① パウロを疑う者たちが依然としていた。

② ユダヤ人の誇りが邪魔をして、異邦人の献金を受け入れない恐れがあった。

(3) ローマに行けるように。

① パウロは確かにローマに到着した。

② しかしそれは、囚人としてであった。

(4) 祈った通りには聞かれていない。

① しかし、祈りの精神は聞かれている。

## 3. 33 節

「どうか、平和の神が、あなたがたすべてとともにいてくださいますように。アーメン」

(1) ここで、ローマ人への手紙は終わってもよかった。

① パウロは、個人名を上げて挨拶を送ることにした。

② 16 章は、いわば「追伸」である。

## 結論：異邦人とユダヤ人の関係

1. なぜ、異邦人の献金をエルサレム教会に届けることにこだわったのか。

2. 異邦人がユダヤ人に対して「負債者」であるとは、どういう意味か。

3. 聖書の裏付け

(1) エペ2：11～16（要約）

「ですから、思い出してください。あなたがたは、以前は肉において異邦人でした。…そのころのあなたがたは、キリストから離れ、イスラエルの国から除外され、約束の契約については他国人であり、この世にあって望みもなく、神もない人たちでした。…キリストこそ私たちの平和であり、二つのものを一つにし、隔ての壁を打ちこわし、ご自分の肉において、敵意を廃棄された方です。敵意とは、さまざまの規定から成り立っている戒めの律法なのです。このことは、二つのものをご自身において新しいひとりの人に造り上げて、平和を実現するためであり、また、両者を一つのからだとして、十字架によって神と和解させるためなのです。…」

(2) エペ3：6

「その奥義とは、福音により、キリスト・イエスにあって、異邦人もまた共同の相続者となり、ともに一つのからだに連なり、ともに約束にあずかる者となるということです」

3. 解説

(1) 「異邦人はその人たちの霊的なものにあずかった」（27 節）（新共同訳）

- ①異邦人が受ける霊的祝福は、本来はユダヤ人のものである。
- ②それらの霊的祝福は、神がユダヤ人と結んだ契約を通して与えられた。

(2) 4つの無条件契約

- ①アブラハム契約
- ②土地の契約
- ③ダビデ契約
- ④新しい契約

(3) 1つの条件付契約

- ①シナイ契約（モーセ契約）
- ②これが、「隔ての壁」であり、「敵意」である。
- ③旧約時代、祝福を受けるためには、ユダヤ教に改宗する必要があった。
- ④その壁は、キリストの死によって取り除かれた。

(4) 教会は、「新しいひとりの人」である。

- ①異邦人は、ユダヤ人と共同相続人である。
- ②教会がユダヤ人に置き換わったのではない。
- ③置換神学は、間違っている。

「キリストにある同労者たち」

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①15：14～16：27 は、「結論」の部分である。
- ②「執筆の目的」（15：14～21）
- ③「パウロの将来の計画」（15：22～33）

(2) きょうの箇所は、知人たちへの挨拶である。

- ①一見、無味乾燥に見える。
- ②しかし、この箇所が持っているインパクトに驚かされた。

2. アウトライン

- (1) フィベ（1～2 節）
- (2) プリスカとアクラ（3～5 節 a）
- (3) 名の知られていない人たち（5b～16 節）

3. メッセージのゴール

- (1) 初代教会における女性の地位
- (2) 家の教会
- (3) 人的ネットワーク

このメッセージは、パウロの人脈について学ぼうとするものである。

I. フィベ（1～2 節）

1. 1 節

「ケンクレヤにある教会の執事で、私たちの姉妹であるフィベを、あなたがたに推薦します」

(1) ギリシア・ローマ世界においては、推薦状は珍しいものではなかった。

- ①フィベは、この手紙をローマに運んだ人である。

「彼女は、キリスト教神学の未来のすべてを、コートの下に入れて運んだことになる」

- ②それゆえ、パウロは彼女をローマの信徒たちに推薦（紹介）している。
- ③「フィベ」という名は、神話によく登場する名である。異邦人である。

(2) ケンクレヤにある教会に属していた。

- ①コリントの南東 11 キロのところにある港町。
- ②コリントの東の港としての役割を果たした。アジア方面の交易のための港。  
\*西の港は、カイオン。両港の間の距離は 8 キロ。
- ③パウロは、第 2 回伝道旅行でここを訪れている。
- ④誓願が成就したのを記念して、そこで髪をそっている（使 18：18）。
- ⑤パウロは、コリント滞在中にこの手紙を書いた。
- ⑥ケンクレヤの信頼できる信徒にそれを託すことは、自然なことである。

(3) 「ケンクレヤにある教会の執事」

「ケンクレアイの教会の奉仕者」（新共同訳）

- ①ギリシア語で「ディアコノス」。男性名詞であり、女性名詞でもある。
- ②英語では、「deacon」、「deaconess」、となる。
- ③訳としては、「執事」も「奉仕者」も正しい。
- ④「執事」とした場合は、役職を意味する。
- ⑤教会史のこの段階で、役職としての「執事」があったかどうかは疑問である。  
\*執事は、長老を援助するための奉仕をする。
- ⑥役職でない場合は、忠実に主に仕える人を指す。

2. 2 節

「どうぞ、聖徒にふさわしいしかたで、主にあつてこの人を歓迎し、あなたがたの助けを必要とすることは、どんなことでも助けてあげてください。この人は、多くの人を助け、また私自身をも助けてくれた人です」

(1) 「多くの人を助け」

- ①多くの人「プロスタティス」となった。
- ②女性のパロトンのことである（patroness）。
- ③卓越した女性のことである。
- ④パウロもまた、彼女に助けられた。

(2) それゆえ、彼女は歓迎に値する。

- ①ローマの信徒は、聖徒にふさわしい歓迎の仕方を示すべきである。
- ②「どんなことでも助けてあげてください」  
\*ギリシア語で「パラスティミ」である。  
\*法律用語で、そばに立つ、そばに寄り添うという意味である。

- ③彼女は、法的理由でローマに行く必要があったのだろう。
- ④そこでパウロは、奉仕の賜物のある彼女に、この手紙を委ねたと推測される。

## Ⅱ. プリスカとアクラ（3～5 節 a）

### 1. 3 節

「キリスト・イエスにあって私の同労者であるプリスカとアクラによろしく伝えてください」

#### (1) 1 番目と 2 番目の名前

- ①パウロの「同労者」である。
- ②神の国のために、パウロと苦楽をともにした。

#### (2) 使 18：1～3

「その後、パウロはアテネを去って、コリントへ行った。ここで、アクラというポント生まれのユダヤ人およびその妻プリスキラに出会った。クラウドオ帝が、すべてのユダヤ人をローマから退去させるように命令したため、近ごろイタリアから来ていたのである。パウロはふたりのところに行き、自分も同業者であったので、その家に住んでいっしょに仕事をした。彼らの職業は天幕作りであった」

- ①ルカは、プリスキラという名を使用している。
- ②この夫婦は、クラウドオ帝によってローマを追い出されたユダヤ人である。
- ③パウロと同業の天幕作りであった。
- ④ロマ書執筆時には、ローマに帰還していた。

#### (3) 使 18：18～19

「パウロは、なお長らく滞在してから、兄弟たちに別れを告げて、シリアへ向けて出帆した。プリスキラとアクラも同行した。パウロは一つの誓願を立てていたので、ケンクレヤで髪をそった。彼らがエペソに着くと、パウロはふたりをそこに残し、自分だけ会堂に入って、ユダヤ人たちと論じた」

- ①この夫婦は、パウロに付いてエペソに行った。

#### (4) 使 18：24～26

「さて、アレキサンドリヤの生まれで、雄弁なアポロというユダヤ人がエペソに来了。彼は聖書に通じていた。この人は、主の道の教えを受け、霊に燃えて、イエスのことを正確に語り、また教えていたが、ただヨハネのバプテスマしか知らなかった。彼は



会堂で大胆に話し始めた。それを聞いていたプリスキラとアクラは、彼を招き入れて、神の道をもっと正確に彼に説明した」

①アポロの伝道の援助をした。

## 2. 4 節

「この人たちは、自分のいのちの危険を冒して私のいのちを守ってくれたのです。この人たちには、私だけでなく、異邦人のすべての教会も感謝しています」

(1) 「自分のいのちの危険を冒して」

①直訳は、「自分たちの首を差し出した」である。

(2) この記録は、新約聖書の中にはない。

①パウロの活動で、私たちが知らないことは多い。

②恐らく、エペソでの暴動の時のことであろう。

(3) 「異邦人のすべての教会」

①多くの異邦人教会のことである。

## 3. 5 節 a

「またその家の教会によろしく伝えてください」

(1) 彼らの家を解放して、信徒たちが集まっていた。

①コリントでも、家の教会を主催していた（1 コリ 16：19）。

②皮なめしの職業なので、広い家があったと思われる。

## Ⅲ. 名の知られていない人たち（5b～16 節）

1. 3 番目は、エパネット（5 節 b）。

「私の愛するエパネットによろしく。この人はアジアでキリストを信じた最初の人です」

(1) 異邦人で、アジアでの初穂である。

(2) 「私の愛するエパネット」と呼ばれている。

2. 4 番目は、マリヤ（6 節）。

「あなたがたのために非常に労苦したマリヤによろしく」

(1) ユダヤ人である。ミリアム。

(2) 新約聖書には 6 人のマリヤが登場するが、このマリヤは誰だか分らない。

①「非常に労苦した」とある。

3. 5 番目と 6 番目は、アンドロニコとユニアス（7 節）。

「私の同国人で私といっしょに投獄されたことのある、アンドロニコとユニアスにもよろしく。この人々は使徒たちの間によく知られている人々で、また私より先にキリストにある者となったのです」

(1)「私の同国人」とあるので、ユダヤ人である。

①恐らく、夫婦であろう。

②パウロといっしょに投獄されたことがある（情報はない）。

(2)「使徒たちの間によく知られている人々」

①エルサレム出身

(3)「私より先にキリストにある者となった」

①使徒たちの伝道によって回心した最も初期の信者であろう。

②ペンテコステの日に回心した可能性もある。

③信仰歴 25 年の信者である。

④パウロは、羨望の思いをもって彼らに敬意を表している。

4. 7 番目は、アンプリアト（8 節）。

「主にあって私の愛するアンプリアトによろしく」

(1) 奴隷によくある名前である。

①「主にあって愛する」とある。

5. 8 番目と 9 番目は、ウルバノとスタキス（9 節）。

「キリストにあって私たちの同労者であるウルバノと、私の愛するスタキスとによろしく」

(1) ローマ出身の異邦人信者であろう。

①「私たちの同労者」とあるので、一般的な意味での同労者であろう。

6. 10 番目は、アペレ（10 節 a）。

「キリストにあって練達したアペレによろしく」

(1)「練達した」とは、信仰歴が長いことをいう。

①さまざまな試練を通過して、信仰が純化していく。

②信仰は、長距離走である。

7. 11 番目は、アリストブロの家の教会（10 節 b）。

「アリストブロの家の人たちによろしく」

(1) ヘロデ大王の孫に、同名の人物がいる。

①必ずしも、彼が信者であったということではない。

②その家の奴隷たちを中心に、群れができていたと考えられる。

8. 12 番目は、ヘロデオン（11 節 a）。

「私の同国人ヘロデオンによろしく」

(1) ヘロデ家につながるユダヤ人である。

①高貴な身分の者も、信者の中にいた。

9. 13 番目は、ナルキソの家の教会（11 節 b）。

「ナルキソの家の主にある人たちによろしく」

(1) テベリウス・クラウデオ・ナルキソという大金持ちがいた。

①もし彼がそうなら、経済的に貢献したと思われる。

10. 14 番目と 15 番目は、ツルパナとツルポサ（12 節 a）。

「主にあって労している、ツルパナとツルポサによろしく」

(1) ともに、ギリシア語の「ツルフェイ」（繊細、温厚）から来た名である。

①異邦人の姉妹であろう。

②双子の可能性もある。

11. 16 番目は、ペルシス（12 節 b）。

「主にあって非常に労苦した愛するペルシスによろしく」

(1) ペルシヤの婦人という意味。

①「非常に労苦した」と言われている。

12. 17 番目と 18 番目は、ルポスとその母（13 節）

「主にあって選ばれた人ルポスによろしく。また彼と私との母によろしく」

(1) マコ 15：21

「そこへ、アレキサンデルとルポスとの父で、シモンというクレネ人が、いなかから出て来て通りかかったので、彼らはイエスの十字架を、むりやりに彼に背負わせた」

①クレネ人シモンの息子である。ユダヤ人。

②「主にあって選ばれた」とは、豊かな賜物が用いられているという意味。

(2) シモンの妻（ルポスの母）もまた、信者になっている。

①パウロは、彼女のことを母のように慕っている。

13. 19 番目～23 番目（14 節）

「アスクリト、フレゴン、ヘルメス、パトロバ、ヘルマスおよびその人たちといっしょにいる兄弟たちによろしく」

(1) 5 人の人物が連なっている。

14. 24 番目～28 番目（15 節）

「フィロロゴとユリヤ、ネレオとその姉妹、オルンパおよびその人たちといっしょにいるすべての聖徒たちによろしく」

(1) 5 人の人物が連なっている。

15. 締めくくり（16 節）

「あなたがたは聖なる口づけをもって互いのあいさつをかわしなさい。キリストの教会はみな、あなたがたによろしくと言っています」

(1) 「聖なる口づけ」とは、何か。

①恐らく、文化的なものであろう。

(2) 「キリストの教会はみな」とは、パウロが関係している教会の意味。

**結論：**

1. 初代教会における女性の地位

(1) キリスト教は、女性の尊厳を認める宗教である。

(2) パウロは、女性を蔑視していない。

①フィベを含めて、9 人までが女性である。

②4 人の女性に関して、「非常に労苦した」、「労している」と言われている。

(3) 新約中、プリスカとアクラは連名で 6 回登場するが、4 回まで妻が先。

①ルカは、プリスキラと呼ぶ。

②パウロは、プリスカと正式名で呼ぶ。

2. 家の教会（13 の家の教会が確認できる）

(1) プリスカとアクラの家教会

(2) アリストプロの家教会

(3) ナルキソの家の教会

(4) 19 番目～23 番目（14 節）

「アスクリト、フレゴン、ヘルメス、パトロバ、ヘルマスおよびその人たちといっしょにいる兄弟たちによろしく」

①5 人は、家の教会のリーダーたちであろう。

(5) 24 番目～28 番目（15 節）

「フィロロゴとユリヤ、ネレオとその姉妹、オルンパおよびその人たちといっしょにいるすべての聖徒たちによろしく」

①この 5 人もまた、家の教会のリーダーたちであろう。

(6) 私たちへの教訓

①家の教会は、非聖書的なものではない。

②しかし、家の教会だけが聖書的とは言えない。

③組織化された教会もまた、聖書的である。

④当時の信者が家の教会を中心に活動したのは、現実的な理由からである。

⑤家の教会運動で留意すべき 2 つの点

＊神学教育

＊説明責任

### 3. 人的ネットワーク

(1) ロマ書 16 章は、退屈な章ではない。

①パウロの活動を有機的に観察するための情報がある。

②ローマ帝国内に張り巡らされた人的ネットワークである。

③わずか 25 年の間に、このネットワークができている。

(2) 「C 世代（Generation C）」の台頭

①2011 年 10 月 19 日、インドネシアで開催されたニールセンのカンファレンス

②シドニーの Dan Pankraz 氏が「C 世代（ジェネレーション C）」の定義を発表。

③ソーシャルメディアを活用したユース（C 世代）向けのマーケティング

④ Y 世代（79-85 年生まれ）や Z 世代（85-91 年生まれ）のような年代別グループではなく、ソーシャルメディアが生んだティーンから 20 代の集団グループ。

⑤「C = Connected Collective Consumer」

⑥面白いアイデアや社会的な話題・運動・動向でつながりたいと望む集団に参加し共感することで、自分を形成する。

⑦情報発信や、社会貢献によって、自分を形成する。

⑧複数の集団に参加する。

(3) キリスト教界の将来は、「C 世代」が担う。

## 「最後の言葉」

### 1. はじめに

#### (1) 文脈の確認

- ①15：14～16：27 は、「結論」の部分である。
- ②「執筆の目的」（15：14～21）
- ③「パウロの将来の計画」（15：22～33）
- ④「キリストにある同労者たち」（16：1～16）

#### (2) きょうの箇所は、ロマ書「最後の言葉」である。

- ①3つの部分に分かれる。
- ②決して軽い内容ではない。

### 2. アウトライン

- (1) 警告（17～20 節）
- (2) 個人的な挨拶（21～23 節）
- (3) 頌栄（24～27 節）

### 3. メッセージのゴール

- (1) パウロの警告の今日的適用
- (2) 人的ネットワーク
- (3) パウロの福音

このメッセージは、警告と頌栄について学ぼうとするものである。

## I. 警告（17～20 節）

### 1. 17 節

「兄弟たち。私はあなたがたに願います。あなたがたの学んだ教えにそむいて、分裂とつまずきを引き起こす人たちを警戒してください。彼らから遠ざかりなさい」

#### (1) ローマの信者たちは、教理的学びをしていた。

- ①使徒たちの教え
- ②パウロの教え

#### (2) 偽教師の出現

①マタ 7：15（イエスの教え）

「にせ預言者たちに気をつけなさい。彼らは羊のなりをしてやって来るが、うちは食欲な狼です」

②テト 3：10（パウロの教え）

「分派を起こす者は、一、二度戒めてから、除名しなさい」

(3) 「分裂とつまずきを引き起こす人たち」

①「分裂」、「不和」（新共同訳）とは、教理的な理由によるもの。

＊教会には、調和と多様性がある。

＊しかし、本質的な真理に関しては、妥協できない。

②「つまずき」とは、道徳的なもの。

(3) 信者の取るべき態度

①「警戒する」

＊ギリシア語で「スコペオウ」。

＊非常に強い意味の言葉である。

②「遠ざかる」

＊現在形の命令文である。

＊遠ざかり続けること

2. 18 節

「そういう人たちは、私たちの主キリストに仕えないで、自分の欲に仕えているのです。彼らは、なめらかなことば、へつらいのことばをもって純朴な人たちの心をだましているのです」

(1) 偽教師の特徴

①主キリストに仕えていない。

②自分の欲に仕えている。

＊「自分の腹に仕えている」（新共同訳）

＊私利、私欲のために、動いている。

(2) 偽教師の武器

①「なめらかなことば、へつらいのことばをもって」

②「甘言と美辞とをもって、」（口語訳）

③「うまい言葉やへつらいの言葉によって」（新共同訳）

(3) 偽教師の目的

- ①「純朴な人たちの心をだましている」
- ②「純朴な人々の心を欺く者ども」（口語訳）
- ③「純朴な人々の心を欺いている」（新共同訳）

(4) 偽教師の見分け方

①使徒たちの教えと調和していなければ、偽教師である。

②2 ペテ 2：3

「また彼らは、食欲なので、作り事のことばをもってあなたがたを食い物にします。彼らに対するさばきは、昔から怠りなく行われており、彼らが滅ぼされないままにしていることはありません」

③1 コリ 2：4

「そして、私のことばと私の宣教とは、説得力のある知恵のことばによって行われたものではなく、御霊と御力の現れでした」

3. 19 節

「あなたがたの従順はすべての人に知られているので、私はあなたがたのことを喜んでいきます。しかし、私は、あなたがたが善にはさとく、悪にはうとくあつてほしい、と望んでいます」

(1) パウロは、ローマ教会の信徒たちを高く評価している。

(2) と同時に、さらなる願いも持っている。

①善にはさとく、悪にはうとく。

②マタ 10：16

「いいですか。わたしが、あなたがたを遣わすのは、狼の中に羊を送り出すようなものです。ですから、蛇のようにさとく、鳩のようにすなおでありなさい」

4. 20 節

「平和の神は、すみやかに、あなたがたの足でサタンを踏み砕いてくださいます。どうか、私たちの主イエスの恵みが、あなたがたとともにありますように」

(1) 「あなたがたの足でサタンを踏み砕いてくださいます」

①創 3：15

「わたしは、おまえと女との間に、また、おまえの子孫と女の子孫との間に、敵意を置く。彼は、おまえの頭を踏み砕き、おまえは、彼のかかとかみつく」

(2) 「平和の神」



- ①サタンは、偽教師たちを通して教会を破壊しようとしている。
- ②使徒たちの教えによって信徒たちが一致するなら、教会に平和が来る。
- ③それは、平和の神が、信徒たちを通して、サタンを踏み砕くことである。
- ④この勝利は、終末的なものではなく、今体験することができるものである。

## II. 個人的な挨拶（21～23 節）

### 1. パウロとともにいる人々

(1)「私の同労者テモテが、あなたがたによろしくと言っています」

- ①第 2 回伝旅行の時に、ルステラで出会った。
- ②パウロの愛弟子である。

(2)～(4)「また私の同国人ルキオとヤソンとソシパテロがよろしくと言っています」

- ①同国人、ユダヤ人
- ②ルキオ 使 13：1
- ③ヤソン 使 17：5 （ヨシュアのギリシア名）
- ④ソシパテロ 使 20：4

(5)「この手紙を筆記した私、テルテオも、主にあってあなたがたにごあいさつ申し上げます」

- ①テルテオは、書記である。
- ②古代世界では、書記を用いることは一般的な習慣であった。
- ③「私、テルテオ」とあるのは、パウロの好意であろう。
- ④ラテン名なので、ローマの教会との関係があったのか。
- ⑤F・F・ブルースは、ここからパウロが筆を執って書いたと考えている。

(6)「私と全教会との家主であるガイオも、あなたがたによろしくと言っています」

- ①1 コリ 1：14
- ②「クリスポとガイオのほか、だれにもバプテスマを受けたことがない」

(7)～(8)「市の収入役であるエラストと兄弟クワルトもよろしくと言っています」

- ①エラスト 2 テモ 4：20
- ②クワルト 不明。ラテン名なので、ローマの教会と関係があったのか。

### Ⅲ. 頌栄（24～27 節）

1. 24 節が欠落している写本がある。新共同訳の訳。

「わたしたちの主イエス・キリストの恵みが、あなたがた一同と共にあるように」

2. 25～27 節

「私の福音とイエス・キリストの宣教によって、すなわち、世々にわたって長い間隠されていたが、今や現されて、永遠の神の命令に従い、預言者たちの書によって、信仰の従順に導くためにあらゆる国の人々に知らされた奥義の啓示によって、あなたがたを堅く立たせることができる方、知恵に富む唯一の神に、イエス・キリストによって、御栄えがとこしえまでありますように。アーメン」

- (1) これは、ひとつの文である。

①この頌栄の中に、ロマ書の主要テーマが盛り込まれている。

- (2) 神について

①神は、「知恵に富む唯一の神」である。

②神は、「あなたがたを堅く立たせることができる方」である。

- (3) 神の方法について

①「私の福音によって」

＊キリストによって啓示された。

＊パウロに独特の内容。

②「イエス・キリストの宣教によって」

＊福音は、イエスの死、埋葬、復活に関するものである。

＊イエスを離れては、福音はあり得ない。

③「世々にわたって長い間隠されていた」

＊福音は、奥義である。

④「永遠の神の命令に従い、預言者たちの書によって」

＊旧約聖書の預言者たちの書の意味が、キリストによって明らかになった。

⑤「あらゆる国の人々に知らされた奥義の啓示」

＊ユダヤ人だけでなく、すべての国の人々に福音が知らされた。

⑥「信仰の従順に導くために」

＊これが、永遠の神の命令であり、計画である。

- (4) この手紙は、神への頌栄で終わる。

結論：

1. パウロの警告の今日的適用

(1) 誤用

- ①2 次的事項で同意できない人を、追放すること
- ②カルト的体質を持った教会
- ③聖書研究が、最高の対処法である。

(2) 今日の信者が警戒すべきこと

- ①無律法主義
- ②自由主義神学
- ③ユダヤ教の伝統を強調するメシアニック・ジュー

2. 人的ネットワーク

- (1) ローマにいる 28 人の人たち
- (2) コリントにいる 8 人の人たち+フィベ
- (3) 人的ネットワークなしに、これからの宣教は考えられない。

3. パウロの福音

(1) 「私の福音」

- ①ロマ 2：16
- ②ロマ 16：25
- ③2 テモ 2：8

(2) パウロだけに特別に啓示された真理がある。

- ①それは、永遠の昔から定められていたことである。
- ②それが、今や啓示された。「奥義」である。

(3) 位置的真理

- ①「キリストにあって」
- ②義認も、聖化も、栄化も、すべてこれによって可能になる。

(4) 異邦人の救い

- ①異邦人も救われることは、旧約聖書でも預言されていた。

②異邦人は、ユダヤ人が受ける霊的祝福の共同相続人となる。

③ユダヤ人と異邦人は、ともにキリストに連なり、「新しいひとりの人」となる。

④エペ 3：5～6

「この奥義は、今は、御霊によって、キリストの聖なる使徒たちと預言者たちに啓示されていますが、前の時代には、今と同じようには人々に知らされていませんでした。その奥義とは、福音により、キリスト・イエスにあって、異邦人もまた共同の相続者となり、ともに一つのからだに連なり、ともに約束にあずかる者となるということです」

「総まとめ」

1. はじめに

(1) 執筆の意図

①使徒としての使命

＊所々、かなり大胆に書いた（15：15）。

②使徒としての奉仕の原則

＊他人の土台の上に建てない（15：20）。

＊これまで、ローマ教会を訪問することができなかった理由がこれである。

③スペイン伝道の計画

＊ローマ教会からの援助を期待している。

(2) ロマ書の構造

①1～8章が教理

②9～11章がイスラエルの救い

③12～16章が適用

(3) ロマ書の講解を終えての感想

①12～16章こそ、パウロが最も伝えたかった点ではないか。

＊牧会者としてのパウロ

②実践のための土台として、教理の解説がある。

2. アウトライン

(1) キリスト者の実践

(2) 義認

(3) 聖化

(4) 栄化

(5) イスラエルの救い

このメッセージは、ロマ書のまとめを学ぼうとするものである。

**I. キリスト者の実践**

1. 全き献身（12：1）

「そういうわけですから、兄弟たち。私は、神のあわれみのゆえに、あなたがたにお願いし

ます。あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です」

(1) 勧告の土台は、「神のあわれみ」である。

①これは、1～11章の要約である。

(2) 勧告の内容は、自分の全存在を捧げることである。

①旧約時代の供え物は、死んだ動物であった。

②新約時代の供え物は、他の命を犠牲にしない。

③それは、自発的な供え物である。

④それは、霊的な礼拝であり、当然なすべき礼拝である（ロギコス）。

(3) 自発的奴隷としての生活

①罪の奴隷から解放された。

②自由の身となった。

③自らの選択によって神の奴隷となった。

④「キリスト・イエスのしもべ」とは、逆説的言葉である。

## 2. 2つの命令（12：2）

「この世と調子を合わせてはいけません。いや、むしろ、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に受け入れられ、完全であるのかをわきまえ知るために、心の一新によって自分を変えなさい」

(1) 否定形の命令（外的要素）

①「調子を合わせる」は、「サスケイマチゾウ」という動詞である。

②受動態（あるいは、中間態。その行動が自分に戻ってくる）

③「この時代」が何かの行動を起こし、その影響を受けるということ。

④否定的命令形の要点は、「この時代」の要求に同意しないということ。

(2) 肯定形の命令（内的要素）

①「変える」は、「メタモルフォウ」という動詞である。

②これは受動態である。新改訳はこれを能動態に訳しているが、問題あり。

\*ロマ書7章クリスチャンに回帰する危険性がある。

③動作の主体は自分以外である。

④神が主体の場合、「divine passive」（神的受動態）という言葉がある。

\*聖化は、「divine passive」（神的受動態）の結果起こる祝福である。

3. 教会内での行動（12：3～21）

（1）みからだの教理

- ①一体性（同じからだに属する）
- ②多様性（異なった働きがある）
- ③調和（愛による賜物の行使）

（2）プライドへの警告（12：3b）

「だれでも、思うべき限度を越えて思い上がってはいけません。いや、むしろ、神がおののけに分け与えてくださった信仰の量りに応じて、慎み深い考え方をしなさい」

①謙遜の勧め

（3）愛の勧め（12：9～21）

- ①19 の愛の勧めが記されている。

4. 教会外での行動（13：1～14）

（1）地上の権威に従う。

- ①権威は、神によって立てられている。

（2）しかし、その権威が神に反抗する場合は、声を上げ、抵抗する。

- ①権威の悪魔化の現象である。
- ②杉原千畝氏、デートリッヒ・ボンヘッフアーの例などがある。

5. グレーゾーンの問題（14：1～15：13）

（1）ユダヤ人信者と異邦人信者の背景の違い

- ①ロマ書は 57 年頃に書かれた。
- ②キリストの死と復活から、20 数年しか経過していない。
- ③ローマ教会が教会として確立してから、20 年前後であろう。
- ④教理的な部分は理解したとしても、実生活の面で分からないことが多い。

（2）第 2 次的なことに関しては、議論しない。

- ①自由に振る舞っている人は、信仰の強い人である。
- ②強い人は、弱い人を見下さない（15：1）

「あなたがたは信仰の弱い人を受け入れなさい。その意見をさばいてはいけません」（新改訳）

「信仰の弱い人を受け入れなさい。その考えを批判してはなりません」（新共同訳）

③弱い人は、強い人を裁かない。

(3) キリストが私たちの手本である（15：3）

「キリストでさえ、ご自身を喜ばせることはなさらなかったのです。むしろ、『あなたをそしる人々のそしりは、わたしの上にふりかかった』と書いてあるとおりです」

## II. 義認（1～5 章）

### 1. 過去形の救い

(1) 信仰による神との和解

(2) 義との宣言を受けること

### 2. 救いに至る信仰

(1) 知識

「そのように、信仰は聞くことから始まり、聞くことは、キリストについてのみことばによるのです」（ロマ 10：17）

①救われるためには、福音の内容を理解しなければならない。

②福音の 3 要素（1 コリ 15：3～5）

「私があなたがたに最もたいせつなことから伝えたのは、私も受けたことであって、次のことです。キリストは、聖書の示すとおりに、私たちの罪のために死なれたこと、また、葬られたこと、また、聖書の示すとおりに、三日目によみがえられたこと、また、ケパに現れ、それから十二弟子に現れたことです」

\*キリストは、私たちの罪のために死なれた。

\*キリストは、葬られた。

\*キリストは、三日目によみがえられた。

(2) 同意

①知識と同意だけでは、人は救われない。

②悪霊でさえも、知識と同意はある。

③信じない理由は、「信じたくないから」と言う人がいる。

(3) 信頼（ロマ 3：22）

「すなわち、イエス・キリストを信じる信仰による神の義であって、それはすべての信じる人に与えられ、何の差別もありません」



- ①イエス・キリストをそのようなお方、救い主として信頼すること
- ②父なる神への信頼

3. 余分な付加物

- (1) 公の場での告白
- (2) 罪の告白
- (3) 洗礼
- (4) 悔い改め
- (5) メシアの主権に従う（ロードシップ論）

### Ⅲ. 聖化（6～8 章前半）

1. 現在進行形の救い

- (1) 多くの人が陥る罠（ロマ 7：18～19）

「私は、私のうち、すなわち、私の肉のうちに善が住んでいないのを知っています。私には善をしたいという願いがいつもあるのに、それを実行することがないからです。私は、自分でしたいと思う善を行わないで、かえって、したくない悪を行っています」

- ①これは、パウロが救われてからの体験である。
- ②「私」という言葉が、18～19 節だけで 5 回も出てくる。
- ③彼は自分の体験を普遍的体験として語っている。

- (2) 最大の悲劇は、律法を行うことによって聖化を達成しようとする事。

- ①この理解は、クリスチャンを律法主義に追い込む。
- ②やがては、信仰の休業状態に陥る。
- ③私たちはこれを「ロマ書 7 章クリスチャン」と呼ぶ。

2. 聖書が教える聖化とは

- (1) 義認も、聖化も、栄化も、すべて信仰により、恵みによる。

- ①「キリストにあって」（位置的真理）

- (2) 頭の切り替えが必要である。これを「悔い改め」という。

### Ⅳ. 栄化（8 章後半）

1. 未来形の救い

(1) これが、クリスチャンの希望である。

(2) ロマ8：28

「神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています」

2. 完成を願って3つのものがうめいている。

(1) 被造物のうめき（8：18～22）

(2) 神の子たちのうめき（8：23～25）

(3) 御霊のうめき（8：26～27）

3. キリストにある神の愛から私たちを切り離すものは、存在しない（8：38～39）。

「私はこう確信しています。死も、いのちも、御使いも、権威ある者も、今あるものも、後に来るものも、力ある者も、高さも、深さも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません」

## V. イスラエルの救い（9～11章）

1. このテーマの重要性

(1) イスラエルの救いは、神の愛と義に係る重大問題である。

(2) イスラエルは神が人類をどう扱われるかのリトマス試験紙である。

2. イスラエルの優先性（ロマ1：16）

「私は福音を恥とは思いません。福音は、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、信じるすべての人にとって、救いを得させる神の力です」

3. 神の知恵に基づく計画

(1) 拒否の現実：イスラエル人の一部しか救われていないのは、神の計画である。

(2) 拒否の理由：イスラエルの拒否の理由は、彼らの頑なさにある。

①イスラエルの頑なさは、神の義についての無知から来ている。

(3) 拒否の解決：神の計画通りに進んでいる。

- ①レムナントの存在がある。イスラエル全体が拒否したのではない。
- ②イスラエルの拒否は一時的である。
- ③福音は、異邦人に届けられた（異邦人は、接ぎ木された野生種の枝）。
- ④しかし、やがてイスラエルは民族的救いを経験する。
- ⑤終末論は、イスラエルの救いを土台にして考えなければ、開かれてこない。

#### 4. 異邦人として考えるべきこと

##### (1) 異邦人信者の使命

- ①ユダヤ人に「ねたみ」を起こさせること
- ②教会は、ユダヤ人に「ねたみ」ではなく、「怒り」を起こさせてきた。

##### (2) 置換神学からの脱却

- ①ロマ 11 章には、傲慢な異邦人信者へのパウロの怒りが見える。
- ②イスラエルが不信仰に陥ったので、イスラエルを見下す異邦人がいた。
- ③彼らは、異邦人の救いこそ神の計画のクライマックスであると考えた。
- ④置換神学の内容
  - \*イスラエルは不信仰のゆえに、契約の民としての特権を失った。
  - \*旧約聖書でイスラエルに約束されていた祝福の預言は、教会が引き継いだ。

##### (3) 聖書のクライマックスは、神の計画がすべて成就し、神の栄光が現れること。